

崎
山
比
佐
衛
傳

移植民教育とアマゾン開拓の先覚者

崎 山 比 佐 衛 傳

アマゾン日本植民の父



晩年の崎山先生（1939年8月撮影）

目次

3

序	5
一 家庭	8
二 東京行	14
三 環境と時代	21
四 北海道開拓（聖園の創業）	27
五 北海道開拓（入信）	34
六 北海道開拓（試練の生活）	42
七 修学（東北学院）	54
八 修学（青山学院）	64
九 苦学生の友（創業以前）	72
一〇 苦学生の友（創業）	86
一一 苦学生の友（生活）	98
一二 南北両米踏破三万哩（北アメリカ）	114
一三 南北両米踏破三万哩（南アメリカ）	128
一四 植民思想の鼓吹宜伝	149
一五 海外植民学校（創立）	165
一六 海外殖民学校（教育方針）	192
一七 八ヶ岳分校問題	204
一八 学校スト（一）	214
一九 学校スト（二）	227
二〇 アンデス縦走	237
二一 アマゾンを下りて	252

二二	南米移住	261
二三	マウエスにおける生活（一）	270
二四	マウエスにおける生活（二）	286
二五	最後の旅行と永眠	295
二六	海外植民学校の結末	319
二七	追憶	332
二八	印象感想	349
二九	結び	363
附録		375
一	日本の海外移民	
二	時局に鑑み敢て一言せん	
あとがき		410

崎山比佐衛伝に序す

崎山氏は南海の男児、広量の素質をもって生れた。逆境に育ちつぶさに人生の辛酸をなめたがキリスト者の信念に生き、あらゆる障害を乗り越えただけでなく、祖国日本の将来を見抜いていた。早くから海外移住の急務であることを説き、海外植民教育会、海外植民学校を創設した。さらに自らブラジルに渡り、その分校をつくろうとした。しかし世にいれられない先覚者は多い。氏もその例にもれず、業半ばにアマゾン上流マウエス開拓地で不帰の客となった。昭和十六年夏のことである。理想がようやく現実の婆を見せようとしていたときに氏の亡くなったことは残念だが、その志を継ぐ者がきつと現われることと思う。

氏と同郷の後進吉村繁義君は、師弟の関係を越えた同信同志の人である。常に氏を助けて、後顧の憂なく外に雄飛できたのも吉村君の力が大きかった。氏が亡くなった後、志を同じくするものが図って伝記編集を吉村君に依頼した。知遇の感に打たれた君は専心従事、ここに本書を見るに至った。私は吉村君と満鉄社会課以来多年旧知の間柄であるばかりでなく、崎山氏とも土佐および北海道石狩月形村の武市農場時代から奇縁をもっている。で、求めに応じて、一文を草することになった。氏が平素敬慕していた渋沢栄一、後藤新平、永井柳太郎、山室

軍平らの方々は氏を推奨する適任者であつたが、今はす
でに亡い。

崎山氏を「せん方尽れども望を失わざらしめた」ものは、青年時代からのキリスト教的教養の賜であつただろう。「汝の目を天上の星に、汝の足を大地に」との格言は崎山氏最愛の遺族をはじめ同人各位が常に心にとめているところであろう。氏の志は永久に生かさなければならぬ。不文の私は以上で氏の在天の霊と、その同志とに深い敬意を表したい。

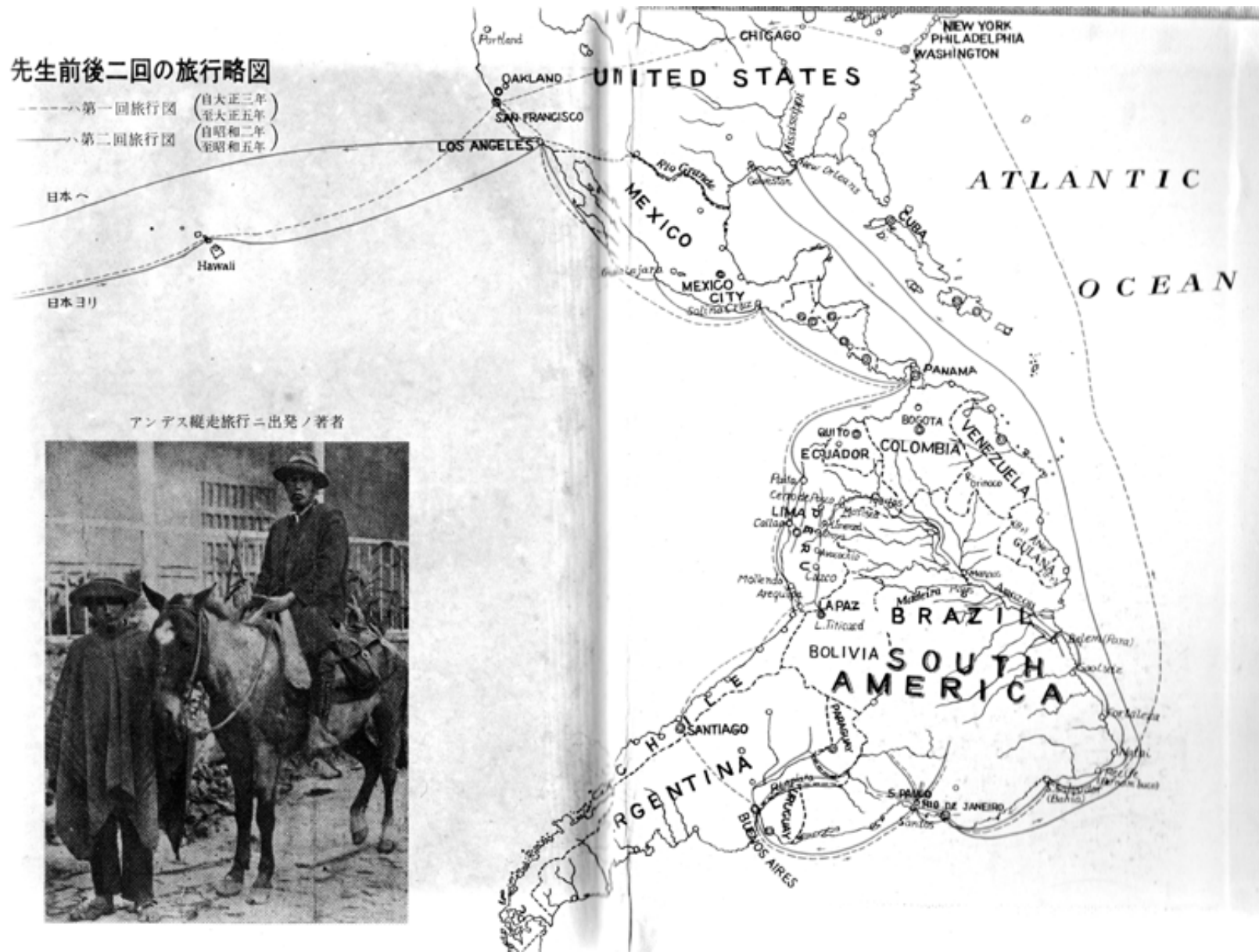
北米シカゴ市ミシガン湖畔で

一九五五年盛夏

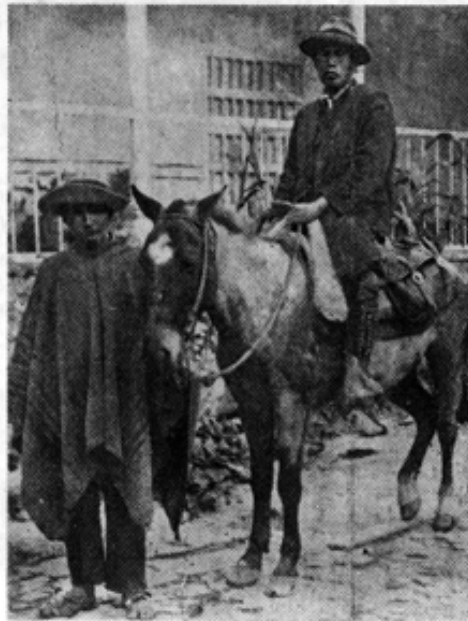
牧 野 虎 次

先生前後二回の旅行略図

- 、第一回旅行図 (自大正三年
至大正五年)
- 、第二回旅行図 (自昭和二年
至昭和五年)



アンデス縦走旅行ニ出発ノ著者



一 家庭

その日も夕暮迫る頃、兄の久吉は、

「おい、ちよつと来い」

と八歳になる弟の松吾を呼んで、牛小屋にすえてある押切の前に立った。牛のはみ（飼料）にするワラをつかんで押切にあてる。まだ非力な松吾が力一杯にそれを押す。彼らの日課の一つである。

同じ動作をくり返しているうち突然、

「あつ痛いっ」

久吉が跳び上がって右手の相をおさえ、苦しそうに顔をゆがめた。中指が中の関節から、ワラと一しよに押切られたのであった。

親達が驚いてかけつけ、切りワラの中から探し出した時は指先はしぼんでしまつて、どうしようもない、一瞬間の過失である。

小学校四年の課程を終えると、上級学校のない村で、また、あつてもゆけない事情の久吉は、夜学に通つた。その頃、水間義盛という小学校の教師がおり、青少年の為に塾を設けて、夜間教授をしてくれた。此の人は学力もある、親切な人だった。向学心の盛んな彼は毎晩そこに学んだ。

昼間は家業を助ける。朝夕の牛の世話。薪をきって山から運ぶ、草刈り、走り使い、姉や弟の面倒を見てやる。

これが毎日のつとめである。生涯人の注目をひいた、短い一本の指は、少年の日の勤労を物語る痛ましいしるしであった。

久吉は崎山比佐衛の幼名で三十三歳までそう呼ばれていた。父は常吾（一八四六一一九〇四）母はじつ（一八五四―一八八四）といった。常吾はふだんはやさしいが、性質は短気で激した時は、近隣の人たちを驚かすほどの、はげしい一面があつた。家は小農で、農事には腕利きであり、熱心で、体格も腕力も人にすぐれ、草相撲では強いので評判であつた。

母親は信心深い、母性愛の豊かな、いわば良妻賢母型の婦人であつた。長女のはつ（久吉の姉）が生れつきのつんぼであることを悲しみ、若い母親は四国遍路となり、不幸な愛児と、八十八ヶ所の霊場を巡礼して、一心に祈願をこめた。ひたむきな神信心と、その愛情は人々の袖をしぼらせたが、宿命はいかんともするすべがなかつた。

久吉はたくましい身体と、激しい気性を父から受け、信心深い素質は、母親に負う処が多かつたようだ。実母から受けた強い感化や愛情は、成人してからも懐かしい回想であり、彼を奮い起たせる源泉であつた。母は腸チブスにかかり、三十三歳の若さで急死した。家庭にははつと九歳の久吉の下に五歳になる弟の松吾の三人が残された。明治十七年（一八八四）五月八日（旧暦）のことである。

これから彼の多難な変化の多い生活がはじまる。実母を失って三年後、父は山下雪見を後妻に迎えた。比の人には先夫との間に、もと、しずの二人の娘がいた。姉が久吉より、またしず、が松吾より、何れも二つ年下である。嫁してきた母と一緒に、姉妹も崎山家の家族となった。

普通の家庭であれば、いたずら盛りの年頃だから、少しくらいけんかや、争いが起つても問題はないのであるが、この寄り合い世帯では少し事が面倒である。ものはいえないはつが、いつも問題にされるからだ。

子供の間で何か争議が起ると、結局不利な立場に追い込まれるのははつである。はつは元気に溢れ、伶俐ですばしこい。自分の要求が解って貰えなかったり、通らないとき、而も子供心にも正しいと思う時は、一層反抗的にもなる。それを言葉で表し得ないので、行動に出ると荒っぽくなるのは自然の勢で、いつの間にか知らず知らず、両親までその渦中に巻きこまれる。子供たちも可愛相だが、両親の心労も並大抵ではない。

こんな日を繰り返しているうちに、久吉は父母と相談し、おも屋に近い庭の隅に、粗末な小屋がけであるが、四畳半のはなれを新らしく建てそこに久吉ははつと松吾を連れて別居した。朝夕に面倒をみてやることにした。

不幸な姉弟をこれ以上悲しませたくない、彼の心持がそうさせたのである。子供達も争いから遠ざかり、いつとはなしに家庭は団らんを取り返した。この十二歳の少

年の生活設計は自然に近所の人たちを感動させ、期せずして同情の眼が彼の上に注がれる。部落の中でも家庭争議の多い家は反省するようになったということだ。

土佐国（高知県）は四国中央山脈で阿波、讃岐、伊予の三国から切り離され、欠けたカマのような長く曲った国で、海岸線は太平洋の荒波に洗われ良港はあつても、地勢上自然に孤立していた。昔は土御門上皇や、法然上人はじめ、遠島に処せられる人々の流刑地になっていた。つまり島の代用品だったわけだ。日本国中、鉄道網が張りめぐらされた時代に、鉄道の開通した、最後の県だったと思う。

中央山脈中の最高峰である瓶ヶ森（一八九七米）に源を発した吉野川の県内を流れる全流域が、東西七十五キロにわたる大峡谷を作っており、面積千二十六平方キロにおよぶ、この地域を嶺北と呼んでいる。此处に十一の町村があり（目下合併進行中の町村もある）そのやや北西部に位置しているのが、長岡郡本山町である。

本山は土讃線で大杉駅……樹令三千年の大杉があつて、天然記念物に指定されている……を下車し、バスで吉野川に沿い、兩岸の翠色を愛でながら十二キロ上ると市街の中央に達する。町は面積六十九平方キロ、世帯数一千四百三十六戸、人口六千七百九十人（昭和二五・一〇・一日調査）で、文化的にも、経済的にも、嶺北の中心である。旧名は吾椅（わがはし）後に自我荘、川副村

などと呼んだときもあり、戦国時代に、本山氏が長曾我部氏に亡ぼされるまで、天険を頼みに山城を築いて長岡、土佐、吾川の三郡を領し、威を振った。

その姓が地名となって、今日に至ったのだといわれる。峡谷ではあるが、瀬戸内海方面から土佐に入るには、ここを通過するのが唯一の早道で、桓武天皇の延暦十六年（西暦七九七）に、此の山路を拓いたことが、記録されており、交通史上古い往還である。

北に白髪山（一四六九米）南に国見山（一六八九米）の高山が聳え、町を抱いて対峙している。

凄いほど清い流れの四国三郎―吉野川―の本流が森川、汗見川の支流をいれて、水勢は大を加え、瀬となり、淵となって管内を貫いている。本山は山内家入国の直後は、一族山内刑部の支配に属し、そのあと、土佐の偉大な開拓者野中良継（兼山）の領地（六千八百石）となった。兼山は鷹山、蕃山と共に日本の三山と並び称され、土佐全土にわたる山や、河や、海の開拓から、進んで大阪に土佐堀を設けて、材木の輸出集散の拠点にしたり、一方では人を長崎に使わし、舶来の書籍を買い、良書は再版して好学の人に分ち学問を奨励するなど、広範にわたる、功業遺策の偉大なことは二者をしのぐものがある。

町内の上ノ坊には兼山が、好学の同志と共に、政務の余暇に、古典を勉強したといい伝えられる遺蹟がある。此の嶺北地方一帯には岩を砕き、石を重ね、道路を拓き、巨岩を掘って溝を通じ用水を引くなど、驚くべき難工事

を、彼の設計と支援のもとに、仕遂げた開拓の見本がいくらでもある。市街に近い鴈山公園には、兼山の母堂秋田夫人の墓があり、山崎闇斎の撰に成る碑文は世に知られ、墓畔の兼山神社と豪壮な拝殿は、嶺北開発会社が中心となって最近完成した。拝殿は市民の修養道場として、松杉の間にそのいらかを輝かしている。

本山町は県下有数の桜の名所で、季節には花見客が遠近からどっと押し寄せる。桜はさほど多くはないが、山岳の折り重なった地勢を背景にして、曲折した流れと、淵に湛える水色の美しくさに、点綴する桜と山の翠が影を写し、こん然一つとなって、規模は小さいが、絶好の眺めである。

今日と違って明治十年代の本山村は、ひどい寒村であつた。川下から市街にさしかかる処、東の山峡から流れて吉野川に注いでいるのが檜ノ川である。橋のたもとを左に折れ左岸に沿ってだらだら坂を東へ一キロ、高津野という二十戸ばかりの小さな部落を見上げて、上るに従い溪流はいよいよ深くなり、それから更になお一キロ半ほど上った所が、吉延部落の中央である。急な山地を背にして稍や傾斜のゆるい所に、六十戸余りの農家が密集している。土地は東南に開けて明るく、大石部落と檜ノ川をはさんで相對し、深い急な流れが岩に激して、部落中に響きを伝えて、いかにも山間の部落らしい平和郷である。しかし四十五町歩の水田、十町歩内外の畑地、数

首町歩の山林、これが部落の全人口の生活を支える資源のすべてである。部落の最も高い所にあるのが、崎山家の祖先代々住んでいた「たろじ」屋敷で、本山市街の中央から約三キロ、海拔一千尺に近い高所である。明治八年十月二十九日崎山比佐衛はここで生れた。

二 東京 行

明治二十年前後は、新しい日本の成長期で、刻々と移り変わる世相も目まぐるしく、文明開化のかけ声は勇ましかった。しかし、教育は普及されていないので、少しでも新しい教養のある人であれば、忽ち抜てきされる人材登用の時代であつた。

秀れた素質ある者はぐんぐんのびる事ができたので、大臣大将となり得ないまでも、漠然と成功を夢みる青少年の胸中には、青雲の志うつぼつたるものがあつた。現在には殆ど各県に大学が設けられたが、帝国大学令の公布は、明治十九年三月のことである。不便な田舎では学問のまねごともし出来ない。しかし地方から東京へ子弟を出して学問さすことは、金もちであつても一家にとって大事件で、隣人たちの眼をみはらせるほどだから、まして、経済力に乏しい庶民階級にとっては思いも及ばぬことである。

土佐は辺地ではあるが、政党人の活躍が目覚しかった

土地柄だけに、時勢の波は物すごい勢いで押寄せていたので、素朴な田舎の人達の間にも、そのいぶきは強く感じられ、何かしら興奮したふん囲気が、のび盛りの多感な少年たちの胸をゆすぶったとて怪しむには足りない、それを最も敏感に受けとったのが久吉である。

いつしか彼の心中は穏かでなくなった。此の山村でコツコツと夜学に通ったとてどうにもなるものではない、いやしくも男児と生れながら安閑として、草野の間に朽ちてどうするのだ、発奮して都会に学べ。そういう声はどこからか聴こえてくる、その声は日に日に大きく強くなって彼に迫る。自分の境遇を省みるとそれは不可能なことである。しかし、彼は肺ふをつんざくようなその鋭い声をどうすることもできない。よし！ 父母に相談して旅費だけ貰い、東京に行つて苦学しようこう固く心にきめると両親に打ち明けた。彼は父親の気性を知っているので大いに叱られるだろうと、内心びくびくものだったが結果は案に相違した。両親は、その事が實際いかに困難なことであるかを懇々とさとし彼の決心と覚悟を確かめたうえ、健康で、不屈不撓で、果敢な性質に望みを托し、とうとう彼の願いを許したのである。

こうして、片道の旅費と、当座を支える僅か計りの金を懷中にし先輩友人の激励にこおどりしつゝ、元気よく出発した。明治二十三年五月、久吉が十六歳のときである。

この前年、憲法が發布され、我が国始めての国会が開

設されることとなり、七月には第一回の総選挙が行われるので、各政党の動きも活発となり、土佐は特に政争が激しく、物々しい風雲をはらんでいる。その一面、農村には平和な田植歌が高らかにうたわれている、晴れた初夏のあした、故郷吉延をあとに、彼はわらじの緒を強く引き締めた。

昔から「可愛い子に旅をさせよ」という。旅行の不便不自由な封建時代は、正にその通りであった。勿論、それだけの意味ではないが、これは大きな理由に違いはない。明治の中期となっても、旅行の不便なことは、今日想像も及ばぬものであった。然も、この前年の六月に東海道線が開通したので、浦戸港から小さな汽船で神戸に上陸すると汽車が待っている。二円二十一銭出して切符を求め三等客車に納まると、一昼夜で東海道を走る。夢想もできなかった進歩である。新橋駅に下車し、親切な老車夫に送られて、芝口裏の小ぎれいな宿に入った。そこを暫しの宿所と決め、あこがれの東京における第一夜の夢を結んだ。

こゝの宿料は中食ぬき一日五銭だから自分の持ち金で三ヶ月は支えられる。その間に一日も早く職場をみつ、勉学の方法を考えよう。彼は東京の地理を学びつゝ、毎日東に西に仕事を求めて歩いた。口入屋にいつて頼むと、どこでも保証人がなくてはだめだと受けつけてくれない。保証人を頼むにも東京には一人の知人もない。それでも彼は来る日も、来る日も根気よく働く口を探して

歩き続けていた。

すでに真夏となった或る日、市中を歩き廻って汗ぐっしりになり、疲れて宿にかえる途中、懐ろの財布が無くなっているのに気づいた。いくら探してもない。宿の主人に注意されていたスリにやられたのだと気がつき、茫然として立ちつくした。思案にくれた彼は交番にかけこんで事情を訴えた。そこにいた若い巡査はこう然とした態度で、あざ笑うような調子で彼の不注意を叱って、街頭に突き出した。

途方にくれて、牛込江戸川にある郷土の大先輩、日本銀行総裁川田小一郎の邸に行き、玄関番にして下さいと家令に懇願したが、体よく断られた。やはり郷里の先輩で、神奈川県令から、今度代議士に当選した中島信行のことを新聞で知っていたので横浜に向った。

中島信行は若いころ坂本竜馬の海援隊に入り作太郎といふ、陸奥宗光と共に隊士中の双壁と呼ばれた人で、議会開会と同時に初期議会の衆議院議長となった。野毛山の宅を訪うと書生が出て、

「先生も奥さま（中島湘煙女史）も旅行に出られて、しばらくお留守です」

とあっさり言い渡され取りつくすべもない。

久吉は波止場に出ると、海の彼方に眼を放った。遠く故郷を離れ一人の語る知人もない旅の空で、無一文となってしまった。今さら悔やんでも仕方ない。さすが不屈の少年も完全に参った形である。だが彼は自分の無謀

や、世間知らずの幼稚さを反省したり、自分の志の実行できないことを嘆くよりも、さまざまな体験から世の中の不合理なこと、都会の冷酷な存在であることに対して押さえ難い憤どうろしさを覚える。無念である。

今まで耐えてきた熱い涙がぼたぼたと、止めどなく流れ落つるのをどうすることもできなかった。

できるだけ大きな声で叫びたいような、そこらに有るものを、手当り次第取って投げつけたような、訴えようのない衝動にかられながら彼は夕暮れの迫るのも忘れ、揺れては寄せる海波をにらみつけるようにして立っている。いつの間に現われたのか、一人の労働者風の男がそこに近ずいて来た。

此の男は久吉の様子を不審に思ったらしく“どうしたのだ”と親しげに話しかけた。スリにやられて極度に人を警戒するようになった彼も、溺れる者はワラをもつかむ心境から、ありのまゝを話すと、思案していた男は、今夜の寝食にも困るだろう、先ず俺の家に来るがよい、と行って連れていった。遠からぬ所に立ち並んでいる長屋の一つ。

それは波止場人足、港の労働者たちの宿舎である。

男はその小頭であった。その頃沖仲仕といえば、諸国のあぶれ者の集団で、労働者仲間でも劣等視され、普通人の余り近よらない社会であった。

毎日汽船の出入するごとに起重機はがらがらとうなる。騒音の中でかけ声勇ましく、大小の荷物をあげおる

しする仲仕たちの中に入って彼は働いた。やってみると想像以上に危険で、腕力のいる荒仕事だ。

苦しい仕事に追われて働くうちに、九月も半ばを過ぎた。故郷を出た日の健康な面影は消え失せ過労と酷暑と栄養不足で、彼は見るも哀れな少年労働者となつてしまった。

或る日偶然彼の姿が親方の眼について呼ばれた。事情をきいた親方は

「二度の失敗に挫け無理をして身体を損つてはだめだ。両親も心配しているだろう。ここはあきらめて国に帰り、再出発する方がよい」

と懇々とさとした。彼も親切な言葉に動かされて帰国することに決心した。

親方はじめみんなから餞別に貰った僅かな金を旅資にして、途中宿をとらないこと、食事とわらし代以外には、一錢も使わないことを心に誓い、東海道五十三次を徒歩で帰ることになった。海陸数百里の旅。行ける所まで行くと、わが心を励まし、澄んだ秋空を仰いで、彼は一步を踏み出した。

宿は、お寺や、神社の縁の下。時には、わらぐろの中にもぐる。日中はねむり朝夕涼しい間に馬力をかけて急ぐ。箱根山中では心中びくびくで野宿したが、何事もなかったので大いに自信ができた。美しい富士山が、自分を見守ってくれているようで、心のなごむ日が続く。イモ畑に入って、サツマイモをほってかじったり、柿の熟

したのをもいで食べて空腹を補ったりして歩くうちに、身体は大儀になる。足は重くなる。垢じみた衣類は破れる。虱がわく。大人たちはうさん臭そうに見送る。子供たちが乞食だといって寄って来たときは、どきつとして一度は立ちすくんだ。やがてもう何事にも驚かない、怖れないと観念して、黙々と歩き出す。

近江路に入った時には、完全に無一文になった。大津も遠くない処まで来ると、橋が修理中である。そこに臨時の渡船場ができていて、二銭の船賃を払わなくてはならない。大変なことになったが引き返すわけにはゆかない。待っている十数人の人たちのあとから、彼もふらふらと船に乗り込んだ。思案する間もなく、船は向岸に着いた。

彼の先きになって下船する、頭を切髪にした品の好いお婆さんが

「此の子の分も一しよに置きますよ」

そういって、彼の分まで払ってくれたので、ほつとして手を合せて拝みたい思いでぼんやり立っている彼の掌中に、一枚の紙幣をのせて、このお婆さんはさつといつてしまった。

思えば、苦しい、険しい幾山河、貧しい旅も日を重ねて、やつと生きて大阪に着くことができた。然し、故郷はなお遙かである。海を渡り、更に四国の難路を越えなくてはならない。体力は衰えはてた。飢や寒さがひしひしと身に迫る。彼は放心した人のように、あてもなく街

頭を歩いていた。痩せて、汚れて、ぼろを着て歩く、彼の見すばらしい姿は、大都会を行きかう人の目を引く。その人の中から

「おおつ、崎山君ではないか、どうした？」

驚いたように、声を掛けて、一人の村夫子然たる人が、彼のそばに寄ってくる。形容のできない叫びをあげて、彼がその人に抱き着くのと一瞬のことであつた。この人は郷里の先輩谷能猪という人で、此日所用で上阪し、偶然街頭で出あつたのだ。郷里に連れ帰られたあと、栄養失調のために、ひどい夜盲症となり、健康恢復に半年間の静養を要した。しかしこれだけの苦難を克服し得たことは、恵まれた彼の体力と、忍耐力のおかげだった。こうして期待した彼の東京行は、大失敗に終つたと人々は批判した。

三、環境と時代

ひたすら健康の回復に努めた甲斐があつて、久吉は元氣を取り戻した、過ぎ去つた苦勞も今は追憶の彼方に消えて、もとの愛される少年である。

変化に乏しい寒村の生活だから、日課の家業はいつも同じだ。山が深いので冬はかなり寒さがきびしく積雪の日もあれば、清水の堅く氷ることもある。そんなに冷たくても、土地の人は底のない半甲がけに、わらじばきで、

山に木を伐りにゆく。

生活程度は依然として低い。青年期に入った彼の友達は、いつしか一人前の若者になって、村の娘たちの品定めにも、興味を覚えるほどに生長した。

その同じ生活の中にとけ込んで、彼等と共に働いている様であつても、それは彼にとっては真実の関心事ではない。彼の胸中にはいつも此のままであつてはならないという向上心がひしめいている。依然として彼は暗い遠い道を夜学に通つたり先輩の門を叩いてその説に耳を傾けることに、無上の生甲斐を発見していた。その頃しばしば催される政治や、宗教の講演を熱心に傍聴した。山川草木を聴衆にして、一人で演説をぶつこともある。いつの間にか彼は急速に若い者を感じさす程の弁舌家になった。こうして平和な三年の月日が過ぎた。やがて、彼の生涯に大きな変動を与える転機がやって来た。

ここで、もう少し此の環境を拡大して説明すると同時に、幾分特色のあつたその時代にふれておくことがよいと思う。

土佐は大国で気候は良く、河川が多い。長い海岸線は変化に富み、好条件に恵まれていることは既に記したがその半面山岳地帯が七割四分を占めて耕地が少ない。

“土佐はよい国、南をうけて、年にお米が二度とれる”

此の俗謡よさこいぶしの調子は陽気であるが、兼山の

天才が開拓した上に、お米が年に二度とれても、なお主食は足りない。九十万の県民を養うためには、現在でも二十万石内外を、他県から仰いでいる。山地にはウルシの木、茶、製紙原料のコウゾ、ミツマタなどを植え、それを加工する一方、シイタケを栽培する。近海、遠洋の漁業に力を入れ、山海の獲物に依存してきた兼山の遺策を拡大強化する外には今日でも手はない。こんなわけで、県民の生活は豊かではない。特に農民の多くは、峻しい山地を上下し、四季の別なく人一倍働かなくては、ちやんとした暮しはできない。まだ経済力の幼稚だった明治二十年代の、小作農の生活がどんなにみじめであったか想像できよう。

働いても働いても楽にならない。こうした自然から受ける制約は、住民の性質や、生活態度を、消極的なまかけ者にするか、或は逆に非常に勤勉にするか、その何れかである。土佐人が勤勉で、激しい労働を苦にしないで、耐えているのは、いろんな悪条件に支配されないで、これに打ち勝ってきたことによるものと思う。その半面に古くから赤ん坊が生れると窒息死させる残酷な方法で、人口増加を防止する蛮行が行われていたので、土佐は鬼国と呼ばれていた。この暗い事実は今から生活のセチ辛かったことを物語っている。

土佐からは比較的人物が輩出している。それは偶然ではなくて、歴史的必然だといえ、理屈っぽくなるが、それ相応に淵源するところのあることは、誰れも否定はし

ないだろう。戦国時代には、国内に群雄が並び起って、七郡の山河に勝負を争い、互いに優勝者となろうと励んで、文を修め武を練った。その頃、南村梅軒という人物が現れ、朱子学を講じて、後に南学と呼ばれる学風を起し、大義名分を唱え、豪族吉良宣怪等がこれを支持し、谷時中に伝わり、南学は水戸学と共に、後に勤王思想の双壁といわれるまでに洗練され、発展した。山内が入国してから、一方では兼山執政時代、大いに学問を奨励したので、一時衰えた梅軒以後の学風が生氣を盛り返して、谷秦栗山以下多くの学徒を出して、活発な思想が展開された結果、南学を大成せしめた。特に明治維新前後に、土着の郷土階級から、優秀な人物が数多く出ていることは注目に価いする。

明治維新は結果からいえば、その字義の示す程の、徹底した維新にはならなかったが、短期間に、ある程度本質的な変革をやつてのけたという意味では、正に新らしい日本の誕生であり、再出発であつた。維新の変革に参加した雄藩中薩長土肥とよばれる中でも、土佐藩はその動乱期に最も多く、第一流の人物を失つた。吉村寅太郎、武市半平太、平井収二郎、間崎哲馬、坂本竜馬、中岡慎太郎等の志士は何れも悲命に倒れた。武市を除けば三十内外の若さだった。終局に近づいて第二流とも評すべき、板垣退助、後藤象次郎等が藩を代表して局面を收拾し、その後新政府に立って、参議の列に加わつたが、数の上からも、その勢力は、薩長には遠く及ばなかったの

である。

江藤新平、西郷隆盛が失脚し、木戸孝允、大久保利通、逝いてのち副島種臣は宮中に入って侍講となり、それ以後藩閥政府はいよいよ専制を恣にするようになった。万機公論に決すると誓った維新の公約は、すでに空文と化し、心ある民衆の眼が、在野志士の巨頭たちの行動に注がれるようになったことは、誠に自然の勢であつた。このような事情から、維新の功労者でそれまで民間にあり、自由民権思想を唱えていた板垣退助が、当時の民主運動の、総帥に推されたことは、偶然ではない。全国に散在する民間有志の多くが、彼のもとに集まり、自由党が結成された。

自由党の黨員中であつて、副総理をつとめた中島信行を始め、谷重喜、馬場辰猪、植木枝盛、林有造、片岡健吉、大石正己、竹内綱、大江卓、島本仲道、中江兆民、坂本直寛、山田平左衛門、西原清東、武市安哉等の、闘士論客は、皆板垣と同じ土佐の出身である。血気にはやる当時の若者たちが、自由は土佐の山間より生ると叫んだのも、あながち彼等のひとりよがりと言えないほど、自由民権運動は、早くから立志社を中心として、土佐の山河を揺り動かし、やがては全国を風びした。そののち民間のあらゆる政治的な結社団体と相呼応するに至り、遂に我が国の立憲政体を確立したのである。

近代日本の政治思想や、政治的運動の形式は、欧米各

国から学んだいわば輸入品であるが、これに先んじて、輸入された文化方面の運動に基督教がある。基督教が我が国人の精神的生活の面や、思想上に与え、今なお与えつつある、感化力の偉大なことは、何人も異議はあるまい。

基督教が、土佐に伝わったのには、他と異つた、特殊ないきさつがある。板垣退助は、日本に民主思想を普及徹底せしめるには、政治運動と同時に、種々の意味の啓蒙運動が必要だと考えた。

その重要な一つは基督教の研究である。立憲政治の先進国である欧米各国の文化は、基督教發達の結果であり、我が国民がこの教の真理を理解することこそ、民権思想發達の推進力となり、憲法政治を実施する場合の大きな支柱となるうというのがその理由である。

板垣の誘導のもとに、明治十一年五月、土佐における基督教伝道は宣教師マツキンソン及び村上俊友等によつて始められた。政治教育を使命とする立志社の人々がこれを助けた関係から、政談演説と並んで、同じ場所で、基督教の伝道説教が行われた。この伝道には植木枝盛、片岡健吉などが便宜を図った。その後、明治十七年から二十五年頃にかけて宣教師フルベツキ、ナックス、ならびに吉岡弘毅、山本秀煌、押川方義、植村正久、その他有力な教師がしばしば土佐に来て教を宜べ伝えた。こんなわけで、土佐では比較的上層の指導階級から、信仰者を出したので、高知教会のような大教会が生れた。前記自

由党の幹部の中でも、中島、植木、馬場、片岡、坂本、坂本、土居、武市、西原等は、何れも政界の闘将であつて、また、クリスチャンであつた。

熱狂的な民権論者たちが盛んに演説をぶつて回る。その一面、人の魂を捉えて浄化しないでは止まない、清新で、熱烈な伝道者の説教や、「さんびか」の声が、周囲の山河にこだまする。此の活気をおびた時代と環境は崎山久吉に決定的な影響を与えた。新らしい政治運動と、新らしい宗教的活動の渦巻の中で、その両面の闘士として活動していた武市安哉が、政界を辞して北海道に、理想の村落を開拓し、建設することになったとき、崎山久吉は拓士として参加したからである。

四、北海道開拓（聖園の創業）

現在では、北海道の大部分は、本土以上に開拓され、道民もまたやや進歩的である。津軽海峡を渡ると、一種清新な、自由な空気が流れていて、誰でも古い日本の伝統的な重苦しい社会から解放されたような、明朗な気分になることは否定できない。北海道は比較的新らしい開拓地であり、近代日本のフロンティアスピリットの発祥地である。その北海道も今は個人の努力で、開拓のできる有望な未墾地は、殆ど残されていない。だが、このような現状から、五、六十年前の北海道を想像することはで

きない。

明治の初年まで此処はずつと蝦夷ガ島であつて、幕末時代には浦賀、下田、長崎などが外船渡来の門戸となつたと同じく千島および北海道沿岸は北方からの侵略に脅かされた。そして最上徳内、間宮林蔵など、幾多先覚者の活躍の舞台となり、海岸線の要所は北辺守備のため、東北諸藩の派兵駐屯地となつたが、全道殆どアイヌと、クマ、シカ、キツネなど野獣の住家に過ぎなかつた。明治初年に北海道と改称されて開拓使が置かれ、開拓、建設に乗り出した後も、その中期までは、まだ一般国民からは古い名で呼ばれる場合が多く、クマの住む、小便の氷る、寒い処という程度の理解しかなかった。

明治四年米国人ケプロンが開拓使顧問として招かれ、北海道の経営に参加し、札幌市の設計まで企画した。北海道は開拓のはじめに当つて特に米国の開拓方式を多く採り入れたので、衣食住の末端に至るまで、それが浸透した時期もあつた。彼の献言に基づいて、北海道大学の前身、札幌農学校の設立にはクラーク博士が迎えられた。

クラーク博士は科学者であり、熱烈な清教徒であり、非凡な感化力をもつ教育者であつた。彼の教頭としての在任は一ヶ年の短時日であつたが、人間の感化というものは、間時の長短に比例するものでないことを示してくれた。札幌農学校からは宮部金吾、新渡戸稲造、佐藤昌介、広井勇、内村鑑三、志賀重昂等々、明治文化の上に

重要な役割を果たした人を沢山送り出したが、此等の中でも彼の作った札幌バンドに加盟した人たちは、特信な基督教信徒となった。ちょうど北米合衆国の開拓時代に似たような、果敢な創業的気魄を呼び起して、この新天地の開拓精神を盛んにしたことと、日本の精神界に大きな貢献をした基督教の有力な一派が、原始林に囲まれた札幌から発展したこと、この二つの精神的な面は、何れも重視しなくてはならない。

明治十四年に北海道開拓使官有物払下事件が起り、国論がわきたった。これから朝野の間に政争が激しくなり、各政党の組織、その発展、療法發布から、国会開設に至るまでの十年間、北海道の開拓事業は停顿状態であつた。その反動でもあるまいが、明治二十四五年頃になると、日本人の眼は急に北に向つた。

例えば、騎馬で單身ベルリンを立ち、シベリアを横断、アジア大陸を踏破した福島安正中佐の旅行記事が、その当時のどの新聞を開いて見ても、殆ど毎日紙面の数段を埋めている。同じ頃、千島の開拓と守備を目的とした、奉効義会が、郡司成忠大尉（海軍）によつて結成されている。

明治二十六年（一八九三）三月二十日大尉以下百余名の同志は、千九百三十七カイリにおよぶ北海の波浪を乗り切る悲壮な決意で、墨堤から三艇のボートを漕いで壮途に上った。満都の人士、特に都下幾万の学生たちが熱狂してこれを歓送した状況、一行の航海、途上における

多大の犠牲、千島における行動などが、毎日の地方新聞にまででかでかと扱われている。こういう有様で当時の国民の関心と興味が、北方に注がれるようになっていた。

そのころ高知県選出代議士武市安哉は、議員の職を辞し、北海道に移住して開拓に従事することを計画し、発表した。一般社会、特に高知県民は不安と、感動の交錯した思いでこれを迎えた。

武市安哉は、高知県長岡郡大篠村の人、家は郷土である。数町歩の土地を持つ、この地方の中農で、村は香長平野の中心にあり、年に米が二度とれる良田で、県下の農村中最も富んだ処である。

彼は小学校の代用教員を振り出しに区長、大区長、郡書記など勤め、明治十四年郷友千余人を率いて自由党に参加し、数回県会議員に当選し、議長に推された。明治十七年クリスト教を信奉し、一生貫いた。身分も、教養も、概して高からぬ彼が郷党の信頼を博し、同志を信服せしめたのは、その徳望に依ることとはもとよりであるが、また、その信念に立つ剛毅と公正無私な人格に負う処が多かった。

明治二十三年、有名な三大事件（言論の自由、地租軽減、条約改正）に関し、県民の代表となったが、保安条例の発布にあい、十二月二十六日、全国六百有余人の同志はことごとく、帝都三里外に退去を命ぜられた。高知

県代表の中でかれら二十余人は頑強にその命を拒み、芝山内のバリケードを突破し、警官と衝突したので遂に捕われ、片岡健吉、坂本直寛等の同志と共に、軽禁錮二年六ヶ月の刑を受けて、石川島監獄につながれた。

憲法発布の大赦で在獄一年二ヶ月で釈放され、静かに郷里で晴耕雨読の日を送っていた。明治二十四年十二月第二帝国議会が解散され、翌年の総選挙に、彼は高知県第一区有志から推され、衆議院議員に立候補した。選挙は我が憲政史上かつてないといわれた政府の干渉弾圧で、特に高知県では死者十、傷者六十六名を出し、遂に予戒令を布くという騒ぎであったが、彼は見事これを突破して、代議士の栄冠を勝ち得た。

第三議会には自由党を代表して選挙干渉に痛烈な批判を浴びせ、一躍政界名士の列に入った。そのあと自由党の政務調査員となり、明治二十五年初秋、後志、胆振、日高、石狩の地方を視察した。その結果、当時の北海道開拓事業が、かけ声の大きな割合に成果の挙っていない現状を遺憾に思う半面、その自然の雄大で、美しいことに、すっかり魅せられてしまった。

清廉で名を求めぬ武市にとって、政界は好ましい舞台ではなかった。北海道の自然に心ひかれた彼は、この富源を開拓して生産開発に当る事は、代議士よりも自分の性質にあい、人口増加の傾向にある我国にとり、有意義であるばかりでなく、神に奉ずる聖業であると感じ、すぐに実行しようと決心した。

中央政界の名士、武市安哉が開拓者の陣頭に立つことは、北海道にとり大きなプラスになるので、農場選択には現地官民有力者が好意的な扱いをしてくれたので、石狩国樺戸郡月形村字ウラウシナイ（現在札沼線浦臼駅所在の浦臼村）に移住地を選定することができた。選定と同時に払下手続を進める傍ら、明治二十六年選挙民に代議士辞任の諒解を得、郷里高知県で移民募集に着手した。この計画に対して、世論は賛否相半ばした。

単に開拓の理想を語るだけでなく、山国で、耕地の狭い高知県は既に人口過剰である。県外への移住による発展の必要を彼は熱心に強調し、県民の奮起を促がし、自から勧誘につとめた。募集要領は、移民には一戸当り五町歩若しくはそれ以上の土地を与える。開拓資金は原則として自弁であるが、その能力のない者には、必要に応じて貸与する。その外に移民として自発的に守るべき厳重な約束があった。移民は農繁期と雖も、日曜日には業を休み、教会礼拝に出席すること。農場に於ては酒類を販売し、若しくは飲用しないこと。である。武市安哉の理想はこの処女林を拓いて、ここにクリスト教の信仰による理想郷を建設することであつたが、彼は最初から移民が信者であるかどうかを問題にしなかった。恐らく身を以て移民たちを信仰に導く自信をもっていたのであるう。

禁酒ということに特に重きをおいたのは、土佐人に多い飲酒癖を直して明朗で健全な家庭を営む事が成功の要

件であると同時に、こうした移民によって、真の理想郷が出現するものと考えたのである。

南国から寒いクマの住む処へ移住するので、この計画は果してどうなることかと危ぶまれたが、武市の声望と、誠意をこめた勧誘と、新聞が大いに声援してくれたので、第一期移民は数カ月で予定に近い数となった。その年は土地払下が遅れ、耕作の時期を逸したので、翌年三月まで延期することにした。ところが、六月に払下がきまると、すでに決心した移民の大部分は開拓の不利を承知のうえ、すぐに強行してもらいたいと望み、制止しきれないので二十六名を先行させた。

前後二回の出願により払下げられた武市農場の土地面積は三百八十二万四千坪。千二百七十町歩であった。

東京行につまずいて以来雌伏していた崎山久吉は雄志を胸に秘めて、家業につとめ、暇あれば読書に親しんでいた。チャンスは到来した。二十六名の開拓者の一人となつて、北海道に移住することになったのである。何の伝統をもたぬ新天地、みなぎる清新で自由な思想、誰もオノを入れたことのない原始林にいどむ意気。その中に同志と共に終始した若き日の開拓者としての生活が始まろうとしている。

五、北海道開拓（入信）

北海道開拓の記事に就ては一九三七年十月二十二日、彼がマウエスで記した『武市安哉先生追憶』の手記を参考とする。以下この項に手記とあるのはすべてその引照である。

開拓に参加したわけは手記によると次のようだ。

明治二十六年の春、先輩前田岩吉先生（当時 二十八歳）がメキシコに行くと言った私は同行さして貰う考えで、お宅を訪問した。先生は「自分の今度の旅行は少し冒険だから誰も同行できないが、友人の武市が今度青年を連れて北海道の開拓にゆく計画だから君の同行を頼んでやろう」父母にも内密で、結果いかにと待っていると、友人の吉村喜蔵君が訪ねてくれて、

「武市さんが君を北海道に連れてゆくそうだ」

と知らしてくれた。そのときの嬉しかったこととは譬えようもない。父もうすうす知っていたらしく、

「久は北海道に行くつもりか」

と聴くので仕方なく、ありのままを話して頼むと、喜んで即座に賛成してくれた。

出発は旧暦の五月八日（陽暦六月二十日頃）だったと思う。その日には実母亡きあと、自分や姉弟を泣いていたわってくれていた、母方の祖母が、この時は余程嬉し

かつたらしく、親戚や友人と一緒になつて大うねまで送ってくれた。父は私の荷物を担いで繁藤から取引を通り、途中で水をすくつてのどをうるおしながら前途を語りつつ、十余里の道を高知まで送ってくれた。本山からは前田駒次、大久保虎吉、岡林唯八、本山久太郎の諸氏と私の五人で、それに天坪から佐藤熊太郎、畑山達三郎、北村宗信の三君が加わり、高知の数日滞在には八人が同宿した。

逗留中に少年時代の恩師高田一二先生の招宴を受けた。大篠村の武市宅に使いして初めて夫人に会い、また同志の案内で高知教会に出席して聖書講義を聞いているがそのときの解説者が若き日の多田素牧師であつたという。高知で石丸左右次夫妻と長男守義（四歳）斎藤為熊、武市茂久治が加わり、前田駒次の指導のもとに浦戸から乗船した。そのとき彼はふとん一枚、聖書、さんび歌（一冊各十銭）林子平著エゾ物語、農業経済雑誌を買っている。神戸で同県人経営の禁酒宿畠中旅館に泊り、一行全部が揃った。その夜初めて祈祷会に出席した時の様子を彼は次のように記しておる。

初めて祈祷会なるものに出た私はばう然として頸をあげていると、隣りにいた齋藤君が「君 お祈りのときはこうしているものだ」

といって、私の頭をぐつと押さえつけて教えてくれた。その夜の有志の祈りは熱のこもった真剣そのもの

であつた。

その時の宿泊料は、三食付一昼夜十銭であつたというのだから、一寸想像外である。神戸で乗船して横浜、荻ノ浜、函館に寄港し約二週間目の七月九日に小樽港に上陸した。船中では岡林唯八と彼とが短気者で、よく激論したらしい。

初めて接する北海道の風物である。小樽の市街はススキた低いマサぶきの家が立ち並んでいる。

手宮駅から石炭運搬潤の無蓋車に乗り込んで、バイ煙をコウモリガサで防ぎながら北に向う、この鉄道は炭鉱会社のもので石炭輸送が目的で客車がない。沿道にはイタドリ（虎杖）フキその他の名も知らぬ雑草が、バケモノのように茂っているのでみな感嘆の声をもらす。江別まんじゅうはその頃から名物で、一行喜んで賞美したらしい。峰延駅で下車し、ここから名々荷物をかついで、十六キロの野道を歩くのだ。丈余の雑草が茫々と茂った平坦な草原の中を、道は一直線に西に向っている。夕暮近く石狩川を独木舟で渡り、予想したよりも川幅の狭いのを意外に思いつつ、月形の街に入り、一行はその夜メソジスト教会講義所に一泊した。その牧師は、現存される日本社会事業界の大元老生江孝之で、囚人の教誨に、植民地の伝道に情熱を傾けている若い姿であつた。牧師と教会員の厚遇に一夜を過ごした一行は、翌日も荷物を肩に、今度は方向を北に転じて増毛街道を、昨日と同じ十六キロの行程を歩いた。

行けども、行けども、一人の農夫にも出会わさないが、道ばたに数百人のカーキ色の作業服を着て、腰に重い鎖を引きずって伐木しているのを見た。月形には空知監獄の分監があり、此の人たちはそこに収監されている重罪犯人であった。みんなが遠い北国に來たという陰惨な印象をひとしお深くしたのも無理のないことである。

密林がところどころ伐り払われて、移民の小足がまばらに建っているところを過ぎて、やがてうつそうとした深林を三キロばかり行くと、清い小川の流れている橋上に着いた。此の道路はやはり増毛街道で、ここはすでに農場内の札的内と呼ぶところだった。そこで、橋の下の河原に一夜を明かした。翌日は一日後れて乗馬で到着する農場主武市安哉を迎える。真夏の太陽は密林の緑にさんさんと光を投げ、昼なおうす暗いまわりには、クマバチのような無数のアブが、大きなうなり声を立てて飛び交い物凄いばかりである。やがてそこに着いた武市は温顔に笑みをたたえて、悠然と馬から下り立った。その前に出て、代る代る挨拶を交わす。久吉の手記は初対面の印象をこう書いている。

「先生は一見平凡な温乎たる風貌のうちに、どこやら犯し難い威厳をそなえていた。身体も大きく血色の良いい、その落ち着いた態度は、やはり一頭地を抜いた人物であることを思わしめ、ああこれが我等の先生かと自ずと頭が下がった。」

時は明治二十六年七月十三日。十九歳の久吉は、一行中の最年少者であった。事件や背景の大小は別として、日本のメーフラワーとも評すべき此の一団は、ここにひざまずいて、天地の造り主を讃美し、感謝の祈りを捧げ、此の処をヒジリ（聖）のような人の住む所にと願って『聖園』と命名した。春風秋雨六十年を経た今日でも、七月十三日は創業記念日として、聖園教会では厚い感謝の祈りがささげられている。

開拓本部の仮事務所には、前田駒次が参謀格で陣どり、本部班によつて測量、道路仮設、本部建築などの基礎的な創業の仕事が進められることとなり、久吉はその勤務に服した。前田駒次は一団の年長者、沈着で頭腦のチミツな、人を統率する材幹だったので、武市から絶対の信任を得ていた。このとき大いに活躍したのは後に代議士になった大工の大久保虎吉で、本部、教会などの建物は総て彼の手で建築した。武市もその指揮のもとで、喜んで木材を担いだこともあつたという。作業は壮快なようであるが開拓の半面にはまた、想像を許さぬ苦しさがある。手記は語る。

こんな仕事をする一方で、その付近を伐木し大急ぎで開墾し、ソバや秋作の野菜をまくなど、開拓者の一日は寸暇もない。一番閉口したのは、マラリアにかかったときで、この病気は急に発熱し四十度位になり、身体がガタガタ震える。初めには何だか気味が悪い。私もこ

れにやられてキャンプに帰り一人寝ていると、日中にブヨ、アブ、カが血に飢えてぶんぶんうんうんうなつて侵入してくる。何れも毒をもっている。中でもアブは大きくて、喰い付かれると痛い。それを叩き殺して紙袋に入れると、またたく間に五、六十匹になった。こんな有様で病氣してもロクに静養もできない。夕方一人が行水するのに、三人位で力軍を逐い払いながら、行水するといふ光景が暫く続いた

本部の仕事が一段落すると、五町歩宛に区劃された一戸分の土地を中州（なかず）に選定して前田を除く本山組は、名々そこに小屋掛けをして、伐木、クマザサ刈をはじめた。入植の日から武市は日曜日には一同を集め、キャンプ、次には新築の本部で、礼拝を守ることを怠らなかつた。手記によると、

入植の日から毎朝、先生を中心に炊事当番以外は朝拝を守り、それから食事をすまし、仕事に掛るのであったが、私はできるだけ炊事を手伝って、集会を避けていた。それを見破られて皆から叱られた。本山久太郎君とササを刈りながら「君はヤソになるか、俺はならないぞ」「うん、僕も絶対にヤソにはならんぞ」互いに反抗的な気持ちで、こんなことを話し合つて、ヤソ教などなるものかと力んでいた。だから私は聖書を読まされたり、その講義を聞いても、半ば反抗的な態度だつたがそのくせい

つも寂しがっていた。ある日曜礼拝に武市先生が『われ
渴く』（ヨハネ伝「九章二八節」）と題して、イエスの十
字架上の言葉をひいて、その死に就て説教された。

“イエスの最後は世界のあらゆる英雄や偉人の最後に
まさり、且つ全然異なる態度のものである。それは人間
のえらさを越えた、人を救う神の子の姿である。人間は
最後の一瞬まで、えらいといわれる人ほど、自分の弱さ
を見せまいとして、様々の表現をするものである。イエ
スの十字架上の死はそうでない。我が意にあらずして御
意の成らんことを願い、飽くまで神の御意志に従うこと
であつて、自己を示そうとするが如き點は少しもない。
そして死を越えて死に打勝つて永遠の世界にうつられた
のである。われわれは英雄偉人にあこがれ、之を崇拜す
る念の強いものであるが、然し真に拝すべきは、死生を
支配する偉大な永遠の人格者イエスである。われらは彼
においてはじめて神を知り、神を見ることができる。

こういう意味のことを強調された。そのときの私はど
んな心境であつたのか、非常な感銘を受けた。イエスを
教主として受入れるだけの理解には達していなかった
が、人類最高の偉大な方であると思うようになり、それ
から聖書を本気で研究し、心ひそかに祈るようになって
た。ある日佐藤熊太郎君（のち精郎）の所に手助けにゆ
き、マリアの発熱で帰る途中、林の中にオノとカマを
投げ出し、道もないササ原に伏して休んでいた。そのと
きわれ知らず声を出して祈った。これは私が神に向つて

あげた第一声である。それから信仰の道に励み、人名の人たちと共に洗礼を受けた。われわれが聖園創立最初の神に献げるお初穂となったので、これは私にとり光栄であり生涯のうち最大の感謝である。

著者註：明治二十六年十月二十七日発行、福音新報第一三七号地方通信欄の中に「聖園講義所通信」と題し左の記事がある。

“十月七日当講義所に於て洗礼式を執り行い左の九氏が小樽教会光小太郎牧師より受洗さる。なほ当日は式後聖餐式を併せ執り行われたり

受洗者氏名、石丸左右次、平井虎太郎、和田吉弥、崎山久吉、水田菊太郎、野口芳太郎、佐藤熊太郎、北村宗信、畑山達三郎。

“ヤソになんか成るものか”と力んでいた数ヶ月後には、彼は受洗している。人一倍激情で、怒りっぽくもある。その半面人なつこい、寂しがりの彼が、植民地のササ小屋の中に孤独な日を過ごした生活にもよるのであるが、また、意識すると否とにかかわらず、彼の時代と環境に負う処が多いことも否めない。純情な青年期を武市安哉のような人物によって指導された影響は大きい。何れにしても生気の横溢する自然の営みの中に投げ込まれて、その開拓に着手している間に、彼自身の精神的開拓が、一歩先んじたことは特筆に価する。蛟竜は遂に雨

を得た。信仰に目覚めた彼の魂はどこまで羽ばたくであろうか。

六、北海道開拓（試練の生活）

千古オノを入れたことのない原始林の神秘を若し国木田独歩の「武蔵野」のように美しく描写すれば詩篇ともなろう。しかしこの原始林は同じ 樹木の少ない地面をえらび丈余の雑草を退治して、ソバや秋まきの野菜をまきつける。共同で本部や近隣に通ずる道を作る。道といつても、ジャ独歩（注・ママ）が空知川の岸边」で、冷厳な自然と形容してスキを投げたほど、開拓者として立ち向うとき、妥協を許さぬ冷厳な存在である。そこには努力と忍耐の連続があるばかりで、聖園の創業また然りであった。ここでは人間の生活条件としては、自分の努力によつて自由に処理することのできる五町歩の原始林があるだけである。

彼はウラウス沼の沼尻から石狩川に流れる小川に沿った地点に柔かい草を刈りあげ、そこに仮小屋を建てた。建築材料に良い大きなヤチタモなどが林立しているが、それを活用する技能もたなければ、長く時日を費すことも許されない。手ごろな立木を切つて、丸木柱とし、同じ丸太材をハリや棟木にして六坪の堀立小屋ができた。屋根や壁はすっかりクマザサを刈つておおい、床は木の

皮を張って、その上に荒ムシロをしいた。真ん中に三尺角の口を切り、出入口には一枚のムシロをつるしてドアの代用にする。用水は長いナワでつるしたバケツを裏の小川に投げ込んで汲み上げる。この小屋は冬がくると四隅には五六寸ばかり雪が吹き込んでつもった。彼は一年近くこの小屋で最低生活に甘んじた。

ジャングルを切り開くだけで、夜は到底通行できない、昼間迷わぬ道じるしの程度で、最初のうちはクマを避けるために石油の空罐を叩いて歩いた。

次の仕事は伐木である。ヤチタモ、ニレ、カツラ、イタヤ、キハダなど種類は多種多様で、これらの大木の間雑多な灌木が茂り、それに山ブドウ、コクワなどのツルがどこまでもはいまつわっている。樹木は径六尺に近い大きなのがざらで、何れも光線を求め競って空へ空へと伸びるので下枝は殆どない。上の方が茂っているので光線が通らない。文字通り千古の密林である。次から次ぎと幹を半分ばかりノコでひいて、大きなを一本倒しかけると、バリバリという音が静かな森をゆるがす。地響きを立てながら折り重なって倒れる勢は息をのむほどすぎましい。伐木は体験したものだけの味う男性的な作業である。伐木は大体冬を過ぎた二三月ごろの堅雪の季節をえらんで行われた。

少し伐木すると附近のササを刈り、快晴の日が続いたころを見はからって火をつける。これがまた壮観である。伐り倒した木や、枯れたササの燃える音は、何個中

隊ものの兵隊が小銃を発射するようだ。その火勢でまわりの立木の幹や葉からほとばしる樹脂の焦げる音も混って物すごい光景であつた。焼けた跡は翌年までにはササの根は腐ってしまつて開墾はやさしい。こんな荒仕事に明けくれて、彼は風呂にも入らず、頭髮は刈らず、すかず、すつかり山男のようになって試練に耐えた。

商店は月形か、川向いの六キロへだてた奈井江駅までゆかなければ塩鮭一匹もシャツ一枚も買えない。米、ミソ、シヨウユなどの主食品だけは本部で扱う。それ以外は日常の必需品すら間に合わないし、もちろん行商人など来るはずはない。高い米が買えないので隣りの十津川村から雑穀を買つて常食とする。他の移民も多くは同じである。

副食物も極端に乏しいので野生のものもシバユリ、ヤマニンジン、アイヌニンクなどを野菜の代用にする。夏というのにダイコンの千切を入れたミソ汁を幾日でもすするといふ不自由な有様で、川には魚が群をなしているが捕える暇が惜しい。

ここでは冬が早い。冬がくると一夜に三尺位雪の積もることが多い。彼だけでなく聖園の開拓者たちは雪を知らぬ南国育ちの人たちゆえ、冬將軍の襲来は最も脅威で、防寒生活について無知であつたことも同情できよう。もちろんこれらは消極的な忍耐力ですませる場合もあるが、当初は全然機械力を用いることができないので

伐木、開墾、物資輸送、一切のことは、自分の労働力に頼らねばならぬ。人を雇おうにも誰もいない。労働力を十分に発揮できるかどうかということは、開拓者の成敗の分れ目である。しかもそれは激働であり、伐木のような荒仕事は危険さえ伴う。どんな人格者も、知恵者も、実行力のないものは、ここでは完全な落伍者である。不便と不自由と粗食に耐え、労働力をもち、それを休みなく持続すること、従って健康で強い忍耐力をもつことが開拓者として絶対必要な資格である。

いついかなる場合にも開拓者の生活は忍苦の一言につきる。スリルに満ちた西部劇的な物語は初期の少ない出来ごとで、実際にアメリカ大陸の開拓史をかざるのは、黙々として忍苦に耐え、鋤を振った人たちである。

小鳥の鳴き声以外に物音一つしない静かな草林の中では、何かしら息ずまるような孤独感にひしひしと襲われる。一種の神秘的な力で、登山者のような一時的なものでなく常時そこに生活するとなれば、それに耐え、打ち勝ち、それを楽しむために精神的な抵抗力が必要だ。開拓とか移民とかいうことを農林省や、道府県の補助を受けて入植した、戦後の開拓者と同じ視して考える事は当らない。当時の移植民者は独力で、何等の恩恵を受けなかった。だから移民の中に開拓の途中で、涙をのんで事業を放棄する者が多かったとしても、あながち薄志弱行の徒として片づけけることは許されないのである。

「聖園」武市農場における初期の移民たちも、それらの

制約から脱れ出ることは出来なかった。

しかしここには一人の落伍者もなかった。中途から理想にあこがれてやって来た連中があった。彼らは学生生活で、本部に寄食して開拓の仕事を手伝っていた。しかし、その人たちは三ヶ月足らずで、みんな農場を去ってしまった。

まだ未成年者である崎山久吉はこの困難な開墾の仕事を独自の力でやってのけ、立派にさまざまな試練と戦い、打ちかつてみせた。

開墾の仕事に忙がしい農場にも特記すべき幾つかの変った事柄があつた。追憶の手記の終りの一節をかかげ當時をしのんでみよう。

「武市先生は北海道に出発するに先だつて、旧藩主山内家に暇乞にうかがつた。そのときに同家から餞別をもらつた。そののしをつけた一封には金壺万円が封入されてあつた。先生はそのことを誠に有難いことだとわれわれに報告し、更にこう付け加えられた。「これは平素私とは政敵の立場にあつた谷君（熊本籠城の司令官として有名な陸軍中将谷干城のこと）の御尽力による賜物と思う」と感謝しつつ話された。ところが入植した年の九月半ばに、その谷將軍が旧藩主山内豊景侯を案内して農場を訪問された。その夜キャンプの中で、谷氏は、

「北米の清教徒は迫害の為に追われて止むなく移住したので、いわば背水の陣をしいたのであるが、諸君は氣候の良い土佐から武市君の理想に共鳴して移住したのである。つまり、思う通り、願ったように順調な道をたどっているだけに、むしろ彼等にもまさる覚悟を必要とすることゝ思う」

と警告し激励せられた。翌年三月末には新らしく家旅移民が多数入植し、農場は急ににぎやかになった。その年の盛夏の頃、東北学院々長押川方義先生が訪問され、日曜日に礼拝説教された。それは私の一生忘れ得ぬ感動であり、特にそのとき武市先生一家と、農場と、移民のために捧げた熱心な祈りには、満堂の会衆ことごとく涙にむせんだ。

この年の早春、空知郡市来知で冬期学校が開校され、私共同志のもの八名が出席した。講師は松村松年博士、内田瀨博士、小川二郎農学士、教誨師原胤昭、留岡幸助、牧野虎次等の諸先生であつた。此の先輩たちが、最初の試みが大成功であるからとて、帰省中の武市先生に報告する相談をしているのをみて、私は先生がこんなに重んぜられているのかと驚いた。

そのうちに知名士の間に、先生が大きな存在であり、北海道開拓の中心人物となりつゝあること、先生の事業の成敗に関心の払われていること、などが私に理解されてきた。他村に行つても評判が高いし、サンタクロというアイヌの老人を訪問したときにも、武市先生は良い人

であると繰り返していた。日本の朝野はもとより、遠く米国など海外にまで喧伝されるに至ったときく一方、名もない、関係もない田夫野人からも同じ様に尊敬されている事実を知るほど、私はかゝる先生から直接指導して頂いている事が、いかにしあわせなことかと思ひ、またそれを誇りにも思つたのである。

明治二十七年十二月一日、武市先生は津軽海峡航行中、千歳丸の船中で、脳溢血で突然永眠された。慈父を失つた開拓民の悲しみは言葉では説明できない。生前先生がここを墳墓の地と選定された札的内の高台に、私たちの肩で先生の遺骸をかつぎ、そこに懇ろに葬つて墓を築いた。墓標には、

“われ既に世に勝てり” と書かれてあつた。

私は後日東京勉学中に帰省して、墓前に一本の落葉松を植えた。二十余年後南米旅行から帰朝して墓参した時には、立派な墓石が既に風霜に古び、落葉松は大きく育つていた。一粒の麦は余りにも早く地に落ちたが、先生の理想は吾等の、またつぎつぎに生れ出る人々の胸に生き、此の開拓の灯火は世界の果てまで輝きつゝ拡がつてゆくであろう。先生逝いて四十五年過ぎた今、私は赤道直下に近いアマゾンの奥に永住の地を定め墳墓の地と決めている。かしこは北半球で雪の国、ここは南半球常夏の国、誠に感慨無量である。そして総てのものゝ上に在して変らざるは永遠の神である。

(完)

明治二十七年の春には、母と姉と弟の三人が来た。小樽に出迎えた久吉の頭髮は一尺ばかり伸び、雪にやけた顔は真黒く眼だけが光っているので、家族が彼であることを納得するには、しばし戸まどつた。弟の松吾は体力人に秀れ、最早一人前の働きができるので開拓の仕事はぐんぐんはかどつた。その年にはムギ、アワ、キビ、トウモロコシ、ダイズ、アズキ、バレイシヨなどを植えた。肥料はいらないうえに収穫は満点とあつて有難いことであるが、交通不便で搬出が容易でないために、生産品はお話にならないほど安く、経営上大きな痛手であつた。

手記にもあつたように、武市安哉の急逝は、農場の支柱を失うと同時に、特に青年層に深刻な打撃を与えた。これが久吉の心境を変化させたことも見逃がせない。武市が広大な土地を提供して押川方義と共に計画していた開拓学校も具体化されずにしまった。同志たちが将来に期待したことはみな夢となりそうである。みんな羅針盤を失つた船の乗組員同様で、この大きな空白に直面して、期待した希望をなげうつ外ないことを覚つた。しかし動揺が収まると次第に彼等は、その指導者が、「君たちはここで経験を つんで、みんな立派な新らしい村造りになれ」と明け暮れに訓えられたことを想起し、一人一人が独自の境地を開拓しようとの自信を取り戻して、失意のどん底から起ち上がった。更生した崎山久吉は、それ

以後一層教養を身につける必要を感じたのであるが、さて先だつものは学資である。

二十八年の春には、郷里の家を始末した父と二人の義妹が来たので三年目に家族全部がそろった。開墾の能率はあがったが、浸水のため換地をして引越すことになり、住宅建築、そこへ農作は予期しない虫害、霜害に加えて、クマにまで荒される。収穫した生産物はまとまった金にはならない。自分の素志を貫徹するには、何とか局面を打開しなくてはならない。こんなときに家には不幸なことが起った。

武市安哉は生前、「われわれがクマの住家に押しかけて厄介になるのだから、若しクマが怒つてもそれは無理のないことだ」などと笑い話をしていた位で、実際クマを虐めないことにして、あまり怖ろしがりもしなかったので、みなその気持に同調していた。確かにクマは猛獣ではない。人間が強て圧迫しなければ危害を加えないのが常態である。著者も少年時代三度まで草原でクマに遭遇したが、いつもクマの方が先きに遠慮してくれたので、今でもクマは猛獣ではないと思っている。

ところが未熟なトウモロコシはクマの大好物とみえ、秋になると毎夜のように畑にやって来て、一夜のうちに数百坪の作物を荒して歩く。

そこでたまりかねた移民が、忙がしい家業を休んでクマ狩をする。二十八年の十月、ある秋晴の日、百人近い

人たちがドラをたたき、クマを追出して包囲した。そのまわりを次第に狭めていって、クマに迫り、射止めようとするのである。クマは残された未墾地の樹林や、雑草の中を逃げかくれする。常吾と、小笠原袈裟次の二人がクマの所在を突き止めようとして、取囲んだ中を数十メートル歩いていった。突然一頭のヒグマ（北海道産の大熊）が草の中から立ち上り、常吾を仰のけに押倒し、前脚で彼の胸部と大腿部を踏まえて、下腹部にかみつこうとした。危機一髪である。わずか数歩離れていた小笠原は、間髪を入れず持った銃を逆さまに振り上げ、クマの尻を力一杯に叩くと、クマは前の草の中に跳び込んだ。急いで抱え出した常吾は、肺部に近い所を教本の鋭い長い爪で刺され、大腿部の肉はむしりとられ、気丈な彼も間もなく、一時失神する程の重傷を負った。

このため札幌の病院に入院してその後四ヶ月の治療を要した。

怒った移民たちは、二日にわたる巻狩のあと、やつと此の大クマを討ち止めた。重さ七十貫のクマは札的内の河原で解剖し、肉は農場移民の全家庭に配った。此のクマ狩は、「聖園」で行われた空前絶後の大掛りなものであった。

父の傷は急所を外れていたので幸いに恢復したが、このために崎山一家は経済的に大きな打撃をうけた。かねて局面打破を考えていた久吉は、その年の冬から雪中だけ空知郡野花南の山小屋に入り、やまごになつて働くこ

とにした。積雪の車をかんじき（ブドーのツルなどを輪型にしたもので足が雪にはまるのを防ぐ）をはいて、山深く入り伐木する。雪煙をあげて深い雪の中に倒れる巨木のまわりの雪を払いのけ、枕木の長さに丸太にひき切る、つまりキコリが角材に削る前の準備作業である。

こうして冬は山に入り、農繁期は家にあつて彼は黙々として働いた。創業当時の移民生活は、誰れも同じ様に耐乏の極であつたが、それらの人々をすら感嘆せしめるほど、久吉のそれは徹底していた。開墾期限五ヶ年と限られた五町歩の土地は、期限内に大体完了した。二ヶ年の冬期間山で働いた収入は、負債を片づけたほかに目的の学資として若干をあますことができたので、三月山を下りた彼は家業一切を家族にゆだね、第二の故郷、魂のふるさとである聖園をあとに仙台に向つて出発した。

彼に転機を与えた聖園のその後はどうなったか。一言だけ付け加えておこう。

武市安哉の急逝のために、種々の計画は具体化されず、高貴な理想は、双葉のうちにしぼんだ。

嗣子健雄、二男精四郎が相ついで父の後を追ひ、後見者女婿土居勝郎（北海道々会議長となる）は政界に投じ、実際の指導者小野田卓弥また早逝し、坂本直寛の移住によりやゝ生氣を取り戻した。直寛は坂本竜馬の後裔、自由党幹部中でもミルやスペンサーを原書で読める当時の最新知識であつた。政友武市の没後その志を助けたい願

いから聖園に移住し、沼のほとりにロシヤ式の建築をして住み、青年の指導に尽した。しかし名家の出である彼は、開拓移民の相手には高級過ぎた。在住五ヶ年、既に政界から足を洗った彼はまた聖園を去って教界に入り、各地のキリスト教伝道に奉仕し、孤高の晩年を終った。

羅針盤を失った聖園は、精神的彷徨を余儀なくされたが、農地の開拓は着々成功した。同志のうち、前田駒次は北見北光社（今の北見市）の大農場を開拓し、大久保虎吉は代議士となり、その事業は一時全道にまたがった。佐藤精郎らは北米に渡り、その他は北海道における有力な開拓指導者、農業経営者となり、聖園教会はその法灯を守軒、真理の霊火は現在武市の令孫、土居英子牧師と同信の人達によつて文持され、高く遠く後人を照らしている。

昭和二十八年七月十三日、聖園教会主催のもとに、盛大な創業六十周年記念祭典を挙げ、思い出の札的内には記念碑が建てられた。碑面には武市に因縁浅からぬ、賀川豊彦の筆で「聖園創始記念之地」の八大文字が刻まれ、台石の表面には「武市安哉略歴」を誌した銅板がはめられ、碑の側面は、佐波亘の撰に成る左の一文が飾られている。

ここは今より六十年前、明治二十六年（一八九三）夏、高知県人元代議士武市安哉が基督教生活の自由、独立、理想を志し、米国大陸に信仰の理想郷を建設せんとし

て、故国の一切を捨て、大洋を渡りし彼の清教徒ピュリタンの一群の如き意気熾んなる郷党の青年二十六名を率いて開墾、教育、伝道に従事せる、永遠に亘る聖なる事業発祥の記念の地にして、移住後間もなく彼等は此の地を聖園と命名し、早くも堅園教会の礎石が据えられた。悲しい哉、一団の楷導者である武市安哉は翌二十七年冬突如帰天したが、人生は短く神の事業は永遠であり、爾来今日まで奇しくも聖なる事業はこの地に維持せられつゝある、美に神は過去も現在も将来も我らをして志望を立て業を行はしめ給う。

一九五三・七・二二日 佐波 亘 撰文

七、修 学（東北学院）

明治三十年四月、崎山久吉は、開拓地を去って、仙台の東北学院普通科（中学）第二学年に入学した。武市安哉について彼の知った第一の人物は押川方義であった。聖園でこの人に接したとき、その精神力に圧倒されてから、神川崇拜者になってしまった。一時的な感激でなかったたとは、一生尊敬して止まなかったことによつて説明されよう。彼にとって学問することは、生きた人物に学ぶことであった。再び勉学を志したときに押川を慕い、その学園に学んだことは、当然であつたろう。

押川方義は伊予松山藩の人で、明治大正時代の有名な冒険小説家押川春浪の父である。嘉永二年の生れ、明治五年三月十日宣教師ジェームス・バラから、横浜で洗礼を受けた九名中の一人で、のちに大学南校に学んだ。我が国基督教界の大先輩で識見高邁、非常な熱血漢であった。チブスを病んで医師から見放されたとき、家族が枕もとに集まると、彼は世界地図を壁に掲げさせ、ふるえる手でこれを指して叫んだ。

“見よ！ 此の豆粒のような日本を、この国をこのままにして、今私が死ぬることができると思うか”

この逸話にも烈々たる彼の氣象をみることができる。仏教の迫害がひどいので、キリスト教伝道は至難だといわれた新潟に、彼は進んで伝道した。一夜路傍演説中竹槍や、ムシロ旗を手にした一団に襲われたが幸か不幸か、彼に似た傍聴者の一人が殺された、おかげで危機を脱したという。

その後新潟の大火に会い仙台に行つて伝道した。

東北学院の創設とともにその院長に推された。

島崎藤村著「桜の実の熟する時」の中に、明治二十三年七月明治学院で、キリスト教青年会夏期学校の開かれた当時のことが書かれてある。その一節に、

今度の夏期学校の校長で、東北の方にその人ありと言われ、見るからに慷慨激越な氣象を示した或る学院の院長が通った：

とその風貌を簡潔に描いている。相馬黒光の「黙移」で

は、東北の神様押川先生云々、と書いているように、彼は東北学院長であると同時に、東北、北海道方面のキリスト教界の総帥格であつた。武市と提携して、北海道に宗教主義の開拓学校を建設しようと計画し、武市の急死に遭つて中止したが、彼が当時の北海道住民に与えた精神的感化は幅の広いものであつた。その当時の旺盛な伝道ぶりを示す一例を挙げてみよう。

胆振国紋別の伊達農場は、明治維新直後伊達邦成男爵の一藩が、大挙して移住した士族ばかりの開拓地であつた。旧家老の支配人田村顕充は、押川からキリスト教の教義を聞いて深く感ずる処があり、農場主である藩主に相談し彼を紋別の農場に迎えて、その教を皆で聞くことにした。そこで彼は、村長、校長、始め幹部級三十余名に向つて、旧約聖書創世紀第一章から説き起こし、新約聖書ヨハネ黙示録の終りまでの梗概を一気に語つた。講演が終る頃に夜はほのぼのと明けたという。終ると同時に農場主一同相談の上、全員が同時に受洗して信徒となり、村には直ぐに教会が建てられた。土地の人たちが今日まで一夜教会と語り伝えられている。明治十四、五年ごろのことである。

松村介石はその昔、キリスト教界人物論の中で、「押川は教界中の大物、大器で碌々たる宗教家や俗人と相容れず、今の社会には過大である為に今後如何に変わるか知らぬが、その憂国の情を懷ろに何時にてもその身を殺すことを辞せぬことは保証する云々」

この評者がいかに変わるか、と危んだように、そののち彼は伊藤博文、大隈重信を説いて海外教育会を起して在外邦人の啓蒙を志し、或は基督教日刊新聞の発行を計画したが、教会内部の反対妨害にあい、遂に三十余年の宣教生活を断念して完全に教界を離れ去った。彼の盟友本多庸一がタモトをとらえて、尊い歴史を中断してどうするか、と泣いていさめたというのはそのときである。

ついで朝鮮国王や、その政府当局を説いて鉾山採掘、鉄道敷設、漁業開発の三大利権を獲得することに成功したが、これは我が政府当局の知るところとなって日韓国交に害があるという理由のもとに、密約は放棄せしめられた。遠大な計画が中断した上に、この運動に要した費用は弁償されないので、結局この負債償却の為に、一外国商社の代理店を営んで晩年に及んだ。その間にも大隈の政治顧問として、隠然たる勢力をもち、代議士となつて議政壇上に立つたこともある。

教界からは変節者として冷限視され、野心家と解された此の人は、天性強い感化力をもった精神家であつたが、それを上廻る熱情を以て国土経営に心を砕いた。少壮あやまって身を宗教界に投じたことが、彼を悲劇的な人物たらしめたと評することは言い過ぎであらうか。断片的な物語にもその人物のりんかくをつかむことはできよう。

知名の士の多い彼の教え子の中から、日本力行会長島貫兵太夫、海外植民学校長崎山比佐衛の二人が出て、と

もに海外に発展する多くの青年を教育したこと、また教界に異色のあるキリスト心宗の創唱者河合信水のような人物の出ていることは、彼の非凡な感化力を物語っている。

二十三歳といえは普通なら大学を終える年輩である。なりふり構わぬ田舎者の大男が、紅顔の少年達と共に、ABCを学ぶ有様を想像すると、微笑ましくもあれば、悲壮な気もする。大器晩成を期したといつて、誰でも出来る芸当ではない。しかし、彼は平然として勉強を続けた。

山で働いて学資にあてた金額はどの位であつたのか、親友の光富松衛——この人は教育家として聖園の青少年に大きな感化を与え、後に転職して北海道の名村長とうたわれ、胆振国恵庭村長在職中に世を去った——はその頃を追懷してつぎのように語っている。

「崎山君が野花南の山で働き、下山した時に私を訪ねてくれた。私はそのころ月給八円貰つて教員を勤めていた。君曰く、『光富君僕が山で残した金が六十円ばかり有る、僕は之を学資にして勉強に出かけようと思う、若し君と一緒にいくなら、半分別けにしよう、どうだ行かんかね』熱心に誘つてくれた。私は長男で、老いた両親に妹が一人いるばかりで、家庭の都合上残念ながら一緒に行けなかった。然し崎山君のあの美しい友情を、私は一生忘れる事ができない。」

家庭から学資を受けず、苦学する決心であつた彼は東北学院でどんな学生生活を送つたか。当時の資料は乏しいが現在南米サンパウロ市で、八十余歳の老後を悠々自適している同学院出身の同窓、名沢一二翁は当時の状況をこう綴っている。

名沢一二記述

或る日東北学院の労働会に例の足音高く、名沢居るか、と呼びながら押川院長がおいでになつた。

「今ここに北海道から来た熊のような青年を連れてきた。崎山君というのだ。労働会に入会さしてやる事にしたから、何か仕事を与えてやってくれ。頼んだぞ。」

これが同君と私の初対面であつた。そのころ学院には押川院長の雷名を慕つて全国から、二百八十名位の健児が集つていた。院長は学資の乏しい有為な青年のために、院内に労働会を設けられていたので生徒の三分の一は、ここの会員になつて働きつつ勉強していた。

当時の会長は川合信水氏（前記）会計兼書記が分部盛之氏、事務長が私であつた。仕事の種類は、牧場の乳牛の世話、牛乳と新聞の配達、学校の清掃、農園、洗濯の各部に別れていた。牧場第二師団司令部の大門に近い広瀬川上流の河内という処にあつて、学院から八キロ計り離れていた。

牧場に欠員があつたので、遠くて不便だがやるか、といつたら、崎山君は、

「何でもいいからやらして下さい。困難など少しも厭いません」

といって承知したので、そこに案内し、三方徳次郎という評判の名牧夫に紹介した。間もなく欠員があつて洗濯部に移った。そのずっと前に、押川先生宅に珍客があつて北海道開拓の大先輩武市安哉氏だと紹介された。その客のトランクを持って私は駅にお送りしたが、途中津軽海峡の船中で急逝されたと聞いた。崎山君はその武市農場の出身と知つて、深い感慨に打たれた。

君はなりふり構わず能く働いた。低学年でも晩学で、年輩の関係から、忽ち良い学友先輩と深い親しみを持つに至った事は、君の特長で非凡な素質を示すものと思う。後の日本力行会長、島貫兵太夫（既出）ダンテの神曲翻訳で有名な山川丙三郎、ユダヤ研究家の酒井勝軍、みみず研究の権威でコロビア大学、東北大学などの講師になった畑井新喜司博士らは特に崎山君と親密であつた。

翌年初夏の頃押川院長が、学院を去つて、東京に行くという噂をきくと、崎山君はそれにはふれずに、東京の知人の好意で上京するからと、平素院長が最も尊敬し、話題にされていた青山学院長本多庸一氏に紹介して頂きたいと頼み、手紙を貰うと院長に先発する気持で仙台を去った。

こんなわけで、君の在学は短期間であつたが、同君からは普通人の数年間にまさる親しみと、印象を受けた。

君が東京勉学中家人病気の招電で、石狩へ帰省の途中、仙台に下車し、私を訪ねてくれた。それは先年世話になったお礼を述べたかったのだということで、時間を惜んで在学当時のことなど語り合った。君の天真らんまんのうちに示された深い友情は、五十余年過ぎた今も私の心を温めてくれるのである。（一九五四、三、二五日）

島崎藤村は、二十五歳の明治二十九年九月、東北学院教師として赴任し、翌三十年の七月に辞職している。崎山久吉が同学院の洗濯部で働いていた頃、若き詩人は青葉城址や、広瀬川のほとりを、「心の宿の宮城野よ」と声高らかに歌い上げながら、あの「若菜集」に盛られた数多くの詩稿を懷ろに逍遙していたのである。小説を余り読まない彼が、「破戒」をはじめ、藤村の作品の幾種かを出版されるごとに、いち早く求めて読んでいたのもそのためであろう。

東北学院普通科二学年第二学期を終えた初夏、彼は東京に出た。東京行に失敗して早くも八年の年月がすぎたのでその間の東京の変化は目覚ましい。彼自身は学問の上では大して進歩していないが人間的には成長した。世渡りは上手ではなくても開拓地生活は彼を鍛練した、圧迫に抗し、障害を突破し、わが志を貫くだけの勇氣と意志力、どんな労働にも耐えられる体力を与えられた。

中途退学して東京に出たのは、押川のいない学院では物足りないという点もある。いま一つは独学でやってきた彼には英語、数学などの学科のむずかしいことを、

東北学院に学んで体験したので、どうかして速成的に平均した学力を身につけようとそこら晩学者がよく扱んだコースをとり上京を急いだことも有力な理由である。彼の学歴がそれを裏書している。久吉が青山学院入学願書に添えたつぎの学歴は、学院に保管してあつたのを、神子朝太郎教官が、戦災前に写しとつておられ、著者に示してくれた貴重な資料である。同教官は学院出身で三十年間母校に教鞭をとっている。

学歴

北海道石狩国樺戸郡月形村武市農場

学生 崎山 久吉

明治八年十月生

東京市麹町区飯田町四十九番地

保証人 片岡 敏次郎

明治三年十一月生

学業

一、明治三十一年二月 仙台東北学院に於て普通科第二学年二学期修業

一、同 三十二年六月 東京市神田区国民英学会に於て正科第三学年前期修業

教科書用

ユニオンリーダー巻四

スイントン万国史

マツカーシー近世史

一、同年九月 小石川区明治学院に於て普通科修業

教科用書 秋山四郎著漢文読本卷五、六

数学、平面幾何、円の終迄

明治三十二年九月十一日朝提出

小石川区久堅町七八

崎 山 久 吉

上京すると青山学院に本多院長を訪ね、押川院長に紹介された片岡敏次郎のあつ旋で、本郷お茶の水の渡辺裁縫女学校（現東京家政大学）の校長宅に住み込むことになった。そこから午前は国民英学会に通つて英語を学ぶ。夜は明治学院という塾で国、漢、数の学科を学んだ。やはり苦学である。仕事は校長宅に起居し、寄宿舎の米とぎである。朝五時半に起きて米をとぐ。北海道で鍛えてはいても極寒の水道の水は冷めたい。午後は銀行その他に走り使いし、夕方は米とぎを終えて夜学にゆく。

ここに來て間もなく、彼は一つの貴重な体験をした。彼は学僕であつて、一家の使用人ではない。だが混同され易い立場にある。隠忍自重と卑とのけじめだけは、彼は敏感過ぎる程わきまえていた。起居している校長の家庭には、彼と同年輩の息子と娘がいて、彼の粗野な風采と、鈍重にみえる挙動に、侮蔑の眼を向けていた。その態度が不愉快だった。だがこれを解消する日が來た。

ある日校長の息子が示した言行に堪り兼ねた彼は、息子をそこに引きすえてエリを正し、烈しい声で堂々とその無礼を責めて陳謝せしめたところ賢明な校長夫妻はこれを当然のこととして肯定してくれた。

かくされていた犯し難い気魄が、偶然その鋒茫を現わしたので、校長の家庭のみならず、全校の職員生徒に至るまで、彼に対する態度が一変したことには面くらつたが内心大いに愉快であつた。

働くことを楽しみ、一生懸命勉学に精出す彼の一举手一投足を、苦勞人である渡辺辰五郎校長は決して見逃がさなかつた。ずつと後に学業を終えて彼が最初の事業を創めようとしたとき、無資力の彼を信じて、多額の資本を出資してくれたのは、この老校長であつた。彼は単に苦学の方便に、ここに一年を忙がしく過ごしたのでなかつた。自分も気づかぬ間に、大きな将来の知己を与えられつつあつた。

八、修 学（青山学院）

明治三十二年九月、青山学院の補欠試験にパスして中学部三学年に入学した。青山学院は現在大学に昇格している、ミツシヨン経営の古い歴史をもつ学校で、寄宿舎その他の設備もよく、都下有数の学校であつた。特に外人教師が多く、英語教育では現在までずっと優れた業績

を保っている。

過去一年の速成勉強は、学年短縮には役立たなかったが、幾分各科目に自信をもつことで彼は満足した。入学と同時に寄宿舎に入り、その食堂で学生に牛乳を販売する便宜を与えられたので、学資の捻出に心を労する必要がなかった。

その頃の青山は、東京西郊の田園の一部ともいふべき地域で、高台を占め、遙かに富士を仰ぎ、秩父連山を望み、周囲には樹木が茂っていた。校庭には芝生が美しく刈り込まれてある一方、手入の届かぬ広大な地面の一部には、雑草が茫々と茂り、そのころはまだ狐が出没するほど、野趣にみちて、静かな環境であつた。

明治三十五年三月、二十八歳の春、中等科を終えた久吉は、直ぐに同学院の神学科に進んだ。聖園にあるところ、受洗後は移民達の家庭を、握飯をもつて訪問伝道したほど熱心な彼である。押川院長を慕つて東北学院に入り、次で青山学院に学んだ彼の意図からも、専門の学科として神学を選んだのは当然であろう。

神学科は英語科（本科）修業年限五年、邦語科（別科）修業年限三年に別れており、本科は同学院高等科（修業年限三年、卒業後中学校英語教員の資格あり）に於て二年間専門に英語の学力を養い、次の三年間に神学を専攻するのである。彼は一年間別科に在学し、翌年本科に転じた。同じ学ぶなら、より基礎的にと考え直したのであろう。神学科時代も彼はスカラシップを受けず、依

然として自給生活を続け、二年間は比較的無事に勉学を続けることができた。後半になって、さてあと二年で卒業という三十九年三月、遂に中途で退学するに至った。

学生崎山の学科成績は、優秀な方ではなかった。クラスでも中以下で、数学などは苦勞したらしい。

「幾何の時間にまごまごしていたら、見ていた和田先生が、僕の手を支えるようにして線を引かしてくれたことがあった、まあ僕は先生方の同情で進級さして貰ったようなものだ」

こう彼が語ったのは謙遜であろう。だが、率直にいつて、彼は頭脳明せき型ではない。年齢など超越して勉学をしたのは、学科よりも指導者の人格に接し、そのふん囲気の中で薰陶されることを以て満足した。特に押川、本多という相反した性格の、しかもその時代精神界に傑出した。二大人物の感化を受けて学生時代を終始した事は、自から選んだとはいえ、摂理に由る恩寵と讃えるべきであろう。

明治二十年頃から、欧化主義に対する反動で、国粹主義の議論が活撥になり、キリスト教に対する風当たりが強く、学校にまで弾圧の手の伸びる時が来た。教職員も、学生も、孤城を守るといった恰好であるが、こんな時、彼は母校の学灯を奉ずることに、誇りを以て終始した一人であるが彼の同期生で卒業したのは僅かに八人であった。

彼の学生時代には、郷里の先輩前田岩吉は北米から帰朝し、米国大学出身の今村茂子と結婚して赤坂新町に家庭をもっていたので日曜日の午後になると、彼はよくその家庭を訪問した。郷里の人の出入が多いので、生れ故郷の気分を味つたり、温かい家庭的な空気に浸ることが楽しかった。

その頃前田は洋行帰りの新知識で、麴町富士見町に、森村市左衛門の出資で、植民学塾を開設し、華族女学校教授の茂子夫人と共に教鞭をとり、中国、英、仏の各国語を教えていた。彼はここに出入したため、前田岩吉の青年教育に対する構想から多くの示唆を得た。

学生としての彼について当時青山学院寄宿舎の舎監で今は故人である石川和助牧師は、生前左のような話をした。

今から思えばその頃の学生は一般にばんからであったが、その中にまた硬派と軟派があり、崎山君はその硬派の頭目だった。寄宿生の親睦と修養の目的で屢々懇談会をやったが、彼は舎生の生活を率直に批判し、舎規の厳守を説いて、寮風の作興を強調した。みんなが隔意なく意見を交換したあとで、彼は熱心に祈った。クラスは下級であつても他の学生よりずっと年輩が上であり、特に彼の弁舌は一種の熱を帯び、その態度の真剣さは人々に深い感動を与えたものである。村松陽三郎君や、その他快男児がいて、その意気投合した連中で、ときどき寄宿

舎の玄関の外にテーブルを担ぎ出し、そこで代る代る練習の目的で演説をぶっていた。

いつ頃だったか、足尾銅山の鉋毒問題が起ったときのこと、崎山君は鉋毒地視察団に加わり、現地を見て来て官権の横暴を攻撃した演説を街頭でやって、それが過激だとか何とかで、留置所にぶち込まれるという事件があった。弁論は同君の好む所で、寄宿の庭の会場では次るものもあれば、声援するものもある。実に賑やかなことであ

った。君はいつもリーダー格であつた。また学生全般の為に能く心を使つてくれて親切だった。それがいかにも自然で、テキパキと男性的な実行力で発揮されたことに、私は深い感銘を受けた。

神学部時代の同窓で、最も崎山と親しかつた白戸良作牧師は、崎山の死をいたみ別府教会で哀惜と追憶の言葉をつぎのように語つた。

とうとう豪傑も逝ってしまったか。崎山君は非凡な人間であつた。僕は彼のような人物を友人にもつていたことを大きな誇りとする。学生時代の彼はいつでも、長い頭髪をすくこともせず、服装なども実に無頓着だったが、彼の場合には、その野性と、天真らんまんて愛嬌に充ちた性格や行動と、能く調和していた。彼は学院の外に異彩を放ち、実に青山の名物男であつた。

青山学院には毎年学生の計劃で、学芸会が催され、それが都下の名物となっていた。その内容は歌でも、弁論でも、演劇でも全部英語であった。

或る時崎山君が登壇して、邦語演説で雄弁を振った。それまで崎山を野蠻人扱いにしていた女学院の学生達まで、感激の拍手を送って、すっかり彼を見直したものだ。それからは学芸会にもいろいろ邦語で実演する番組がふえたのである。

あの頃の青山の学風は自由で、開放的で、また進取的だった。僕等は彼と共によく郊外を散歩し、武蔵野のあの特色のある林の中の、青草の上に寝ころんで、人生を論じ、大いに歌い、熱心に祈った。我々の力で日本を救うのだ、と叫んで、意気軒昂たるものであった。彼はあらゆる障害を克服し、乗り越えて、遂にそのような大業を成した、実に偉い男であった。

神学科在学時代の或る暑中休暇に、中田重治氏が僕達数名の神学生を連れて、北海道伝道に行ったことがあった。その時は崎山君は案内役のように、先きに立ってよく世話をしてくれた。日程中に聖園に数日を送り、伝道集会の暇暇に、慣れない乗馬で農場を見学さして貰った。原始林の見本のような処が、広くあちこちに残されていて、往時の開拓時代を偲ばしめたのであるが、よく聞くと崎山君は十代で、あのような大自然の中に入り、孤独に耐えて数年間にわたり、五町歩の開墾をやったのけ、それから勉学にとりかかったのだという事であつ

た。現地で初めて詳しい事情を開いた僕等の驚きと感激、彼に対して今更のようにわき起った畏敬の念、それは今到底言葉で説明のでき得ないものである。南米大陸の真ん中に骨を埋めたことは実に彼らしい。どんなにか本懐であろう。

前記の母校青山学院で長く教鞭をとられた神子朝太郎教官の数多い追憶談の一節――。

明治三十四年九月十一日、そのとき私は青山学院中等科二年級の新入生でした。食堂に導かれてゆくと、その入口で「君いらん（入用）かね」と手にもっていた牛乳の小カン（ビンはまだない時代だった）を差出して声をかけられた方がある。

それが崎山先生で、先生は中等科の五年級でした。そのときの笑顔は実に一種特有の愛きようにみちていました。これが先生との初対面でしたが、おおよそ外見に似ないやさしい人との印象をうけました。

翌朝先生が神学校校舎わきの生垣の間を披け草深い運動場を横ぎつて大きな牛乳罐をさげ、誰よりも先きに食堂に入るのを見かけました。先生は学院構内の内外人教師宅に牛乳を配達し、更に食堂で舎生の飲用する牛乳を供給していました。いつもニコニコしながら……。

その九月末のある日のことでした。運動場には毎日数名の人夫が大鎌を振って夏草を刈っていました。放課後

練習していた学生の野球のボールが飛んで人夫にあたり、そのボールを返せ、返さぬの口論となり、鎌とバットで血の雨が降りそうな最悪の形勢にまでこじれた。そのとき寄宿舎の二階の窓からシシのほえるような声で「学生が人夫などと喧嘩するのは止せ！」と怒鳴る人がありました。それは長髪を逆立てて運動場を遙かに見おろしている崎山先生でした。その声と人相に、緊張していた運動場の空気もゆるみ、やがて円満に治まりました。虫も殺さぬような魅力にみちた笑顔と、血気の青年たちを一喝のもとに挫く蠻声とは何れもよく先生の性格を表わしていると思います。

先生は自分の修養に毎日聖書朗読をされ、また好んで偉人伝を読まれ、それを自分に引きあてて考えるのが修養法であり、楽しみであつたらしい。よく見識ということと言われ吉したが、この見識を養うことが修業の目的の一つであつたかと思われます。

明治四十年十一月久しぶりに上渋谷の学生労働会で先生に面談を得たときは、会長であり、立派な牧場の経営者で、寄宿舎の舎主として奮闘しておられました。会員つまり苦学生の仕事や生活は楽でないはずだから閉口する者が多く、中には不平をいう者もあつたようですが、先生がどんな粗食でも共に感謝して頂く、弊衣の上に縄の帯をめて、「さんびか」を歌いながら、欣んで働かれるのでみんな敬服し反省していました。

先生は青山学院で、テニスのイノック・アーデンを

読み、イノックが無人島の椰子の木の下で、毎日祈祷し自分の運命を占っていたことを感心して私に話されたことがありました。晩年の先生は自分が植えたグアラナの樹下を除草するとき、一抔毎に祈祷をささげて働かれ、ついに「私はブラジルの土をつかんで天国へ行きます」と叫んで眠られたそうです。先生はブラジルのことを、アンドスを父とし、アマゾン之母として生れた日本人の墳墓の地だと呼んでおられました。金儲けにブラジルに行くものはわが友ではないと主張され、そしてこれを実行させる力は宗教だと説かれ、植民学校での教育の第一の目的は信仰に導くことでした。

崎山先生は実に理想を語る大雄辞家でありましたが、また信念に生きた大躬行者でもありました。

九、苦学生の友（創業以前）

多くの人たちは向上心をもっている。より良くなるろうとすれば何等かの意味で人は教養をもたなくてはならない。その人の素質にもよるが、これはかんたんではない。時代が進むにつれてある程度の学歴をもたなくては気のきいた職にもつけない。こうなると一層学ぶことが必要なので、不自由しないものは当然だし、貧しい者もどんな無理しても、血液を売つても勉強しようとするのは自然の勢である。苦学することは向上心の現れだといえよ

う。

苦学という言葉には、刻苦勉励時間を惜しんで学問に精出すということと、自分が働きつつでも勉強しようという二つの意味がある。ここで問題にするのは後者である。すべての事柄を一つの社会現象として採り上げ、科学的に分析して問題の核心をつこうとする現在、血液を売るまでになった苦学生 of の在り方も何等かの解決を迫られている重要な社会問題にちがいない。

明治大正時代は、自活する学生を苦学生と呼んだ。普通なら学生時代は楽しいもの、それを肉体を苦しめ時間に縛られるのでは苦しいにちがいないのだから苦学生と呼ぶに不都合にない。このころはアルバイト学生という、敗戦後国民が大体平均に貧乏だったので過去十年間、都下大学生の六割がアルバイトをやっていたという。高校生、中学生にも昼間働いて夜間通学している者が沢山いるので苦学生は決して少なくなっていない。しかし、日本育英会のような大規模の奨学機関が拡張され、そのほかにも民間団体や特志家による給費貸費の方法も多くなつて、五十万内外の学生がその援助を受けているので幾分緩和されている。次ぎには苦学生に対して社会一般が次第に理解をもち、これを援けようとする社会通念が発達しつつあるので、比較的アルバイトの口も多い。だが時代の刺戟で向上心は一層強くなり、学生数は多くなるばかりで、毎日のようにアルバイト学生からものを買わされる。自分の血液を売ることは戦後の新手

で事態はますます深刻になりつつある。

以上のような面もあるが苦学生は昔ほどにせまき門ではない。日かげもの扱いされないで堂々とできるだけでも進歩だ。

現在に比べると五十年前は大いに違う。中途半端な時間しか持たぬ学生の働き口といえ、新聞、牛乳の配達か、極一部の夜間工場位、それに玄関番の書生などである。官費支給の学校も少なく、貸費給費の制度や、団体なども寥々たるもので、勉強しながら、職をもつ機会など容易に得られない、今一つは苦学生に向ける社会の眼が冷たかった。その頃は学問は上層階級の子弟がすればよいので、貧乏人の子弟は苦んで学問しなくても、汗を流して労働すればよいのだ。高い階層の多くはそう思っていたのであるから、そのような空気の中で、下積みになり苦痛を忍んで学問する貧乏学生にとっては、きびしい社会であった。

明治大正時代は教育の傾向も、社会の風潮も、立身出世主義であった。そのため学問で立身しようとする青年が都会に集中した。学若し成らずんば死すとも云々と、肩を怒らし、意気盛んな連中がちまたに溢れたときもあった。そのころの修身教科書には薪を背負って歩きつつ、読書している二宮尊徳の絵や、物語が教訓的に書かれてあった。尤もそのねらいが、貧乏人も学問せよと教えるのか、貧乏人は本を読みたくばこうして読むがよ

い、薪取りをして労働する事が、もつと大切な勤めだと教えたのか、甚だあいまいであるが、尊徳の像は勤勉のしるしとして、戦前到着の校庭に見られた。彼はアルバイト学生の元祖の様な印象を与えた感がなくもない。要するに昔も今も日本の社会は、君は何が出来るかでなく、学校はどこで、成績はどうだ、の問に答えられる証文、つまり卒業証書と成績表によつて、人間の価値や、月給高が決まるのである。

とにかく人間に向上心、競争心、よりよく生きようとする意志のある以上、貧乏であろうが境遇の如何にかかわらず、卒業証書を手にする事は必須の要件であるのだから、学業に対する烈しい欲望を押さえ得る、如何なる方法も、力もない。

内村鑑三が「代表的日本人」として挙げているのは西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人である。その大西郷自身、貧居傑士を生ず、と詠んでいるように、此の五人のうち、大名である鷹山を除くと他は皆貧乏人である。鷹山も大名中では貧乏大名の筆頭で、藩の窮乏を挽回したので彼の人物が大成したといえよう。こんな事は古今東西の例を多く引用する必要はあるまい。

苦学する者には、引込思案で、卑屈な人間が多いという世評も事実なら、一方良心的な勇氣のある、意志の強固な、思いやりの深い傑出した人物を多く出している事も事実である。米国でもリンカーンや、ガーフィールド

など、貧乏人出身の横綱格であるが、歴代大統領中でも最も人気がある。

如何なる困難にも打ちひしがれない、強い精神の持主に、僅かの力を添えてやれば、楽学した人に倍する実力をもつようになる。この意味で、いつの時代でも、アルバイトで身を修めようとする要求に即し、適切な道を講じ、或ほ一指でも力を添えてやる事は肝要で、育英事業は高貴にして重大なる使命を負えるものといえよう。

青山学院にも、当時こうした苦学生仲間であったが、東北学院の様に組織的でなかった。やがて彼に見習って労働する学生が多くなったので、彼がリーダー格の一人となり、学院の中に、青山学生労働会という学生団体が生れた。明治三十五年一月のことである。

労働は幾種類かあったが、牛乳配達は早朝と午後働くだけで、通学に都合がよい。一方アルバイトを望む学生で、日に日に彼を頼って来る者が多いので、牛乳配達に依り多数学生の便宜を図ろうと計画した。寄宿舎では、迷惑を及ぼすこともあるので、山階宮邸内に移り、間もなく青山北町七丁目にあった鳥居牧場に引越した。この牧場の牛乳を特約し、片隅に殺菌消毒場を設けて自ら牛乳殺菌の労をとり学生に配達させることにした。彼は鳥居邸の離れ二室を借りて、学生数名と共に起居し、学院の食堂を利用しながら、三十八年の秋までこの生活が続けられた。

明治三十一年九月、同じ三十五年七月の二回にわた

り、石狩川の水害があり、浸水地域が広く、農作物の収穫は皆無で、彼の一家も甚大な被害だった。その間に二人の義妹は他に嫁し、弟松吾は三十四年十二月、旭川の騎兵聯隊に入隊した。三十七年一月二日に、慢性胃腸病を病んでいた父の常吾は、五十九歳で没した。日露戦争の展開と共に、除隊後間もない松吾は出征し、傷病兵となつて、翌三十八年八月、東京戸山の陸軍病院に後送きられ、結局北海道の家には継母と、姉の二人を残すのみとなった。

その母が三十八年の初夏に発病し悪化したので看護のために、暑中休暇中帰省した。東北学院に名沢氏を訪れたのは此の途中ではあるまいか。神学科在学中の四年間、彼の一家はこのような種々の事件に見舞われた。母の病気は心をこめた彼の看護で快復したので、新学期に入る直前上京した。渋谷駅に下りた九月五日の夕べ。この日は日露講和の結果に不満をもち、憤激した群衆が、眉比谷方面で焼打ちの最中だったので、流言が飛び戒厳令が布かれるという物々しい空気に充たされていた。家庭の事情で、会の仕事を他に任せていた間に、予期しなかった空気が学生たちを支配している事を、帰京してまもなく彼は直感した。

牛乳の得意（華客）先は、彼自身で開拓したのが主であるが、中止する家があり、新規に学生が、直接注文を受ける場合もある。こうして新陳代謝が行われる。得意は勿論彼の私有物ではないが、会の名のもとに管理さ

れ、仕事の量や、範囲を調節して、一人でも多くの学生の便宜を図る。

その支配権は、責任者の彼にある、卒業して退会するもの、また中途退会する場合でも、仕事は彼を通じて、後進に譲ってゆくのが習慣になっていた。それがいつか彼等学生の完全な私有物であるという觀念に変わった。これは妥当ではないが、そう考えられる理由はあった。

学生がなぜ離反したかに就ては話が細くなるが説明がいる。そのころ学生労働会は牧場から牛乳一合一銭九厘の卸価で受け、これを瓶詰殺菌し、・レツテルを張って二銭五厘で学生に渡す。学生は四銭で得意先に配達する、牛乳一合について会は六厘、学生は一銭五厘の利益である。

学生の一人に外交が巧みで得意をふやし、学業を忘れて仕事に熱中するものがあつた。本末をてんとうした邪道であると反省を促したがきかないで、得意先をもつて脱会してしまった、崎山は牛乳を扱って学生のピンハネをするというのが表面の理由である。商売となると些細な損得のことにも敏感になるものだ。そうきかされると、そうかなと思う者がだんだん多くなって、いつのまにかそうだと決めてしまうようになった。

そのとき大体一日三斗の牛乳を扱っていたので会の収入が一ヶ月五十円内外それが総収入である。これで家賃、助手の手当、瓶代と附属品代、石炭代、配達車管理費、印刷費、雑費を支払った外に、収入の少ない学生に

は一部補助してやる。

残りは彼自身の学資を支弁することがやつとで、小使にも不自由する実状であつた。

そこで思いがけない誤解を正すために彼は学生と対談し説得につとめた。人間の心理は微妙なもので、絶体の信頼感がぐらつき、両者の間にミゾができてくると話は混乱し易い。ことにこの学生たちは猜疑心が強いらしくて容易に釈然としない。感情的にくすぶるうちに、反抗的な態度を示した学生をなぐりとばし、巡査派出所に呼び出されて説諭されるという余り器量のよくない悲喜劇を演ずるという一幕もあつた。

彼自身は憤慨してもすぐカラリとした気特になるが、学生たちは同じではない。こんな事件など原因して学生は形容のできない気特でお得意をもつて一人去り二人去り彼のもとから去ってしまった。最後には四、五人を残すだけとなった。どちらにも軍配をあげかねる後味の悪い事件であつた。彼もとんだ資本家のぬれ衣をきせられたものである。

退院すると北海道に帰った弟の松吾は、学業を断念して、潤達な彼の性質にあう開拓者として再出発すること決心し、保護を引受けた姉を連れて北見国モコト原野に入つて三十町歩の開墾に着手した。この弟も今は故人となつたが、亡くなるときには百八十町歩の大地主となつていた。

聖園の家はたたんで病後の母は東京に引とり、渋谷の

金王八幡附近に小さな一戸を構えて住わせることにした。三十八年から翌年の春にかけての彼の身の移り変りである。

キリスト教の教役者（注・ママ）として働くことは彼の根強い志望だったので、専門の学科もそれを選んだ。

先輩学友もその志望は彼に適していると支持し期待してくれた。ところが学生生活の十年間を苦学に終始しているうちに、いつかしら志を抱いて而も学問の道に進むことのできない青少年の存在が、彼の胸中に大きな場所を占めるようになった。

往年横浜の埠頭に立って無念の涙を流した哀れな少年の姿は彼自身であると同時に、毎日自分を頼って相談にくる多くの少年の姿と一つになって彼に迫る。幾人かの学生が彼を誤解し裏切ったとしても。このような社会の欠陥や人生の不幸を見過し忘れ去ることが許されようか。なるほど放任しておけば成るように成る。だが彼等に指一本でも添えてやれば、その将来は一変する。この若人たちの運命を放置してよいであろうか。

今直面している事実を解決することと伝道することとは両立すると彼が考えたとしても不思議はない。しかし事業として計画し実行しようと考えてみると、聖職とよばれる牧会の働きに比べて、誤解と窮乏にさいなまれるいばらの道である。のみならず一般的にもさほど高く評価されることではない。彼は二つの使命に対して右すべ

きか、左すべきかに迷った。その撰択いかんが彼の人生行路を決定する重大な岐点に立った。

身のまわりの事情がどうあろうと、僅かな施設と数名の学生の境遇をよく処理すれば、あと一年静かに学業を継けて学校を卒えることもできれば、聖職に就く資格を得ることもむずかしいことではない。だが問題は彼にとつてはもつと根本的なところにあつた。

必要なときにはいつも指導を受ける押川、本多の両先輩に意見を求めたことはいうまでもない。

押川は彼が伝道界に立つことを強く指示してくれた最初の人だが、一方彼の当面した事業に対して大きな興味と期待をもつことを明かにした。これに対して本多はあくまで素志に忠実であれと勧める。両先輩はおのおの平素の信ずるところを端的に示してくれているのだが、この相違は彼の決断を助けることにはならない。これは彼自身の問題で、第三者の批判によつては決せられない課題である。

彼がこのために野に伏し、山を歩き、或は多摩川の岸辺に祈つて天の啓示を求めたことが、そのころ用いた大型のバイブルの余白に書きつづられている。何が彼を最後にそう決定せしめたかを明かにするすべはないが、サイほ投げられたのである。彼は先輩友人の勧告を感謝しつつそれとは逆な、イバラの道をえらんだ。

福音伝道者となる最大の願ひにかえて、苦学生の養成

を生涯の事業に撰んだ動機が何であつたかは、彼を知る一部の人たちの興味ある話題のようである。ほんとに私心なく学生を思う切実な要求から、この縁の下の方力もちとも評すべき仕事に、打算を超えて取り組もうとしたのか、この人道的な事業こそ、ワクにはまることを好まない者が自由にやれて、社会的名誉を勝ち得る新らしい着想だとして、野心的な彼を誘惑するに至つたのではあるまいか。

彼の単純な性格と十年の体験は、彼を同じ境遇の学生の手に渡す結果になった。彼はそれほど純情で感激家であつたのだ、人生意氣に感じたのだと思う等々。いろいろの疑問に対する解答は、その人たち自身の判断にまっほかない。

明治三十八年九月末の或る日、突然色の黒い八字ひげを刈り込んだ、三十前後の背広姿の紳士が「崎山君のお宅はこちらですか」と鳥居邸の玄関に訪ねて来た。この人は彼の幼な友達で、同村高津野出身の吉田常太郎であつた。北海道へ出発のとき別れてこのかた、十余年の再会である。

吉田は県立師範学校を卒業すると直ぐ、小学校訓導となつて、各地に教鞭をとつた。成績抜群で早くも、出身地の母校である本山村小学校校長に昇進した。ところで、子弟の教育以外、当局や父兄の意を通うごとに心を使つたり、現状に満足している者の多い初等教育者の有様に、彼は心を安んずることができなかった。どうか

して、もつと束縛されない意義のある生活を見出した。こう心が決まると、彼は一人の幼女の教育を両親に託し、職を辞して九月上旬単身上京し、いま芝の下宿屋にいるという。彼は明治十一年生れで、崎山より三つ年下の二十八歳である。事情を聞いた崎山は、

「そうか、君よく思い切って出て来た、まだどうするとも決まっていなかったら、しばらく僕と生活を共にするのも、何か参考になると思うが、ここに来てはどうか」昔に変らぬ卒直な友情に喜んで、吉田はその日からこの群に投じた。彼は毎日崎山を助けて朝早く牛乳殺菌の仕事を手伝ったり、新らしい得意先を勧誘するなど働きつつ、都会の生活、アルバイト学生の日常について、観察する機会を得たことを喜んだ。

彼は起居と食事を共にするだけで無俸給の生活に甘んじて、愉快に働いた。確かに彼は尋常普通の教育者とはちがっていた。その前から翌年の春にかけて、労働会は学生の動揺離散した時期であったことは既に述べた、彼はその渦中に身を置いたわけである。

東京の空気にふれ、自分のまわりを見回して、わが精神生活の貧弱なことに気づいた彼は、異常な熱意を以て言論、特に思想方面の講演や日曜の説教講壇などむさぼるように聞き、心の糧を探求する熱心な求道者となった。

彼は学生の動揺離反するに至つたことには、それだけの理由と欠陥のあることをみてとり、止むを得ないこと

だと考えたが、教育の体験者として、苦学生保護の必要なことと、その事業の高い意義については大いに共鳴していた。それゆえ崎山に対しては、学生の心事に失望しないで、彼等を過ちに陥らしめないような組織に改めて、再出発することをすすめた。彼は崎山によって心靈に点火され、人生に新らしい希望を発見することができたが、崎山もまた彼によって創業の時にかけがえのない良い協力者を得たばかりか、この事業の土台を築く構想の上に、貴重な示唆を受けた。

吉田はそののち崎山の最も困難な創業時代に、その片腕となって、三年にわたりその基礎の定まる日まで協力を続けた。その経験を生かして同じ事業を志し、明治四十二年二月牛込に移って学生労働会を創設し、ここで早稲田大学その他付近各学校の学生二十余名を収容し、海外植民学校の創立によって合併する日まで十余年の長きに及んだ。

彼の夫人は病弱で家庭は寂しく、事業の性質からも重荷であったがよく耐えた。のち自らも健康を害して閑地に静養する日が長くつづいた。再起し京都に移り、上京区上総町に学生労働会を創設し経営七年、封建性の強い土地柄で執拗な同業者の迫害をさけて昭和三年大阪に転じ、住吉区田辺に「勤労ホーム」を創設して、そこを根拠に教会、幼稚園の事業を助けたり、町民の福祉に奉仕した。多年にわたる勤労の生活は再び健康を害して遂に起たず、昭和八年五月三十日五十六歳で永眠した。彼の

援護によつて世に出ている有力な後進が多いので、それらの人々が發起し、昭和十四年五月郷里本山町に左の頌徳碑が建てられ、郷党みな彼の余徳をたたえている。苦学生にとつて忘れられぬ恩人である。彼はまた最後まで崎山と志を共にした数少ない同志の一人であつた。

吉田先生頌顧徳碑

吉田常太郎先生明治十一年本山町高津野ニ生ル
寿賀吉氏長子県師範学校卒業郷土小学校長ニ進ム
向上ノ念抑ヘ難ク三十九年帝都ニ上ル偶多数
苦学生ノ実情ヲ知ルエ及ビ深憂措カズ之ヲ自棄
的境地ヨリ救フハ自己畢生ノ天職ナリトシ即宿
志ヲ一擲学生労働会ヲ起シ資ヲ牛乳配達ニ求メ
自助友愛ヲ信条トシテ前途アル学徒ノ為ニ荊棘ノ道ヲ
開ク後京都ニ転ジ更ニ大阪ニ移ル悉ク一般同業者ノ迫
害ニ因ルモノ也然モ一念不撓恵マレザル青年ノ心ノ父
トシテ具ニ辛酸ヲ嘗メ屡病ヲ得テ死線ヲ彷徨スルモ不
悔終ニ昭和八年五月三十日他界ス
夙ニ基督教ヲ奉ジ博大ナル愛ト鉄ノ意志ハ克ク二十有
八年ノ苦闘ニ耐ヘタリ嗚呼先生ノ犠牲的生涯ハ只感激
感謝ノ涙アルノミ時ヲ異ニスルモ
保護指導ニ依リ今日アルヲ得タル恩願ノ者胥謀リ永ク
先生ノ高風盛徳ヲ伝ヘンガ為梗概ヲ叙シテ石ニ勒ス
青年ヨ志ヲ立テヨ

艱難ハ忍耐ヲ生ジ忍耐ハ練達ヲ生ジ練達ハ希
望ヲ生ス「ローマ書五章」

昭和十四年五月三十日

学生労働会々友不朽会有志建之

山 崎 在 撰

一〇、苦学生の友（創業）

あますところ一年、学業を終えて一つの資格をもつことは、望ましいのであるが、新らたな事業を開拓するには、高い教養は必要であつても卒業証書を手にすることは、大した重要なことではなくなった。周囲の事情をも考慮したうえで、神学科四年を終えた明治三十九年三月限り、彼は青山学院を中退して、長い学生生活に終止符を打った。その年の四月八日に岩沢田鶴子と結婚した。

田鶴子は、新潟県中頸城郡新井町、岩沢義彰の三女で、明治十六年生れ、二十三歳で、花むこの彼は三十三歳、当時としてはどちらも晩婚の方である。彼女は青山女学院手芸科出身で、在学中本多庸一の家に寄寓していたので、同家に入出入する崎山とは相識の間柄であつたが、恋愛関係はなかった。

田鶴子の生家は、その地方では屈指の豪家で、当時家運は衰えていたとはいえ、家と家との結婚といわれる封建的な習慣からみれば、これはチョウチンとツリガネの

たとえにも似た、不つり合な縁組である。しかし結婚が人と人との結合による、人間的理解の上に立つべきものであるとすれば、むしろこれは合理的であつた。

本多家の女婿宮之原信次郎が彼の親友でありその夫人まりが田鶴子の学友であつたという関係で、花嫁の方はやゝ気が進まなかつたが、宮之原夫妻が熱心に媒介の勞をとつたので、目出度く成立した。

結婚式は彼の恩師本多庸一の司式により、本多家の広間で、キリスト教式により厳肅に行われ、終つて別室で簡素な披露が行われた。

田鶴子夫人は堂々たる体軀に恵まれ、健康で、明朗な性質で、話し上手であつた。非情なまでに辛棒強く、變化の多かつた主人公のベター・ハーフとして、二男二女の母としてのつとめを果たしてきた。

誰にでも短所はある。労働会時代の貧しい生活にも耐えて、よく窮乏に打ちかつた内助の功は大きいが、夫人もやはり女である。局面が転換して植民教育会になり、接触面が広がるにつれて弱点をばくろした。妻の立場は公式なものではなくても、主人公の事業や、社会的地位に応じて、台所から玄関に直結するその言動は、東洋の伝統としてプラスになることが少ないばかりか、普通の家庭の主婦とちがって影響が大きい。夫人の場合にも相手の誰であるかを意に介せぬ不用意なおしやべりがどれだけ大きなつまずきを与えたか、後章に明かな学校ストの始末は、主人公のみのものではなく、同志と共に彼女

の負うべき責めも大きいはずである。嫉妬心が女性の特長としていろいろの面に発揮される、それが女らしい現れだとすれば夫人もまた女らしい人である。女性の生命ともいふべき濃かな愛情を示すことの少なかつたことが、夫婦愛に小しも破局を示さなかつたことは、主人公が徹底的な愛妻家だつたことにあるのだとすれば、配合の妙といふべきであろう。

普通人の求めて止まない人間的快樂というものに大よそ縁の遠い生活に甘んじた、そして頗る短気でワンマンだつた主人公に仕えて、平和な家庭を営んだことは、この夫人なればこそといつても言い過ぎではあるまい。それのみかアマゾンの奥地にまで良人と行を共にし、既に齡五十を超えた老境の身、しかもその年まで労働の経験をもたない慣れぬ手にスキ、クワをとつて、赤道に近い酷熱のもとで、カッポイラ（再生林）の開拓に挑んだ。不便不自由に直面して少しもひるまなかつた雄々しさには、さすがの主人公もたじたじであつたという。豪家の深窓に育つた人の誰でもが成し得る芸当ではない。

配偶者の境遇の変転にもよるのであるが、人を相手にせず自然を相手とする開拓地生活は、彼女の心境に大きな変化をもたらした。冷めがちであつた胸には、ほのぼのとした人間愛がみちあふれて、朝夕の家拝にも祈りの人といわれる主人公にふさわしい家族として、いまは亡夫の志をついでアマゾンの将来のために祈りつゞけているという。一九五二年軽い脳溢血を起し、人々を心配

させたが再び元気を回復して、子女の孝養のもとに健在である。満足と感謝でつづられたときどきの消息は読むものに、大きな感激と希望を与える。

結婚は人生の禍福を決定する重大な機会となる。あやまれは六十年の不作である。彼の結婚は生涯妻を操縦することに苦勞した点で、豊作の部に入らないことは、その夫人との関係を知る人の等しくみとめるところであるが、それは夫人の剛操と、系累の複雑さによるのである。決して不作ではなかった。その意味でとくに彼の場合祝盃をあげなくてはならない。

結婚以前の彼は修業一点張りで女性に対して交渉をもつ機会は少なかった。彼はよく武骨もの扱いをされたが決して木石ではない。むしろ常人以上に女性を尊敬した。この感情は幼なくして母を失い母性愛に飢えていたことも原因したのではあるまいか。アミエルの日記には、女性というものの矛盾に充ちた不可解な存在であることを、皮肉った記事が、ところどころにあるが、彼にとつては若い女性は、この瞑想家が考えたよりも更に幾倍か未知の存在であつただろう。

ともあれ彼の過去は恰かも荒ムシロの上に座わつたようなきびしい生活の連続であつた。青壮年の時代の十年間、完全に男性はかりの団体の生活に終始し、娯楽にたのしむ時間など全然もたずに青春の日は過ぎた。それはいとわしいことでも、寂しいことでもなく、むしろ彼に

とつては楽しかった。しかしそれがひどく殺風景な生活であつたことは否定できない。

結婚した彼は中渋谷に新築の家を借り、母を加えて新家庭の人となつた。新妻にかしずかれて過ごす朝夕、新調した軟かい夜具にくるまれて結ぶ夢。この当然すぎる生活にすら彼がどんなに歓喜と幸福を見出したことか。だが事實は、彼には悠々としている閑などはなかつた。彼の前には新たに設計すべき事業、創業の困難が横わっている。

久吉の名で呼ばれていた彼は、このころから崎山比佐衛の戸籍名を用いた。

「手をスキにつけて後ろを顧みる者は神の国に適う者にあらず」とは彼の生涯の行動をいつも力ずけたイエスの言葉である。

一旦決意するとすぐに着手する彼が、これから始めようとする事業の構想は牧場をもち自分で生産した良質の牛乳を販売する。お得意は自分で開拓し、すべて学生に配達させその収入を学資にあてる。学生は寄宿舎に収容して規律ある家庭的生活のもとに通学させることだった。

そのころ東京市渋谷町上渋谷二四番地（現在渋谷区役所付近）に川名某という人がいて、二十頭ばかり乳牛をもつて牧場を経営していた。敷地が広く牛舎も大きいので、この人を説き、資本の半額を崎山が出資し共同経営

とし、生産した牛乳は全部引受けるということで協定を結んだ。無一物ゆえその資金の調達は容易でない。知己先輩に訴え百方苦心のあと、結局既述したように渡辺辰五郎校長が無条件で彼を信用し貸してくれることになって解決した。その金額は貳千円であった。

千四百坪の敷地の上に、七十二坪の建物があつて牛舎、作業場、住宅に別れ、牛舎は三十頭の乳牛を収容する能力がある。線路寄りに飼料置場や、汚物を処分する設備があり、その反対側には消毒殺菌用の機械が据わっている。そこで牛乳の処理をする。このコンクリートでできた作業場の片隅にある井戸からは、清冷な水をつるべで汲み揚げることができた。作業場に並んで六畳の座敷が二つ。そこが管理者の居間である。

牧場の地形は正方形で、南西側にスギ、ヒノキ、クリの木が幾本か竝んでいた。夏はそこで蝉が鳴く。広場の一部にはクローバーが青々と茂っている。この牧場に添った空地を借りて住宅を新築して崎山一家は六月に移った。八月にはその付近に新築した一戸を借り受けて、鳥居邸にいた一団が引越したのでやつと全部がまとまった。前に本多庸一によって命名された、青山学生労働会の名称はそのまま使用することとして再建の創立打合せをした。会長崎山比佐衛、幹事吉田常太郎、会計吉村繁義（学生）を役員と定め、僅か三名の学生を会員として、新たな組織のもとに出発することになった。明治三十九年八月十五日のことである。いってみれば簡単だ

が、何の事業でも創業は容易なものではない。無資本で手を着けてから発足までわずか五カ月足らずであった。

その日から彼は吉田とともに毎日雨の日も風の日も、近きより遠きへと、新らしいお得意の勧誘につとめた。この成績は良かったが、得意が多くなるよりも、学生の方が上回る勢いで殺到してきた。新聞にも紹介されないし、宣伝など全然しないが、「学生労働会」と書いてある牛乳配達車を街頭で見つけて追っかけて来るものもある。得意先から紹介されてくるものもある。満員札止めと断るのに汗だくであるが、中には転げ込んで動かないといった強引なものもいて、負けてしまう。いかに多くの学生がアルバイトを求めて右往左往していたかがわかる。

財政の方は収入よりも支出が数倍することになって赤字だとか、バランスがどうといった程度ならよいが、支出は収入に数倍するという苦境に陥った。その年の瀬は辛うじて越したが雑煮餅も思うようには頂けないという春も明けた。二月半ばには降ってわいたような大事件が突発した。

真夜中に泥棒が侵入して、牛舎から優良な乳牛を十頭ばかり引き出し、暗やみにまぎれて何処へか行つてしまった。翌朝になってみると、牛盗人と思ったのは、共同経営者であった。川名某としては、このような連中と共同でやっているのは、自分も裸にされると思い余った上の仕業となったものらしい。

彼の行先は深川とわかつていたので談判したが話がまとまらないので、止むを得ず事件は法廷に移された。本多家の紹介で普賢寺徹吉という老弁護士に依頼し、数回審理があつて勝訴になった。

債権者にも迷惑をかけないで落着いたうえ川名の分を肩替りして、牧場は彼が完全に管理することとなり、雨降つて大地は固まったわけである。しかし事件が突発したときには、意味もわからずに驚いて、逃げていった学生もあり一時は騒ぎであつた。

わずか半年の間にこのようなちん事を引起したが学生は早くも十八名を数えた。食い盛りの若人が、朝夕数時間駆け足のアルバイトをやつて、学校に通うのだから腹が減る。内地米と南京米（外米）をまぜた御飯にゴマ塩を振りかけて、粗末な副食物で我慢する日が暫く続いた。後日ゴマ塩時代とよんで彼がその頃の追想にふけたことから、苦勞したことが想像されよう。

とうとう外米交りの米代も払えないので、出入の米屋も顔を見せなくなった。糧道を断たれたわけである。どんな名将の籠城も、兵糧がつかれば城は落ちる。いくら豪の者が揃つても、腹が減つては戦さはできない。臨月に近いお腹を抱えた田鶴子夫人と係の者が、付近の米屋をシラミつぶしに頼んで歩いたがカケでお米を届けてくれる米屋は一軒も無い。借金取りが来ると、玄関の二畳敷に端座した会長が、腕組みをして天井をにらみつつ、滔々と雄弁を振つて説得撃退に努めるが、いくら強気で

も明日食う米が無いことには閉口である。学生たちには知らしてはならないが、牛盗人事件以上の焦眉の急である。万策つきた彼は暮夜ひそかに本多院長の宅を訪れて、窮状を訴え嘆願した。

「先生、どうぞ米屋からカケ買の出来るように 保証人になって下さい」

物に動じない院長も、これには閉口したことであらう。後日に彼はこう語った。

「本多先生の様な立場の人が、こんなことを一々うんといっていたら、身代がいくらあつても足りはしない。無理なことを百も承知しながら創業時代で打開の道も、急には見出しかねて……話しているうちに柱時計が一時をうつた。夫人も言葉を添えてくれたので……大きなあくびをされた先生はわしはねむくなった、何とかよいようにしておけ。といわれて、実印を渡してくれた」

こんな境遇の中で、四十年五月二十八日には長女をあげ、本多夫人によつて慰与子と命名された。初めて人の親となった役は意気益々盛んで、様々の難問題を克服し、不眠不休の活動を続けた。得意先もぐんぐんふえて事業は軌道に乗った。翌四十一年には牧場広場の南西隅の栗の木の一部を取りのけて、寄宿舎を新築した。これは事業に興味をもってくれた特志家の低利融資によるものであった。学生たちは歓呼して寄宿から引越し、会長一家、役員、学生、労務者、乳牛と一団の大世帯が、一つの地域に完全にまとまった。

創業の時期が一段落を告げると、会長と苦楽を共にし、どんな事件にも誘惑にも屈せず協力してきた吉田常太郎は、独立して同じ目的の事業を経営することとなり、彼もまた崎山会長と同じように創業の苦心を体験した。

武市安哉、押川方義については既に書いた。押川は昭和三年八十歳の天寿を全うするまで、晩年はずつと東京にいて、終始彼の相談相手となつて、活を入れたり、慰め励ましてくれた。いま一人の先輩本多庸一は押川に比べ早逝したので、彼の飛躍の日を見なかつたが、彼に深い感化を与えただけでなく、結婚から続いて労働会の苦境時代には陰に陽に大きな援けの手をのべてくれた恩人であつた。彼は押川において自分に共通するものを見出したのと反対に、本多の風格に接して自分に欠けていて、而も最も必要な多くの美德を学ぶことができた。惜しいことに彼が指導的大人物を必要とするとき、最大の尊敬を払っていた先輩は既に地上にいなかった。これは彼にとって大きな失望であつた。

本多庸一は嘉永元年（一八四八）津輕藩の名家に生れ、漢籍を始め刀槍、馬術、砲術、山鹿流兵法等、武士に必要な教養を修めて、十八歳で藩の稽古館の司監を命ぜられた。慶応四年、二十一歳のとき、維新の風雲に際し、藩の代表者の一人として、奥羽諸藩連合盟約の事に関し諸方に使した。結果は維新史の示す通りであるが、若い彼

は決死の覚悟で、藩の面目を立て、士節を全うした。明治三年に藩の秀才として横浜に出て宣教師ジェームス・バラから英語を学び、修学中にキリスト教を信じ、五年五月バラから受洗した。二十七歳で東奥義塾々長に就任したのである。

その後憲政発達の時代、東北地方の有力者として民権の伸張につとめ、明治十五年青森県会議員に当選し、間もなく議長に選出された。同十九年

キリスト教の伝道を志して仙台にゆき、次で東京に移り、二十年九月東京英和学校（青山学院前身）の校主兼教員となった。翌二十一年渡米して、ドルー神学校に入学し、キリスト教神学を研究した。此時既に四十歳。その信ずる処に忠実であった。

東北の有志は、なお本多の大器を推重して、機会を得て政治界に活躍せしめようとの望みを捨てなかった。彼もまた之を斥けきれない心境にあったが、在学中奇禍にあい、危機一髪のところを免れて悟り、政治を断念して、宗教界に献身する決意を固めたといわれる。明治二十三年帰朝して東京英和学校総理になった。

雑誌「大陽」誌上で人物評論に健筆をふるつた鳥谷部春汀は、三十二年九月号の同志上で『東北の人物』という題下に、本多庸一を東北第一の人物と論評し、その天分は政治家として卓越している。彼が政界にあれば、東北の首領たる地位は彼にあると断じている。

本多庸一はずつと教育家で、学校経営を担当しつつ、

日本のキリスト教会の大立物として、特に教派間に反目の多い教界内の調和者としての役割を果たした。悠揚迫らぬ風格から発露する春風のような温かい人格と、大きな抱擁力の前には敵はなかった。彼は単に教界のみならず、日本精神界の代表者の一人で、宗教界に重要な事のある毎に、そのメンバーの一人となった。幾度か日本教会代表として、国際的な宗教会議に列し、幅の広い活動をし、日本の地位を高めることにつくした。

宗教界のみではない。日露戦争前後の多難な内閣の主席だった桂太郎は、暮夜屢々着流しの姿で「本多君はいますか」と、彼の書斎を訪れ、内外の状況について、彼の意見を聞いたという。当時政府の依嘱で海外に使し、日本に対する誤解の一掃につくしたことから彼の国際的信用と、卓越した識見をうかがうことができよう。

明治四十年日本におけるメソジスト二派の連合が成立したとき、青山学院の存在に重きを加えていた彼は推されて初代監督の地位に就いた。伝統を固執したがる各派を融合し、統率するには、彼以外に人がなかったといっても過言ではない。監督となって後は、東奔西走、席の温まる暇もなかった。たまたま旅先の長崎で病気になり遂に起つことができず、明治四十五年三月、六十五歳で劇務のうちに急逝した。

本多監督永眠の報が伝わると、国民新聞社長徳富蘇峯は「東京だより」でその長逝を追悼した。

「君にして身を政界に委ねんか、少くともその所属の

政党に於て、長老の一人たるべし、或は大臣たり、或は大臣たらざるは只其時の運如何によるのみ」

“大臣たるも可リであらうが、むしろ国会にあれば片岡健吉に比肩すべき円満公平な名議長を得たことだろう。

しかし本多庸一は教育界、精神界に終始したことによつて、その偉大な人格的感化を社会に与え、長く後進にその余芳を追慕せしめているのである。

武市安哉、押川方義、本多庸一。このすぐれた人物を先輩にもち、その感化をうけ、とくに本多庸一に親しむことの多かつたことは、崎山比佐衛の人間としての成長に大きな力を与えた。

一一、苦学生の友（その三） 生活

学生労働会で学生は、どんな日を送っていたか。仕事は牛乳配達一点張りで、彼等の働く地域は当時、麻布、赤坂、四谷の各区から、渋谷、大久保、代々木、柏木の郡部にまで拡がつていった。後には支部の方が、牛込を中心に麴町、小石川、本郷、下谷の各区まで発展して、山ノ手一帯に及び、余り急激なぼう張が、当然同業者の迫害や、摩擦を起したが、得意先が会の目的を理解しているので、業者の対抗も長くは続かなかつたが、学生は屡々脅びやかされた。

一区域を一組とし、朝一人、午後一人配達する。この頃の自転車配達のような便利なことは出来なかったので、ペンキ塗りの箱車、その中の枠に牛乳瓶を詰めて梶棒を振る。量は朝夕で八升から一斗内外。朝の方は、午前三時ごろ起きて、六時半から七時に終る。午後の方は放課後三、四時間、冬期には朝夕共にチョウチンがいる。もちろん祝祭日も、正月元旦も休みはない。

通学時間外に働けるのが有難いだけで、少し位発熱しても、痛いところがあつても、我慢しなくてはならないのがこの仕事の辛いところ。そのうちでも最も辛さの身にしてみたのは、日曜日など余暇あれば、補充のために新得意を勧誘することである。学生だという誇りをもつだけ、人知れぬ悩みを体験する。やはり、不屈の精神、丈夫な身体、忍耐心、それに加えて、相当の頭脳の持主でなくては永続しない。

手当は労働量とその人の必要に応じて食費、月謝、小便が支給され、当初は食事は会長の家庭で一緒にし、ゴマ塩でもストームをやる様なことはなかった。しかし食事というものは不平の出やすいもので、余裕ができると自治的に賄った期間も長かった。どこの学校にでも、自由に通学して差支えないが、地理的關係で、青山学院が多く、牛込の方は近い距離に学校が多かっただけに千差万別であった。

そのほかの点では、学生生活として変ったことはないが、睡眠不足のために授業中に眠いのでたまらなかつ

た。働く、学ぶ、眠るで、王陽明の“飢え来れば飯を喫し、倦み来れば眠る”という修業を地でゆくわけであるが、“玄之又玄”までは達し得ない。反対に家庭における一般子弟のように、我ままも許されなければ、遊び、スポーツ、その他の娯楽を楽しむ余暇は殆どない。こうして少しも退屈するひまもなく、忙がしく一日の日は過ぎてゆく。

変った点では得意勧誘についての感想懇談会など、どこの学生団体にもみられまい。名々の体験した成功や失敗談に花が咲く。女中が取次いでくれないのがしやくにさわって、けんかを吹きかけたという者があれば、犬に吠えつかれて悲鳴をあげて逃げだしたという臆病な男、訪問した家の主人公に、無理して苦学までしなくてもよいではないか、とかるくあしらわれて憤然、大いに議論を闘わし、とうとう主人公をして、よしわかった、と承服さしたと得意がる元気なのもいる。かと思えば、堂々たる応接室に通され、主人公に用件を語ると、牛乳のことなら玄関で話せと叱られた話、焼芋をかじりながら語り出す珍談奇行に一同ばく笑しながらも、貧しい学生たちには真剣な苦心と悩みがそこらに漂よって泣き笑いの表情だと評した方が真実であろう。今日社会科の好題目を彼らはこうして実践した。

得意とりはかれら学生の生活のうちで最も辛いことだった。しかしこれがよい修行となったことは、後日社会に出て働くようになったとき、その体験が非常に役

立つたとみんなが回想していることから知られよう。

朝早い仕事には生れつき早起きの会長はお詔向きである。五時に起床するころは学生は車をひいて駆け出したあと、仕事着に身を固めて、牧場に出て牧夫と一緒に一頭一頭ていねいにブラッシュをかけてやる。それから搾乳を手伝い、牛舎の清掃をして、二時間で朝の労働を切り上げると、聖書の一章を朗読し祈を終えて朝食、背広の紳士になって、外交員といえはハイカラに聞こえるが牛乳の勧誘に出かける。

余暇のある学生がいればそれを伴うこともある。いなければ一人でてくてくと、出かける。玄関に立って、例の鉱毒事件で絶叫してのどが破れてからくせになったエヘン、エヘンの咳払いをして、それから思い切って親指で強くベルを押す。

取次のものに

「私は崎山と申します、御主人か、奥さまにお手間はとらせませんが、一寸お目にかかりとう御座います」

地声がふといので取次ぐ先に、奥に通ずる場合が多い。家の人にあいさつするまに手にした広告紙……それは会の趣旨、学生の生活状況、牧場の説明と写真の外に、内務省衛生試験所の牛乳分析試験表などを印刷した一枚の紙……を渡して、一段と声に力をこめて、滔々と説明する。＂要は牛乳を用いて下さい＂という訳である。

「宅では牛乳は用いませんで」 という家もあり「平

常用いていませんが、切角だから少し頂きましょう」というのは、勧誘に動かされた同情の発露である。「牛乳は頂いておりますが、古くからの取付がありますので折角ですが」というのが、需要のある家庭の断りのきまり文句で、こう聴けばしめたもの。「左様で御座いますか」と引退つては商売にはならぬ。先方の断る言葉の先手先手を打って説得する。強要は出来ないが理詰めで駄目なら情に訴えて泣きおとすこともある。

「では毎日いくら頂きましょう」要求が容れられると緊張した顔が一瞬にほぐれて、魅力のある破顔一笑、お礼をいって、勢いよく次の邸へ、午前中四時間続けて三、四十戸訪問すると、さすがの弁舌家も、あごがだるいといった疲れた表情で引上げる。

一軒の家に、二度でも、三度でも出かけて、説得し、陥落するまでは止めない。東京の山ノ手のどんな路地、その奥のどの家でも、かれの足跡を印しない路地、訪問しない家はなかったといっても過言ではあるまい。それが十余年間一日の如く続いた、誠に驚くべき努力である。

午後一時間ほど午睡したあと、手紙を書くとか、雑用をすまし、三時過ぎには牛舎に現われ、朝と同じ作業をして五時頃になると、今度は尻切れ袴天の腰に、麻袋を巻きつけ（防水のため）なわのおびをしめて、瓶の洗滌を手伝う。庭に雀が飛んでくれは

すずめ　すずめ　今日もまた

雪の降る日は

雪は降れ降れ 雪は降れ

調子外れの大声で童謡やさんびかを歌いながら働く。労働するときの彼は嬉しそうである。早変わりして清潔なエプロンをかけ、乾かした瓶にゴム管で牛乳を注ぎ込む。一日の汗を流して、その日の勤めから解放された気持で、食卓に向うのは七時ごろである。

日本の家庭では、食事中は静かにする習慣が多いが、会長は成るだけ大勢で、四方山の話をしながら、賑かに食事するのが好きである。愉快的話をして皆を笑わせる。それがだんだん自分の話に自分がつりこまれて面白がつては、ご飯茶碗を抱えて笑いこける。こうして天真らんまんな彼にかえる。

就床前の数時間、座談が好きで、また巧みな彼は、話相手があれば、ことに来客のある時などは、いつまでも楽し相に語って飽きることがない。一人静かにいるときは読書する。読書人としての彼に就では別に語る機会があろう。

新たに発足した学生労働会のバックボーンは何か。鳥居時代とちがい、封建制から中央集権制：（用語が大げさであるが）…に組織を改めたので、得意先をもつてとび出すような無分別はできない。前には独立心が強く、それがやがて極端な利己心に変ってしまったのであるが、統制ができたあとは、依頼心が多くなり、個人の責任感が薄らぐおそれがある。全体の調和を保ちながら、ルーズにならぬように引きしめてゆ

くということが大切でもあれば、むずかしいところである。そこで、会には指導精神というか、命令せずして全体を支配する力となるバックボーンをもたなくてはならぬ。

言い換えると、秩序と統制のある団体として向上すれば、学生もおのずから向上する。要するに学生をして烏合の衆とならしめてはならない。個性の成長を見守りつり、団体の一人として共通な人間性の育成につとめることが肝要になってくる。これはまた、利己的な人間に社会性を与えるためにはよい団体生活の長所であって、教育上からも品性を鍛練する機会である。

そこで方法としては、たてとよこの連絡を密にして、お互いの理解を深めることに重点をおき、毎週土曜日の夕べには全員集合して修養の時間をもつことにした。これは回を重ねるに従い、だんだん充実して、その形式もキリスト教会における礼拝を簡素にしたような整ったものとなった。ちがうことは、牧師がいなくて、会長が司会者となり、また講話をする。学生が代る代る壇上に立って、若々しい情熱を傾けて夢を語ることの多いのが特色である。献金、祝祷は当然省略されるが、さんびかを歌い、祈りをし、まじめな求道の精神に燃えている青年がいつも半ばを占めて、そこには敬虔な雰囲気がかもし出される。また田舎出の少年が次第に育っていくのが、彼等の語る内容や、姿のうちに見られることが会長にとって無上の喜びである。とくに会長の熱烈な祈り

が、総ての学生の支えとなった力は大きかった。この修養会は彼ら学生が社会人となったのちまで、かくれた指導力となり、また、楽しい思い出となった。

会長は、生涯牧会のことには携わらなかったが、このような方法で成長期の団体のリーダーとして十数年を送ったことは、実質的には彼の素志を実現したことになった。彼は経済的には全責任者であるが、精神的には独裁者とならないようにつとめた。この修養会にはしばしば青山教会石川和助牧師、また、殖民学校の労働部となつてのちは、渋谷教会石垣勝三郎牧師を招いて、彼も学生と共に教えを聞いた。

人間の精神力はいつも張りつめてばかりおれぬ。弛むときがある。その機微なところを見失わぬようにして、過ちのないようにはかることが、指導者の任務であつて、これは修養会だけでは解決しない。規定はないのだから、人を見て法を説くことと、温かい思いやりで若人の夢を育ててゆく用意がいる。

会長は実践の人、信仰の人、そしていつも新鮮な気分で陣頭に立つ。それが大きな指導力であるが、学生にははつきり一つの方向を示さなくてはならない。彼が懇々と繰り返した言葉をまとめるところである。

「私が今までお預りしてきた多くの学生諸君に共通している点は、諸君が由緒ある家に生れ、その傾いた家運、或は没落しかけた家を挽回しようとして、志を立てた人が多いことである。これは諸君を励ます最大の力であ

る。そのことを忘れないためには、諸君は少くも毎月一回以上、父母兄弟たちの安否を問い、自分の無事を知らすようにされたい。はがきに三行か五行で宜しい。身体が疲れ、心の弱ったときに、あの故郷にあつて諸君を案じつつ、汗を流しておられる両親や、家の人たちのことを思い出せば、自然に感謝にみちて奮い起つことができるはずである。諸君は家を興すと同時にもう一つの使命が、国家の安全と、社会の福祉に奉仕するにあることを忘れはすまい。若しこの大乗的使命に対する自覚を失えば、諸君の学問も勤労も、その価値を半減されるであろう。

諸君は学生である。学生の最善の務めは学業に励むことで、授業に欠席しないこと、いかなる理由でも学校の出席を怠ることは、墮落の一步であるというほどに考えてほしい。

諸君は苦学している。苦学生といえば世間も卑しき、自分も同様に思っている者が多く、この劣等感が苦学生を卑屈にしていることも事実である。わが会の諸君はそうであつてはならない。自ら汗し自ら学ぶことは、父兄のスネをかじっている人に優るといふ誇りをもたれよ。諸君は頭を高くあげ、空を仰いで、胸を張つて歩め。いつも俯天地に恥じない心構えをもつてほしい。衣服は古くても恥じることはない。いつも垢ぬけのした、さつぱりした身なりであるように気をつけられよ。

われわれの牛乳のお得意は会を支え、緒君に勉学の機

会を与えてくれる方である。これらの家庭に感謝し、またこれを失わずますます拡張することに努力しなくてはならぬ。諸君がこのために人の邸宅を訪ねる時は、私がいつも諸君と共に行って範を示しているように制服制帽か、和服のときはハカマをはいて、堂々と門を通つて大きな玄関から訪問すること。女中、書生を相手にせず、必ず主人公、若くは主婦に会つて、その願いを貫徹すること。

われわれの商品は、多くは大切な赤ん坊か、病人の用いられる衛生品であるから、取扱には細心の注意を払い、特に清潔を忘れないように。それはやがて諸君の品性にまでかかわることである。

土曜日夕べの修養会の会合は、われわれが神の前に相会して、過ぐる一週間の生活と実行を反省し、相互の親睦を増し、さらに来るべき日の活動を勇気づける心の準備に大切な機会である。これを怠った人は殆ど失敗している。必ず出席し、心をむなしくし、氣力を旺盛にして、人後におちないように精進されることを切望する」

こう書いてくると、いかにも形式の上からもキリスト教に偏っているように早合点する人もあろう。しかし、このようなことは取扱う中心人物の抱擁力や、寛容な態度によるので、この点では会長の学生に対する態度は全く公平である。ここで苦学した人で大きな寺の僧侶になつてゐる人が幾人かいることでも説明されるように、

仏教であれ、何宗であれ信仰心をもっている者には彼は尊敬を払っていた。だから何人にも窮屈な思いや強制感をもたせることは少しもなかった。云いかえれば学問と思想の上では自由に彼らの人生観を発展することができた。

明治四十五年は、会長には悲しい年であった。

それより以前、長男茂が生れ、また、姉を北海道から招いて、共に暮らすことにしたので、家族はますます多くなった。三月二十四日に恩師本多庸一が亡くなった。彼の落胆はまことに痛々しかった。同じ年の七月三十日には、明治天皇が崩御された。労働会の牧場は山手線に沿っていたので、桃山に向う霊柩の列部が通過する真夜中には、会長は家族、学生たちと共に寄宿舎に端座し哀悼の赤誠をこめてお送りした。

その頃民間にもれてくる、この偉大な君主の言行は悉く彼が学生たちに語る話題であった。また天皇の御製は、彼の最も愛誦したところで、かれ自からこの頃から三十一文字を並べることに趣味をもちはじめた。稚拙と云いか、通俗早易と云いか、義理にもよい歌だとはいえないのだが、幾首かできると、彼は誰れかれの区別なく、まわりの人たちに向つて朗々と一種のふしをつけて詠み上げる。

「僕の歌は明治天皇さまの御直伝だから、よかろうが。どうかね」

喜びの色を満面にたたえて、得々としている。

まことに無邪気な作家である。その御直伝の名作は、後段になってしばしば読者に紹介されよう。

ここに来たころ、空地の多かった上渋谷地方も七年後にはすっかり住宅街となった。会長は土地の有志に推されて、渋谷町町会議員に当選し町政に参加して、専ら教育衛生の施設改善に力をつくした。また、町政に干渉して不正を企たむボスたちに対し、革新勢力の代弁者となり、公民の義務を果し、町民の信頼を博した。

明治末期のわが国は、今日ほど人口過剰の問題は、深刻ではなかったが、弱小国から強国へと、頭をもたげる途上にあつたので諸外国からの風当りは強かった。排日排貨で貿易は振わず、全般に経済力が伸びないので生産は小規模であつた。

一方学校の門を出る者は年と共に多くなつて、学校卒業者にも、就職は狭き門となつてきた。履歴書に写真をそえて東奔西走、先輩知人の門をたたくといった傾向がみえはじめた。たたいたからといって簡単に望む職に就けるほど、甘い時代では既になくなつていた。有力者に縁故の少ない、あつても頼ることを潔ぎよしとしない苦学して世に出たものには、就職は一層不利であり、みじめであつた。独立して事業をすることは、よほど有能の者でない限り、資本が乏しくては、殆ど不可能といつてよい。

こうした国内事情があつたためか、崎山と同時代の学

友たちで、卒業後海外とくに北米合衆国に渡航する者が多かった。それらの人の中には、村松陽三郎、菱川虎男、川村耕造、近藤長蔵、山鹿讓、上条信次、野口議蔵、椽尾光之助、玉田熊之助、森岡茂、岡豊峰吉らの彼と親しかった人たちがあつた。そのうちには苦学した人たちも二、三ではない。渡米の目的は留学するもの、かの地で志を展べようとするものである。

少しおかれて青山時代の労働会出身者たち、中にはかつて彼のもとから離れ去つた人たちも、彼が学生労働会を再興したところに訪ねてきて、渡米のあつ旋を乞うもあつて、海外に渡航しようとする者は次第に多くなつた。空手で身を立てるには、日本よりも海外、とくに米國がよいのと、一部には労働に自信のもてる点などがその理由だつた。

会長は自分の天職をえらぶために悩んだことはあるが、自分のためにも、人のためにも就職について心を勞した経験に乏しかつた。労働会の創業とその発展に力を集中していたので、学生の修学に考慮を払うのが精一杯であつた。

就職難などというものは、もとより突発的に起る性質のものではなく、經濟事情を主とした社会の病氣で、はつきり気づいてからあわてても個人的にどうしようもない。学生として自活している連中だから学校を出たのち、自分の運命を打開してゆくことは問題ではない。こう考えたとしても無理からぬことであるが、世の中は理

論通りにゆかぬ。

現在は各学校とも卒業生の就職については非常な便宜と努力を払っているが、当時は学校としてはさほど積極的にやっていたいなかった。

学生労働会は学校とはちがう。これだけ苦勞して育成した学生が、世の中に出て安定を得なかったら、仏作って魂を入れないのと同じである。一人でも落伍すれば、無能だからとか、不運なのだと片ずけて看過することは絶体に許されない。ところが、大正の初期になるとそれがはつきりしてきた。出身者の就職について安易な氣持で樂觀していられなくなった。労働会の経営者としては予期しない大きな壁にぶつかったわけである。

ではどう解決すればよいか、この大きな課題に対する答案は一、二に止らないのであるが、そのうちでも前記のように、誰れが教えるともなく、彼の同窓の学友たちが、束縛や情実の少ない自由の世界……海外へと出てゆきつつあるという事実が、ほかの解決策よりも真つ先に、彼の頭の中に大きく浮び上ってきたことはまことに自然であった。

彼らの働く場所を見出すことは、手近なところにないわけではないし、方法も考えられる。しかし長い将来をもつ彼らの活躍する舞台を狭い日本に局限して、それだけが生き甲斐のある世界であり、祖国に忠であると思うほど愚かなことはない。われらの生きている地球上には、まだ無限といつてよいほどの、未開の天地が拡がつ

ているではないか。だが、学友たちが渡航したという眼前の事実だけで、実感のこもったアイデアが彼の頭の中に湧いて出たわけではない。若くして開拓者の生活を体験している。恩師押川方義は、日本の発展という悲願に、情熱をかたむけ遂に教界を去った。そのもとで兄弟弟子だった島貫兵太夫は、日本力行会を起して渡航青年を育成している。郷里の先輩前田岩吉の植民塾に出入して、その主張をきいたことがある。こうしたことが彼に強く影響していた。しかし、彼にはそれ以上に独自の批判と、それに対する解決の構想があった。

当時人種的排斥の盛んだった北米合衆国に多少無理しても入国することが、両国にとって利益であるか。それが日本人にとり好適であるかどうか。その他のどこに日本人の発展に良い天地があるか。そのへんの消息は案外明かにされていなかった。

われわれが運命をかけて、新たな墳墓の地、子孫のための楽土を定めるには、その前に先ず確かな知識をもたなくては軽々に行動できない。まして人々に奨励しようとする場合はなお更である。

そこで率直にそのころの事をいえば、国としても海外移民については確かな方針もなく、これに対する強力な方法は講じられていなかった。既にそうであるとすれば、結局自分で現地を踏査してその国の実状と、入国する者の利害得失と将来の発展性などについて、確信をも

つのでなければ、積極的に青年の海外渡航を奨励することとは早計である。彼はこう考えた。

平素の言葉や動作は荒削りで、馬車馬的な一本調子のような感じを人々に与える会長の性格の一面には、案外慎重で、細心で臆病なところがあつた。それがいつも夢をみつづける彼を、強く現実と結びつけていた。この矛盾している二つの面が表裏一体となつて彼を動かしてゆく。

学生労働会はジグザグの道を歩きながら、やや目的に近い軌道に乗ったとはいえ、何一つ充実したところはない。財政的には極端に切り詰めた経営を続け、辛うじてバランスがとれている程度である。会長の家庭は最近二男茂一を失つたが、長女の外に長男茂、三男忍の二男一女の母である田鶴子夫人は現在身重である。この家族と、三十名の学生と、二十頭の乳牛。これだけの事業を残して外遊するには非常な勇気がいる。外遊といつてもざつくばらんにいえば無銭旅行で、行くものの決心も並大抵ではないが、留守を預るものの責任も楽ではない。

この壮挙は単にアルバイト学生のためばかりではない。天下多くの青年の運命にかかわることを思えば、奮つて決行しなくてはならない使命である。彼と同志の意見は一致した。決死一番百尺の断崖を仰いで正に一大飛躍を試みるべく、背水の陣を布いて文字通り万里遠征の途に上ることになった。つぎの記事は、彼の旅行記を要約したものである。

一二、南北両米踏破三万哩（北アメリカ）

大正三年（一九一四）二月二十一日、香港丸の三等船客となる。航海中船長東郷正作、一等機関士山榊儀市の同氏に非常な厚意を受ける。私のこの旅行は、家に一銭の貯えがあるわけではなく、三十名の学生と、これを養う二十頭の乳牛、それらの経営と、子女三人を抱えた妊娠中の妻、一切を同志の一人に托して旅程に上るので、行く手の困難はもとより覚悟のことであるが、後ろに顧るところもまた多い。ただ一大後援者の在しますことを堅く信じて進む。後援者とは、わが信ずる唯一絶対の父なる神である。祈ってゆく。謹んでゆく。伏してゆく。四、五日で船に慣れ、求めに応じ食堂で、食後三等船客たちに、海外生活者の責任と心構えについて幾度か講演する。

三月二日 ホノルル入港。上陸する同胞の中には写真結婚の花嫁三十六人がある。彼女たちの上に祝福を祈る。船は比較的平穏な航海を続けて十日、サンフランシスコに着く。三等船客は、石炭船に乗せられて、エンゼルの島の移民館に送られた。ここで米国官憲により、男女共何れも丸裸同様にされて身体検査を受ける。検査の結果十二指腸虫がいるというので私一人だけ、病室に留置された。おちついてまわりを見ると、建物の壁には中国人の憤慨の名文句が漢文で刻みつけられてある。まだ一

歩も陸地を踏まないうちに早くも東洋人排斥の感が深い。この間に巨船春洋丸が着いた。邦人の渡航者は大部分写真結婚の花嫁である。いま日本人排斥のため青年男子は、入国できないのは残念であるが、花嫁は痛快である。生めよ殖えよと祈る。エンゼル島ときけば天使のようだが、実は囚人同様の扱いである。しかし考えて見ると、紳士、淑女たちでここを視察する者はあるまい。私は一人ここに残されて、偶然多くのことを学ぶことができた。二週間後にやつと上陸を許され、その数日前に一度訪問してくれた、先輩小室篤次牧師に迎えられてお宅に落ちつく。三等客は百円の“見せ金”を持つおきてだが、私の懷中は邦貨十円に満たないので心密かにとがめていたが、小室氏の迎えで無事通過した。

上陸してみると髯のある紳士は殆ど見えない。

私は東京では全然無かったが、必要だろうと思って船中で大切に育て蓄えて、やゝものになり相だと楽しんで来た。ところが訪ねてくれた友人たちが、そんなものは無用だ、恥かしいではないかと、よって、たかつて、剃り落してしまったので、二十日間の努力がすっかり水泡に帰してしまった。

サンフランシスコバークレーの後ろに高い丘がある。この頂上からは金門灣を一目に見下し、オークランド、バークレーの街々が足下に眺められる。私は上陸後間もなく、この丘上にある花畠に、一ヶ月間働かして貰った。

思えば前途三万哩の旅程、懷中は空しい。どうすればこの目的を果すことができるであろう。眼下に幾万の灯火が、明滅する夜更けに、私は丘の上の草に伏して、幾度となく祈った。

“この行、汝のみ心ならんには如何なる障害も止どむる能わざるべし。汝は万物の造り主にして、全能の神、わが父にして、われを守り給えばなり。たとえ世人には冒險的であり、不可能とみえる旅行であつても、願わくば大能のみ手によりて成させ給え。しもべをして、日本青年の将来のために。奉仕の微力を尽すことを許させ給え。”私は日本を出発するとき、この旅行を意義あらしめる便宜にと、大隈重信伯、江原素六先生、H・B・ジョンソン博士、監督平岩愼保博士等諸先輩が、私のために署名して下さった紹介状をもつていた。私は熟考ののち、これをもつて在留同胞を訪い、自己の経験と、希望と、母国の近状を語り、異郷に在って排斥の屈辱に耐え、努力していられる、彼等の活動ぶりに接し、その労を慰問し、その意見を伺うと同時に私の目的のために援助を乞うことを決意して丘を下りた。

北米特に西海岸加州方面の同胞の生活の中心は、キャンプである。邦人の労働者と、これを支配するボス（親分）とは、このキャンプの中で寝食を共にしている。私は日本人の多い農園に入つて、キャンプ回りをはじめた。朝早くキャンプを出て次ぎのキャンプに行き、昼食どきにボスを訪ねて、その夜の講演を約束し、直ぐ労働

服に着更えて畠に出、数十人、数百人の労働者と共に働
きながら、その間につとめて彼らの身の上話に耳を傾け
ることにした。

夜はボスに紹介されて、「植民の使命に徹し、民族の誇
りに生きるように」との意味で一場の話をした。労働者
相手ゆえ平易な話をしたのであるが、疲れているにもか
かわらず居睡りする者もなければ、邪魔する者もなく喜
んで聞いてくれた。

至って平凡な内容の話も何か彼等の胸に訴えるところ
があつたのか、流れる涙を拭っている聴衆も多かった。
そのあと座談もすんで就寝する時には、競って私のため
に自分のベッドを提供してくれるので厚意に感謝して一
首できた。

行きくれて人の情けに宿るとき

露ならなくに袖ぞひぢぬる

昨日も今日もまた明日もと、こうして毎日巡ぐり廻つ
た。キャンプで私の試みた話は大体次のような意味で
あつた。

専門のことは然るべき方が来て語るだろうから私は平
凡な母国の一般生活に就て申上げる。日露戦争後の四、
五年間は、東京で白米が一円に七升五合位で、労働賃金
は一日六十銭であつた。近頃米価はその倍になり、賃金
は前と同様なので労働者の生活は苦しい。それに乗じ米
倉の扉を締める商人もあつて民衆が役所に押し寄せる騒
ぎなどもあつた。一日六十銭の収入で一升三十銭の米を

買い家族を養う労働者の生活がいかに苦しいものか諸君に想像して頂けよう。

私の仕事といっても団体のことで、天下の事業である。即ち将来有望で思想堅実な青年を養成しているのであるから、哀れつぽく思われては困る。しかし、なかなかうまいものは食べられない。米の高い時は外米七升に、もち米一升、粳米二升を交ぜた御飯を食べたこともある。私が前にいた青山に兵営があつて、その裏門に人の出入が多いので、不審に思つて見ると、群衆が兵の残飯を争つて貰っている。この人々は貧民窟の人ではない。東洋一の首都に、しかも聖代にこの民の多いのを見て、私は何ともいえない感に打たれた。

食べ物のことばかり申上げたが、長屋住いの人の玄関には、麻糸や、紙袋に張る紙などが積んであるのが眼につく。これは婦人の内職の材料で、一ヶ月夜更けまで働いて、諸君の一日の賃金即ち五円内外の収入であるが、こんな仕事でもある人はまだ幸いなのである。

私は渡米してまだ日浅く、在米同胞の生活をよく知らないが、一見しただけでも安いビールを水のように飲み、台所には種々の缶詰が山と積まれている。食卓の豊かなことは母国の中流の生活者以上である。国を出て長い歳月の間の諸君の辛労と、努力に敬意を表すると同時に、恵まれた生活の中からもみなさまが母国の空を顧みて頂きたい。

諸君のはらからが、外米を食べていると申すのではな

いが、今日では暮し向きのよいのは、村百軒のうち、五軒か十軒である。諸君の親戚知己の中に、貧乏人が出来ないと誰が保証しよう。私の願いは、今日まで父母の安否を問う暇のない方は、この際手紙を出してほしい。そのついでに諸君の勤労の報酬の中から、一弗、二弗でも送って上げてほしい。それは、きびしい社会にある諸君の関係者をどんなに慰さめ喜ばすことだろう。

私はまた良い方面のことも語らねばならぬ。吾国は日清、日露の両役を契機として、国勢は隆々と揚つている。諸君が国を出られた十年、二十年前は、漠然としたほこりをもつ日本に過ぎなかったが、戦争の是非は別として、日清戦役はわが国に光栄を与えて、東洋の日本たらしめた。日露役の勝利は世界の日本たらしめ、大勢は今や日本の世界たらしめなければ止まない勢いとなっている。思うに吾国の一言で、東洋に嵐も起せば、平和も保たせ得るのである。やがて全世界に対し、大きな発言力をもつときも遠くはあるまい。船舶も多くなった。兵隊さんも多くなった。銀座の通りも美しく賑かになった。国の富強となったもとは、また諸君の働きに負う処が大きい。諸君は小島固日本から来ているのではなく、世界の日本から来ているのである。世界は諸君の一言一行によって影響を受ける。祖国の輝かしい興隆は、今やこの国に在る諸君の立場にまで、複雑微妙な結果をもたらしつつある。それが何を意味するかは、敏感な諸君の感知される処である。諸君よ卑屈にならず、飽くまで、民

族の自覚と誇りをもち、自重自愛されることを切望する。

次にわが国に桜の木が多く植わったことである。日露役の後には地方の行政も急激に進み、公園や道路も開けた。そこに最も多く植えられたのは桜の木である。桜は日本では武士にたとえられる。解釈はどうであつても花は美しい。春はこの花が、諸君の故郷の公園に、路傍に咲き誇るのである。夏は蝉は榎の木かげに鳴き、螢はたんぼに飛んでいる。諸君が弟妹と釣を垂れた小川には、今も魚がはねている。この自然は諸君に恋しい故郷を慕わしめるのみではない。世界を見たまえ。国は荒れ、民は散り散りとなり、志士をして憂国の熱涙に咽ばせている国もあれば、民族もある。諸君の故郷に花が咲き、魚が淵に躍っているということは、祖国の発展と、平和を物語るもので、お互いの大いなる仕合せではあるまいか。

最後に諸君の祖先の墓のことである。諸君の村の背後の山も、あの細道も、依然変ることはない。そしてその山麓の墓は湿っぽい木蔭に何を語っているであろうか。ああわが子孫は今遠く外地に行っている。いつの時遊びに帰って親戚相集い、墓上の落葉を掃ってくれるであろう。いつまでも丈夫で働いてあれよ。こう諸君の奮闘を願う祖先の声が、今諸君が耳を澄ますとき、海の彼方の墳墓から聞えてくるではないか。

私は海外発展を唱道する者である。決してセンチにな

れとは申上げない。僅かに太平洋を隔てた母国日本である。諸君は平素徒らに齒を食いしばって焦ったり、自墮落になることなく、悠々と堅実な生活を営み、五年に一回、十年に一回、母国に遊びにかえって頂きたい。そして事情の許す限り、永住の精神で、前途に望みのある生活を楽しみ、他日の大成を期せられることを祈る。この母国訪問は、諸君に大きな利益を与えよう。これは私の希う処であるが、また諸君の衷心よりの願いであらうと信ずる。

終りに諸君の御健康と御活躍をお祈り申上げ、御厚意を感謝する」

こうして、キャンプを訪問しつつ、カリフォルニア州を、サンフランシスコ附近から、南方メキシコ国境の近くまで、一とめぐりした。その状況をかいつまんでみよう。

まず友人知己が多いのと、地理的な関係で、スタックトンから出発した。ここは数千町歩の耕地でキャンプが五十余、バレイシヨ、タマネギ、マメの産地で、ポテト―キング牛島謹爾氏の農園もここにある。私は大正三年の六月から八月まで、この耕地を東西南北に歩いて労働者と、内外有力者の訪問と、講演とに日を送った。ここを終って、ダイヤブロー山（四、八〇〇尺）の頂上に登り、疲れを休め下山すると、次は加州行政の中心の一で、同胞の多いサクラメントに入った。日本の寺院、教会、新

聞その他社交機関も多い。生産面では野菜、ブドー、ホップス、セロリなどの耕作、養豚、養鶏などが邦人の手で盛んに行われている。私は洋紙千頁を、新旧約聖書のよ
うな形にした折皮表紙のサイン・ブックを新調し、既に
加州大学総長ホイラー博士、知事ジョンソン氏、日本側
官民の署名など千余名に達していた。これを携えて市長
エム・ジェー・パーク氏を訪問したところ、

「日本旅行者で来訪する者は官公吏ばかりで、個人で訪
問してくれたのは貴君が初めてだ。これは非常に嬉しい」

と喜んでくれたのは一寸意外であつた。次でブドーの
おいしいこと天下一品といわれる、フロリンに入った。
殆ど日本人ばかりの村である。

ブドー食いまたブドー食い

フロリンのブドー畠をわれはゆくなり

九月三日、桃の名産地ルーミスの村に着いた。

生来黒い私の顔は、更に黒彩を加えて眼ばかり光つて
いるので、ここのキャンプのボスさんに怖がられて閉口
した。初めての経験である。バカビルという処の山地で
は、米人の老夫婦で日本に旅行したことのある人の家に
宿り歓待を受けた。十月三日にはヤマトコロニー。ここ
は良い地味ではないが、日本人の力でブドーが生育し初
め、また茄子を作り出して、これが名物となりはじめて
いる。

十六日、プレスノーに着く。ここは種々の果物や、野

菜の生産地で、同胞も多く活気がある。ここで、初めて学校（米国）を訪問した。ハイスクールの校長レジキ―氏が親切な人で構内を案内してくれた。この参観にヒントを得たので、そのあと各地の学校を訪問したときは、私のブローケン・イングリッシュで一場の話をした。話の内容は略するが、その中で、「日本人はこの国の人にも親切で、差別などしない。日本はまた美しい桜の国で、みんな諸君を歓迎するから、大きくなったら日本に遊びに来給え」と強調した。生徒たちに解ったかどうか保証できないが、無邪気に手を拍つて喜び、別れるときは私の手が痛くなるほど握手されたことは事実である。教育の庭は、国境人種を超越した神聖な場所であることを繰り返し体験した。身心の疲れも忘れる思いで、こうして、加州で二十一校を訪問し、話をした。それ以来、私は旅先の日本人会で、可愛い米国の青少年男女からの手紙を沢山受けとり、地方の新聞にまで一々紹介されて、多少評判の旅行者となったのである。これは前記のホイラー博士、南加大学のボアード博士や、サンフランシスコのクロニクル、ロス・アンゼルスタイムス、サクラメントのユニオン、プレスノのリパブリカン等、有力新聞の紹介のおかげであった。

大正三年の秋から翌年の春にかけて、沿岸地方と呼ばれるサンフランシスコから、ロス・アンゼルスまでの海岸線を、特にロス中心にサンノゼ、ワッソンビル、サ

リナス、モントレー、ガタバラ、サンタバーバラ、オックスナードなどを歩いた。この地方一帯の主要産業のうち牧畜、牛乳、果物、苺、野菜などは、日本人によって多く生産されている。モントレーに入ったのは十二月二十日で、北方の高山には白雪を見せていた。米海軍根拠地の一つであり盛んな漁業場である。それを日本人が独占しており、ガソリン・ボートが百隻ほど忙がしそうに動いていて排日の声など全然ない。ここはスペインが加州を開くとき総督を置いたところで、古い建物が幾つか保存されている。

湾の中に突き出た半島の丘の上に、セント・ジュネピローの記念像が立っている。このスペインの伝道僧が遠く南米を回って、数百日ののち幾多の困難を排して、この岸に上陸地点を見出したのは一七七〇年七月三日のことである。石像は片足を陸上に、片足はまだ船に、そして万里の波濤を経て、新世界の伝道に一大使命を負い一歩を進めんとする恩寵を感謝し、天を仰いで祈りを捧げた、というその姿である。本国から何を求めるかと照会したときに答えた手紙には、

「われ何物も求めず、若し能うべくんば聖蠟の代を送り給え」

と書かれてあつたという。彼は名も権力も財も求めず、求めるのはローソク代だけであつた。武を以て世界に立てたスペインの旗は今どこにあるか。黄金を集めて積んだ本国の富は、今どこにあるか。しかし聖者のまい

た天国の事業は、モントレーのみならず、南北両米の
津々浦々に栄えている。ジュネピローの岬、この石像、こ
の岩を洗う波浪と、大陸の土壤のある限り、彼の事業は
永遠に讃えられるだろう。低徊顧望去り難い思いで、時
の経つのを忘れたのであった。

十二月二十五日のクリスマスを、ワツソンビルで迎
え、相変らず附近を巡歴するうち、大正四年三月二十七
日には、七千尺のマウント・ウイルソンに登って、カー
ネギー財団経営の天文台を訪ねた。エフ・エラーマン主
任の案内で、美妙的な天界を近くに見せて貰った。それか
らリバサイドに入ってサンバラジノー、レドランド、
キュカモンガー、アップランドなど、ミカンランチに
ある同胞のキャンプを巡って、更に南のメキシコ国境に
近いインペリアル平原に、ウリや棉を作って最近大発展
をしつつある同胞を訪れた。

ところが私事ながら奇蹟的事件が起った。事の起りは
私が、二月九日ロスのホテルで、スーツ・ケースを盗ま
れたことからである。その中には例の数千人がサインし
てくれたブックがある。新聞に懸賞広告などしたが出て
来なかった。六月になって日本人会からの電報で、国境
に近いところからロスに引き返してスーツ・ケースを拾
ったという人を訪ねると、「崎山さんではないか」と呼び
かけられて不思議に思った。それは拾った人の弟で岡崎
厚君といい、私が青山学院で親しかった人である。そこ

で、このケースが家の焼跡から無事に出て来た、奇蹟的因縁について、後日の記念のために岡崎さんにサインを願った。それにはこう書いてくれてある。

本書及別に四冊と写真一葉、一九一五年二月九日羅府ホテルにて盗難に罹りたるに、去る五月廿一日生が経営のパナマハウス出火に遭い、跡片付中友人入江氏が物置部屋の片隅より発見す、思うに白人労働者の所為ならんか。生は崎山会長とは一面識なきも此書発見に付不思議にも崎山氏は愚弟厚が在京中恩顧を受けし方ならんとは、今更奇遇に驚く外なし。この書盗人には一文の価値なきも、氏にとりては又と得難き貴重なもの、出火は生には大打撃なるも、この焼跡より斯る貴重なる者を得たるは亦心に慰むる所あり。崎山氏の依頼によりこの事発見の記如斯

一九一五年六月十六日

北米羅府一街三二一、パナマハウス焼跡にて

岡 崎 生

余人にはとにかく、私にはどんなに考えても、奇蹟としか思われぬ。神共に行かせ給う、という思いを一層強くし、私の勇氣は百倍したのである。

以上は私の加州めぐりの日記の大要に過ぎないが、しかしこの一年二ヶ月にわたる旅行は単純ではなかった。その間には、生れて祝うこともあれば、死して葬ったこ

とも多い。利得する者ある一方には、破産に近い悲劇もある。花嫁結婚失敗で不和に苦しむ家庭、さては他人の成功を羨み、同胞互いに相争う醜さも見せつけられた。楽しいことばかりではなかつたが、今一つ正直のところ私はずいぶん赤毛布（失敗）も出した。友人が「君はよく赤毛布をやっているが、少しは自覚しているのか」ときくので、「自覚している」と恐縮して答えた処、「君の自覚している何十倍もあるぞ注意しろ」と叱られた。以て知るべしである。私はまた固苦しい講演ばかりではない、『石童丸』と題して宗教的な恩愛物語や、『いや唯の與八』と題する滑稽武勇伝の講談をやつて、泣かせたり笑わせたりして、大いに疲れた人達を慰めることに努めた。

こうして、異郷に働く同胞の真実な姿を見て、何ものにもかえ難い教訓を得た上に、在米同胞から受けた温かい待遇と、私の目的に対する理解と、物質上の援助とは、到底語り尽せるものではない。キャンプで講演が終ると、労働者の中には、自分の過去の不身持を涙と共に告白し、今日から親に手紙を出す、送金もすると誓い、また、持金をみんな私の目的にとて差出した方もどれ丈けあつたか。見知らぬ無名の人からも沢山届けられた。こうして私の旅行は三等紳士としてこの旅行を続けられる見通しがついた。この海、山にもたえようのない人々の赤心について、私は語る言葉を知らない。如何にして報いるべきか、唯だベストを尽すだけである。

一三、南北両米踏破三万哩（南アメリカ）

十五ヶ月の間、北米にある同胞の後援によって、視察調査の目的を達した私は、学生労働会から、留守を托した同志の病氣について、憂うべき電報を受けとつた。しかし背水の陣に後退は許されない。一切を大能の御手に委ねて、南米大陸視察の途に就くことにした。東洋汽船会社南米航路、静洋丸の三等船客となつて、サンペドロ港を出発したのは大正四年（一九一五）六月二十一日、船中の三等客はペルー行移民九十六名、自由渡航者二十名である。二十三日メキシコのタートル湾に入る。

大正三年九月四日、横須賀を出港した戦艦浅間は、カイゼル号を武装解除させたあと、ドレスデン号を追って今年の一月三十日に、海図にもないここの暗礁に乗り上げて、今なお離礁の作業中と聞いたので、私はその艦上を訪ずれ吉岡範策艦長以下乗組員、人夫に、御苦労さまですと挨拶をして回つた。既に半歳の長きに亘り、あらゆる不便と、不自由を克服しつつ、炎天にもめげず、昼夜交替で作業を続けている。私の挨拶に答える彼等の言葉は異口同音 お国のためです の一語である。青年下士官たちに囲まれて聞いた総ては貴い体験談であつた。二隻の御用船の外に、今一隻の日章旗を翻えした帆船は、近藤政治氏が日本人三十四名であわびの採取をして

いるのだという。

六月二十九日、船はメキシコのサリナクルーズ港に着いた。上陸してみると、数年の内乱続きで、物価は高く、市中すら危険なので自由に視察できない。海は浪静かに七月五日、パナマ運河河口に碇泊する。バルボアと、パナマ市とを見物して、大統領ペリアノ・ロアス閣下を訪問した。彼は私の差出したサインブックに

「旭の如き貴国の隆昌を見て、われらがいかに 貴国に信頼しつつあるかを知れ」

と書きつけ、パナマの国旗と、自分の写真をくれた。パナマ運河見聞のことは省略する。この国の人達には中国人と、日本人の区別はわからないらしく道で出会うすと、「お前はチナかハッポネスか」と訊くので、私は余り良い人相ではないのだが、「ハッポネスではないか人相を見ろ」というと、おおハッポネス、ハッポネス、ハッポネスには強いアメリカも困っていると、彼等は手を握って喜ぶ。

船中盛んな赤道祭を催した船は、南半球に進んで、七月十四日、ペルー国のカリヤオ港に着いた。加州出発以来二十三日目である。私は船中ではずつと船客の希望に答えて、北米視察談と植民について語り、また聖書を講義するなど、いささか諸君のつれづれを慰め、啓発にとめた。講演は四十回を重ねて、航海中に親しくなった移民諸君とも別れる日が来た。カリヤオに上陸し、初め

てあこがれの南米大陸の風物に接する。この国は南米最古の歴史をほこる文化国で、リマ市は人口二十万、南北両米車で最も古い大学がある。人間の悠長なこと、寺院（カソリック）の盛大なことが先ず眼にとまる。日本の移民は明治三十二年以来で、ブラジルに先だつ九年、比較的早いのであるが、その割合に発展しない。同胞の数は現在六千余人、私は耕地に入ることは出来なかったが、農業方面よりも都市に進出して成功しつつあるのがここの日本移民の特色のようである。私は時日が少ないので、外務大臣ソロボン氏を訪うたほかに、次ぎの大統領候補として声望の高いドクトル・ホセバルト氏を訪問したが惜しくも不在であつた。しかし夫人が、東方の孤客に与えられた懇切な歓待には、頭の下がる思いがした。

七月十七日カリヤオ港を出帆して、やがて世界一の長い国チリーの沖合を南下する。見上げるアンデスの連山は、一木一草もなく荒涼として凄じばかり。二十三日、ペリカンの群れをなすイキークに寄港。ここは硝石の輸出港である。峻しい山路を、煙を吐いて登るのは、硝石を運ぶ貨車だという。丘の上にはあちこちに、十字架の墓標の立っているのが印象的である。恰かもわれらが人生の十字架を負って、やがて天国に入るように、われらの船は熔岩の岩塊の続く沙漠に沿った旅を続けて二十七日、バルパライソ（スペイン語の極楽の谷）港に着いた

。船は横浜を出て六十八日目、私が乗船してから三十七日目である。満目緑樹青草滴るばかり、全く極楽の思いがする。港の人口は六十万、市街は美しい。ここから百十六マイル、汽車で首府サンティアゴ市に入る。この人口は四十万、南米屈指の都市である。テリ―は人も自然も全く美しく、人情もやさしい。而も勇気を貴ぶ国民で、非常に日本人を歓迎する。

ここで、私は十八日間滞在し、大体の視察をした。南米五大新聞の一つメルクリオ紙が、私を大々的に紹介してくれたので、有名人の家庭に数回招待される光榮に浴した。国の延長四千二百キロ、長いのでこの家にも地図を三つに切って壁に掛けてあるのもこの国らしい。或る邸宅の応接間には乃木將軍の肖像画が掲げてあった。国民崇拜の中心である中央寺院のゴンザレス大僧正をはじめ、フンテ大統領、数名の大臣、そのほか有力者を訪問して、意見を交換することができた。在住日本人は好遇され、彼らの商店はみな繁昌しているが、同胞の数は少ない。狭少な国だから多数の移民の発展は望まれない。

ここから私はアルゼンチンに行く予定のところ、今はマゼラン海峡を回る船便もなく、冬で汽車も通わない。そこでアンデスの山越えをすることに決めた。この冒険的な計画に参加しアルゼンチン入りを希望する者が十六名、その中には二人の婦人がいる。一行は次の人たちで

ある。

秋山清太郎、久保惣太郎、尾山亀吉、服部宮次（静岡）
稲嶺盛、妻カマダ子、新垣篤学、妻カメ、名幸方元、比
嘉松、新城高林（沖縄）、阿部正七（宮城）、森俊彦（和
歌山）、井上茂八（熊本）、池田誠造（鹿児島）、崎山比佐
衛（東京）

隊編成にさいしその中から会計二名、荷物係二名を選
び、引受会社への旅費の支払は、バルパライソからア国
メンドサまで、一人二百三十五ペソ、荷物は二十五キロ
まで無賃、超過十キロ毎に五ペソ、食料、宿料は自弁と
する。予定日数は五日間である。一行は一旦バ港を出て、
八月六日ここから三等車で、ロセアンデス駅に着く、雪
で列車はここから不通である。二泊、八日一行皆ミュー
ルという動物にまたがる。一行十六頭の外に案内用七
頭、荷物用七頭、予備三頭、合計三十三頭、くつわを並
べてアコンカグワの流れに沿って進む。

おそろしき岩と雪とのかげなれど

桃の花さく村もありけり

すごいばかり美しいソルダード峡谷を過ぎて、この
日リオブランコに着く。翌九日は山頂を極めるというの
で、午前五時に出発、山路はいよいよ急峻、岩の馬ミュー
ルはますます勇気が加わるらしいので心強い。一昨日ま
では岩、昨日は雪、今日は氷をふんで、漸く国境のトン
ネルの通じているカラコーレスに着いた。一行はこのト
ンネルを通らず強て絶頂を越えようとするのである。坂

の急な処は下馬して氷の中に指を差し込み、四つ這いになってのぼる。先鋒隊二人の中に私もいた。午後三時、遂にアコンカグワ南方の峠の頂上に達した。

岩の上に、千古の雪と氷を重ねた二万余尺の高峰、蜿蜒々六千八百キロを連ねたアンデスの火山脈、前を望んでも山また山、うしろを顧みても山岳重畳、幾多の危険を冒し、白雲に乘じ人塵を去つて今一万四千余尺の頂上に立った。羽化登仙の思ひである。心眼を開けば遠く北半球は戦雲漠々、母国日本は一時的戦利の富に酔つて狂喜乱舞している。人間の愚かな姿を一眸の下に俯瞰するの感が深い。頂上に立った平和の象徴キリストの聖像の前に整列し一同感謝して、君が代をうたい、日本万歳を三唱して下山の途についた。

アンデスの山の上をも守ります

神をあがめてわれら越えけり

頂上は空気稀薄のため呼吸困難で、みな顔色が蒼白となり、頭痛や耳鳴りがして唇が裂けた。登山中に三頭のミュールが仆れたのみで一行は無事、特に日本婦人が一万四千尺の高峰を馬で越えたことは天照大神の高天原以来空前のことではあるまいか。

われわれは既にアルゼンチンに入った。八月十日ラスクエバを出発する。この山路はチリー側より遥かに緩やかである。日暮てから暗夜の危険を冒して、午後十一時サンホンアマリーヨに着く。

貨車を宿としたので寒さ酷しく夢を結ぶことができな

い。十一日午前七時ここを發つて、正午メンドーサ市に着く。州の首府である。人口三万、海拔二千三百七十六フィートの高处にあつて、ブドーの産地である。

八月十五日午後一時、やつと車中の客となつてブエノス・アイレスに向う。六百三十五マイル、所要時間が二十七時間、その間は一直線である。

億を以て数えるウシ、ウマ、ヒツジ、ブタの群れ遊ぶ世界的な大牧場を横断するので、どちらを向いても地平線までかすむ平原には動物以外眼を遮るものはない。

この広き野原にあそぶ牛みれば

五反百姓いやになりけり

十六日午後四時、一行無事にブエノス・アイレスに着く。

アルゼンチンは南米第二の大国である。面積二百七十九万平方キロ、日本本土の約十倍に当る。人口七百万人、一平方キロ僅かに二・五人である。耕地二億町歩のうち、既耕地が千五百町歩。家畜は人口の約十六倍だという。この国の施設は外資に依存している。大体英国は鉄道、フランスは港湾、ドイツは電気事業に投資している。首府ブエノス・アイレスは、南米のパリーといわれる美しい都会で、文化施設がととのつている。

例によつて私の視察は訪問が主で、此の市で訪問したのはラ・プレンサ、ラ・マシオン両新聞社。中央寺院のマリアノ・アントニオ大僧正。大統領ブドリー・ラ・プラサ閣下。ペドロ・エヌ・アレタ文相。英国大使レギ

ナルド・トワ―の諸氏である。文相代理の案内で、先ず市内第一のセンホーセ小学校を訪い、田村耕作氏の通訳で日本語講演をする。日本の国旗を知っているかと聞くと、一人の児童が日の丸を黒板に書いて軍艦生駒の来訪の時見たと説明する。次で高等師範学校を訪問し、ここでは英語で挨拶し、それを女教師が通訳してくれた。

この国に在留する日本人は、まだ千数百名に過ぎない。事業を成すにしても、単位が幾ケタも違うので、容易ではないが、将来は非常に有望な土地であるから、充分研究して同胞の発展されることを期待したい。私はまた首府から二十マイル離れたゴメズ耕地に、日本人赤手組という青年の団体を率いて健闘する早大出身の田中誠之助氏を訪ねて、尊い体験談を聞くことができた。

八月二十九日には在留同胞の催した天長節祝賀会に列し、共にブドー酒の祝盃をあげた。この国でも大新聞の紹介で、幾度か家庭に招待され好遇を受けた。国を出る時に矢島揖子女史が、「旅は道連れ世は情け」と書いて下さったが、各国を訪う毎に、しみじみ此の言葉を味わった。

九月三日、フィツシャー号の三等客となりア国に別れる。同室は外語出身の水野勉、久保徳太郎の両君で、共にブラジルに行くのである。四日、船はウルグワイのモンテヴィデオ港に寄る。人も自然もまばゆいばかり美しいが、海水が濁っている。実は海ではなくてラ・プラ

タ河の河口で、ここの河幅は百キロあまり、六日ブラジルのサントス港に着く。

九月七日、サントスから列車は悠々と海岸山脈を超えて、州の首都サン・パウロ市に着いた。沿道はスギ、タケ、ツバキなど故国と同じ樹木が見えて懐かしく思う。

ブラジルは世界有数の大国、面積八百五十万平方キロ、領土を除いた日本の約二十倍あって、人口は僅かに二千万人である。人種はブラジル人、ポルトガル人、スペイン人、その混血種、外にニグロ、独伊の他、欧州の移民に近ごろは日本人も加わりつつある。交通はサン・パウロ中心に鉄道網が張られているが、水運に依る処も広く、アマゾン川はイキストまで、数社の巨大な貨客船が航行している。まだ、未開の森林が大部分で、奥地の広大なマッドグロッソ、アマゾナス、パラの三州には鉄道は全然布かれていない。

地図の示すように北はアマゾン河兩岸の赤道下熱帯地で、天然ゴム、カカオ、ナッツ、煙草、甘藷などを産する。中部の州連合の首都リオ・デ・ジャネイロと、サン・パウロの二大都市を擁する地域は気候温暖で、世界一のコーヒー産地である。農牧の好適地は広く、ダイヤモンドなどの鉱物も出る。南部は高原地で牧畜が行われ、茶の産地で、ドイツ人移民が多い。アマゾンには、世界第一位のものが十指を屈してなお余りある。知られない世界の宝庫である。

サン・パウロ市は人口三十五万で、急速に発展しつつ

ある。市とその郊外を視察した私は、直ぐに沿線で日本人移民の働いているファゼンダー（耕地）巡りをはじめた。奇妙な形の大きなアリの巣が左右にたくさん見える。汽車は薪をたいて運転し、鉄道は丘を迂回してゆく全く大国らしい悠長さである。

サン・シベラス駅に下車して、モロー耕地を訪ねる。耕主はプレシデンテ・コレア氏という日本好きの人である。数千町の農牧地には二千人の労働者が働いており、中に五十五人の邦人同胞がいる。次はサランデー耕地でここの耕主は、ジョアキン・ビー・コレア氏という。ここには同胞が七十人、どこでもコーヒーの栽培である。

九月十七日ガタバラー耕地に着いた。大富豪の経営で農場は数十キロ平方にわたり、ここには同胞が三百家族いて、その監督を広田千代太君という。明治四十一年笠戸丸の、第一回移民の入植した土地で、歴史も古く地方一帯に日本人が多い。日本人小学校、寺院、墓地などがあり、バーや、遊戯場もある。

二十日サンタ・ユードキシアに、アルフレッド・エリス氏の農園を訪問する。氏は上院議員で自由党の領袖、英国系である。日本移民を歓迎し二千四百人の労働者の中に、首五十人の同胞がいる。ここのコーヒー園の監督は原口七郎氏で、そのほか安田良一氏の監督の下に、水稻の試作が行われ、日本人七十人で百町歩を新作し、その成績は大変良好の様である。

以上私の訪問したのは総べて外人経営ばかりで、数千

町の大耕地に、数千頭の家畜を放ち、封建時代の日本の小大名に等しい豪華な生活振りである。ここに働く移民は全部雇用者である。私は毎晩旅行談をし、監督者や、労働者の体験談、時には耕主の意見を聞いた。そのうち反省すべを点は、日本人は勤勉であるが功を急ぎ、落ち着きがなく、移動し易いので、耕地主としては安心して大量に使用することができないというのが定評であつた。

独立して農業を経営している同胞には、何れも最初から投資した人はない。否資本をもつた者は無かつたのである。みな一個の雇用移民としてコーヒー園に働き、零細な賃金を貯えて独立した人たちである。

その順序としては大体コーヒーの手入れから収穫までを一本幾らで、何千本か請負う。その畠の間作は作り取りになるので、自分の食糧はそれで賄える。そして貯えた金で土地を買い開拓にとりかかるという段どりである。

何処でも開拓は困難なことで、自然、人事共に幾多の障害が起るものである。然しブラジルは大体気候がよく、地味がよく、未開地は無限である。それに地価は安く、無資本の人でも発展できる。最も良いことは人種的偏見もなければ、排斥もない。私は試みに種々の角度から、人々の体験と実績を参考にして、開拓の計画と、収支に就て考量してみた。恐らくこの様な、日本移民にとって好条件の楽土は世界中他にあるまいと見たのである。

る。

私はブラジルの内地を視察して、私の目的にかなう理想の天地を発見して、初めてこの旅行を意義づけける事が出来た。

最後にプレシデンテー・コロニーという邦人経営の新耕地を訪い、経営者平野運平氏の豊富な体験談を聞くことができた。二千アルケル（五千町歩）の土地に既に三百人の入植希望者が決定し、そのうち二十四家族の先発隊が入植して、開拓に従事しており、野菜類が良く出来ている。現在地価は一アルケル（二町五反）五十円のよし、此処で私は記念のために一本の大木を選んで伐木した。人々は大いに感心してくれたが、北海道で経験のある私としては当然のことである。十月二日出発する日の朝は、未明にみんなが集合して、馬上の私を送ってくれた。駅まで十六キロ、森林の中の新しい道を通って車中の人となる。

顧みれば、天は蒼々として四辺を限り、大地は千古の大森林に埋まっている。深林また深林、その奥から厳かな声が、私に呼びかける。

「来れ、都会を捨てて来れ、わが秘蔵の宝を汝に与えん」

ブラジルの宝庫は大森林である。この森林を拓いて無尽の富を植えるのはいずれの民族であろうか。

サン・パウロ市に引き返した私は、校長トンプソン氏の案内で、高等師範学校を参観し挨拶した。学生二千六

百人、お国柄で各国人子弟の集合であるが、その施設の
ぜいたくなことは羨ましい。

リオ・デ・ジャネイロに出る。首都は人口百万、南米
第二の大都会であるが、風光の美は第一で、世界でも屈
指の良港である。大統領ペルメス・フォンセカ氏を訪れ
て星野氏の通訳で、移民を主題にして談話を交換した。
ブラジル、コンマシヤル・ルーカの両新聞社を訪問し、ア
ルフレッド・エリス氏をその邸に訪ねて、農園と異なる
政治家としての多忙な氏の一面に接することができた。

私の視察の期間は短かくて甚だ遺憾であるが、しかし
私は此処に来て目的の核心をつかみ得たことに多大の満
足と感謝を以て、この国を去ることができる。十月十九
日ニューヨーク行の英船バサリー号に乗る。あいにく席
がないので余儀なく二等船客となった。バヒア（ブラジ
ル）バードバス島のブリッジタウンに寄港し、大西洋上
の十八日間、海上静かに十一月六日、船は無事にハドソ
ン港に入った。

世界第二の大都会となったニューヨーク市の発展は、
世界大戦を劃期として、一層眼覚ましかった。交通は目
まぐるしいが、落ちついた静かな感じのするのも面白
い。この地には友人も多いので、これらの諸君に案内さ
れ見物に歩く。西部の方ほど、ジャップという声を聴か
ないのも快よい。ここで天皇御即位の同胞祝賀会に列し
た。三千の在留民中その半数が出席、高峰讓吉会長の祝

詞とその発声で万歳を三唱し、盛宴を張った。この間にブルーの森を数回訪ねた。ここは恩師本多先生の母校で、現在七名の同胞学生が留学中である。

十二月五日、ペンシルバニア州のフィラデルフィア市に遊ぶ。北海道時代ウヰリアム・ペンの伝を読んで感激した私には、彼の拓いた此の地は憧がれの地である。ここに米国独立の旗が翻り、自由の鐘が鳴った。いま教育と宗教の中心地となっていることは偶然、でない。市の南に郷土の大先輩、有為の天才を抱いて三十八歳で客死した馬場辰猪先生の墓を弔う。

十日ワシントン市にゆく。期待したウイルソン大統領訪問は新婚旅行で駄目となった。議事堂その他の施設を參觀して、十二日雪のシカゴ市に入る。ここで一日スイフトの屠殺場を見て、殺生を嫌悪する私は度胆を抜かれた。一方乳牛の扱い方、牛乳の進歩した殺菌法などを見学して大きな発見をした。

二十日大陸の中央部デンバーに下車し、ここでクリスマスを迎え、昨年のワツソンビルにおける夕べを想起して感無量。この地方は、米国の各都市に学ぶわが青年たちが、暑中休暇に来て砂糖大根の畠に働く者が多いときいた。この奥のキャノン市の監獄、同胞の一人が徒刑囚になっていると聞いたので友人と共に慰問して、同情の涙に暮れた。

大正四年（一九一四）は大陸横断の車中に暮れて、大正五年一月四日ロッキーマウンテンを越える。車中で私の南米談

に興味をもったフランス人ハッチェス嬢は、

ロッキー越の最高点に於て崎山比佐衛氏と相知る、氏の旅行の前途を祈る　ハッチェス

と私のブックにサインする。これも旅は道連れである。ソートレーキ市に下車して、この地を開拓したモルモン教の開祖スミスとヤングの事蹟を見る。

ヤングの設計した本山の一万人を収容する大講堂は、針一本落ちた音でもきかれる。備附のパイプオルガンは世界第一であるという。附近のピングラム、ガーフィールド、トイレー等の鉱山に働く同胞を、一週間にわたって慰問し、且つ痛快な作業を視察した。十七日ここを出発し一路加州へ向う。

そして、二年前にこの旅行の一步を踏み出したスタックトンに着いた。待っていてくれた多くの人たちと手を握って、しばしは声も出ない。母国出発のときは歐洲經由帰国の予定であったのが、大戦勃発のため果せなくなつたが、私の主要な目的は貫徹することができた。

その日から毎日昼夜の分ちなく、友人、知己、団体に招かれて南米旅行の報告談に多忙の日を過ごし、二月五日春洋丸で桑港を出発、二十一日無事横浜に上陸、旅装を解くことができた。満二年目である。

以上は私の旅行の概要であるが、ここで此の旅行の見聞中二、三の点に就て特記したいと思う。

私は北米で耕地を歩いただけではない。主要な土地で

は、先ず米国の官公署、新聞社、次に日本人側では日本人会、新聞社、教会、寺院等を訪問し、大所高所からあらゆる問題に懇切な解説と指導を受け、また貴重な調査資料を貰い、多大の便宜を与えられた。その結果滞在の短かい割合に、北米に於ける日本移民の生活について、知ることができた。これは旅行の目的からいって私には大切な事であった。

日本人会は一言に言えば、半官半民のように役所の仕事と、民間の団体行事とを兼ねた公共的機関である。實際上役所の事務を代行し、民主的なやり方で、同胞全体から、絶対の支持と信頼を受け事務をとっている、この日本人会が現在北米各地に五十三ある。

世論を代表する報道機関として、各地に邦字新聞があり、枝葉の問題では異論があつても、同胞の福利と、国際関係のことには堂々と筆を揃えて民衆の啓発に活躍している。民族発展上将来の方向を誤らないために、健闘を期待したい。

在外同胞にとって天命を信じ、人事を尽し、喜んで業に励む為に大切なのは宗教機関、即ち教会、寺院である。仏耶同数各派新旧合せて、その団体百数十に上り、何れも心霊上のみならず、社会福祉のために、活潑な働きをしている。

渡り鳥（労働者）：同胞のうち定住し、家庭をもち独立の事業を経営する者は、中堅とみるべき存在でこれは少数である。量的には日傭労働者が圧倒的で、移民即出

稼人といっても言い過ぎではない。渡り鳥とは定住せず、転々として働くことを意味する。生産物が季節に支配され、地域的に限定される関係から、播種、手入、収穫の忙がしい時と処に、需要に応じて動いてゆく。

たとえば、フレスノーのブドーを収穫する人、九月になると、日本人労働者がそこに一万人以上集まる。それが終るとこれが二群に分れて、北にゆく方はプリーニング（果樹手入）の仕事をしながら越冬し、サクラメント方面の野菜作りや、タマネギの収穫から、順次にマメの除草が終るころになると八月になるのでまたフレスノーにまた戻って来る。南に向う方はリンゼーからリバーサイド方面の、ミカンの採集、イチゴ畠の手入から収穫などに従事して翌年の初夏にはインペリアルウリ畠の仕事をすまして、八月にはまたフレスノーにあつまる。つまり季節を追って南北する渡り鳥に似ている。彼らは定住せず、定まった土地に社会的生活のつながりがない。ブランケ（毛布に身廻品を包むこと）を巻いて簡単に動く。集団生活には便利な点もあるが一方では、欠陥も伴う。

国内とちがって彼らの環境は国際的で、各国の労働者との競争や、民族性の相異から来る誤解が多い。言語不通のために意志の疎通を欠くことなど、大きな制約がある。仕事の性質上ピース・ウオーク・ピープルと呼ばれるようになった習慣やボスの支配から受けることの利害、ボスの労働者に与える感化の良否など、考えなくてはならない材料は山ほどある。これに反して定住して家

庭を持ち、独立の事業を営む同胞は国際的協調を別として、その外は殆ど満点と評してもよいのではあるまいか。

方針を誤った青年：真の海外発展は、青年男女に期待すべきである。学生の方は留学生はもとより、皿洗いでしても勉学を続けているのは優秀な方である。だが、これも卒業後母国に帰る人は別として、任官就職の道のない現地に止どまる者の将来に問題がある。次は落伍者組である。中学校を落第した者、専門学校に進学のできない者、そのほか中途で志の挫けた者たちが、面目を立て直す意気込みで渡航した者である。彼等は労働を蔑視し、忍耐力に乏しい。精神が生ま温るい点も共通している。北米がいくら自由平等の天地であつても努力なしに成功する途はない。だが、彼等を薄志弱行の徒というだけで片づけてはならない。

境遇の一半は他にある。日本の形式にとらわれた教育、労働を賤しむ国民に共通した誤った観念、海外渡航者の取扱に対する国家の無方針など、あげればまだまだ沢山あると思う。こんなわけで自信と希望を失った彼らは踏み迷った末に、賭博場の門前に立って同情を乞うシャッコ隊のむれの中に落ち込んでゆく。その光景は旅行者の胸をも痛ましめる。

日本学童の教育……七、八年前の同胞排斥の火蓋は学童問題によつてきられた。平静に帰った今日でも、在米日本人は子弟教育の点ではまだ去就に迷っている。これ

は重要な意義を持つだけに論議はいつまでもつきない。問題は同胞が永住するか、金を貯えれば帰国するのか、この方針態度の如何にかかることである。永住の精神で、市民権を獲る見通しのある者は米国の教育に抛るべきであつて、邦語の方は補習教育とすればよい。これを唱えて、国賊呼ばわりされた日本人牧師があつたときくが、私はその人の説に賛成する。完全に日本人教育をしたい者は、母国に送還して教育すればよい。語学はその環境に在る子供にとつては、大人の考える程むずかしいことではない。理想としては眞の日本人であつて、また米国の国民でもあり得る国際人の資格を具えることであらう。

日本人排斥……日米間で不愉快であり、困つたことは何といつても排日問題である。勿論米国側に言わしめれば大いに理由があろう。然し日本側としてもご尤もだといつて引き退がつてばかりはいられぬ。だからといつて喧嘩してはならないから飽くまで協調的に解決しなくてはなるまい。日本人は、最初は全く無反省で事ごとに相手を刺戟し激化させた。次ぎには排斥が盛んになると驚きから極端に神経過敏になつて、風俗改良だとか、同化説を唱えだす。遂には平身低頭して卑屈な態度をとるまでに成り下つた。それでも効果のないことがわかつて、現在は漸く実力で、堂々と解決しようとしている。少くとも識者の間にこの自覚が擡頭しつつあることは結構である。

私は北米在留同胞を対象としての移民観とそこに起っている問題の若干に就て卑見を述べた。南米の移民に就ても感想をもっている。然し両者を対照比較するとき、根本的な点に於て事情が違ふ。また南米の日本移民は、古い歴史を持っていても実際は最近に至つて漸く活潑に動き始めたものでそれだけに、むしろ今後の発展にまづべきものと思う。

私は南米特にブラジルの邦人移民の実況を現地に見て、そこに日本人発展の理想郷を見出したことを、無上の喜びとするわけを既に申述べた。しかし、南米も放任して過ぎせば、北米出稼移民の二の舞を演じないとは保証できない。この点に就ては、聊か微力を尽したい決意をもつに至つたことだけを明かにして、旅行記事を結ぶことにしたい。

以上旅行記事は、大正五年十月一日『南北両米踏破三万哩』（菊版三二六頁）崎山比佐衛著として自由出版所から出版されたもの（今は絶版）から要約した。したがつて内容が省略されているだけで、原著の要点をそのまま伝えたものである。

これによつてもこの旅行がいかに一般の視察旅行とちがつた方法で行われたかということがわかる。日本の外交官として最初に南米に使いした野田良治翁（八十一

歳）が、最近『崎山先生を追憶する』と題する冒頭に當時ブラジル大使館書記官として、母国からの一旅行者崎山会長と応待した当時の思い出を書いておられる。第三者の眼に映じた旅行者としての彼の面目躍如たるものがあり、旅行中の彼の行動を想像する一助ともなるので、その一節をここに紹介する。

「崎山比佐衛先生に初めて会ったのは、先生が三年にまたがる両米視察の大旅行の一部として ブラジルを訪問された一九一六（大正五年）の事でした。当時わが公使館は明治三十年開館以来そのまま避暑地ペトロポリスに在ったので、先生はリオから二時間の汽車旅行をして公使館に來られました。公使は不在でしたから書記官の私が代って会ってみると、素朴そのものとも言うべき先生は、即日リオへ引返すからゆつくりしてはおられない。汽車が出るまで市中を見物かたがた一しよに散歩をして、道々歩きながら語りたい、そして全市を望見することのできるような高所があれば、それへつれてほしいと、少しの遠慮もなく露骨に希望を述べられました。しかしあいにくそういう場所がなかったので、幾らか先生の希望に添い得られるような小高い方面へ案内しました。もちろんそれは賑かな市中目抜き通りでなく、全く反対の人通りの少い淋しい街を場末に向つて歩いたのですから、見物はそちのけで話に熱中する先生のためには結局好都合でした。

油が乗れば乗るだけ持前の大声がますます高くなつて行く先生の弁舌は、時としてどなつて居られるようにも聞こえるので、往来の人々は、或は立止まり或はあとを振り向いて、私共を見つめたりしました。

そのときの一時間ほどの散歩演説を拝聴したことによつて、私は邦人の海外発展に関する先生の遠大な理想、それを目標とした青年教育に関する先生の大抱負、その手段としての植民教育施設の計画などについて、その一端をうかがい知ることができ、初対面の時から先生の人格と識見には敬服せざるを得ませんでした。（後略 一九五五年五月記）

海外発展は日本が将来決行すべき大事業であるとすれば、先ずその指導者となるべき人材養成の機関を創設しなくてはならぬ。これは両米に亘るこの大旅行を通じて、わが移民の実状を具さに視察したのち、彼の到達した動かすことのできない結論であつた。

一四、植民思想の鼓吹宣伝

飛行機の旅行など思いもよらぬ大正初期のことで、すべての交通条件が現在に比べるとおくられていた。そのころは南北両米の視察は大旅行であつた。完全ではないとしても日本移民の実際の状況を、彼ほどよく観察したものは少ないであらう。

その移民たちが働いている国々に即して、そこに不用意にばく露している日本人の長所短所を見、また、日本人の将来の発展地としてどこを選ぶべきかをつかむことができた。もともと苦学する青年が発展すべき世界を見つけることが旅行に出るまでの動機であつたが、見聞した結果、日本人の発展ということは、それほど局部的な單純な問題でないことがよくわかつた。何れにしても彼が猛然海外発展という大きな問題と取り組むようになったことは、半ば予定していたことといえなくはないが、この旅行の間にその構想は当初の目的とは比較にならぬほどの大きな飛躍をした。

つまり苦学生の進路を開拓するという見地から、日本青年全般の海外進出、更に進んで日本民族の海外発展を考えるようになった。それは各国民族の活発な発展ぶりや、広大な未開地を見た彼としては、当然の心境の変化であろう。そこで移民大いにやるべしであるが、海外に出てみると、日本人は他の文化国人に比べて大いにハンディキャップがある。それは言語に全然共通点がないうえに、小さな島国に生れ三首年鎖国生活を続けた間に育成された島国根性であるということに要約されよう。

それが有利にもなりつまずきともなっている、その長所短所を反省し認識し、現地の生活に順応し得る人材、現地でいうボス……通訳者に代るつまり出稼移民を指導する人物を養成して送り出さなくてはならぬ。これには移民教育が必要である。陸海軍創設には士官学校や、

海軍兵学校がこれに伴った。商業貿易の発足と共に高等商業学校が創立され、海運業の振興には高等商船学校が設けられた。これらの学校で養成された英才は何れも新興日本の指導者であつた。移植民教育といつても同じ人間教育にちがいはない。だがそれは特別の目的と使命をもっているのも、やはり一般の学校教育だけでは不十分である。

そこでこの目的に副う教育つまり移植民教育の施設がある。見渡したところ教育には熱心な日本であるが、この種の教育施設はまだできていない。これを具体化することがいかに困難な事業であるか。開国以後の日本の対外的関係、特に移民に対する当局のなまぬるい態度をみてもわかる。

出稼移民の素質と、その発展段階など総合してみれば一層明らかである。そのために旅行して現実を直視し、帰朝して官民のこの事に対する理解の程度を打診した彼にして、この困難なことがわからないはずはなかった。だが、彼はその実現に着手することにした。

学校そのものは小規模なものでよいとしても、そのバックとなる問題の内容は大きくて幅が広い。一国の政策につながっている。これを進めてゆくには国民各階層の力を結集することである。

地位ある人は地位権力をもつて、財ある人は金力を以て、精神界、思想界の人々はその立場において、一般民衆はその世論を以て、この事業を援けて貰う。彼は海外

旅行中既にこのような各階層の国境と人種を超えた多数の人々の援けによつてその目的を達した。いわばこれは経験済みである。

帰朝するまでには彼のハラは大体きまっていたので、同志たちと語り合つて再確認するとすぐその具体的なだんどりにとりかかった。物を右かち左へ置き換えるのはちがうので、いざ実行となると方針を決定するだけでも大変な努力を払わねばならなかった。実績に基ずいて計画されなくては世間が承知しない。従来の学生労働会を名実共にその目的に合致するように発展的解消のうえ「植民学校」にする方針で進めることになった。

方針が決まると識者の意見を叩いて回りますます輪廓がはつきりしてきたので運動は本格的となった。会長はサンフランシスコ上陸のときと同じく、帰つて横浜に上陸したときも懷中には十円もなかった。東京の留守宅とて有りあまる現金はない。しかし事業を進めるには運動資金がいる。

そのころ山手線の拡張で、労働会の牧場の線路側は、約幅八メートルが鉄道用地として収用されることとなつたため牧場経営は不便になるので、移転計画をしなくてはならなくなった。鉄道院に対し移転費を請求することとなり、当局技師の指示に従い、一木一物ももらさず計上し提出したのが一銭の増減もなく申請通りに支払われた。これが後藤新平の好意であつたことを、後日に知つた。正直のところ、牧場はそのままで、どうやら辛棒で

きるし、この予期しない現金は財政を助けたうえ、即時当座の運動資金として大いに役立った。

旅行の報告をしながら識者の意見を求めたのち、それらを参考として『海外植民教育会』を組織した。これは学校設立の母体であると同時に、当時低調であつた海外発展の思想を鼓吹し、その普及宣伝につくすことを目的としたものである。

彼はその会の主幹として目的の達成に邁進することになった。

当初この挙に賛成して、彼を社会に推挙してくれた先輩の紹介の言葉、海外植民教育会並に海外植民学校設立の趣旨は次の通りであつた。

紹介

吾人は茲に海外植民教育会主幹崎山比佐衛君を全国有志の諸君に紹介す。

君、海南の僻村に生れ年少にして北海道に赴き開墾の業に従事し、後仙台東北学院、東京青山学院に於て牛乳配達により苦学し、業終るや天下有為の青年にして貧困其他の境遇の為め天与の才能を抱いて草野の間に朽つる者多きを察し自己の経験より同志と共に青山学生労働会を起し、彼等青年の修養の友となり奮闘ここに十八年に及べり。

然れども時勢の要求は其現状に満足するを許さず、茲に於てか君、壮図ある青年飛躍の天地を海外に見出さん

とし、遂に大正三年一月より滿二ヶ年間に亙り南北両米三万哩の地域を踏破し、具さに植民農業牧畜教育等の実状を視察し大いに得る所あり無事帰朝せり。

爾來その見聞する所を以て熱心に内地の同胞に訴え、吾国海外発展の好機今日にあるを唱導し海外植民教育会を創立し、其事業として前記学生労働会を基礎として、海外植民学校を設立せんがために努力し、日夜尽粹殆ど寢食を忘れんとするものあり。

吾人は君の美挙を賛し為めに紹介の労をとる事斯の如し、有志の諸君幸いに君が為めに相当の便宜を与えられんことを希望す。

侯爵	大隈重信
伯爵	土方久元
伯爵	板垣退助
男爵	渋沢栄一
男爵	森村市左衛門
男爵	後藤新平
男爵	島村速雄
法学博士	水野鍊太郎
	岡田良平
男爵	田健次郎
子爵	大浦兼武

海外植民教育会趣旨

熟々現時に於ける宇内の大勢を察するに吾人は將に特殊なる意氣と精神と信仰とを以て我が民族の世界的發展を遂行す可き絶好の機会に逢着せり。故に吾人は將に此大勢に処するの進路を定め、此機会を善用するの策を立てざるべからず、吾人若し今にして尚は確固たる方針と遠大の画策なくして此好機会を逸せんか、遂に世界的精神に遠かりて何等の貢獻をも為し能はさる已ならず、後世子孫をして其所を得ざらしむるに到るやも知る可からず、之れ民族盛衰の歴史が明確に垂示する所なり。

此秋に際し、吾人は先ず我民族に対して時勢の急務たる民族發展の氣運を善導するの目的を以て同志相結束し教育上の見地より海外植民教育会を起し、先ず会務実行の第一着手として従来の学生労働会を改称拡張して海外植民教育会となし海外植民学校を設立し、今日の時勢に処して能く植民の任務を完うするの人材を養成せんとなす。吾人が敢て此大任に当らんとする所以のもの亦同胞を思うの赤誠に外ならず、大方同感の諸賢幸に援助を賜いて吾人の目的を成さしめよ。

海外植民教育会

主幹 崎山比佐衛

海外植民学校設立趣意

◎設立の本旨Ⅱ大凡天下何事を為すにも最も貴く、且必要なるは之を遂行するに足る人材を得るにあり。今や我国海外発展は唯に労働者の出稼ぎに止まらず大いに資本家の投資すべき時代とはなれり。其趨勢実に奔流急潮の如きものあり。此時に際し一方に於ては労働者を統御し、一方に於ては資本家の相談相手となるべき士官即ち親分を養成するは急務中の急務と為さざるを得ず吾人が海外植民教育会の趣旨に基き、海外植民学校を設立するの精神之に外ならざるなり。

◎士官即親分の資格Ⅱ如何というに凡て親分たるの天性を有すべきは勿論なりと雖も今日の時代に於ては更に他の資格なかる可からず即ち廿世紀の親分としては、世界的智誠と、練磨せる品性と、宗教的の素養なかる可からず。此智誠ありて能く世界の形勢と本国の天職とを理解し、それに適応して投資者の利潤を図り、また移民及労働者を善導する事を得べく、此品性ありてこそ能く彼尊の信頼を博し、之を奨励して其目的を達せしむるを得べく、又此素養ありてこそ能く異郷にありても天命を信じ人事を尽し彼等に慰安を与うるを得べし、海外に在る同胞につき一例を挙げればブラジルのサンパウロ州に約三万の邦人あれども、一人の僧侶も牧師もあらざる故に、妻を失える夫は自ら位牌を作りて之を祭り、子に別

れし母は独り自ら命日に手向せ為すの有様にして、彼等は真に異郷の寂寞に堪えず、永住の念を生ぜざるは勿論、只一日も早く本国に皈還せんことを希うは洵に無理ならざる次第と云うべし。故に今後の士官即親分たる者は、啻に資本家及労働者の中に在りて単に機械的指揮官たるに止まらず、矢に天命を知るの慰撫者たる心掛なる可からず。

◎本校の方針Ⅱ此使命の許に本校は、海外に出で同胞の多数を指揮するに適する人材の養成を目的と為す故に一面には精神上に必要な智徳を開発せしむると共に之が實際的応用の訓練に重きを置き、実務に従事し額に汗するの生活を経験せしめ、以て我国海外発展の遠大にして而も困難なる事業に貢献するの資格を具備せしむる事を期す。

◎現下青年の要求Ⅱ翻て我国内の情勢を察するに、年々義務教育を修了する者約七十万あり而も其のうち中等学校以上の学校に進む者は実にその幾分に過ぎず、自然に海外雄飛の志を懷抱するもの甚だ多し。

されば本校は此志望を善導し、彼等の進坂的意気を盛んにし、その天賦の能力を開発し、以て将来日本民族の大運動たる海外発展の偉業に貢献すると共に彼等多数青年の宿望を成さしむる為に修業年限を短縮し、出来得る限り学費を少額にし以てその目的に添わんことを欲する者なり。

◎本校の基礎Ⅱ本校は今回新に創立する者なれ共、既設

の青山学生労働会の財産及事務一切を継承し、之を基礎として拡張を加え、財団法人として永く之を経営せんとするものなり。参考としてその具体的内容を示せば、本校に本科、専攻科を置き、一、本科は年令十五歳以上の男子にして高等小学二年修了者、亦は之と同等以上の学力ある者の入学を許し、修業年限三ヶ年とす。

一、専攻科は年令満十七歳以上の男子にして中学校及甲種程度の農商工の各学校、その他中等学校卒業者及び之と同等以上の学力ある者の入学を許す、修業年限二ヶ年とす。

備考 本校に入学を希望する者は各科共、身体健全、意志強固、労働を愛し挙動活発にして積極的精神を具え、海外植民に志を有するものたるを要す。

これだけの準備に帰朝以来寢食を忘れ、約四ヶ月の日数を要した。その間の彼の説伏力はすざましいものであった。特に当時最も日本朝野の各階層に徳望のあった渋沢栄一と、またわが民間教育事業に対し、財政的援助を惜しまなかった実業界の硬骨漢森村市左衛門の両翁を説いて、顧問となつて貰つたことは、事業に先だつ一大成功であつた。もとよりそのためにはお百度をふんで、数十回に亘り意見を闘わしたことは改めて説明するまでもない。

崎山主幹は北海道に去って以来、生国を訪問する機会がなかった。自分の所信を世に問わんとするとき、祖先の墓参を兼ねて、海外発展の第一声を呼号する舞台を高知県と決めたことは賢明であつた。その計画を聴いてかつけた寺島天園を伴って懐かしい故郷の土を踏んだのは大正五年七月の下旬、郷里を去って実に二十四年目である。寺島天園は宮城県の人で、崎山主幹とは旧知の間柄である。大日本帝国愛国同志会を組織して活躍中、一部の誤解を受けて、閑居中であつたが、おそろしくものに集中する熱血児であつた。

高知を中心に約四十日間“南北両米踏破三万哩”の題で、旅行談を骨子として植民教育のことにまで言及した。彼独特の熱弁は弁を好む土佐人を熱狂せしめ、県下の新聞は逸早く郷土の異彩ある人物の出現として、大々的に紹介した。公私の団体が挙つて各々の主催のもとに連日講演会、歓迎会を催す。その評判を伝えきいて郡部の方から申込が殺到する有様で、一日に二回、三回、若くは四回、毎回二時間に余る長広舌を振つた。いかに弁論に慣れた彼にも、これは重労働に違いないが、疲労の様子を見せないその絶倫の精力は、人々を驚かした。

最後に郷里本山に入るといふ報道をきくと、村の方では彼にはお構いなしに、大歓迎宴の支度一同熱狂していた。そのとき彼は悠々繁藤から山道を一人静かに歩いていた。そのむかし、父に送られて別れた故郷の山川に、無限の愛情を寄せながら、南国の夏に汗でほてる頬を、

溪谷から送られてくる涼風に撫でられる快よさ。フロツクコートの上衣を脱いで肩にかけ、カッコウドリの声を友に歩を運ぶ。さすがに連日の奔走で疲れにおそわれると、路傍の青草の上に仰臥して、忽ち熟睡すること十分、彼の元氣は百倍する。村民の代表者たちは、彼が車上の人となって意気揚々と凱旋將軍のように、乗り込んて来るであろうと、吉野川に添う往還を街の外れまで出迎えた。漸くにしてそこに車上の姿を見せたのは、寺島天園一人である。

事情がわかって引返してみると、そこに早くも「崎山先生は間道を徒歩で今大うねの方からおりて来られ、墓参をしておられる」という連絡があつて、みんなほつとしたり、あわてたりという一幕もあつた。こうした行動は彼の半面の床しさを示している。部落の古老たちは今も四十余年昔のその日を追想して、昔の友だちそのままの氣どらぬ態度で、洋行帰りの紳士だなどという感じは全然無かつた。なつかしそうにこう物語る。

八月上旬土佐から帰京すると、武蔵寄居にあつた俳優松本幸四郎の別荘に人を避けて、旅行記を出版するために、二年間の旅の日記を整理した。

筆記は小笠原義之、吉村繁義の両名がこれを助けた。書名は『南北両米踏破三万哩』と題し、その校正から出版までの事務はすべて小笠原義之がその労をとった。この書は菊版三二六頁の冊子で、自由出版所の手で、初版二千部を印刷発行したことは既記の通りである。

小笠原は早大理工科の出身で、その九月から海外植民学校仮教場開設の主任となり、自ら海外事情など講ずる一方、スペイン語はホセ・ムニョス、佐藤久平、植民原論は毎日新聞論説部主任松岡正男などの權威を招き、十名内外の学生を集めて授業を開始し、教場には一時労働会寄宿舎の一室をあてた。

著述の仕事が一段落するとすぐ、九月二日主幹は第二の故郷北海道に向った。今度は北海道に縁故のある吉村繁義、大島喜一の両名を帯同した。

札幌に着くと北海タイムス社長東武、小樽新聞札幌支局長佐々木鉄之助の両名が、各々その紙面の多くを割いて、彼とその事業に就て、懇切に紹介してくれた。高知県民が彼の旅行そのものに興味と感激を示したのとやや違って、北海道の人士は、南北米移民や、植民教育の主張に就て深い関心を示したことは、その土地柄を物語るものといえよう。札幌農科大学が彼を招いて学生を中心に講演をきいたとき、教授学生が拍手したり、ばく笑したり、テーブルを叩いて歓呼し、世界を吞む気概に共鳴したのも北海道大学らしい。そして、そののち日を改めて再び佐藤昌介、宮部金吾、南鷹次郎等諸博士教授連が、地方有志と共に豊平館に集まって、彼の主張に耳を傾けたことなどもその植民教育への熱意を示したものといえよう。

第一次欧洲大戦は正に酣で、弱小国まで戦禍に巻き込まれ、戦線は拡大するばかり、いつ果てるか見通しもつ

かない有様であつた。その苛烈な戦争の影響は北海道にまで来ている、というわけは、欧洲が物資不足のために、北海道の農産物の価額が暴騰したことである。その中で著しいのはバレイシヨの澱粉と、グリーンピースであつた。

欧洲人のスープリ用に不可欠なピースの価は、平常石当り七円程度のものが、四十円にはね上り、商人は血眼で農村での買付けに狂奔するほどの景氣となつた。

大体海外植民教育会は、学校創立その他の経費として、三十五万円の予算を計上し、これを満天下有志の寄付に仰ぐというのであるが、まだそれまで一銭も寄附を受けたことはなかつた。小樽港は北海道物産の集散地で、商人の大部分はここに集まっている。生産物の暴騰で、市中の景氣は沸き立つばかり。そこで札幌の官公署への挨拶や、各団体学校などの講演を終ると、崎山主幹の一行は小樽市に移つた。ここで講演に応じつつ、一方資金募集に全力を傾けはじめた。計画開始以来寄付募集は、いわば最初の小手調べである。捨身の攻勢で勧誘した結果、新調した寄付者芳名録には、寄付高に多少の差別なく、金額と姓名が次から次と、自署され、大いに成果をあげることができた。

小樽を終えると、石狩国樺戸郡浦臼村に即ち聖園に入つた。彼を開拓者として練成してくれた、記念すべき地である。直ちに札的台上に、開拓の恩人「聖園開祖武市安哉之墓」の前に脆いてその霊を弔うた。丘上に立つ

て東南に向うと平坦な石狩川流域が、一望のもとに拡がる。うつそうとした森林は今はない。二十余年の歳月は、この沃野を一本の遮るものもない、本土にも勝る良田と化してしまった。多忙な主幹も、開拓当時の人で、そのころまだ健やかでいた人達に会い、温い友情の囚となつて、数日を送った。その間にも奉賀帳は村の有志の寄せる赤心で幾ページかが埋められた。

ここから進んで旭川に入り、天塩を訪い、北見に轉じて、北海道行脚は、翌大正六年二月に及んだ。北海道の人たちが、海外発展の説に興味と理解をもち、また道民が好景気も手伝つて、金放れがよく賛助を惜しまなかつたので、この旅行は植民思想の鼓吸と、資金募集の一石二鳥の効を収めた。彼が開拓当時の親しかった人たちで、そのころ奥地で大農場を経営していた者が多かつたため、その人達に導かれ助けられた力も大きかつた。とくに北見では、実弟松吾をその農園に訪うて、深い雪に埋もれた爐辺を囲んでの数日間、過ぎし思い出を語り、飢えていた兄弟愛を満喫することが出来た。

さてこうして毎日歩いた地方のことである。澱粉で三千円の大金を手にして「夢ではないか」と繰り返しつつ気が狂つたという老農夫の哀話や、札束を古新聞紙にくるんで部屋中、場所に戸惑いした男が、処もあるうにストーブの中に押し込んで出ていったあとへ還つた女房がそのストーブに火をたきつけたので燃やしてしまったというような小成金ブームの診談哀話も拾えば山のように

決して退屈はしなかった。だが乗馬が腹まで泥濘に没し脚をとられる悪路もあれば、隣家も訪ねるにも五丁、十丁ある途中で、吹雪のために立往生することもあって、必ずしも安易な旅ではなかった。

同行の大島喜一は、北海道出の労働会出身者、青山学院を卒業の春、会長の帰朝を迎え、南米談をきいて、青年の純真な感激から、植民唱歌『ラ・プラタの夕空』を創作した。彼は良い声の持主で、主幹の講演のあと、その壇上に立って独唱した。これがヒットして、一行のゆく処『ラ・プラタの夕空』で風靡したことを付記して、同時に、その歌詞を読者に紹介しよう。

作曲 納所弁二郎

作詞 大島 喜一

一、いざや友よ白妙の 雪の心と黒がねの
強きかいなのあらん者 世界はやがて汝がものぞ
二、希望にもゆる同胞よ、 心開きて眼を上げよ
アマゾン岸の人知れぬ、 五千マイルの大自然
三、自由を望む人や行け、 雲上に連るアンデスの
平和の嶺を越えてかの ラプラタ河畔の夕の空
四、海を渡りて西ひがし 野にも山にも我が民は
世界の民もろ共に いざやたてたてたたんかな

一五、海外植民学校（創立）

学生労働会は、従来本部支部と呼んでも、内容特に財政的には完全に独立した対等の存在であつたのを、この機会に名実共に一つに統合することに関係者の意見が一致した。そこで麻布区霞町にあつた既設の牛乳殺菌販売所施設一切を買収し、寄宿舎を設け、本部をここに移した。吉田常太郎が主となり、筈町に数人の学生を擁して同様の経営に従事していた片野敬之助も合流し労働会の陣容を新たにし、牛込支部は現状のままで新人の沢田稔が当り、本部の寄宿舎は海外植民学校仮教場兼創立事務所にあてゐることにした。このすべては主幹の北海道旅行中に、順調に運ばれて、一つの飛躍をみた。

既に中央に於ける知名の士が、一応の好意を寄せ、役員に名を連ね、紹介をしてくれたが、実際に踏み込んで協力するという段階になつていないのが実情であつた、というのは、移植民は国策的な問題で官民の理解と協力を必要とする。それ依然にこの種の施設としては、貿易その他の目的を以て支那大陸に発展する人材養成のために、東方斉荒尾精の主唱のもとに、のちの東亜同文書院が生れ、或は台湾の帰属と関連して、後藤新平を中心とした有志によつて、現在の拓植大学が設立されていた。いずれも傑出した人物が主となつて、最も時代と国家の要求するところに合致した措置である。しかし南米

を中心とする自由移民のために、このような施設を考えることは、そのころの国家の目標からは縁遠く、従って当局者や識者としても関心がうすい。移民しようとするものは必ずしもその必要性を理解しない。ことに全般的にはむしろ無知無関心といってよいほどである。而もそれが従来の厄介な国際問題をひき起した漠然とした移民に対する印象から、それまで移民の実施されてきた長い期間、殆ど何等積極的な国策をもたなかったことを反省することなく、難かしいものと思ひ込んでいた。

このような場合だから到底一個人の、しかも彼のような民間の一特志家の思い立ちによつて容易に実現可能だとは誰にも思われない。のみならずこれらの先輩は二、三度顔を合わして、その意見の概要を聞いた程度に過ぎない。崎山の人物、手腕、実行力によつて、果してこの大事業をやりぬくことができるかどうか、この点に於て多くの人々が不安懸念をもっていた。

二月に帰京した彼は直ちに、いよいよ東京を攻略しようとの策を立て、その開始に先だつて先ず北海道運動の状況を報告のために歩いた。北海道地方有志六百余名から一万円余の寄付金があつたという事実を知った大先輩たちの態度は大いに變つた。彼の根氣と益々高調を示す熱意をみて、これは本物だとみとめたのである。

そこで大正六年五月のある夕べ、青山学院教授左近義弼宅で、第一回の創立委員会を開いた。集つた者は同家の主人公のほか、富田幸次郎（後の衆議院議長）、崎山、

吉田、寺島、吉村であつた。

富田、左近の發議で創立委員として数名の有力者を依頼することが当夜の主なる申合せであつた。

左近教授は運動開始の初期に崎山主幹を森村市左衛門に紹介した人で、森村が渋沢に紹介し、それからそれへと有力者を結縁する道を開いた人である。

それから一ヶ月のち、先輩の中でも特に深い関心をよせていた江原素六は、創立委員を受諾すると同時に、その肝入りで三井財閥の理事長団琢磨、三菱の総務理事江口定条、興業銀行総裁志立鉄次郎の四名と鉄道会館に会合して、崎山主幹の計画を詳細に聴取したうえ、これら有力者によつて経営方針についての根本的な点に関して、意見が交換された。

さすがに、江原は教育家で、私立学校経営者で、また政治家であるだけに視野が広く、主幹の意図をよく理解し、全面的に学校設立案を受入れようとする態度であつたが、他の三者は実業界、金融界の大立物で、財界に対して絶大の信用を有ち、責任も重いだけに慎重である。且つ揃つて地味な性格の人達である。だから、この人達が学校の形を避けて、学生労働会をそのまま拡大し、労働に中心をおき、一日少時間語学教育など施す程度で、結論をいえば使い易い人間を育てることを強調したのは、資本家タイプの考え方とも見られる。尤も団琢磨などは、そのずつと前に、雨の夜労働会の庭に大きな自動車を乗り入れて、寄宿舎の学生と膝を突き合せて、処世

に就ての訓話を試みたこともあつて、こうした学生の実践的な生活に多大の興味をもっていたことは事実である。

江原は席上、学校といつてもこれは鉛筆を耳にはさみ、デスクの上で事務をとるのでなく、クワとソロバソを手にして、現場に直結する人を養成するのであると、その趣意を巧妙な説明で補足するところもあつたが、その日は結論を得ず散会した。同じボスといつても資本家に従順なボスと、むしろ資本家の不合理な支配や、搾取から、労働者を庇うボスとは、よほど肌合が違ふ。この中庸を狙い、而も労働者本位に立つ教育の焦点は甚だ微妙であることは見逃がせない。この会合は結論を得ないまでもこの有方な三者が創立委員を受諾する前提となつたことや種々の意味で、この運動の一つの推進力となつた意義は大きかつた。

この年大正六年（一九一六）一月には、ドイツは無制限潜水艦戦を宣言し、至る処で商船を撃沈する、四月には堪り兼ねた米国が参戦するなど、開戦三年を経て、欧州大戦の様相はいよいよ苛烈なものとなつた。開戦間もなく聯合軍側に立つて参戦した日本は、青島戦に出動する一方、海軍は広範な海域に目覚ましい活躍を続けたのであるが、実際には戦争による損失は軽微でむしろ日本は漁夫の利を占める立場におかれ、戦争成金を続出せしめた、その中でも船舶業者は船成金として大いに喧伝さ

れた。

そこで崎山主幹はこの機逸すべからずと、寺島天園、吉村繁義を帯同して神戸に向つた。大正六年七月初旬のこと、それから約四十日間講演と後援者の募集に奔走した。

先ず神戸YMCA会館で、海外発展大講演会を催し、東京からは評議員で創立委員である江原素六が応援し、真つ先にこの挙に賛成した地元の上西汽船会社社長上西亀之助が共に演壇に立ち、大いに氣勢をそえてくれた。それから主幹は（金儲けに血眼というよりも、思いがけないほどトントン拍子に金が儲かるので血眼になつて、寸分の時間を惜んで活躍している人達を片っ端から訪問し説得しようとした。

或る人は自分のテーブルの上に二三台の電話器をおいて、おれはいま五分間に十万円ずつ儲かっている、のんきな話をきいてやる閑はないのだ、と叱るようという。店員の居並ぶ事務室は半狂乱のような光景である。

「そんな金儲けよりも、こちらの話はもつと大きな金儲けの話だ、まあ少し気をおちつけてきいて下さい」といった鼻息で、こちらもひるむものではない。この年は特別に暑くて、神戸は水ききんであつた。その炎天の中を主幹はいつも下は毛の冬シャツに、冬のフロックコートを着用していた。

地球を彼と共に半周した古びたトランクをそばに引きすえて、かいつまんで自己紹介をしながら、先ず大きい

バイブル型の旅行に用いたあのサインブックを開いてみせながら移民を語る。

彼は講演旅行のときには必ず別製のサインブックを携え、一講演毎に記念に書いて貰っていた。或る人は演説の受取を集めているのは崎山君位のものだろうと評した、その帳面を出して各地宣伝普及の成績を示しなどするうちに、主客相対するテーブルの上にはそれらの数冊が積み上げられる。初めは少しうるさそうに好い加減にあしらっている主人公も、彼の熱誠な話と、その実績を裏書きするために眼の前に矢つぎ早に繰り出されるそれらを対照しながら、いつのまにか雑事を忘れて熱心にきく。そこで趣意書を取り出して植民教育の必要を強調して学校建設の計画と予算を説明する。相手の面前に趣意書を示し、右手の親指に力をこめて、彼は総額三十五万円という金額のところを押しながら、手早く片手に寄付帳をとりあげて主人の前にひろげる。この間約二十分全く間髪をいれることを許さない。さすがに商売で鍛えあげた豪の者も、この強硬な押しの一手には圧倒されて、はね返すことは容易でないと観念する。

「では僅かばかりだが賛成しよう」と筆をとつて紙につけると、「いくら出してくれるか」、「二千元」と答える相手の腕を彼は黙っておさえ、強引に二を三に一本線を加えさすといった場面もあつて「今日は崎山さんには完全に負けました」とニコニコして相手方が嘆声を漏らすと、牛乳の得意をとつた刹那と同様に緊張した彼の顔も

ほぐれて破顔一笑、かざりない態度で感謝しながら相手の手を握って別れるという場面がくり返される。

港の人氣が強ければ、彼の勢もいよいよすごい。

そこへまた創立委員の富田幸次郎が中央から応援に来る。学校その他の団体が各地から寄付募集に入り込んできているので競争する中で、海外発展と移植民教育の主張は、幸いに海運業者、貿易業者の共鳴するところとなった。兵庫県知事清野長太郎も大いにあつ旋してくれた。こうして三井船舶の川村貞次郎はじめ金子直吉、勝田銀次郎、山下亀三郎、内田信也、松方幸次郎、上西亀之助、兼松商店等々四十余名の有力者から賛助金は約七万円に達した。

奔走開始以来約一年有半、漸くまとまった資金ができたので第一期事業に着手することになった。そのころ世田谷町北沢二丁目（現在帝都線池ノ上停留所付近）は駒場農科大学の裏に当り、渋谷駅から徒歩松涛町を経て大学を迂回するか、玉川電車で三宿に下車し、約一キロ半歩かねばならない不便なところだったが、そこに個人経営で乳牛七十頭收容能力のある牧場が、牛乳処理の施設一切一括して売物に出たのでこれを買収することにした。付近一帯は畑だったので、牧場に接近して学校敷地を選定したが、地主が頑として手放さないので、止むなく建築敷地と実習用地として四千坪を借り受けた。岩本組に講負わして吉田常太郎が建築監督に当ることとなつて新校舎建築工事に着手したのは大正六年九月、落成は

翌七年四月末であつた。

それまで協力していても金銭の上では容易に援助しなかつた森村顧問から着手と同時に、金五千円の寄付があつた。それから続々と東京の有力者からの賛助が寄せられた。

大正七年二月崎山主幹は吉村、寺島、大島等を伴つて大阪に出張し、駅前梅田旅館を本拠にして二ヶ月に亘る賛助員募集に當つた。運動に着手すると同時に、評議員永井柳太郎の応援で、中之島公会堂で大講演会を催し、超満員の聴衆を前に先ず海外発展ののろしを打ちあげて浪速の空に彩色を施こした。

ここは名だたる商業地だけに富力では天下に名を知られている紳士も、かけひきはまた格別である。彼もさるもの次第にその心理をのみこんで、夜討朝駆けに似た奇襲も辞せず着々と有力な同志の獲得に成功したのであるが、もとより彼の努力だけではどうにもならない。それには大阪府知事林市蔵、大阪商船会社社長堀啓次郎等々の代表者の支持に負うところが大きかつた。

建築工事の進行中も、彼は一日の休暇もなく、東京を中心に協力者を求め、また当局者との連絡につとめた。その間に工事が完成したので、盛大なる落成式を挙行し、いよいよ開校する運びとなつた。

これより先き校舎と殆ど同時にその近くに工事を起した寄宿舎は、前年十二月末に落成した。内部は洋式にしてベツトを備えつけたハイカラな設備である。麻布牛込

から全部の学生が引越し、落成入舎式とクリスマスと年を同じうして挙行した。そのうち学校落成に前後して、職員住宅の幾棟かが移転或は新築された。こうして海外植民教育会、海外植民学校、学生労働会の三者が一体となって、民族発展の基地となるべき使命を負った植民学園が誕生した。

海外植民教育会は、そのころ報道の必要から月刊「植民」を発行していたので、その第七号は「植民学校落成記念号」として編集され、その前後の状況が詳しく記述されている。内容は形容詞が多く詳細に過ぎるかと思われるが誇張はない。

海外植民学校の建設は小さいながら日本に於て劃期的な意義をもつものであつて、また彼の生涯にとつても特筆すべき晴れがましい事件の一つである。東京の西郊麦田の中に立つた白堊の小さな校舎に過ぎなかったが、この記事に見られるように、いかに当時の各層を代表する地位にある人々、中には当初その実現を危ぶんだ有力者まで多数ここに参集してその門出を祝したか。いかに彼の多年心血を注いだ熱誠に対し、讃辞と激励を与えたか。いかにここから送り出す青年の前途に大きな望みをかけたか。この記事から読みとつて貰えることと思う。

植民学校落成式 「植民第七号記事」

大正五年春以来、街に野に山に吾徒が其必要を絶叫した植民学校は天下幾万の人士の賛助と赤心に由つて遂に設立され、四月廿七日には盛んなる落成式を挙行した。いでや当日の光景を読者諸君に報道せんかな。廿六日の大雨覆盆の勢なりしも、至誠籠れる我らの願は天を動かし、一点の雲を留めざる青天となり「植民晴れ」との感喜の中に暁を破りて全員動き出ず、外部の装飾、校庭の中央に立てる日章旗は高く春光に翻り、之より吐き出す万国の旗はへんぽんとして四方に張らる正に之れ我校の抱負を示すもの。

我校の位置たる武蔵野に打建てられたる凡百諸校の中最も高きを占め、清浄の氣漲る。農科大学の海拔三十八米突をぬく更に四米突、西は富嶽に対して浩々の氣を養うべく、東は大東京を瞰下し、西南一籽半、密航の先を企てて成らず『親思う心にまさる親心今日のおとずれ何ときくらん』の辞世を残し、我国植民の思想を發揮して逝ける二十一回猛士の墓あり、緑樹鬱蒼の中に祭らるるその靈は今尚我らをべんたつす。ここに新設の建物と設備を併せて、我らに同情ある紳士淑女を歓迎せんとす快哉ならずや。

門柱は源平の紅白を以て巻かれたる方柱に、大国旗を交叉し、狼煙を揚げて盛時を報ぜんとす、門に導く道し

るべは学園を指さし、玉川電車より来る人士は徒渉一
料、自動車上の人は渋谷より駒場農大を廻り、又は陸軍
獣医学校を過ぎて来る両道ありて何れも二料、京王線は
幡ヶ谷駅より守山公園を眺めつつ杖を曳く十五分にして
何れも吾校正門に達す。

打揚げる狼煙のもとに、轟々として来る自動車あり、
人車を駆る新聞記者あり、文官あり、軍人あり、知名の
紳士と会衆合して四百余名、定刻二時壇上には司会者海
外植民主事吉村繁義立つて静かに開会を宜し、式は左の
順序によりて施行せらる。

- 一、君が代斉唱 参 列 者 一 同
- 二、聖書朗読 植民教育会理事 吉田常太郎
- 三、祈祷 神学博士 平 岩 愼 保
- 四、讚美歌三五番 参 列 者 一 同
- 五、挨拶 創立委員 校 長 崎山比佐衛
- 六、事業経過報告 衆議院議員創立委員 富田 幸次郎
- 七、植民唱歌 ラプタナの夕空 参 列 者 一 同
- 八、祝辞演説 米国宣教師 ハリス博士
- 植民教育会出身者総代 小笠原義之
- 衆議院議員 床次竹次郎
- 外務大臣 男爵 後 藤 新 平
- 衆議院議員憲政会総務 浜 口 雄 幸
- 男爵 渋 沢 栄一
- 九、祝詞祝電披露

一〇、頌歌四六二番 参列者一同

一一、祝 禱 ハリス博士

一二、閉会、茶菓及余興

挨拶 (植民学校落成式当日) 崎山比佐衛

海外植民学校々舎新築落成せし此機会に於て一言の感謝と希望を大方の諸賢に呈する事を得るは不肖が無上の光荣とする所であります。海外植民教育会設立に関し、及び設立以後の経過を顧みれば、其主幹として今日ここに如何なる言葉を以て感謝すべきかに苦しむのであります。

一片の赤誠止み難く、朝野先輩諸賢の門に走り、或時は来客に忙殺され居らるる中に於て、或時は御多忙なる事務所の一室に於て、或時は自動車上急がるるを道に擁して、或時は避暑避寒の御静養中に、甚しきは御病褥の裡に於て御目にかかり御力を受けました。常に非常なる奨励を頂きました。

時代の機運は吾等の主義主張に対して格別なる熱心と熱意を以て迎えてくれました。天は弱き吾等を試鍊に遇せず、健康を与え、その些少なる努力を祝福して下さいました。不肖は唯畏みて皇天の御恩寵と有志の御同情に對して『有り難い』の一語あるのみ、謹みて御礼申し上げます。

同時に此際吾人が快心の一片を披瀝するは亦当然の責かと存じます。皆様のお力により学校は小さい乍ら此処

に出来上りました。さて如何なる教育の湛能なる士を迎えて教鞭を執らしむべきか、如何なる青年を抜いて教育すべきか、植民学校教育方針の目標を那邊におくべきか。

かく考え来れば多くの問題がありましよう。けれども私の考えを打明けて申すなら此の大正聖代に於て天下有志の赤誠により建立されたる建物としては誠に種々の大いなる意義を有して居るものでありますが、最後に之を祝し聖めて天に献げる事であります。

然り日本国民の為に之を神に献げ、其命に服従し、孜孜として唯だ畏れ虔んで使命を尽し務めることを誓つて、なお残されし本校及び附属事業の将来に就ては一層天の御恩寵と大方各位の御援助を希う次第であります。終りに謹んで各位の御健康を祈ります。

次に富田幸次郎氏巨軀を壇上に運んで左の様な事業経過を報告した。

私は農務局長道家齋氏と共に、本校建築委員となつておる關係上、茲に諸君に対し、本会の事業経過報告を致したいと思ひます。

崎山君は既に諸君の御承知の通り、自分が十年間の苦学の経験から、明治卅五年に学生労働会を起して、自分同様の境遇にある青年を世話する事を始めた。之が起源で然し個人の小さな事業であつたのが同君の熱心と忍耐、即ち学生と共に働いて来た労働神聖主義を、十余年

間貫いたおかげで、出身者諸君の多数が腕一本で海外に出て事を然すと云う様なわけで、崎山君は青年時代北海道植民の経験もあり、大正三年春遂に進んで南北両米の植民地状態を視察に出かけるという事になったのである。

單身空拳南北両米三万哩を踏破して帰朝すると共に一層当初の目的即ち植民の急務なるを感じ朝野の有志に其意見を陳じて賛成を得、海外植民教育会を組織して大いに吾国の植民問題に尽そうという事になり、同時に真に植民に成功するには之に適する相当の人物を養成して、即ち教養ある労働神聖主義の人を送る事が急務であるという所から、先程申上げた崎山君個人の事業一切を基礎として植民学校を建設する事となりました。第一に朝野有士の協賛を受け其御尽力に依り、崎山君とその同志は高知県、北海道、東京、神戸、大阪という工合に植民演説をしつつ同志の賛助を求め今日までに殆ど一千名の人々より、金額や種々の物で拾万円に価する賛助を受けました。ここに御列席の渋沢男の如きは最も大いなる賛助者として御尽力下さったわけでして、之は実に崎山君の非常なる熱心と努力に対する有志の御同情の賜物と信ずるのである。

本校設立の順序や趣旨は大要以上の通りで、さて何れだけの設備が出来たかと申しますと、二千坪の敷地と五千坪の地上権を得て、其上に本校舎の建坪が百八十坪、生徒の牛乳を搾り配達する牧場が建坪二百四十坪、消毒

室が二十坪、寄宿舎と住宅が百五十坪で同計六百坪の建物が出来ましたので、目下六十五名の学生が二石の牛乳を配達しながら労働しつつ勉強しておりますので、また学校の方は本年は本科生四十名、専攻生三十名だけ収容する準備で、本校で結局百五十人の学生を教育する予定であります。なお之にも実習として勤労せしむる為に農園を設けました。

以上の様な概略有様でまた此建築費にも必要がある様なわけで将来設備しなければならぬ事も、残されて居るので将来一層の御尽力を願わなければならぬのであります。

私も初めは賛成者の一人であつたのが、頼まれて評議員となり進んで創立委員とまでなる様になつて最早崎山君一個人でなく亦私共の責任になつて参りました。こんな関係では是非各位の御援助に由つて此事業の目的を成就したいと思ひます。

なお会計の方は浜口雄幸氏監督して其道の方に厳密に整理して貰ひ大正六年十二月末までは印刷に付し、特別関係の方へは御手元へ廻しました筈で、なお事業中途にあり適當の時期に於て其後の御報告を致すことになつております。

富田氏の報告に続いて当日の席上、左の諸氏の祝詞演説の大意は次ぎの通りである。

ハリス 博士

満堂の諸君、美しくしき学校が出来まして本日落成式を挙げられ、私も此席に列なり皆さんと共に国家のために御祝いを申す機会を得まして嬉しく存じます。

過去の日本がいかに神の御祝福の下に進歩せしかを思う。諸君は将来に於て更に偉大なる進歩発展を信じ且つ斯くあらしめんことに努力せらるるであらう。而してこの努力は人類の文明に対する貢献であり神の祝福に対する感謝であることと思う。

『善を為すに臆する勿れ』との言葉は勇敢なる神の僕否日本国民を励ます聖き言葉である。

皆さんの御奮発を希望し、この世界的学校の出来ましたことを国家のために神に謝し且つ祝するのであります。

床次竹次郎氏

諸君、私が崎山君と相知ったのは今途中自動車の中で君と話をした処では、大正三年自分が鉄道院（総裁）に居た時であった。当時崎山君が訪ねて来られて、自分は天下有為の青年にして学費に窮して居る者に労働せしめて学校に出して居るが、この青年の元氣は是非共どこか世界に活動の舞台を見出して発展させなくてはならぬと思うので世界の殊に植民地方面を視察して見たいという様な話で、自分も賛成の意を表したことであった。唯今もこの印刷物を手にすると、吾国の人口は年々七十万増加しているという事であるが、之から考えても海外発展

は日本の近き将来に於て止み難き勢であると申すべきであらう。

海外発展は男らしい仕事である。崎山君とその同志は斯くの如き方面に着眼して多年熱心に努力せられ、今日ここにこの盛典を挙ぐるに至りし事は、私は目覚ましき成功と見て寧ろ驚くべき事と感ずるのである。

思うに其意義より将来の使命に思い到れば崎山君同志の責任は益々重且大である。然り海外発展即ち植民事業は男らしい面も困難な事業である。此男性的な事業を為し果すものは種々の要訣ありと雖も帰する所、青年の熱心なる努力と旺盛にして撓まざる元氣に依つて成されるものと思う。

私は今後本校より此の如き青年の生れ出でん事を希い謹んで祝意を表するものである。

床次君に次で老軀を壇上に運んだわが国実業界の大先輩渋沢男爵は、諸君、本日この盛大にして壮快なる式に列席し一場の祝詞を述べることは私の光栄とし且つ非常に愉快に感ずるのであります。

私は崎山氏とは寧ろ最近の知合で、同君が南北両米の旅行より帰朝されて間もなく訪ねて来て下されて熱心に植民教育の必要なことを懇々と説かれたのであります。

私も遠い外国の事は詳細に知らないけれど貿易の必要上隣国の支那に就ては余程早く注意を初めたつもりで、今日は先程も印度の貿易家ターター氏の歓迎午餐会に出まして同氏と懇談致しましたが、同氏の話では私が同氏

と日印貿易の相談をしたのは二十年前であることが解つた。綿の輸入の驚くべき増加に就て、昔を想い出した話を致して参った様なわけで、南米にもブラジルには多少関係した事業をやった事もあり、私の知っている範囲ではなかなか大問題で、崎山氏の熱心と其意見には賛成でしたけれど、その実行には容易に御賛成出来なかつたのであります。

唯今創立委員富田氏の報告演説の中に、自分は最初賛成者でやがて賛助者となり漸くにして後援者たりしが崎山君の熱心に動かされ今は創立委員として本校の為には社会に対し大なる責任の地位に立つ様になられたとの御話がありました。之は御尤の話で大凡大事業の徐々に発展して行く順序は斯様なものであります。此点に於ても同じ様なわけであります。

之は崎山氏の胸中に抱かれた決心の強固なりし事と之が為に誠に熱心に努力なされた結果であつて今や着々として熱誠は人を動かし、知名の士が此事業を助くる者漸く多きを加うるに至りしは実に慶ばしいことであります。

終りに私は本校より出ずる青年諸君が他日世界の一角に国家の為効果ある活動を試みらるるの日、真の祝詞を述ぶる事とし、本校の生れし事を国家の為に感謝して本日祝詞と致します。

「本日は多数先輩名士の御参列を頂いておりまして御祝

詞を述べて下さる御希望の方も多いのでありますが、時間も予定を経過していますので、満場の皆様を代表して頂きまして浜口雄幸氏に一場の御祝詞をお願い致します」と司会者の希望にこたえ氏はその雄姿を壇上に運ばれた。

「余は崎山君とは同郷の誼として交際を重ね、また本校創立にも関与し来った一人であるが、本日は茲に斯る個人的関係でなく、国民の一人として植民学校の落成せし事を国家の為、大和民族発展の為に万腔の祝意を表するものである。同時に崎山君と同志の今日までの努力を多とすると共に、之より真に其事業に一步を進めし事を自覚せられて、この大任を完了せられんことを希望して止まない次第である。」

言句簡にして而も同情と力に満ちた莊重なる奨励の言葉は印象的で、吾人を感激せしめた。

尚当日列席の約を和子夫人の急逝の為に果し得ざりし後藤外相は、式場である本校講堂に掲げられた尺八の絹本に「智周万物徳濟天下」の八大文字を揮毫して贈られしのみならず、左の如き祝詞を寄せられ、席上世田谷村長によって代読された。

祝 詞

方今世界の大勢は益々民族発展の機運を促進して已まず、国家の威力を加えその大を成すもの一に此の大勢に順応し国民をして能く其の志を暢べしむるにあり。願うに天涯地角到る処青年の飛躍を待つ。蝸牛角上徒らに利

を趁うて争闘是れ事とするが如きは固より我已族の世界的發展を策する所以にあらざるなり。

崎山比佐衛君夙に身を苦難の裡に起し、不遇の境にある青年の為に奮闘すること十有五年一朝壯図を懷いて南北両米三万哩を踏破し、海外

發展の好機逸すべからざるを見るや帰來植民教育会を興して大に力を致す所あり其の寢食を忘れて尽粹最も勉めらる。海外植民学校の設立は朝野有志の同情に依りて今やその成るを告ぐ。

君の志や一端を報いられたりと謂うべし。茲に本日をして落成の式を挙ぐるに当り、満腔の祝意を表し併せて今後の奮励を祈る。

大正七年四月廿七日 外務大臣 男爵 後藤新平

この外時間の都合で式上でその芳名を披露するに止どめたのであるが長文の祝詞を寄せられたのは左の人々であつた。

伯爵板垣退助、伯爵土方久方、ブラジル駐在公使畑良太郎、文部次官田所美治、帝国教育会長沢柳政太郎、外務省通商局長中村巍、海外興業会社社長神山潤次、青山学院長高木壬太郎、救世軍大佐山室軍平、衆議院議員島田三郎、修養団主幹蓮沼門三、実業家高田一二、国教宜明団長酒井勝軍

以上の諸氏で、また遠近から寄せられた祝電は五十余通に達した。外に日本婦人矯風会会長矢島揖子女史より

贈られた色紙には

神こそは野をも山をもつくりたれ

人にまことの道をふめとて

の国風一首がしたためられてあった。

斯くして式は無事に終了した。前記の外に当日御臨場下されし先輩有志は 海軍大将元帥島村速雄、男爵出田正敏、学習院長北条時敬、代議士高木正年、三菱総務理事江口定条、興銀総裁志立鉄次郎、頭山満、内田良平、東爽五郎、その他の渋谷町、地元世田谷村名誉職有志、各新聞社記者各位であつた。式終了するや直ちに校庭に溢れる群衆に対し祝賀の余興として、紅白の祝餅一石五斗は、階上の教室より幾久しく幸あれと雨あられの如くに撒きとばされ、歓呼のうちに黄昏迫らんとする頃目出度く万歳を連呼しつつ散会した。

以上『植民』紙上の報道をそのまま写したのであるが、越えて翌五月には学校の落成を天下に報告する意味のもとに大講演会を催した。これはまた「植民」の記事を原文のままに借用して、当年の盛況を偲ぶことにしたい。

学校落成記念植民大講演会

五月廿四日東京神田基督教青年会館に於て我が海外植民学校の落成を記念せんために植民大講演会を開く、朝来微雨至り集会には恰好ならざりしも定刻には満員の張札を掲げて空しく割愛の恩を以て帰去せられし紳士三

百を超ゆるの大盛会、満堂立錫の余地なく無慮三千、椅子は摧け窓硝子は飛ぶ蓋し植民事業の時代要求に迫られたると崎山主幹の実行的活歴、南北両米踏破三万哩の臥薪嘗胆の労苦挙って天下の志士に反響あるを知るべし。我大和民族の世界的活躍を試むべきの時既に熟して小なる天地に蟄居するを肯んぜず將に外部に押圧せんとする縮図を示せり。

定刻吉村主事開会を宜し、伊達政宗や、山田長政の海外発展の歴史を快哉なりとして欽慕する時代は過ぎて、今や現実に植民の必要を余儀なからしめつつある我民族の膨脹を如何にせんと論じ慨然胸をうつの辞正に斯会の空気を緊張せしめたり。

時に悠揚として壇上には前早大教授にして本校評議員植民政策学の大家永井柳太郎氏の英姿を見る。満堂期せずして大喝采、氏は、戦後の来るべきアジアと題して古今を例証し東西を比較して博弁宏辞、得意の植民論を繰り広げて肺腑に徹するの雄弁満堂を圧す。博士沢柳政太郎氏は、日本の大発展と題して反覆説明甚だ忠聴衆亢奮より醒めて沈思黙考玩味するの趣きあり。

次で堂々壇上の人となれる崎山主幹は、両米踏破の実歴を語る。布哇に於て或はタートル湾外に於て有為の青年密航して志を世界に成さんとする所謂船幽霊談あり、青年発展の天地として両米を対照し、アンデス山嶺に於ける靈感を結語として、此に心眼を開き世界の大勢を指呼す。其表情の妙音声の雄、内容の生氣澆冽たる三拍子

揃える大獅子吼なり、氏右手を挙げれば会衆之を仰ぐ、左を指せば之に従う、崎山主幹の五指は將に聴衆の心琴を弾ずるが如し、共鳴とは此事の謂か。最後に大島喜一氏のラプラタの詩は朗々四壁を振わしむ。喝采拍手、世界はやがて汝がものぞと口々に口吟しつつ退場せり。大隈侯は鷹司公薨去の為にその姿を壇上に迎え得ざりしは遺懇なりしも聴衆は平素の屈托せる心境を洗い、新たに輝ける理想を抱く者の如く満足して散会されしはわれらの欣幸措かざる所なり（完）

前後するが、ここに特記しておくことがある。

学校開校後一ヶ月、校長は職員を伴って拡張運動のため横浜に進出した。東京の関門であつて、移民の動きにも密接な環境の横浜を、それまで訪問しなかったのは、自然にあとまわしになっただけで、東京の本格的な運動が、それよりもおくれたことからみても、何ら理由のあつたわけではない。或はそのときの直接の動機は、前年の神戸運動が船の景気であつたのに対して、ここは生糸や綿糸布のブームであつたかと思われる。

横浜市に於ける植民思想普及大講演会には中央から、会の評議員でこの土地に縁故のある島田三郎が出演し、例の立て板に水を流すようと評された快弁で、彼の主唱する植民教育を実現することが、日本の将来にとって急務であることを力説し、政治的見解の上から明快に論断した。次いで壇上に立つ校長を、この会の司会者はこう

紹介した。

「三十余年前、この港の波止場に迷いでて岸壁に立つた一人の哀れな少年、かれはそののち様々の境遇を経て……とその概要を語り……そのかれはいま諸君の前に立つ。かれが幾多人生の曲折に耐えて、いまその忘れ得ぬ因縁の地に来って、諸君の前に何を語らんとするか、乞う虚心坦懷その所信をきいて頂きたい。その夜の崎山校長の熱弁が名講演だったと同時に、聴衆の熱狂的な感激、それは幾百回か繰り返されたこの種の大講演会に於て最も印象的なものであった。その反響もあったのであろう、原富太郎、茂木惣兵衛、中村房次郎はじめ多数の有力者を後援者として与えられた。

左の役員名簿は大正八年四月現在のものである。この人たちの当時の地位を知る人が一見されたら四十年前の社会を動かしていた中堅人物を網羅していることに気づかれるはずである。そしてこれは僅々三年の間にこの広範な協力者を説得した崎山主幹の活動を知る参考資料である。

財団法人海外植民教育会役員名簿

役員（順序不同）

◎顧問

男爵渋沢栄一 男爵森村市左衛門

◎相談役

楠瀬幸彦 松方幸次郎 永田仁助

男爵 内田正敏 山下亀三郎 原 富太郎

早川千吉郎 勝田銀次郎 大谷嘉兵衛
堀 啓次郎 中村房次郎 茂木惣兵衛

◎評議員（東京）

江 原 素 六 浜 口 雄 幸 志立鉄次郎
床次竹二郎 道 家 斎 男爵 阪谷芳郎
島 田 三 郎 鎌 田 栄 吉 法博 高田早苗
松 方 巖 工博 団琢磨 文博沢柳政太郎
富田幸次郎 志村源太郎 押川方義
浅野総一郎 永井柳太郎 池 田 謙 三
小 池 国 三 串 田 万 蔵 農博 横井時敬
田川大書郎 増 田 義一 林 曄
海老名弾正 法博 天野為之 古島一雄
根 木 正 江 口 定 条 門野重九郎
神 谷 忠 雄 井上準之助 町田豊千代
林 民 雄 村井吉兵衛 須 田 利 信
手 塚 敏 郎 神 山 潤 次 神博 平岩愼保
丹 沢 善 利 成 瀬 正 恭 神博高木壬太郎
平 沢 均 治 左 近 義 弼 井 上 雅 二
池 田 成 彬 松 岡 正 男 中沢惣次郎
松 出 順 平 成 瀬 正 行 笠 井 信 一
三 土 忠 蔵 櫛 引 弓 人 高 橋 菊 蔵
末 延 道 成 小田切万寿之助 山 科 礼 蔵
大倉久米馬 米 山 梅 吉 若尾謹之助
間 島 弟 彦 男爵中島久万吉 山 成 喬 六
伊東米次郎 勝 田 主 計 工博国沢新兵衛

片岡直輝	名和陽一	高倉為三	堀啓次郎	島徳蔵	安宅弥吉	山本藤助	林市蔵	大阪、神戸	上野吉次郎	安部幸之助	木村庫之助	左右田喜一郎	大浜忠三郎	田中茂	大谷幸之助	原富太郎	横浜	三宅川百太郎	柳谷卯三郎	美濃部俊吉	石塚英蔵	中沢彦吉	藤瀬政次郎	木村清四郎
金子直吉	大谷順作	岡十郎	伊藤忠兵衛	伊藤鉄五郎	林竹三郎	永田仁助	山岡順太郎		上郎清助	阪本一宮	長与程三	岡部菊太郎	平沼久三郎	小野哲郎	渋谷義一	中村房次郎		赤星陸治	神田雷蔵	緒方圭造	井上公二	小田柿拾次郎	土方久徴	工博仙石
水島鉄也	松方正雄	阪伸輔	藤本清兵衛	中川浅之助	浜口駒次郎	北川亀三郎	池上四郎			永万吉	若尾幾造	渡辺和太郎	上甲信弘	渡辺文七	森本銀太郎	茂木総兵衛		三枝基	角地藤太郎	坂本正治	水田袈裟六	川田鷹	水越理庸	竹内明太郎

川村貞次郎 内田信也 岡崎忠雄

服部一三 河内研太郎 田村新吉

山地土佐太郎 本多一太郎 松方幸次郎

勝田銀次郎 山地四郎 愛久沢直哉

上西亀之助 小山新次

東北、北海道

農博 佐藤昌介 磯野進 大久保虎吉

山本厚三 農博 南鷹次郎 東武

男爵 岩村八作 長野幹 矢島栄助

大木喬命 広瀬和育 岡貞吉

南茂喜

四国

森下高茂 宇田友猪 後藤正形

安芸喜代香 松村覚次

学校創立委員

江原素六 江口定条 左近義弼

志立鉄次郎 団琢磨 浜口雄幸

富田幸次郎 道家齐 崎山比佐衛

吉田常太郎 吉村繁義

◎法人監事、理事

理事長 崎山比佐衛 副理事長 吉村繁義

理事 吉田常太郎 理事 左近義弼

理事 大島喜一 理事 寺島天園

理事 崎山信義

一六 海外植民学校（教育方針）

海外植民学校は落成式を終えた直後、大正七年五月二十七日、東京府から私立学校令による認可を得た。これに先だって学校の方針、経営の直接担当者の人事について、創立委員の間に協議が進められた。その結果、普通の学校と全く趣旨がちがう上に、労働に重点をおいて牧場経営など兼ており、世間一般の学校経営の経験者の中から適任者を得ることはむずかしく、労働会を創立運営し、直接学校設立に当たった幹部で陣容を整えるのが妥当であるという意見に一致した。設立者―校長崎山比佐衛、主事吉村繁義、労働部主事吉田常太郎と決定、これに従来の同志同労者を適所に配してスタートした。小さな学校に主事を置いたのは、創業の途上にあるので校長は海外植民教育会主幹として外部の活動が多忙なので、主事が学校の直接経営を代行する方針を定めたのであった。

予かじめ担任者によって学則の制定、教職員の採用、生徒の募集などが順調に運んでいたので、直ちに授業を開始した。

学則は本科三年、専攻科（後に南米科）一年…十数年後に女子部増設……本科生の資格は高等小学二年卒業者、若くはそれ以上の学力を有する者で、年令十六歳以上の身体の強健な労働に耐えるもの。専攻科生は中学

校、甲種農、商の各学校卒業生、若くはこれと同等以上の学力を有する者で、年令十八歳以上の身体の強健な労働に耐えるものとなっていた。

学科は修身、西班牙語、英語、農業一般、商業、経済、簿記、植民政策、植民歴史、各国地理及奉清、数学（珠算）国際法大意、弁論、音楽、体育（柔剣道）

学科は本科、専攻科とも生徒の学力に従って程度に高低の差があるだけで、課目の内容は大同小異であった。

生徒の収客定員は本科百二十名、専攻科四十名で、学費は入学金一円、授業料本科一月三円、専攻科三円五十銭。

開校当時の教職員は専任十名、講師十一名合計二十一名であったが、そのうち多少の異動と増減をみた。学校経営で主力を集中すべき点は良い教師を得ることである。この点については東京農業大学長横井時敬博士（本校評議員）などは、懇切な助言者だった。学校当局者にもよく解っているが、教授陣の完備にも財政が先に立つので、急速に充実することはむずかしい。多くの私立学校が創業時になめなければならぬ苦勞である。強いて言えばここでは学校以前から労苦を共にした同志があり、新たに迎えた教師、講師たちも、学校の目的に共鳴して、自然に利害以上の使命感から自分の働く職場としての愛校心以上に、学校の遠大な理想と抱負がかもし出す空気によって結ばれていたことが強味であったというべきだろう。

生徒は定員にみたなかったが、出身地は全国にわたり、北海道がやや優勢であった。これは開拓地であったのと校長が遊説して、その趣旨が徹底していたことにあつた。生徒の素質は秀才型ではなく、共通していることは、その大部分がたくましい若々しい野心と夢をもった積極的で実行力の旺盛な青少年たちだった。

学校には仮教場の時代に学んだ生徒の中から、開校期を控えて早くも渡航した先発隊があつた。

岡二郎、金野兼吉、池谷正文、毛利高義、松村政雄、宮村正時、松本久作等何れも血氣盛んな豪の者である。彼らはおのおの機会をつかんで中米、南米、南洋に渡り果敢な行動を試みていたので、現地からの便りは学校に伝えられ、生徒たちの雄飛熱に拍車をかけた。

崎山校長の人間的魅力と、開拓的気魄を中心として、この教授陣と、野心に富んだ生徒たちが一つになつていて、そして更情協力者の強い支持と、時代の要求とは彼らの情熱をゆすぶって“海外発展の総本山”と評してもよい「植民学園」が急速なテンポで世田谷原頭に築かれていった。

では海外植民学校教育の根本精神の、各学校と異なつた点は何であつたか。それを説明する前に二つの特例のあつたことをあげておこう。

もともと崎山校長は旅行の見聞によつて、当初婦人を

伴わない出稼移民を主としたわが海外発展が、結果においていかに償いがたい欠陥をばくろし、排斥の因をなしたかを看破したのであった。

それゆえに移植民は必ず男女共同で行わなければならぬというのが、彼の決定的な主張であった。

高等学校以下の男女共学が行われはじめたのは終戦後のことで、四十年前の日本では以ての外であった。だから出来れば、植民学校を男女共学にしたい校長の希望を実現するために、文部省に南弘（後枢密顧問官）次官を訪れてこの問題について懇談した。次官は省の方針でなく当局者の好意的見解として、次ぎのような黙認を与えた。

とくに表面化する必要がなければ他と全然目的を異にした学校だから、女子にも希望者は入学を許可してやって差支えあるまい。但し男女間の風紀等については最善の注意を払い、学校が全責任をもつこと、というのである。次に修身教材用としてバイブルを用ゆるのを要請した。元来南次官は宗教に対しよき理解者であったので、次のような意味に扱ってくれた。

世界共通の倫理の基礎がバイブルの教に負うところ多いことはもとより、南米諸国が悉くキリスト教国であることから、そこに志を抱く人々が、バイブルの理義に通じていることは常識として必要である。のみならず移植民者として海外に墳墓をきずこうとする人たちが確乎とした信念をもつことは大切で、これらの点からも海外

植民学校に於て、一つの教材として、理解せしめることはむしろ必要である。教師の聡明な態度と公正なる取扱によつて、人格養成の上に効果をあげることができれば、満足であつて、当局は敢てこれを云々するものではない。

この二つは当時の中等学校には異例のことであつた。当時の学校で施す徳育の基本原理は教育勅語であつた。その中でも忠君愛国に重点をおきこれを強く押し出していた。中外に施してもとらないはずの遺徳は、むしろ排他的で外国を蔑視し、甚しきは敵愾心をもつことが忠君愛国であるかのように歪曲され、教えられていた。為政者も敢てこれを咎めない。このような教育をうけた生徒たちを集めて、人格主義の上に立つて世界を家とし、各国の国民と共に手を握り、共存共栄のできる平和愛好の精神を徹底させるには、かなりいろいろの方面につながるもつれを解きほぐさなくてはならなかつた。忠君愛国はわが国の一手販売ではない。世界の各国民は何れも祖国に対して忠誠の念をもっている。われわれは忠君愛国者として自重すると同様に、各国民をも尊重しなくてはならぬ。こう教えることは現在では当然なことだが、四十余年の昔はかんたんではなかつた。これは教職員の中にあつてさえ足並が揃いにくかつた。まして帝国主義的な教で固められている生徒たちを世界的道義心を植えつけて国際人に育てるといふことは容易ではない。

そのころの日本は台湾、朝鮮を統治し、満蒙大陸に対

して虎視眈々たる有様であつた。各大学では外国学者の研究を翻訳した、植民政策がそのまま講ぜられていた。武力による領土拡張は暗黙の間に是認され、必至のこととされていた。こんなときに飽くまで他国の主権と領土を尊重し、一個人としてその国の人となりきつて、その文化に貢献せよといい、移植民を文化の伸張運動とみて個人の人格的な発展を基調とする。この学校の教育が或る方面に批判の的となつたことは止むを得ないことであつた。

行先で狭い頑固な日本主義を押売してはならない。謙虚と寛容な態度で其国の長所をとり、それを助長し完成することによつて、その国を良くし、われわれの教養を開花させ実を結ばす。言い換えると良い花婿花嫁となつて外国にゆくことが真の植民であると断じた、単純素朴な移植民に対する校長の基本観念を一つのまとまつた主張として、政治的、倫理的な根拠の上に理論づけることは、当時としては確かに勇氣と覚悟を要することであつた。少しでも表現を謬れば誤解されるからである。事実どこから聞き込んだのか、これらの教育方針に疑惑をもち、私服刑事が数回に亘つて学校を訪問したことがあつた。

過去の日本移民の短所の一つは、渡り鳥のようにブラシケを巻いて転々し、永住心をもたないことであつた。これは大部分出縁日傭移民で仕方ないとして条件のよい境遇におかれても彼らは落ち着かなかつた。而もこの右

往左往する人たちを指導して安住の処を得させるような保護は本国からも与えられなかった。心あるものが移民でなくて棄民だと嘆いた理由である。校長はこれを日本移民の欠陥として指摘し、移民の定着と永住を強硬に説いて出稼ぎ根性で渡航し、金を蓄えれば帰国してしまうということを極度に排撃した。彼の在伯同胞に訴えた講演（附録）を一読しても、終始倦むことなくこの問題で真剣に闘ったことを知りうる。

移植民者は必ず永住すべきであるというのが植民学校における教育の中心眼目であった。これを唱えることは誰にでもできるが、実践する人をつくることはやさしいことではない。その人の人生観、世界観に支配されるからである。日向の可愛岳の山麓長井村に囲まれた西郷隆盛は、指揮官桐野利秋が“ここを最後の地として潔よく散ろう”と号令したときはじめてその命に抗し“どうせ死ぬなら城山（故郷）にいつて死のう”と自ら陣頭に立って重囲を脱した、この英雄の悲しい心事は人の胸をうつ。故郷を慕うことはとくに日本人の性情なのか、人間の本能かは別として、強く深いものである。万里天涯の異境に骨を埋めるかと思えば悲壮感で胸が迫るのは日本人だけだろうか。

これに打ち勝ち至るところを青山墳墓の地として、日々の生活を楽しむには安心立命の心境に至らなければならないまい。国境と人種を超越した人現愛の大きな世界をわがうちに発見して、安住の幸福を体得すること、それ

は時と処とすべての境遇を支配できる宗教的信仰の上に立つことによつて解決する。

校長が力説し、また実践しようとした今一つは、生徒に労働を体験さすことであつた。移植民に最も必要なことは労働である。これは出稼移民であるなしに関わりなく、労働力をもつということは絶体的な資格である。

植民学校で最も遺憾なことは、それを有効に体験さすだけの舞台や設備がなかつたことである。

僅か一町歩内外の畑を試作したり、測量実習に用いる程度であり、牧場があつても生徒は牛の子を校庭に引っぱり出して面白がる位である。多数の生徒たちが汗を流すほどの労働の場所はなく、それを毎日体験できるのは、苦学の必要から働く労働部の生徒だけであつた。

この条件をみたすために八ヶ岳山麓の開拓を計画したのであつたが、それは遂に実現するに至らなかつた。

しかし校長は機会ある毎に、労働の尊ととき、植民者にとつて労働の重要なことを説いた。彼ほど教育者として労働を説くにふさわしい資格の持主はあるまい。彼によつて語られる労働談義をきくとき、誰でも自ら汗を流して働くのと同じものを学びとることができた。

生徒たちの中に労働を蔑視する者がいてもやがて彼らはその誤りを覚り、働くことの尊さを理解し、労働に対する信念を盛り上げた。結果からいって、労働尊重の教育方針もその目的の半ばを達したといつても差支ない。

日本人の欠点というよりも必要から習慣づけられた弱

点の一つは、相手に対して腹に思うことをそのまま言葉で表現しないこと、甚だしい場合には全くうらはらのことを言つて、相手の気持に迎合しようとするのである。これは卑劣な誠意のない不都合なことに違いないが、日本の社会ではそれが一つのかけひきとなり、また社交上のエチケットとして結構通用する。国内ではそれでもよいとして、これは外国、また外国人相手の場合には通用しないし、とんでもない結果を招くことにもなる。腹芸は役に立たない。実際海外でこのために日本人は誤解を招き、また損をするだけでなく、誠意さえも疑われる場合も生ずる。日本移民の排斥された当初の理由の一つもこれであつた。

一般人だけではなく国の外交の上でもこのために誤解を招いたことは少なくない。

人前で堂々と自分の所信を表現することは誰でも訓練を要する、まして言葉のちがう外人との間では一層むづかしいので語学は最も必要である。

語学ができてもらうことをずばずばと直言するには勇氣がいる。学校は渡航地として南米を重点的に採り上げていたのでスペイン語に多くの時間をさき、また英語会話を奨励した。これは一貫した方針で、外の教職員に新陳代謝があつても、語学担任の酒井祥州、アルテミオ・リカルテ両教師が開校当時就任してから閉鎖の日まで、二十四年の長い時日、学校の柱石となつて教鞭をとつたことから知られよう。

校長はいつも生徒に対して

諸君は一步外に出れば、一人の日本人として見られるだけでなく、彼らは諸君の一挙一動によって日本を見、日本を批判する、その意味で諸君は日本の代表者である。政府の任命を受けない外交官である、だから一言一行苟くも堂々として紳士らしくあることを忘れぬようにと訓戒した。この校長の指示を実践するために、語学を中心とする一方、正科目の中に本科生に対し、弁論練習の時間を設けた。

弁論練習の方法は土曜課業の最終時、一時間に三人の弁士（生徒）が、一定の演題のもとに十五分間ずつ語り、終ると指命された数名の生徒がそれを批評する。最後に教師が講評する。生徒はこれに対する問題の選定と実演を研究するので大きな勉強となる。熱心なのはわざわざ余暇を割いて都内で行われる名士の演説を傍聴し、その特長を学ぶ者などもあつて、これは生徒たちの人間的成長に満足を与えた。

のちに学校争議が起つて両派に分れた生徒が、学校関係の名士を訪問し、その主張を訴えたとき、その和解の役を買って出た浜口雄幸から

植民学校の生徒はあまり高い教育を受けていないはずの若年の人たちが、そろいもそろつて非常に雄弁である。一体どういう方法で教育しているか
という質問がでた。この方法をきいた彼が嘆息して「少し菓がききすぎた。これから弁論教育は少し控えたがよ

い。あんなに論じられてはたまらぬ」といったというが、卒直に自己を表現することは学校の一つの伝統となった。

女学校でなくて音楽の課目を採ったのは、どこの国にいつてもまごつかずに、その国の国歌や民謡などをうたえることが目的で、他の課目も教え方は実用的にいうことがモットーであつた。

広い自由な海外に思いをはせ、希望に胸をおどらせて学んでいたその年の七月には、九十二歳の小笠原吉次翁が一族四十六人を引き連れてブラジルに渡った。小笠原翁は武市安哉に一年おくれてその農場に移住した一家で、のちに天塩国美深で、百余町歩の未開地開墾に成功した開拓者の一族である。彼らは先年崎山校長から、南米談をきいて共鳴し、渡航を決行することになった。

出発のときは植民学校のあつ旋で、丸ノ内鉄道協会で官民有志合同の大歓送会を催し、席上鎌田栄吉、江原素六らの歓送激励の言葉があり、島村元帥の発声で翁一家の万歳が三唱された。大隈重信、板垣退助、渋沢栄一、後藤新平、団琢磨らは親しく、その自邸に翁を招待して、開拓に鍛えた固い手を握って前途を祝した。都下の大新聞はこの快挙をトップ記事で報道してくれた。この壮挙はとかく引込思案の国民に大きな刺戟を与えたと同時に、植民学校健児の血を一層沸き立たせ、発展的な気分が学園の空気をいよいよ高調せしめるに役立った。開校当時

の一挿話である。

大正八年三月第一回卒業式を行い、専攻科十二名、正料十八名の卒業生を送り出し、新学年には前年に倍して多数の新入生を迎えた。卒業生の中から六名はすぐ移民会社の社員に採用され、実務練習ののち、数月を出でずして、移民輸送監督となった。

移民船は毎回家族移民六百名乃至七百名を乗せ、ペルー国に向うのもあれば、ブラジル国に渡るのもあった。彼らはその監督として次ぎ次ぎに目的地に渡航した。二十歳未満の人たちが問題の多い移民輸送の責任を、どうして果すことができたか。彼らが移民機関や、汽船乗組員から、移民船として前例のない良い航海ができたと感謝と称賛をうけ、移民たちから有難がられたその行為は、校長の良いボス教育が核心をついていたことを裏書したものといえよう。

彼らは監督の肩書や地位にとらわれず、移民に奉仕する責任感から親切をつくした。船中に散らかすゴミを掃き集め、便所を洗った。船に酔ったものや病人を介抱した。しばしば移民を集め、乗客中の博識者を依頼して講話をきかせ、域はさんびかを練習するなどの会合を催した。スペイン語の講習会を開いて自からこれを教えた。

Sという青年監督は移民の子供が印度洋上で海に落ちたとき、救命袋を身に着けて躍り込んで之を助けた。そのため九千屯の汽船は洋上に一時停止せざるを得なかった。異例である。或る移民船がアフリカのダーバン

に着いたとき、沖人夫のストのために貨物の積み卸しができず、空しく十日間も碇泊し、汽船会社は莫大な損害を蒙り、移民は無聊に苦んだ。Mという青年は船長と相談し、移民たちの同意を得、これを動員して荷物を片づけ出帆することができた。突発事件にもおのの性格に従って臨機の処置をとり、すべての事務を処理して、彼らは各自の任務を完うした。

一七 八ヶ岳分校問題

八ヶ岳分校問題は失敗したが、成功したことだけに価値があるわけではない。過ちをみて仁を知るという古語のように、レセプスがパナマ運河で失敗しても彼の価値を増減しないと同じに、実現しなかった八ヶ岳も同様である。或る日、吉川巖という老人が植民学校に訪ねてきた。強引な要求に動かされ、英語の教師に採用した。大正七年二学期の開始も近い頃のことである。この人は創意はあるが実現力の乏しい風変りな植民狂で、教え子の藤森成吉が創作の中に自分を書いてくれたと喜んでいった。無邪気な爺さんである。諏訪中学校教諭時代に、八ヶ岳山麓の開拓に手を着け、途中で挫折、崎山校長に自分の素志を継いで貰いたかった。もとより何等の私心があったわけではない。彼の熱心な勧誘にこたえて、校長は大正八年暑中休暇を利用し、現地の視察を行った。

中央線日野春駅から、北方間近に見える八ヶ岳の雄姿は、文豪田山花袋をして、日本無双の高原美と嘆称せしめている。東へなだらかな裾を長くひいている、その高原の中央を念場ヶ原という。西に八ヶ岳の最高峰赤岳（九五六〇尺）が権現岳（九二〇〇尺）を南に控えて屹立している。

念場ヶ原の北によった方を「美しい森」とよんで、ここは甲信の国境に近い海拔三千尺の高地である。

南は釜無川の流域を俯瞰して、右方に駒ヶ岳（九八八〇尺）に続く南アルプスの連峰をながめ、また左手には浅間、金峰の山々をのぞみ、正面に遠く富士山が山頂を見せて、限界は甲府平に向つて東南に開け大景観である。高原は南東にゆるく傾斜し、比較的起伏が少ない。美しい森の裾からはこんこんと清水が湧いて、小川を成し、疎林には雑草が茂り、牧場地としての好条件を具えている。孔夫子は、仁者は山を愛す、といったが、山の好きな校長は八ヶ岳に魅せられてしまった。東京の郊外でままごとの様な実習をしている学生が可哀相だ。この高原で悍馬を駆るカウボーイ式の生活をやらしたい。持ち前の開拓欲が胸にたぎる。ここに分校を設けて、学生に自給自足の生活体験をさせ、開拓者の資格を完成させよう。

こう心を決めて山を下りた。

学校はまだ創業日浅いので、快適な構想であるが、即時着手には、主事はたやすく賛意を表さない。内外学校

関係者も賛否相半ばし、とくに渋沢顧問はその成否を慮ばかり態度頗る慎重である。

しかし全般的に事業が好調だったので、校長のこの熱意を断念さす何ものもなかった。

高原は清里村外六ヶ村の採草地だったため、この計画が発表されると、地元民の間に、賛否の同派を生じその反目が日にひどくなった。広大な高原で二、三百町歩の土地を使用することは、大局からみて殆ど問題ではないので開拓実習所を設けることは、歓迎する人が断然多かった。だが農民の蒙る損害を巧みに説き立てる反対者の説も有力で、これを煽動する地元ボスの策動も巧妙である。賛否の両論は日に月に白熱化して八ヶ岳山麓をゆるがしはじめた。抵抗が強ければ強いほど躍起になる性格の校長は勇往邁進いよいよ拍車をかけて、とうとう退くにひかれぬ立場にまで問題を押し進めていった。彼はその年の暮の押し迫るまで、十一回入峡して山麓を東西し、地元民の催す数十回の演説会に出演して、賛成派の要望にこたえた。

群衆心理は面白いもので、民権運動の明星であった土佐出身板垣退助の遠祖は、甲州の名将板垣駿河守信形で、また同じ馬場辰猪も武田家の勇将馬場美濃守信房の子孫である。何れも甲州と縁故があり、崎山校長が同じ土地の出身だったので、地元の人たちがとくに親しみをもった。歴史的伝統は争われぬもの、話が少し脱線したが、とにかく運動は翌春に持越して、遂に県民に訴うる

こととなった。甲府市における大講演会には江原素六が応援し、植民教育の上からその主張を明かにした。この回は長野幹知事が自ら歓待に力めるなど大盛会で、土地の新聞はこの状況を報道する、予期しなかった大きい話題となって人気を呼んだ。

当時県庁に提出する願書に添えた、四項目から成る分校設立計画概目一覧がある。これは校長自身の設計で、一読知事を感じせしめたもの。左に掲げて参考に資したい。

山梨県八ヶ岳に海外植民学校分校設立

計画書並に東京本校の現在

場所 山梨県北巨摩郡八ヶ岳山麓念場ヶ原

地積三百五十町歩

財団法人海外植民教育会

海外植民学校分校設立計画概目一覧

- 一、完成後の分校経営収支予算表
- 二、完成後の分校の業種別及所要人員表
- 三、分校設立事業予算概目表
- 四、分校設立事業遂行計画表

備考

- 一、分校の事業計画を五ヶ年とす
- 二、分校の卒業年限を三ヶ年とす。夏は主として事業に従事し勉強は冬期の昼と夏期の夜間を利用して授業す
- 三、学生が当校卒業の後は東京本校に送りて当分校の奨

学資金により専ら学業に就かしむ

(二) 完成後の学校経営収支予算表

一、収入之部

(一) 完成後の学校経営収支予算表

一、収入之部

項 目	反 別	其 他	金 額	説 明
農産物売上	三〇町	一五、〇〇〇円		農産物は当校に於て消費するものを除外して計上せり
乳製品売上	五〇〇石	一五、〇〇〇		
家畜代(屠殺)	二〇、〇〇〇斤	一〇、〇〇〇		当校に於て消費するものを除外して計上せり
計		四〇、〇〇〇		

二、支出之部

項 目	金 額	説 明
職員手当	九、七一五円	学生の労力に依つて得るものは之を省略計上せり

学 生 費	五、六〇〇	当校修業者は本校に送りて専門の勉学をせしむ
一般事業補充	三、〇〇〇	
肥料及借地料	三、〇〇〇	
奨学資金	五、〇〇〇	
学校備費	五、〇〇〇	
学立金	三、〇〇〇	
計	四〇、〇〇〇	

二、支出之部

雑務係	薪炭建築路築	
炊事其他	土	農閑を利用す
	地	
	道	
	路	
	築	
		一〇人

備考 常備以外臨時の仕事に限り農閑を利用す
若し不足を生ずる時は本校より応援するものとす

(三) 分校設立事業予算概目表

項目	金額	説明
建築費	一一、九四〇円	学生の労力に依り得るものは省略計上せり
職員給	四一、七二二	
事務及諸費	五、〇〇〇	
学生費	二三、七七五	
衛生費	二、一〇〇	
炊事及諸具費	二、三〇〇	
農具及諸道具	七、八〇〇	
畜牛費	一九、五五〇	
畜馬費	九、八六五	
小畜費	一、二〇〇	
種苗費	二、六六〇	
肥料費	九、七五〇	
予備費	六二、三三八	
計	二〇、〇〇〇	当校に於て自給し得るものは省略計上せり

備考 学生の実習に依りて得るものは之を省略す

(四) 分校設立事業遂行計画表

年次	新墾地	耕地	牧草地	敷地	牧場	植林	計
初年	一五町			五町		一〇町	
第二年	一五町				五〇町	二〇	
第三年	二〇町					二〇	
第四年			一〇町			二〇	
第五年			五〇町			二五	
計	五〇町		五〇町	五町	五〇町	一九五	三五〇町

備考 一、牧場に限り必要に応じ年々適宜拡張することとし、本表には之が計上を省略せり

(二) 完成後の業種別所要人員表

備考 常備以外臨時の仕事に限り農閑を利用す

若し不足を生ずる時は本校より応援するものとす

(三) 分校設立事業予算概目表

備考 学生の実習に依りて得るものは之を省略す

(四) 分校設立事業遂行計画表

備考一、牧場に限り必要に応じ年々適宜拡張することとし、本表には之が計上を省略せり

二、植林は天然の潤葉樹を保存し足らざる部分を実播の苗木を以て補い其下草は肥料用を目的とす

三、本事業に要する新入学生数は初年二十五名、第二年三十五名、第三年四十名とし、第三年以後は 百名を定員とす

海外植民学校現状(参考)

所 在 東京府荏原郡世田谷村

設立資金 参拾五万円

開校年月 大正七年四月

法人認可 大正七年十二月文部大臣より財団法人たる認可を得

設立目的 我国今日奔流の如き勢ある海外発展の機運に際し教育上の見地より人材養成によりて世界に貢献せん

とするもの

現在学生数 百 貳 名

内貳拾六名専攻科中等程度卒業生収容

七拾六名本科高等小学校卒業生収容

職 員 数 貳拾貳名

本校の特色 本校は学と業と兼備の人材養成の為又学費乏しき青年に勉学の道を与える為自営自活の方法を採るものなり、故に六十頭の乳牛を飼育し毎日平均二石の牛乳を搾取販売し、又農園を経営するものなり

卒業 生 廿八名本年第一回の卒業生を出し既に十名は南米南洋の天地に働き居れり、尚此外二百十名の卒業生あり之は植民学校前身時代の我が経営せる学生労働会にありて各自、大、中、専門学校を卒業、大部分は朝鮮、満蒙、南米、南洋に活躍するに至れり

之等は別紙趣旨書に記しあり参照されたし

大正九年一月二十日

東京府荏原郡世田谷村下北沢二丁目

財団法人海外

植民教育会

主幹 崎山比佐衛 (印)

ここは今中央線小淵沢駅から小諸に通ずる小海線が走り、また八ヶ岳の附近には戦後農民センターや開拓訓練所ができて時代の脚光を浴びつつある。校長は四十年近い前にここを選定しこれを開拓する方法として酪農経営

に着眼し、綿密な計画をたてたり学生に自給自足の生活をさせて創造開拓の意欲を盛り上らせ、農村の貧しい二、三男を收容して一石二鳥の効果を収めようとした。哲人エマソンはいつた。

教育は一部は言葉であり、一部は崇拜であり、また一部は労働でなければならぬ

わが国でこれを実証する事実で、最高度の人材を生み出したのは、塾生が師の松陰を尊敬しつつ、共に米を搗きながら学んだ松下村塾であろう。

人は労働によって何等かの創業生産に参加するとき、人間の生甲斐に対する自覚を喚び起すものである。あの雄大で爽涼な八ヶ岳の偉容に親しみつつ、自然を開拓し、いわゆる天地の化育を助くる移植民者を教育するには、労働は決定的な課目である。労働会を経営してきた彼のように教育の要素として労働の真価を知り、あらゆる機会にこれを実践しようと努めた人は少ない。支那事変後に満洲の農業開拓が唱えられ、その拓士速成の開拓道場が設けられたとき、筆者は満洲から派遣されて現場を視察し、おおよそ近代人の住むに耐えない杜撰な施設と、開拓経営に指導性をもたない粗放な扱い方に驚いたのであったが、校長のこの計画はそれに先だつ二十年、国策の名において莫大な国費を使つて行われたそれに比較して、計画書が示すように誠に懇切周到なプランであつた。

着眼が早かつたのは、時代に先んじたわけで、有識者

にすらその卓見は理解できなかったが、それは朝野の人たちの開拓への理解と関心の低級さを物語る尺度であったことにもなるし、校長の植民教育者として高邁な識見を示すだけで終ったてしまったことが惜しまれる。

一九一四年七月に突発した欧州大戦は、この前年一九一八年に休戦となつて関係各国の間に構和が進められ、大正八年六月にはベルサイユ条約が調印された。戦争の一時的景気に過ぎないわが経済界は、国民上下の浮華な生活態度も手作つて、その直後から漸次不況の兆を示し、さしも活気を呈していたあらゆる事業は次第に萎んで、のちには火の消えたようになった。

このような世界の大勢と、国内の動きをよそに、校長は八ヶ岳山麓を東奔西走していた。賛否の論が灼熱化したころのこと、江口定条、左近義弼らはそれぞれ現地を視察し、そして進歩的な構想のもとに建てようとする分校に期待を示した。

八ヶ岳分校設置は予算二十万円を別途計上し、この財源は有力者の寄附に俟つ方針だったが時すでに遅く、終戦に伴う不況からわが財界も予想以上に深刻の度を加え財ある者も出し惜しみをする空気となつて、三百五十町歩の土地貸下が認可となつた年もそのままに暮れ、翌十年学校にはスト騒ぎが起り、次ぎから次ぎと不利な条件が集中して、本校の維持すら容易でないという事態になった。現地における賛成派の人々や、県庁の好意ある

取計いも裏切らねばならないような羽目になって、とうとう最後に土地は返上し、彼のすぐれた着想は人々の胸に無限の愛惜を残して、葬られてしまった。

一八 学校スト（一）

海外植民学校の騒擾は学校が小さかつたに拘らず長期に亘ったこと、各階層の人物が登場したこと。問題の焦点が変貌していったこと、その結果広く世間を騒がせ、深刻で規模の大きかったことなどが普通の学校のストとちがっていた。

スト騒ぎは単に一つの事件であつた以上に、これによつて受けた影響は大きく、発展途上にあつた事業が蹉跌を生じたばかりでなく、多年苦樂を共にした同志を四散させ、校長の性格の上に大きな影響を与え、そのものの彼の運命を動かす転機となつた。その意味で不愉快なことの連続であるが特筆大書すべき割期的な事件であつた。これは彼を思い植民学校を知る人たちの話題になるが、しかしその事件の全貌を把握したものはない。大象を撫でためくらのたえではないが、互いに局部的な理解のもとに回想されているに過ぎない。

大正十年二月、学生労働部の生徒が結束して校長に談じ込んできた。この学年度の卒業生のうち三名の生徒が落第と決定したことを労働部の生徒が知つて、それを

きっかけに学校に対する不平と、寄宿舎生活に物足りない事情も手伝って、この談判となった。話し合うのでなく、生徒の抗議が詰問的なので校長は虚を突かれた形である。

生徒の口吻からいろいろのことを読みとった校長は、学校に対し、労働部に対し努力の足りなかったことに自分も不満を覚えていたので、自責の念に駆られているとき、生徒が強硬に出たので面喰った。彼はとうとう理性を忘れ感情に支配されてしまった。何ごとか己れを叱りつつわめきながら、上着をぬぎ、下着をとり、しまいは下帯までとりのけて全身一糸もまとわぬ丸裸となって躍り狂うという異様な行動にでたのであった。校長はもしか狂気したのではあるまいかと思つた者さえあつた位でさすがに意気込んでいた生徒たちも息を呑んだ恰好でしゅんとなって引き退がり、このときは一と先ず納まつた。そのとき山形県方面に旅行中だった吉村主事が帰校すると、生徒代表数名は、例の学生の落第取消しを当面の責任者である彼に迫った。改めて職員会議の結果、三名のうち二名だけ卒業を認めることになった。尤も会議では同調したあとで「私は卒業さしてやるように主張したけれど」と生徒に弁明する職員もいたことは事実で、こんなことが事態を悪化してゆくものようである。

この結果多数の生徒が憤慨して、その問題以外に学校当局の態度、日常の授業のことなど数ヶ条をあげて解決を迫り、問題は更に発展した。校長は前日の例もあつた

ためか陳謝すべしと言い、主事ほか数名の職員は、学校は不完備の点においては生徒の寛容を乞わねばならないが、謝まるべき理由も必要もない、校長のさんげの気持は生徒たちには理解されずして、軽侮せしめる恐れがあつて円満解決の道ではない、というのであつた。しかし校長として事情はどうあろうと彼の自責感陳謝によつて救われるものと考えているらしく強く主張するので職員一同校長の説に従がうことに決めた。

それは霧のような春雨にけふる日であつた。全校生徒の円陣をつくつた前に、校長夫妻はじめ職員一同大地に手を突かんばかりにして、誠意の足りなかつたことを謝まつた。悲壮な光景であつた。

その結果、開校以来の責任者であつた主事はその地位を退き、ほかに職員一名、講師三名を整理して陣容を新たにし、事件は一段落して新学年を迎えた。

大正十年四月の新学期から崎山校長は名実ともにその任務を果す意気込みで立ち上がった。同志社大学出身の少壮教師此島喜三郎を教頭の地位にすえ、従来の課目の一部を調整して、一層語学教授に重点をおいた。山室軍平が来て神中心に一同が和らぐように激励した。校長は職工ズボンをはいて登校する日が多く、校舎内外の清掃整頓、実習強化などに力を注ぎ、生徒の出欠その他規律実践を強調して自ら陣頭に立ち、教頭以下の協力のもとに学園の空気は緊張したが、しかしその時日は余りにも

短かった。

五月の終りごろ生徒代表と称する数名の者が校長室に於て数項目から成る要求書を校長の前に提出した。内容は教師陣を強化して学科を充実すること。卒業生の海外渡航を自由ならしめる方法を講ずること。学校経営に関する実情を明かにすることなどであつた。学課を勉強することとを第一とする生徒の気持からいえば、校長の力こぶを入れていることは第二義的であつて、もつともつと学科を充実して貰いたいという要求である。校長の真意をまだ理解していない新入生は一層その要求が強い。それはよいのであるが、それを訴える彼らは校長の努力を冷笑的な態度で批判したと校長は感じた。のみならず生徒の立場を逸脱して、学園の経営そのものに対して言葉を挿まんとしたので、押問答のすえカツとなつた校長はドン・カミロの差し上げたような大きなものではないが、そこにあつた曲木の藤椅子を振り上げ、"学生の分を忘れて何をいうか"とばかり、一声生徒代表を怒鳴りつけた。投げつけられて怪我をしたと生徒たちは宣伝したが、それほどの手荒なものではなかつた。

学園は蜂の巣を突つついたような騒ぎになつた。これはまだ学校への不平、一部職負に対する反感が解消しきらず、新入生の中には過激なのがあり、事が大げさになつたのであるが、いつも生徒全部が一致していたわけではなかつた。生徒の一部は都下の各新聞社を歴訪して、校長の暴力を云々したので、「毎日」を除いて各社と

も校長の武勇伝を一斉に報道した。この一団の生徒の行動は愛校の精神から、また生徒としての利益を守る念願から出たものでなく、むしろ学園を攪乱することを目的とするのではないかと見られるほどの行き過ぎが目立った。職員は挙って校長を支持する。但しその中には熱意に乏しい批判的な態度のものもあって、生徒を増長せしめる嫌いもあったが、一方真に勉学を志しているマジメな生徒たちまで漸く旗色を明かにして、学校を擁護するために結束したので、学生は二派に分れた。

分れた学生団は競争の形で新聞社を訪い、学校創立委員の私宅を訪問し、互いに自説を主張して、校長排斥と擁護の鬭争が、入り代り立ち代り展開された。創立委員であり会計監督であった浜口雄幸はその騒ぎに驚いて調停に乗り出した。政治家中でも人格者として尊敬されている人が学校の立場を説明し、諄々として生徒たちの言動を戒め、意気銷沈の校長を大いにべんたつして両者の間を執りなしたので、双方これを諒とした。六月十四日講堂に全校職員生徒相会し校長、学生共に過去を反省し、虚心坦懷勉学に励むことを誓い手を握った。壇上に立った浜口監督は学校の使命の重要なことを高調し職員生徒を激励した。普通の学校騒ぎであれば、これで解決したはずである。

騒擾事件は二期に分けられる。第一期に再び三度びスト騒ぎが続けられたことに就て、関係者また見聞者は誰

でもそのしつこいことを奇怪に思ったのであった。その真因はどこにあったかを、進行中ここで少し詮索しておくことが、簡単な記事を通じて成行を読みとるうえに便宜だと思う。

先ず施設経営の手違いで、これは財政的事情からであつた。学園には校舎、寄宿舎の次ぎに地理的に不便を補う必要から校長宅、外三戸の職員住宅を新築した。その進行中に八ヶ岳運動に半歳を要し、次で財界不況で募金は思うに任せず、予定した学校内部の充実を図る財源が漸く涸渇し、維持費も不足し借金で支弁することが起つてきた。

次ぎは、学校創業当時寺内内閣の後藤新平は、植民学校が一年に五十人、七十人卒業生を出したとて海外渡航に必要なパスポートのために心配することはないと言明した。その内閣が続いて彼がずっと外相であればどんな手を打ったかは別問題として、大正七年九月原内閣となつて内田康哉外相の態度は前外相とはガラリと変り、外務省の取扱事務者まで冷淡になった。もともと南米方面移民は家族構成で単独渡航者の面倒なことは解つていた。この為め閣僚中学校に好意をもつ床次竹二郎内相は心配して、浜口雄幸に呼びかけ、海外興業会社社長神山潤次を招待し、崎山校長と四者で打開策につき懇談した。その結果将来打つべき方法は考えられたが、卒業した渡航希望者を即時渡航さす方法は見出し得なかつた。こんなわけで学校を卒業しても海外渡航は容易でないと

なると、渡航の見通しなく青年を集めて国内での就職に不利な教育を施すことは、結果に於て人を欺くものであると、一部卒業生の憤懣が在校生に不安感を与え、学校不信の一つの焦点となった。

次ぎには校長が自信力を失った。崎山校長は積極的には偉くて強いが、消極的な守成の立場におかれると法人のような組織の中では弱い人であった。自分の信ずるところを語ると人を魅する熱弁家の彼が、弁解の立場にあつて、痛烈な質問をうけたり、逆襲されると、しどろもどろになり易い。対立が烈しくなると感情的になり彼の最大欠点である短気を起してどなる。労働会時代から二十年間の学生との間に安全べんとなる者の苦心がそこにあつた。校長として直接学生に接すると二ヶ月を出でずして、教頭を安全べんとしなかつた結果は忽ち正面衝突を起した。

財政的には苦しい、海外渡航は思うように運ばない、学校の授業では生徒に反抗される、天性守成の人でない彼は少しも進展を見ない境地に立つに至つて意気沮喪しはじめた。自信を失うと共に彼本来の美点は發揮出来ず、又強力なる支援者からはたしなめられ、一方同志同労の人たちの和を失わしめ遂にこれを裏切る結果になった。

植民教育会発足以来はでな運動が展開されると、それに加勢する有志の中には、自己のためにする便乗者があつて彼を取巻く。彼もちやほやされると悪い気持はせ

ず度量を示す。しかし政治運動ではなく目的は教育にあるので人事は特に慎重を要する。必要以外の人を自分のまわりにあいまいにしておくこと、そして不用意な言動を見せることは、大事を成す人の戒むべき処であるが、機会に乘じ順調に運ぶ間、彼は案外平気で、このことを注意すると喜ばない。結局逆境に立つと彼らの雑音が学生を煽つて飼犬に手を咬まれる例えのように大きなマイナスになった。

同時に業務が多端になりさまざまの論議や批判が生ずると、それに動かされ同志に対する彼の信頼感が動揺しはじめた。その雑音の発源地が彼の家庭にあつて、それを気づいてか気づかないのか制止し得ず、次第に自分までこれに動かされ、学園の誇りであつた人の和が失われることになり、富田幸次郎の如き有力な支持者をして「牝鶏が時をつくるのでは」と嘆声を発せしむるに至つた。

次ぎには有志の示唆に従つて財団法人組織にしたことが、つまずきになった。彼の性質はワンマンであつた。彼は独自の実行力によつて人を動かし、社会を動かし、己れの仕事を成就する総力をもつ人で、多数の人たちが理論づくめに決めたことを小心翼翼々として代行する柄ではなかつた。要するに財団法人は彼の事業の信用を裏づけるに役立った以上に、彼を束縛する厄介な組織だったのである。

こんな点についての簡単な説明は誤解を招く恐れがあ

るが 紙面の都合で止むを得ない。だが、事件進行の段階において、主なる原因を知っておくことはそののちの成行を理解するに役立つかと思う。

若し学生が最初の要求通りであれば、ここで学校当局の措置を静観しつつ勉強を続けるべきであつた。ところが一旦調停に服した直後また団結して行動をはじめた。生徒の運動目的は變つて、学校は浄材を集めて浪費し、金銭扱上不正な行為があると思ひ込み正義感から憤激した。校長の鞆もちから失職し徒食していた某が、事件が起ると生徒の黒幕となり、彼の弄する雑音に加えて、思ひがけぬ方面からの放送が混線する。こんなことが一層生徒を自信ずけて前よりも過激になつた。

こうして運動は再燃し前と同じ方法を繰り返す一方、夜陰に学園内を横行し一部職員に暴行を加え、家族を脅かすまでに悪化した。彼らは相変らず機敏に新聞社に連絡し、事実と逆に校長に不利な報道が行われた。当時の記事は今日の新聞紙ほど両者の立場をにらみ合せた批判的な扱方でなかつた。労働運動の勃興期だつたし学校ストは労資の闘争と同じようではないが、その風潮も手伝つて弱い生徒に同情したといえよう。記事訂正を要求すると新聞社は小さな学校の記事を大々的に扱っていることを学校に恩を着せるような弁明だつた。

騒ぎの進行中自称政友会壮士が生徒に加つて之を煽り、学校の会計を計いて監督の責任者である浜口雄幸をやつつけろと揚言する。正直者で責任感の強い政治的に

も一党の重責にある浜口としてはこれを聞捨てできないのは当然である。紛糾して止まない有様に浜口ら数名の創立委員は崎山に代る経営者を以て局面を收拾する以外に道はないとした。丁度その頃農林学校長の職を退いて閑地にいた高橋昌が收拾について浜口に進言した。学校経営の有経験者なので適任とみた監督はこの人に依嘱して学校の内容を細大洩らさず調査せしめると同時に、将来の経営案の作成を依頼した。高橋はその命に応じ騒ぎの中でその案をまとめあげた。その内容が学校に対し、好意的でない言い換えると不利であつたことは平素全然学校に興味も好意も示したことのなかつた彼が突如この騒ぎに乗じて、関与しようとした動機からその心事を批判し、こう断定しても差支あるまい。八月半ば校長は浜口監督から辞職を勧告された。この辞職は学園の全部から手をひくことを意味していた。弱気になつていた彼としては社会を騒がせた責任を追及されると致方ないと思ひ「二十二年間事業を共にしてきた……主事吉村理事を退いて以後教育会理事として校長に代り外部関係の仕事に専念していた……が同意すれば退く」旨を答えた。もちろん内心辞職の意志はなく、また辞職すべき筋合のものではなかつた。この時は創立委員も一派に分れて一方は、事情如何に拘らず退いて罪を天下に謝すべし、という主張は浜口、江口、志立ら三名が主で、崎山の力で出来た特志の事業だから円満に收拾して従来通り継続せしめよう、江原、富田道家、左近らはそう考えていた。団

は不在のため関与しなかった。前者は法人を重視する法理論であり、後者は人物に重きをおく人情論である。

浜口監督と吉村理事の対談は雑司ヶ谷、浜口邸の奥座敷で、午前十時から午後四時の長時間に亘った。情理をつくして運ぶ双方の話はいつまでいっても平行線をたどるだけで、譲歩の余地のない互いの立場から同一の結論を引き出すことは不可能であった。

「天下の有志から浄財をあつめて出来上った事業だから天下のものである。而も世人の疑惑を招くような事態をひき起したことは、崎山主幹としても、共に名を連ねたわれわれとしても社会に対し申訳がたたぬ。そこで全責任を負うべき立場にある崎山君は、潔ぎよくその地位を退いて罪を天下に謝すべきで、同君がその決心をしてくれたことはさすがに見上げた態度である。あとは関係者の手で世人の納得するように改革して建て直しをやり、われわれも不明を天下に謝する。このことは吉村理事の同意によって決定するのだ。」

要約するとこれが監督の主張である。これに対し一方は被告の側で謹慎の意を表しつつ受け答えしなくてはならないのだから、この対談はまことに歩が悪い。

「事ここに至りしことに就ては、校長はじめ一同深く自責の念を以ている。唯だこれに対処する意見のちがうことを諒とされたい。崎山の心血を注いだ事業に仮りに彼に大きな過失がありとするも、これに理不尽なる妨害を加える者に屈服することは、彼自ら永久に汚名を負う

こととなり、これを雪ぐ機会を得ざるのみか、貴下ら先輩に不明の名を負わしむる結果となる。思うに植民学園は彼によつて創業発展したるもの、他人の手にて経営不可能なるは勿論、思慮浅きものの騒ぎを理由に、彼よりこの事業を奪うことは、法的にも不都合を生じ、天下義人の等しく許さざるところと思われる。

責任者としては謬れるを糺し、誤解を一掃し、当初の目的に添い、有終の美を収めることこそ、道徳的責任を自覚するものの天下に謝する道であると信ずる。後進のために計らるる貴下ら先輩の厚意は感謝に堪えざるも、自分は義としてこの御指示に従い得ないことを遺憾とする。」

法人の経理は創業後各年度毎に、会計士東爽五郎事務所の監査を受けていた。寄附金募集費用が募集額の二割を超過したことを指摘注意された事実以外にはもとより何等不正はなかった。しかしかく非難される以上何か大きな欠陥があるのではないかと、細心で責任感の強い浜口監督は、心配の余りこのような態度に出られたものと思う。その点理事としては確信をもっていた。

評議員会の議決に俟つ外に方法はなくなつたので、八月二十七日丸ノ内中央亭で、海外植民教育会臨時評議員会を開いた。議題は「海外植民学校経営に関する件」である。出席者二十七名、廊下には両派の学生が静かに結果如何にと待期していた。司会者に促かされて起つた浜口会計監督は、堂々一時間余に亘つて植民教育会（学校

を含め）の経営状態、並びに今回の騒擾の問題点、財政状態について一々数字をあげて報告し、即ち經理に不正の点はないが、その経営の不合理なる事情を指摘し理路整然と報告した。終つて現当事者が自発的に退職され、新たな責任者に收拾を一任することが公正妥当であることを強調して満場の考慮を希望する旨の動機を提出した。

討議中小笠原義之は「崎山比佐衛にやらしていけないという理由はどこにあるか」と鋭く叫び、左近義弼は起つて

「形式は法人であつても有志の大部分は崎山を信じ、彼によつて大業を成さしめようと金を出したのである、実質的には崎山のものである、一片の決議でこれを取上げたり、止めさすことは許されない。飽くまで彼に経営せしむべきものである」

静かな発言であるが人々の心を動かした。討論採決の結果、浜口説は少数で否決となり、浜口、志立、江口の三創立委員兼評議員は名々辞表を即時提出して退席、そのあとに従つて今一人退席したのは高橋であつた。

こうして多年校長を助けてくれた三人の最も有力な大先輩と悲しむべき訣別をしたが、数年後に浜口大蔵大臣は、海外植民学校に毎年二千円の国庫補助をするよう、拓務省に斡旋してくれ、学校は長くその恩恵を受けた。

評議員会の決議によつて、校長はじめ幹部を追放できると期待していた学生一派と、その煽動者たちは、こ

の結果に失望するとますます激昂して、学園内には棍棒を手にした二組の生徒が数日に亘って、ロープをめぐらした内と外に睨み合つて対立しながら九月の新学期を迎えた。これを知つた江原素六は止むなく警視總監に電話して善処方を要望した。この事を内偵し静観中の世田谷署長は、總監の注意と同時に署員を総動員して、ロープ内に侵入する学生を一網打尽のうえ署に引上げ、生徒は懇々説諭ののち解散させ、介入煽動者は拘留したので自称壮士も遂に弁当代に有りつくことができなかった。長期に亘り当時としては深刻な騒擾もこれを最後に終止符をうち事件は表面上落着した。

一九 学校スト (二)

スト事件はこれで一応落着をみたが、その結果は内攻して一層深刻になっていった。これからあとは、第二期に入る。いくら行き過ぎであつても、生徒は純情で、而もこれだけ両派ともに頑張ったことは、さすがに万里波涛を超えて海外に雄飛しようとする猛者連が揃っていたことによる。

この騒ぎのため有為な十数名の生徒を失ったこと、同時に社会の期待に失望を与え、その信頼を半減せしめた損失は莫大なものであった。一段落と同時に崎山校長は責を負うて校長を辞し、再び経営の重責に当ることと

なった。財団はこれを受理し、代うるに創立委員たりし青山学院教授左近義弼を校長事務取扱に依嘱し、校務を処理することにした。

極度に疲労した彼は、満鉄の事業及び満洲の新らしい社会を視察し、知己を見出したい望みと、これによつて気分を一新し疲れを忘れるため、十月中旬満洲に向つた。この旅行について同行者の越智義秀の記述を借りる。

「崎山先生は大正十年十月より翌年に亘り、満洲、朝鮮に旅行されました。その際満鉄総裁早川千吉郎氏の依頼により満鉄沿線を「南北南米踏破三万哩」の題下で大講演をされたのであります。演壇に上った先生の身体からは炎が燃え輝くようで、聴衆一人一人の心底に非常な感激を与えたものです。講演会が終ると、その土地の有志たちと座談会を致しましたが、先生はみんなにこの土地に墓を建てられるようにと熱心に諭されました。夜床に入る前必ず夜具の上に端座して、お世話になっている先輩や、内外の校友のために祈りを捧げて居られました。朝な夕な祈りの人でした。

また満洲至る処に大砲の弾丸をかざった戦勝記念碑が建ててあるのを見られ、日本も今後鉄砲や軍艦では、何れの日か必ず行詰まるといわれました。そして日本はどうしても鎌と鋤をもつて世界に乗り出すべきである。これほど強い武器で而も世界に歓迎される武器はないといわれました」

講演日程

十月二十四日	滿鉄本社重役及幹部
二十五日	南滿洲工業専門学校
二十六日	滿鉄本社社員
二十七日	大連中学校
二十八日	南山寮
二十九日	大連高等女学校
三十日	朝鮮銀行大連支店
三十一日	大連商業学校
十一月一日	大陸青年団
二日	日本基督教会
三日	基督教連合婦人会
四日	大連高等小学校
五日	南滿洲工業専門学校
六日	大連第二小学校
七日	大連第三小学校
八日	中華青年会（中国人）
九日	大連第一小学校
十日	大連第五小学校
十一日	大連取引信託会社
十二日	旅順中学校
十三日	旅順師範学校
十四日	旅順第二高等小学校
十五日	旅順工科学堂
十六日	大連取引信託会社
十七日	大連取引信託会社
十八日	大連取引信託会社

旅順第一高等小学校

旅順公学堂（中国人少年）

旅順民政署

十九日 旅順警察署

連実科高等女学校

二十日 大連美以基督教会

二十五日 基督教青年会

十二月 四日 普蘭店市民

五 日 瓦房店市民

瓦房店高等小学校

瓦房店公学堂（中国）

六日 熊岳城高等小学校

熊岳城青年会

七日 蓋平公學堂（中國）

蓋平青年會

八日 大石橋高等小学校

大石橋市民

九日 當口高等小学校

〃
〃
宮口商業学校

當口市民

二 十日 鞍山高等小学校

鞍山市民

十一日海城尋高小學校

海城市民

十二日遼陽公學堂

〃	遼陽高等小学校
〃	遼陽市民
〃	十三日奉天公学堂
〃	十四日奉天基督教青年会
〃	十五日奉天中学校
〃	〃 南満中学堂（中国人）
〃	十六日奉天高等小学校
〃	〃 南満医学堂
〃	十六日奉天高等女学校
〃	十七日奉天公学堂（中国人）
〃	〃 奉天城内小学校
〃	十八日奉天基督教会
〃	〃 基督教青年連合会
〃	十九日奉天商業学校（中国人）
〃	〃 国立高等師範学校（ 〃 ）
〃	二十日奉天病院従事員
〃	二十一日撫順高等小学校
〃	〃 撫順炭礦教養所
〃	二十二日撫順永安台高等小学校
〃	二十三日撫順炭礦市民
〃	二十四日奉天東洋拓殖会社

旅行から帰って六年も経てば「南北南米踏破三万哩」の講演もトウの立った感じだが、実際はその内容は千変

万化、いつも聴衆に新鮮な感興を喚び起さすのは弁舌の力というのか、重役でも、児童でも、男性でも、女性でも、相手に応じて活殺自在、その興味を捉えることは彼の得意の壇場で、演壇に立った彼は水にかえった魚である。半歳にわたる心労のあとでも壮心なお盛んな半面は盛沢山な日程や、この記事の内容でもわかる。

東京の方では学校経営の上に問題が多くてしばしば帰京を促すが要領を得ない、とうとう財団から吉村理事が急使に立って、現地にいつてみると、前記のような日程がずつと長春まで決まっている。「学校のこととは宜しくやってくれ僕にはこれが柄（がら）に合っている」といった調子で彼にはイヤ氣がさすと、他に代ってくれる者があるときはできるだけ避けようとするくせがあるので、学校のことではすっかり腐っていたので、こんな態度に出たのであった。満鉄に諒解を得て日程を変更し、奉天以北の講演は主要地に止どめ、長春を経てハルピンで打ち切り、朝鮮は僅か一週間ですませ、翌年の一月下旬に帰京した。

学校はいよいよ経営難で、役員会議では種々の方面から検討されたが、彼は校長の名義でないのを楯に、自分は労働部の仕事を担当して学校経営の責任を他に任せようとした。それまで親身になって好意を尽していた富田幸次郎にその任務を転嫁させようと試み「学校設立の全責任を負うべき君が傍觀的態度をとるとは何事か、みんな君を助るために心配しているのだ君はとんでもない考

え違いをしている」と大いに富田からたしなめられてしまった。局面打開のために有志の間に奔走しつつ、新学年を開始して一ヶ月後のこと、今度は渋沢顧問から相談相手になることを遠慮すると宣告された。顧問もまた彼の態度を心配したのである。

或る日、吉村理事に対し「今日渋沢顧問から」このころあなたの御相談には私は安心がもてない、若し学校経営に私を必要とするようなら、吉村理事の責任で御相談ある場合には、お話に応じるから能く打合せて方針を立てるように」といわれた。それで僕は遠慮するから、万事学校のことは君にやって貰いたい」というのであった。渋沢顧問がいくら婉曲に話したとしても、これだけの意志を表明したことに對し、その警告の意味が那邊にあるかを反省することがなく、案外平然とした彼の態度は不可解なことであつた。しかしその心事は遠からずして事件の進行によつて明かにされた。この場合学校の責任を一応外したい彼にはよい理由ができたわけである。

当惑した理事は折よく療養先から来た吉田理事と共にこの立場にいかん処すべきかを相談した。

吉田は学校の維持発展の道が開けるなら、同志間の関係は心配しないで、顧問の意見に従うがよいという。しかし理事の態度としては崎山と共に、顧問に對しその心事をただし、崎山に對する不安と誤解の理由をただし、これを説破して取り除くことが、真に同志としてとるべき方法であつて、若しそれが希望通りにならなければ理

事の方が辞すべきであつた。ところがこの事業を意地にも完成さしたい、また成敗によつて心を動かさないその性質に加えて、更生に対する烈々たる意欲にもえているので、この立場におかれても離れようとしなかつたことがあやまりであつた。自分のやり憎い立場を承知しつつ吉田の説に同調し、二十年間の同労者であることに安易感をもつて、彼の心境に深い観察と注意を払わなかつたことは、人心の機微を知らぬ馬鹿正直であつたこと、今一つは渋沢顧問に信任されているという得意な氣持が、意識しなくとも増長していて、その態度に永久に学校を支配する意志ではないかと、人々をして娯解せしめる点があつたのではないかということも想像され得る。

そのあと崎山の案で労働部を切りはなし、特別会計として、彼は希望通りに労働部の責任者となり、学校の経営を吉村理事に負わせることに決め、その協力者として越智義秀を理事に依頼した。これより先き「植民」編輯者坂本正雄まず袂を別ち、崎山信義は北海道に去り、同窓の友で一時教会牧師を退き事件後学校に来て英語教授を担当し、彼を助けていた宮之原信次郎も、彼の態度に飽き足らずして一年余で去つていった。此島喜三郎は北米に渡り、大島喜一は南米視察の途上にあり、最近に至り吉田常太郎は健康を理由に京都に移つたので、創業時代以前から彼と苦楽を共にしたものは吉村、越智の両名を残すだけであつた。

労働部は財政的に独立できる定収入があつたので、そ

ここに納まった彼は生活を保証されつつ昔にかえって得意の勧誘につとめた。学校は早くから赤字で減員して少数になった教師の給料さえ辛うじて支払う程度で、経営者は既に数ヶ月無給であり、新たに収入の道の開けない限り両理事は給与の出どころもなく、依然無給の生活を続けなければならぬ境遇に立たされた。それでもまだ両人は彼を信賴して、その不利な立場に甘んじ東奔西走を続けた。大正十一年八月理事は伊香保の山荘に渋沢顧問を訪うて行き詰まった学校の現状と経営案を呈示して協力を求めた。そのときの一ケ年の経営費は三万円弱であった。顧問代理として労資協調会専務理事添田敬一郎が直ぐに学校を訪問し、内容を聴取して施設の現状を視察し報告したので山を下りた顧問はそれに基づいて新学期前に案を立て、渋沢自らの紹介依頼する寄付者三十名を選んで、これら有力者から一人一千円宛の賛助を仰ぐことを想定した。顧問の意志が彼を再起させるための好意であつたことは許よりである。窮すれば通ずるたとえで、確信を得た両理事は即時この実現に着手した。

両名は連日一人一人虱つぶしに承諾を得てはその結果を喜び毎夜彼に報告していた、ところが、ある日数日前に訪問し承諾してくれた横浜の原富太郎から両理事宛に書翰が届いた。その内容は意外であり彼ら両名にとりては青天のへきれきだつた。それには

「先口御要求に賛成致せし処、昨日崎山氏来訪されて日く、私は海外植民学校には関係が無くなっていますの

で従つて責任もありませんから左様御承知を願いたい、との話に有之、貴殿らの御説明とくいちがい腑に落ちざる故一応御賛助の件は見合せ度につき不悪御諒承ありたい」

という意味が認められてあつた。両名は一日も早く岐山を元の地位に納まつて貰ひ立て直しをしたいと、衷清を訴えて賛助を願つたその直後だったから、彼の態度や学校の内情が原の腑に落ちないのは当然であつた。そこで、彼が自由にやりたいのだという真意が解つたので、即時に両理事ともに一切手をひくことを申出た。直ちに数名の評議員を集め三日後には、財団法人解散のための理事評議員会を開いた、このときの出席者は十名であつた。会は岐山理事長が司会し解散の止むなきことを説明しその決議に満場一致の賛成を要求した。理事の経過報告の発言も押さえた、また出席者の質疑は予じめ封じてあつたので、そのまま法人を解散して事業の処理一切を理事長に一任することを決議し散会した。大正十一年九月十四日のことであつた。

こうして半年間無給で最後まで頑張つた両理事も去り、解散直後に帰朝した大島理事も即時に別れざるを得なくなり一人の同志も残らず去つて、学校ストに起因した内部事情はこのような経過を辿つて、法的には植民学園は解消して名実共に一個人の私有物に還元して結末を告げた。

二〇 アンデス縦走

過ぎ去ったあとを顧み、冷静に批判すれば、学校ストの起りもその紛糾の果てしなかったことも、彼一人の負うべき性質のものでなく、経営に参加したものの共に負うべきであることは明かである。ただその結果において極度に社会の信頼を失い、最も親しい気骨ある同志の全部から見放される結果になったことは、彼自身の負うべきものであって、その收拾の心構えと方法の拙かったことは弁護の余地がない。彼は危く畢生の事業を曲りなりにも自分の手中に収めることができたが、その犠牲は余りにも大きかった。果してこうするために他にもつと公明な手段にまつことはできなかっただろうか。彼が冷静を失い同志を信頼することのできない疑心のとりことなったために、その事業を蹉跌せしめ、彼のもつていた尊いものの一部を失ったことは惜しみても余りある。

だが嵐は去った。学園はもとの静けさにかえった。ここにはもはや発洩とした前日の精気は乏しかったが、彼がいやでたまらなくなっていた法人組織を解消して、一切を自己の意志によって支配できる形になって、自由な行動が許されるようになった。しかしその自由はさびしい孤独な自由であつた。その孤独は一切を失つて一人孤高の道を行くものの孤独ではなくて、曾て彼を内から外から充たし支持していた多くの真実なものから離れねば

ならなかった孤独だった。

法人の解散手続きを終ると同時に、その帳簿書類一切は一応検察局の方に提出を命ぜられた。騒擾中の世評に注意を払っていた当局として、これは当然の措置であったが、翌大正十二年三月には、内容取調べの結果何等不審の点のないことが明かにされて一切の書類は返還された。財産であつた物件の一部を処理して負債を返却し、未払給は各人よりの寄附として、或る程度の整理を断行した。賛助者に多くを期待することができないので、学校を縮小して一層簡易化し、主力を労働部に注いで財政の強化に寄与せしめることとし、労働部寄宿舍は「植民義塾」と命名した。こうして細々ながら事業を継続する方針が確立し、彼は名実共に校長の地位に復し、今井修一に学校事務を担当せしめ、田岡貴義を労働部の業務に当らせることとし、片野敬之助はこれに協力した。今井は海外植民学校第一期の卒業生で、田岡は労働会拡張時代に参加し、何れも資性温和、敢て自己の主義を固執することのない勤勉忠実の士で、校長の指示に従順な人たちであつた。酒井、リカルテの両教師は学校における貴重な授業の中心となつた。

多くのものを失つた彼は尊い祈りの心だけは失わなかった。失わなかつただけでなく、ますます祈りの人となつた。人には我ままなようにみえた彼はいよいよ神を畏れた。乱されがちであつた気持は治まり、朝に夕に聖書研究と思索に思いをひそめた。同窓の先輩川井信水か

ら贈られた「耶蘇基督讃」などは手元からはなさなかった。そのころの彼の日常を知るために、当時在学した諸君の回想記を借用しよう。

「若葉と土のいきれの中で農業実習を終えたのは、夕日が物の影を長く地に引く頃だった。僕は新宿一丁目の万朝報取次所で配達をやり乍ら通学していたので、夕刊配達に遅れてはという心配があった。真実にはいやだった当番の便所掃除を、いい加減にゴマ化して帰ろうとした。

処がどこで見ておられたか、崎山（校長親父とお互いに呼んでいた）が出てこられ「清水君！一寸残って手伝ってくれないか」といい乍ら上着を脱ぎ、僕を井戸端へ連れて行き、そこにあったバケツで水を運んでくれと云い残しておいて、自分は箒を握り便所をゴシゴシこすりはじめられた。僕はまるで催眠術にでもかけられたように、何杯かの水を運んだ。その時の校長の態度といい、言葉使いといい、何ら威圧的なものはなく、極く自然で「悪かった」という反省の気持がジーンと頭のとつぺんにまできた。

そして「や御苦勞、きれいになったろう」と言いながら笑を湛えて「君便所は特に学校などは多くの人が使用するので、ともすると不潔になり勝だ。だからご不浄ともいわれる。不浄な所だから尚更清潔にしておかなくてはいけない。人はうわべのことには気をつけるが、人目のつかない事には手を抜いたり、いい加減の事をやりが

ちだ。それでは社会というものは真実に浄化されるものではない。一家にしても、便所と履物の汚れておる家は精神的にも物質的にも円満性を欠いた生活をしている。だからね君！ 便所はいつも清潔にしておくように心がけるんだよ。そうすることは、とりもなおさず君自身の心の掃除をすることになるんだよ」と親父独特のねばりと情味溢れる言葉で、こんこんと説き聞かされた。この間時間にすれば数分に過ぎなかったのだが一時間以上も経過しているように思えた。時間に氣をとられていたので、少々むくれ気特で、やれやれと思ひ乍らそそくさと校門を駆け出した。

あれから二十四年、世の中も人も、自分の身の上にも、ずいぶん移り変りがあつた。第一校長がこの世に居なくなつておる。しかしあの時の校長の言葉心は今なお私の心の底に変わることなく生きておる。おそらく年を経るに従つて増々強く生きることであろう。何故なれば結婚後、あの時の吉葉を守り続けて来たお蔭で、三人の児の親となつてゐる今日、日常生活にこと欠かさず、三百余名の児童と共に、日々を楽しく過しておるからである」
(二九五二年十一月 在ペルー 清広亮光)

(前略) 次に崎山先生について思い出すままに書かせて頂きます。忘れ得ぬことの中で、その一つは、私が植民義塾で牛乳配達の時代でした。そのころ懷中也淋しかつ

たのに何を思つて買う氣になつたものか、私は新しい中折帽子を買いました。いつもそれを被つて牛乳配達をしておりました処が、或日配達の途中大雨にあい、塾に歸つてみたら無惨にもその帽子は紙の造花の如く型も色もくずれて哀れな姿となり、私もその時ばかりは雨が恨めしく思いました。

それでも時のたつに従い平氣でその帽子を被り氣にもかけず歩いておりました。

ところが先生はその無恰好な帽子に氣を止めて居られたのでしよう。或日曜私は人より遅れて食堂から出様とすると、「藤沢君ちよつと」と先生の聲が致しました。ふり返つてみると、先生が帽子を持つて私の方にツカツカと来られ「君これを被つてみ給え」といわれるので、私はそれを受取つて被つてみると、中古だが恰好はよし、また丁度よく頭に合いました。先生はこれを見て眼にシワを寄せて笑い乍ら「君に丁度好く似合う、僕はほかにあるから使い給え」といつて私に下さいました。私は喜んでこれを戴き、別に先生の御心を追究するでもなく相当の年月これを使用し乍ら無関心で過ごした私を、今更の如く恥かしく思います。

當時を回想して感じますことは、あのくぼんだ鋭い眼の持主の先生に、あの優しい反面のあること、また塾中に最年少の自分にあの心遣いをされたこと、而もあの帽子を下さる時でも、私の自尊心を傷つける事なく、極めて自然な態度で下さったこと、省みて若しあの当時先生

が、私の買った帽子を批評されたり、又先生自身帽子を私に与えたわけを聞かされたらと、今思い出しても身が縮りそうです。常に風采を気にしない先生が教え子の身なりに気を止められたこと、又あの遠大な植民論を説かれる反面に、私如きものに払われた細心な注意を思うと、自然に頭が下り目頭が熱くなります。（一九五三年八月パラナ州アブカラナ藤沢良之助）

好きな労働に親しみ、学生と食卓を共にして暮す幾年かの静かな楽しい環境の中にいて、彼の心もなごみ、曾ての嫌悪と失望に歪められた顔のくもりが拭われて、人をひきつける微笑が甦り、本来の面目に立ちかえった彼らしい姿が、両者の追想の中にくっきりと浮び上がってくる。学校には数は少いがまじめな勉学と労働にはげむ生徒たちが集まって、彼の体験と独創的な着想のもとに語る「植民の階梯」に胸をおどらせながら楽しく聴講する日が続いた。創業の時代とちがって先発の出身者たちの撓まぬ努力のおかげで、卒業生たちは校門を出ると、目ざす外地（多くは南米）に向つて展びていった。

ところが身の辺の平和にいつまでも満足のできない彼の心は再び動きはじめた。彼を動かす力の内容は複雑である。その詮索において彼が祈りの中にも、講義のときにも、その脳裡から離れない南米大陸は夢の中にも彼を招く。彼は多くの先輩を失ったが、しかし再度の大旅行を決意して、その野心的な希望を訴えたとき、そこに多く

の賛助者を見出した。中でも終始彼に好意を寄せていた
渋沢栄一、団琢磨、本山彦一、頭山満等は最も有力な援
助の手をのべてくれた。第一回の旅行ほど無理をして旅
費を心配しなくてもよい。家庭も子女は成人し、田鶴子
夫人も留守居には十二分の自信をもつことができた。条
件は整ったので第二の壮図についたときの彼は既に知命
の齢も過ぎて五十四歳であった。昭和二年（一九二七）十
一月二十九日、日本邦船墨洋丸の船客となつて知己校友
の心からの歓送のもとに日本人として最初の試みである
旅程に上った。この行大胆不敵にも彼はアンデスの高原
を縦走し、アマゾンの大江に浮んで下航せんとするので
ある。

南米の父と母とにことといて

その姫君にむこや送らん

彼は出発に先だち新たに英文聖書を求めてこの大旅行
の唯一の伴侶とした。船中では求めらるるとき船客に講
話する以外は聖書を播くことが日課である。十二月六日
には百八十度を通過し、太平洋上で十日にはマタイ伝
を、十八日にはマルコ伝を読み終えている。ホノルル、サ
ンペドロ、マンサニアに寄港して船中で年を越え、昭和
三年（一九二八）一月四日パナマ港を出た翌日にルカ伝
を終え、十日南米ペルー国カリヤオ港に上陸した。

船と別るときわが行く手の平安を祈り、読み続けたヨ
ハネ伝第六章の「わたしは生命のパンである。四十八節」
の聖句に彼はアンダーラインをひいた。リマ市では既に

有力な地歩を占めつつある校友の家庭に代る代る客となり、彼らの協力のもとに附近を視察するかたわら旅行の準備を整えた。

アンデス山脈は南はマゼラン海峡から、北はパナマ地峡まで六千七百五十キロに亘り、南米大陸を貫くバックボーンで、地質の上でも、気象の上でも、大きな影響がこの大陸に与えている。高度ではヒマラヤ山脈にゆずるが規模の長くて大きな点では世界最大の山系である。山脈は分派しているところでは、チチカカ湖を抱くアルピラノのような高原が多い。活火山を交えて高さ二万尺を超ゆる高峰が競い峙たち、その雄大なる偉容は神秘の靈氣をただよわせている。そこはまたインカの興亡にみられるような高原文化の幾多の秘史をかくして考古学者や史家の興味を唆る。彼はこのアンデスを南米の父と呼んでこれを敬し、恰も靈場に詣ずる人のように、身も靈も浄めて、ペルーアンデスの高原を縦走した。

一月二十一日在リマの校友たちの激励の言葉に送られてアコンカグワ号の船客となってカリオヤ港を出発し、翌日モリエンドに上陸して汽車でボリヴィアの首府にゆく。ラパス市は海拔一万一千五百尺の高所にあるが、しかしここは溪谷である。市内に百四十人の同胞がいて日本人会の設けがあり歓迎をうけた。ラパスを上るとボリヴィアアンデス中の大高原に出る。そこにビワ湖に十三倍するティティカカ湖がある。ウワキーから船で二百四

十五キロの湖上を渡る。一八九八年英人コンウェイが初登山に成功したイリマニ山は千古の雪の王冠を頂いて、その姿は首都で仰いだよりも鮮かに輝いて、サワマー岳もそれに劣らぬ山容を示しこの山水の美は雄大の極みである。彼は前回の旅行でアコンカグワ山をミュールで越えたのでアンデスは初対面ではない。プウーノで船を下りて汽車の客となり、羊、牛、リヤマの群れ遊ぶ高原を走ってラーラーヤーの分水嶺にアバサンナ駅に達する。今立つ地点は南米の父と母との結ばれている心臓部で、ここから南下する水は大湖水に注ぎ、北流するはアマゾンに落ちる。海拔一万四千尺、この駅に下り立つ旅人の顔は蒼白である。

汽車はウヤカリーの上流ヴィルコノータ川に沿うて下り、三月五日クスコに着いた。

クスコの町は平原ではない。ここはインカの遺跡で城の礎石は一個の石が高さ六メートル、巾五メートルもある。重さは幾万貫あるか大変なもの、機械力のない時代どうして築いたのか、或は今日知られていない機械力を使っていたのか、クスコを江戸と見て箱根とか白河に当る処には小石を巧妙に組み合せた砦がある。台であった岩の崩れた処では橋のように宙に懸っている。コンクリートではなく小石の組合せである。大石の城、小石の砦、これだけ見ても驚嘆すべき珍しい遺跡である。彼はその城石に腰をおろして静かに語る大石小石の悲しい昔語りを聞いた。コルベール博士によると南米の先住民

族は五十六種族で、インカ族は全盛時代には二千万人位居たと想像されている。宮殿その他主要な建物は金銀で蔽われていた。ピサロが残酷な破壊を逞うしてその金銀を奪い去り、当時の城の石垣で現在のクスコの町を造ったという。インカ人は日本人に似ている。西洋人はわれわれ東洋人を見分け得ないがインカ人は日本人たるわれわれを直ぐ判別するのも一奇であるとして、彼は善良な彼らに親近感をもつて旅を続けた。

クスコからアヤクチヨまで約三百二十キロ、非常な溪谷である。イスクチャから乗馬する外ないので、唯一人の日本人岩本若松氏の尽力で山の馬ムーラーを買い、イリマこと命名し、案内人も氏の斡旋で雇い入れた。数日来場を患い一日二十余回の下痢で休養を勧められる。

「前途定めなき旅なれば神の命を仰ぐのみ、」昼は日汝をうたず、夜は月汝をうたず」と示さる。わが畏敬するリビングストーンは「商人利のためにこの沙漠（アフリカ）を横ぎるわれキリストの愛に励まされてゆく、何ぞ能はざる事かあるといった。明日出発と決意す」

と日記に認めている。三月十一日、此日アンデスの峰は澄み亘り輝く雪の山々は壮巖である。これから先き日本人はいない。道はイスクチャ川に沿うて下る。高原を下りれば青草茂って牛羊が遊ぶ平和村である。リマヌンボという峠を越すころ雨大いに降る。夜に入り案内人が呼びながら歩く。二児を抱えた婦人の住家に入り、土間に一夜を明かす。翌日は深谷を歩いて夜は羊の皮を山と

積んだ原で南十字星を仰いで野宿する。テンデス山中で
の大川であるアプリマツクの釣橋を渡る。

危いので思わず冷汗をかいた。この下の水はウヤカリ―
に落ちアマゾンに注ぐのである。十四日はクラハシで
宿を得る。彼は二日間シヤボテンばかり食べ、この夕べ
食卓について感謝の声をあげている。

十五日千仞の底に見えるアワンカイ（プリマツク県庁
所在地）に向う。途中物凄い大雨に遇い山荒れ水増す。ホ
テルの主人の世話でアヤクチヨまでの案内人にカルロス
という土人を日給十二円で雇う。十七日出発。パチャチャ
カ河に沿うて下り、河を渡つて第三の峠に懸る。泊る度
びに案内人は酒手を要求しチイチャ（トウモロコシの
酒）を飲むので彼は悩まされた。河と別れて第四、第五
の峠を上下する時は土人の婦人を交えた道連れあり心強
さを覚えた。彼は暇あれば聖書を繙き学びながら旅を続
けて、読み終えたヨハネ伝の終りにこう書きつけた。

「アヤクチヨまであと五日間を要すべし、而も道は今
までに増して険難、心少しく不安を感じ、されど神は我
をして安全に彼地に達せしめ給うべし」怖るるなかれわ
れ汝と共にあり”のみ声をきく。リビングストンはわが
友なり、祈りのときのわが友なり」

彼はこの行で屋内で寝たのは七晩で、その他は岩窟や
土人の軒の下で寝た。このようにしてあられや、みぞれ
の降る一万三千尺以上の高所に上ること七ヶ所、そして
また一万尺近くも溪谷に下つて甘庶のできる家畜の遊ぶ

ところを五ヶ所も通って、電光形に屈折する険峻な道を上下し、アプリマツク、マンタローなど溪谷の断崖に懸る幾百尺の鈎橋に幾度か冷汗を流し、山中でも女を張り合う狂暴な男の行動に肝を冷やすなど、死地を越え飢渴を忍び、病と闘いながら十八日間の旅を終えて、日本人として最初の旅を成しとげた。アヤクチヨの町が見えたとき出発以来一度も嘶いたことのない彼の乗馬イリマニは初めて高いなないた。ここで別れる悲みか、無事に主人を送り終えた喜びか、動物の心は量り知りかねた彼も感極まり馬の首を抱いて泣かんばかりだった。さもあるう。三月二十七日アヤクチヨの町に着いた。

アヤクチヨはペルー独立戦争の終止符をうつた歴史的の場所、高原の端にある都会で人口一万二千、英米人が金鉱銀鉱を営んでおるところ、郵便局もなくリマ市に送る銀貨を安全に輸送し得る人は、石川貞市という日本人で、この町第一の信用ある町の元老で、その人が親切に彼を迎えてくれた。ここから自動車でマンタロー河に沿うてまた上る、アマゾンの上流の一つである此川の溪谷もなかなか深い。山崩れがあつて彼は三日間途中で露営し、人夫の道修理を手伝った。次ぎの山崩れは水が多く土砂を流した直後なので、彼は道連れになった土人の子供を一人抱いて通ったが、既に夜で山崩れの全景は見えなかったが、身の毛のよだつ光景だった。

メホラダーから狭軌の汽車が通う。高原に入るとアワシカヨ町がある。ここも一万二千尺の高地だが、この平

原には小麦、トーモロコシ、マメ、イモなど作られていて、入口二万人の町にも活気がある。どこにも自然の喬木のないアンデスにここではユーカリの植樹が茂っている。不毛ではなく植ゆれは育つのである。この駅から汽車は広軌となりオロヤを経て終点のセロ・デ・パスコ市に着く。アンデスの小都市は欧米人経営の鉱山都市で、煙突の煙で悪臭が鼻をつく。彼は語り且つ歌う。日く大アンデスを真に愛するものは金銀を掘り出す人ではなく、ユーカリ樹を植えて百年千年の計をたてる人であると

欧米人すでに金銀ほりとりぬ

のこる植樹は誰れのつとめぞ

セロ・デ・パスコ市（海拔一万四千尺）は世界最高の都会で、市とその周辺を合せて人口四万、日本人も少ない。彼は往復ともに非常な厚遇をうけた。

ここからウワヌコまでウワラー河に沿うて自動車で下る。大溪谷である。ウワヌコは県の主府、附近は甘蔗畑が多い。ここに星製菓会社の土地があつて沢田という人が支配していた。その人が彼を百キロ距てたパンパヤーグまで案内してくれた、谷が深く険しい道で途中数ヶ所で馬が斃れていた。日記には

「アンデス旅行中險処では十字架の墓標の外に、人や馬の白骨がしばしば転がっていたが死んだばかりのものは全然見なかったので幸いであつた」と感謝している。星製菓の土地の面積は山梨県位、ここにコカが作られ

である。彼は沢田氏一家の厚意を受け、ここに働く同胞の労を謝し、「またあう日まで」の別れのさんびかを共にうたつて帰途につき、セル・デ・パスコからオロヤを経て四月十二日無事リマ市に帰って、懐かしい校友知己に迎えられた。要せし日数は五十日、険難の連続ともいふべきその行程は二千四百軒であった。

彼は大アンデスの中心部ボリヴィアからペルーまでアンデスを縦走した。危うい道で恐怖と不安を覚えないではなかつたが、父なるアンデスの懐深く入って、多年の悲願を達して、大きな満足と感謝のうちに、この大旅行におけるスケジュールの一部を果した。日記の中から彼のアンデス感想の片鱗を紹介しよう。

「先ず旅した地方を専門家でない私は勝手に南部高原を湖沼地帯、中部高原を溪谷地帯、北部高原を半湖沼地帯に分けてみる。而も曾ては全部が湖沼地帯であつたかと思う。南部ティティカカ湖の地帯は四方から水が注ぎ込んで出口がない、雨が沢山の土砂を運んで湖水を埋めている。幾千年か昔はずつと大きい湖水であつただろう、幾千年後にはずつと小さくなるものと思う。湖上を汽船で渡ると水天ほうふつ際でもない、入道雲を仰いで山上の湖水たるを忘れ大洋を航行していると思えない。

次ぎは溪谷地帯であるが高い峠から見下ろすと雲烟漂渺として、これもはてがないほどで、横にみれば大湖水であつたのがウヤカリ河へと切れて流れ落ち、水勢で右

も左も刳られ今日の大溪谷となったのではあるまいか。北のセロ・デ・パスコ高原も曾ての湖沼地帯で今なおフニン湖がある。ここは南に切れてマンタロー河となり、河の落差が緩いため純湖沼地帯の形を脱したもののまだ溪谷地帯になっていない。ペルーアンデスの斯る地帯が西海岸地方と、東アマゾン奥地にどんな影響を及ぼしたであろうか、興味深い大自然の変りゆく姿である。

この地方に大切なのは高山家畜のリヤマで、首が長く姿が美しい動物である。このリヤマが十頭二十頭と同じ形の袋を背負うてラ・パスの町に下りて来る、袋の中は何かときいてみると、これはリヤマの糞の乾燥したもので市民の燃料である。

リヤマのむれふくろ背負うて通りけり

何かと問えばおのが身のくそ

ペルーアンデスの雪線は一万六千尺で、これ以上は永遠に雪に蔽われている。日本の山などと異なり、雪線以上の峰の軟弱な岩は破壊され、硬い岩だけが剣を立てたようになっている。そして雪の雫が岩石をくぐつて湧き出る、仰げば凄壮であるが、俯せば山裾には青草が伸びて山羊がのどかに群れ遊んでいる。アンデスの高原には樹木はないが、美しい草花がおびただしく咲きほこつている。旅人を慰めてくれるのはソザロと呼ぶ鳥の美しい鳴声である。

どこにいてもこの鳥が朝早くから日暮まで賑かに鳴いてくれる。それは恰かも、お早よう、お休み、とわれら

を励ましてくれるかのように。

二一 アマゾンを下りて

父なるアンデスを楽しく走破した彼が、これから訪わんとするアマゾンは、二十世紀の後半に入った今日でも、まだ怪物とよばれ、その流域の奥地は神秘境とされている。河の長さはミシシッピ河に劣るが、延長六千四百キロは世界第二で、流域は六百五十万平方キロ、ブラジル、ペルー、ボリヴィア、エクアドル、コロンビア、ギアナの諸国にひろがつて、日本の約十八倍、まだ人跡未到の地が広く残されている。本流支流を合せると可航水路が八万キロに及び、本流はイキトスから河口まで三千四百キロの間は六千トン級以上の汽船が自由に航行しておる。水量は一秒間に五十万立方呎を大洋に吐き出すので、数百キロの沖合まで海水が濁っている。その水量はミシシッピの二倍である。水中には千二百種の魚類が棲息するといわれる、まさしく怪物である。

リマ市に帰った崎山校長は、同市にある校友や同胞から盛宴を張つての激励と祝福を受けて四月二十七日アマゾンに向つた。ペルーからはゴム採取にアマゾンへ行った日本人は少くなかったが帰って来た人はいない。彼は全然ちがった道、言い換えると本道をえらんで、この怪物である神秘境を探求して、その自然と契りを結びたい

のである。この旅行の目的は最初から人文方面よりも南米の山と川と平原と……自然を慕うて、懐かしきアンデスよ、懐かしきアマゾンよと心に唱えつつ進んだ、これが彼の心境であつた。

リマを出た汽車はリマツク河に沿うて急坂を十三回もスイツチバックして、二十三の鉄橋を渡り、二十四のトンネルをくぐつて漸く峠に達した。オロヤ駅に近いこの峠は海拔一万五千八百六十五尺、鉄道の通じている高所としては世界第一である。空気がきはくで慣れない旅行者は苦しむ、ここで大平洋は見納めである。汽車をすてこれから自動車でペルーアンデスを西へアマゾン低地に向う、二十九日ラ・メルセドを立つてからエスプーマで大部分は馬上（ムーラー）の旅である。自動車の運転手は聖臘をサントに献げ黙祷して出発するといふほどの生命がけの道である。車も通わぬ溪谷の危険さが思いやられる。遥かに溪谷を下つて森林地帯に入った。不毛の高原と森林との境界はその場に立つてみて不思議なほどハッキリしている。

三十日ジャバス、五月一日アナニアース、二日セツテントー・ウー、三日はノベントー・トレス、四日サン・ニコラス、五日メレアテレニアと宿りを重ねて、六日午後四時彼は無事エスプーに着いた。日記を見るとこの十日間に晴天は一日だけ、その他は毎日雨ばかり、常雨地帯で椰子科のものは葉の長さ四丈に余るほどで、あらゆる植物が茂りに茂り、無風のため枝も鳴らさず、聞ゆる

ものは名も知らぬさまざまな鳥の声だけ、彼は傘大の大きな草の葉を雨着の上に冠って、止みなく降る雨に叩かれながら馬上静かに黙々として、この驚嘆すべき大森林の声なき声に感激の胸を躍らせつつ毎日進んでいった。二三の見聞を日記の中から拾ってみよう。

この地方の山の中から沢山の人が買物にこの町（ラー・メルセド）へ出て来た。それらの内に予て聞いていたアマゾン奥の土人の一種であるチンチュ族が見えた。男女とも腰には刀を佩き、背には鉄砲を負い、弓矢を持ち、みな跣足である。婦人も同様のいでたちで額に真赤な入墨をしている。いよいよアマゾンの奥に来たなと思った。それからち彼らに谷の底や、木の 蔭の暗い所や、道の狭い所などで能く出会ったが、彼らは敢て危害をわれらに加えるものではない、却って尊敬してくれた。

アマゾン奥の蝶々の大きくて美しいことは世界一だといわれておる。その蝶が大森林の中にひらりひらりと飛んでいる。日本の蝶々は雄雌揃って飛ぶようであるが、どうしたわけかこのアマゾンの蝶々は一羽ずつ飛んでいた。

一体南米にはアリのが多い、彼らは肉食よりも菜食主義のようである。草木の若葉を自分の倉庫に取り込み醗酵させそれを食料とする。冬がないから年中行事のようだが、この作業は実に秩序の立ったもので、木の葉を切り

落とす役はきまっていて、それは運搬しやすいように若干多角形に或は楕円形に切り落す。そして運搬にも団体になると障害物の多い所から、彼らの大通とも称すべき道へ持ち出すものと、大通りだけを運搬するものがある。その障害物をさけるため恰も帆を立てたかのように、その一つ一つを縦に担いで運んでおる。何万という大群が芝の葉を一つ一つ帆を立てたように、担いで通る有様は一つの見ものである。かれらの途には塵一本も無いまでに良く掃除をしたのがある。

この国の馬子は歌は一つも歌わぬ。只だ口笛ばかりである。馬が谷間を順に上ってゆくとき、中に足ののろいのがいると、馬子が何十間も後ろから石や木の枝をそれに投げつけて叱る。その手ぎわはうまいもので、十回が十回目的のムーラーに当る。ある河に來たとき、我らは筏に乗って渡ったが、ムーラーは皆荷物を背負ったまま自分で浅いところを求めて渡った、さすがに慣れたものである。

五月七日から十日まではパテチア川をキャノア（丸木舟）に乗って下る、ペルムーズという無線電信所のある風光の美しい町に出た。ここで宿の附近に牛の遊んでいるのと、米を作ったあとの稲の刈株の大きいのを見て、彼はこの地方の将来を予想して感謝した。ここからキャノアは大型になり、八日の午前十一時ヴァナドス港に着く。ここで「アタナルバー号」という小さい河蒸汽

船に乗り換えた、汽船といつても小さな舟を二つ縛り合せて、それに発動力を据えたもの、船賃はペルムーブーイキトス間十四円七十銭。途中船を所々に着けて薪炭を積み、郵便物を上げる。

この日オンサ（南米の豹）が河へ水を飲みに来た処を水夫が打ちとった。殺生を極度に忌む彼は罪なき者が殺されるのを好まなかったが、その大きな皮を買ってみやげ話に日本へ持ち帰ろうと思ったが、言葉が通じないままに、剥いだ皮を彼らは河に捨ててしまった。この附近の状景を日記は語る。

「夜の景色はまた格別でした、生い茂れる森林に包まれた屈曲せる一筋の河、その森影を通じて夜の大空が見えます、名にしおうあの十字星、子供時代に土佐で見たあの星、父と語りながら眺めたあの星、これが世界の神秘、処女の境であるこのアマゾンの奥で見えます」

その夜はヴィクトリアで泊る。九日ここを立ってレギアに寄る。ここに北米の資本家の手で百万町の植民地が企図されていることをきく、流れが渦まいて船がグラグラ揺れる。サンターというところで日暮れ船中で眠る、十日今日まで三日間快晴で午後三時ウヤカリーの本流に出た。曾てクスコを出てアンデスの大溪谷に見下ろしたアプリマックから流れ流れてきた水の上に浮んだ。岸には伐り開かれた山の焼かれるのが見えた。この少し前の

ところで山口県出身の城与市という唯一人の同胞に会って語る。合流地点の川原の上には沢山の墓がみえた、川が大きくなってフカか、ワニか大きなものがここ、かしこに頭をもたげる。午後六時マセシャーに着く、四日の行程は三百余キロ。十一日はここで滞留し船を待つ、十二日午前十時イキイトスから来た三百一トンの「アルヴェルト号」に乗り換える。またあう日まで……のさんびかの一節を歌って「アナパルト号」に、船長にさよならをする。

十二日マセシャーを出発する、十九日イキイトスに着くまで晴天続きで楽しい旅であった。

河は広くなって無数の鶴や白鳥など大きな鳥が空にまゐり、水に遊ぶ。物と景と移りゆくごとに雄大である。十三日プカルバーに着いてレールを陸揚げする。ここから奥地のカンポ・デール・ソールまで三百二十キロ鉄道を布設する資材で、この鉄道会社は三千万円の資本で米独の合資だという。荷上げを終えて出帆したのは十五日午後三時。ブエローという神話的なローマンスをもつ一丈余もあるかと思われる大魚がいてよく跳ねる、この魚は水上でも呼吸するのであちこちでプープー音を立てて水を吹く。大河に出て空が仰がれ快晴なので、夜は美しい星が見られる。彼得意の三十一文字

ウヤカリ―夜航のきせんそらはれて

ほしかげこいし世田ヶ谷のそら

十六日の午後コンタマに着く、この川筋第一の港で人

口五千、町にはマンゴの並木あり、公園あり、学校あり、将来は大いに発展するであろう、五十銭で買ったみかんは持ちきれないほどである。十七日オレリアー、テラー・ブランカーに寄港する、十八日も前日同様で川幅はますます広く兩岸が低いので岸は見えない、明日はイキトスに着くので、お別れに「神共にいまして」の一節を日本語で歌って喝采された。彼は旅行中にめがねを忘れ万年ペンを失い、携帯の聖書は使徒行伝を終え、五月三日ローマ書第六章のところに最後に鉛筆で一行書き入れたきりで、それもうすれ、そのあと七月二十二日までではわからない。レクイナーに寄港していよいよ十九日「アルヴェルト号」はイキトスに着いた。彼はこの旅行の出發に当って特に激励をうけた渋沢顧問とサンパウロ州の地下に眠る小笠原九十一翁の墓前に、代理に参拝してくれと、供物を托された本山毎日新聞社長らに宛てて、鉛筆で左の便りを書いた。

謹啓 お変りなき事と存じます。四月二十七日リマ市を親しき校友の方々に送られて立ちました。私は本日無事イキトスに着きました。

みめぐみの守りゆたかにありませば

きのふも今日もさちのたびなる

当イキトスは南米大陸の真ん中、世界森林と水の真ん中、神秘処女の境であります。西せんかアングスの陰を越えざるべからず、亦幾多の森林と水とをくぐらざるべ

からず、東せんかなお二千余哩の長水を下らざるべからず。ペルーとお別れする日も近くなりました。御主はこの小さき旅人にこの莫大な地域に足を入るる事をお許し下さいました。顧みれば只だ感謝の外はありません。先ずは遥かに世界森林の真ん中より御健康の程祈りつつ御報まで如此申し上げます。

一九二九年（昭和三年）五月十九日

海外植民学校長 崎山比佐衛

イキトスからは英国のリヴァプール、北米のニューヨークへ六千トン級以上の汽船が通うておる。ここから千六百キロ下流がマナオスである。マナオスはアマゾン本流に沿う大都市である。ここを見物し、ここから彼は廻り道をしてマウエスを視察した。この初印象の記事は彼が後にこの地に移住後外務大臣に詳細報告したものの簡単な基礎的内容なので省略する。再びマナオスを出て本流を下り、七月六日アマゾン河口のベレムに着いた。

アンデス縦走アマゾン下り、これは古くはコンキスタドールスによって、そののちも欧米人によって開かれた処や荒された処の多い故地であるが、日本人としては未到の地である険難な山河を彼は無事に踏破した。彼は天災地変の外に盗賊の難、猛獣毒蛇の難、さまざまの場合を予想し覚悟するところあったが、それらの難に一度も会わなかった。だが、軍事探偵ではないかと疑われ、また土人から怖れられたこともあったが、胸に下げた十字

架、手にした聖書を示すと安心して通してくれた。偉な
るかな宣教者の感化。旅行途上から著者に宛てた消息の
一節に「十八日間一語も語らず旅した、しかし世界には
三つの共通語がある。それは笑うことと、泣くことと、怒
ることである。これを巧みに使えばいずれの世界でも通
行できる」と認めてあった。

彼は身に寸鉄を帯びず、祈りによつてこの大偉業を
打ち建てた。

以上の記事は彼の著わした、昭和四年十一月二十日、
海外植民学校出版部発行の「南米の大自然アマゾンを下
りて」の要約、抜萃である。簡に過ぎるのは紙数の関係
で諒とされたい。彼は七月六日ベレムに着いて、帰朝し
たのは翌昭和四年三月であるから、この間約九ヶ月の月
日がある。この間の旅行に就ては何らまとまった記録が
ない。

聖書には七月二十二日かその前からパラ（ベレムの旧
名か或は市内か）の南米協会仲野という人の宅に留ま
り、腫物の養生をしたらしく、二十九日使徒行伝第二十
章の終りに、われアマゾンに来るべき暗示を求めて祈つ
た、とあり、この日まで腫物痒くて不快、とあるから治
りつつあったのであろう。

前記旅行記の中に、第一回旅行のときサンパウロの奥
で最後に訪問した平野運平経営の植民地を十四年目に再
び訪問して、ここのペナの駅が、当時十三戸だったの

が人口一万の町となっている発展ぶりに感嘆し、またノロエステ線、ソロカバナ線などの森林だったところが、コーヒーの樹海となっているのを驚喜している記事などから曾遊のブラジル、アルゼンチンを旅行地図の示すように視察や構浜に有益な、愉快な旅を続けたであろうと想像される。

二二 南米移住

崎山校長のこの旅行が学術上専門的に高い意義をもっているとは思わない。しかし日本人未到のアマゾン奥地の神秘境を探查し、殆ど無尽蔵といってよい富源、広大な新世界のあるごとを我国民に実証し、紹介した功績は高く評価さるべきものであった。彼はこの大業を果して疲れも見せず一年四ヶ月を経過した昭和四年（一九二七）三月帰朝した。留守中の学校と義塾は共に着実に語学教育と実践に主力を注いで順調に進みつつあった。

第一回旅行の結果移植民教育の必要を痛感し、遂に学校を興した。彼は第二回の旅行に於て何を感じ、何を成さんとするのか、今度の旅行でエスプーに着いたとき五月六日の日記にこう書いておる。

「ここに来ますともう河が大変広くなって居ります。河畔に立って遠く上流下流を眺めていますと、四十年昔のことがありますと浮んで来ました。あの時は日本第一

の大河石狩川の岸でありました。今日は世界第一の大河アマゾンの奥であります。彼は北半球、比は南半球、かしこは雪降る国、ここは常夏の国であります。私の植民は木枯荒む北の国より、この周年緑繁れる 常夏の国迄ある。そして御用はこれからである。まだ日も高く河の水もハッキリと見へますので怖ろしい事もないので、服を脱いで河に入り行水致しました、これでアマゾンとも深い縁結びができました。多年あこがれていたアマゾン、而もその奥の清い水につかりました。とにかく日本人では私が初めてです」

マナオスからマウエスに立ち寄り、その植民地として好適な諸条件の具わっていることに心を動かし、越えて七月二十九日には「われアマゾンに来るべき暗示を求め祈った」とある。南米同胞の間をアマゾン旅行について語り、帰朝して一層これを語る機会の多い間にますますアマゾン移住に心動き、彼の祈りと願いは決定的なものになった。そこで例によつて崎山式にその決意に基づいて着々と、アマゾンを下りての旅行講演、旅行記の著述、南米土地購入に関する下準備、その次には移住資金の獲得と約二年余に亙る忙がしい日が続いた。彼を助けて著述をまとめ、平素身辺にあつた宇野円治（在学生）の「思ひ出の記」によると。

「先生は恐らく数百回に涉つて講演された、その講演の一つで深く私の印象に残つていて先生の面目躍如たるものの一つ、先生の同窓で貴族院に勤務していた石橋徳

作氏の幹旋で貴族院議員たちに講演する事になり私も同行しました。

愈々講演が初まってアンデスを語り、アマゾンを述べ、例によつて先生お得意の歌になりました。先生曰く「私は無器用で写真一つ撮れませんので写真の代りに、歌を作り歌いながら旅をして参りました。そこでその歌を一つ御披露申し上げます。

南米の父と母とにことといて

そのひめぎみに婿やおくらん

「父というのはアンデス山脈、母とはアマゾン河で御座います。姫君とは即ち父なるアンデス、母なるアマゾンによつて出来ました広大な平野で御座います。この大平野に大和男子を婿として送ろうというので御座います。皆様方は国家の柱石として政治をおとりになる方々で御座いますが、私共の若い者が沢山彼地に参つて働いて居ります。又毎月ブラジルに参ります船では沢山の同胞が彼地に移住して居ります。若し南米のお話、移民のお話が出ました節は、特別に同情の眼を以て見て頂くようお願い致します」例の名調子でした。

講演がすんで石橋氏が「写真が今日は早く出過ぎたようだね」すると先生はいつもの照れた時のくせで、あの指の短い方で鼻と口と顔半分上から下へつるりと撫でてアハハハと声高らかに笑われ、居合わせた大勢の人たちも爆笑されました。あの時の光景が今もありありと浮んでまいります。

次ぎは、先生は愛宕山や、仙台などの放送局から例の歌で放送されました。愛宕山の放送の時でした。原稿のあちら、こちらを削って、やつと四十分でできる原稿を作られ、それをマイクの前で朗読講演するはずでした。さて当日迎えの自動車で愛宕山に急がれました。ところがあとになって原稿を忘れてあることに気づき、奥様はじめ心配しましたが時間切迫し届ける方法はありません。私たちはラジオにかじり付いて結果如何にと待期しました。やがてアナウンサーの紹介も終り、講演がはじまりました。その素晴らしかったこと、まるで名音楽を聴いているようでした。文章としては名文でもないと思われる文章が、一度先生の口を通じて語らるる時、全く一変したものとなる事は皆さんも同感された事でしようが、それがまたラジオを通ずる時、制限された短い時間内の講演なので一言一句無駄がなく洗練された言葉の連続で、一つの芸術品という感じでした。今は先生が原稿を忘れたことなど忘れ、只だ惚れ惚れと聞き入りました。そして最後の挨拶の言葉に入ったとき、予告の鐘がチーンと鳴って、ほっとした気特になると共につくづく感じた事は、先生の頭の中には南米の大自然が完全に認識されつくしているということでした。その晩の放送がいかに素晴らしかったか、その後間もなく仙台の放送局から三晩連続放送の依頼があつて出かけられた事実でも明かです」

講演だけでも忙がしいその間に彼は厚意を寄せてくれ

る有力者を説いてアマゾン分校建設の資金を集める一方、既に予定地と定めているマウエスに代理として今井修一を派遣して再調査の上、分校用土地を購入せしむることにした。斯くて土地決定ののちいよいよ準備を整え、比較的少額の資金を以て、昭和七年彼は一族を挙げてアマゾンの奥地に移住することになった。知らず彼をして斯くも万難を排し、この冒険的な大事を決行するに至らしめたものは何であつたらうか。旅行日記の五月七日の記事の一節に

「この宿（ペルムデーズ）は屋敷広く庭廻り正しく垣を廻らしてありますので誠に心持よく見えました。しかし床が高いので牛が床の下にノソリノソリと遊んでおりました。特に前を河の流れて居る景色は何とも言い得ない程でありました。若しも私にしてアマゾンを下る必要がないものならば、私はこの辺に土地を撰定して永住してもよいとさえ思いました。」

また「途中の風光三十一文字」の我が祈りに「昔より高僧たちが庵を結んだ山の奥が尊い寺院となつておる、若しも私がこの世の戦いに御用が終つて、尚ほ余命があつて、何処かの山奥に庵を結ぶ事が許さるるとすれば、それは何処にしようか、それは此の世界一の大河アマゾンの奥の奥の何処かの沢に最後の場所を求めたいものだと思つてやまなかつた」

わがねがいしきりにさしぬアマゾンの

いずれのさわかいほりむすばん （再出）

彼に企業家的な半面と、宗教的な半面のあったことは何人も認めるところであるが、それにしても、これらの寂しい而も底力のある響きはどこから出て来たものであろうか、彼は労働会経営時代反省的であり、会を自分や学生の人間練成の場所として築き上げた、第一回旅行から学校建設の間、事業計画者としての面が大きく頭を揚げて、ある程度まで漕ぎつけながら粗野な生地と、わがままな弱点が崇つて半ば落第した。第二回の旅行は傷心を胸に秘め、聖書をかてとした祈りの旅であった。その間にまた「聖女テレザ」の書など愛読してその中に彼自身に共通するものを見出し孤独な旅の空で深い慰めを受けた。こんなことが彼の宗教的な活機を著しく露呈していたことを示す。住み慣れた世田谷も小さく固まつて今は彼の計画的活動慾を満たしてくれるものはない。苦労を共にした同志は悉く去つて昔を語る友もいなくなつた。そこに医しようのない寂寥があつた。この心事と環境にあるとき、彼の事業計画家としての手腕を発揮し、自然の裡に宗教的情操を満ち足らしてくれる魅力ある世界、庵を結ぶにふさわしい天地が遙かに彼を招いたとすればそれに答えることは余りにも当然なことであつた。だが彼にはそれ以上の大乗的な天与の使命があつた。

彼の知己野田良治の追憶談から聴いてみよう。

「崎山先生が何年頃から大アマゾンヤに着眼されるようになったか。少くともそれが先生のアンデス、アマゾ

ン大旅行よりも何年か以前のこととて、そこに着眼点があつたればこそあの大旅行を思い立たれたものと推測されます。

そしてこの大旅行によつてアマゾニアを目撃し、その実情を知り、その重要性を理解し、その将来を考慮洞察して画策し、且つ実行されたのですが、世界人類の福祉のために大アマゾニアを開拓し、そこに一新文明を創始するといふ大理想を以て、これが実現を期する第一歩として、まず海外植民学校の分校を建設することを決意し、地をアマゾナス州のアワエスに選び、なおその上に自ら全家族を引連れて現地に移住し、植民先駆者の歩むべき道を身を以て示されたことは、崎山先生なればこそ出来たのであつたと唯々感服嘆称する外ありません。

ここで私事にわたるは恐縮ですが、私は今から数えてざつと五十年前、ペルー在勤中同国領アマゾニアの片隅を覗いた時から、日本民族のアマゾニア移住の可能性について調査研究を始めていたのです。のちブラジル転勤を命ぜられ殊に一九三〇年から翌年にかけて満一ケ年間にパラ州、アマゾナス州及びボリヴィア領アマゾニアの一部を踏査した結果、アマゾニアの気候風土は決して日本人の移植に不適當でなく、日本民族はアマゾニアに於て繁栄し得る。否、世界の諸民族中ひとり日本人のみがアマゾニアの大自然征服の先駆者となることができるのだ、という結論に達し、爾来これを維持してきますから、私は先生と志を同じうする者の一人であります（中略）

彼はこの理想を実践し、且つその無限に拡がる夢を育てようとした。いよいよ移住と決まると、学校と義塾を今井、片野の同労者に托し、先輩、友人、知己に訣別の挨拶をし、永住の決意を以て、家族と共に祖国を離れた、出発のときの状況を教え子の一人茅根（石丸）哲子は、数々の思い出の中でこう語る。

「先生が御家族もろともアマゾンに渡るおりあのガタガタの校舎で送別会の集りを共に致し、又東京駅に壮途を送らせて頂きました。プラットホームを埋めるほどの沢山の方々の見送りの中に、まるで若人のような元気でみんなの歓送の合唱に和しておられました。まるで生れ故郷にでも帰られるような明るく逞ましい光景で御家族打ち揃って東京駅を立たれたのでした。

「私のアマゾン行は安住の地を求めんがためでもなく、事業を経営して金もうけせんがためでもなく、彼地に於て学校を経営せんがためでもない、疲れ果てて訪ね来ん旅人に冷かな水一杯を与えんがためである」青年のような熱を以て叫ばれた、あの夜のお言葉をこうして二十年近くなった今日なつかしく思い起すものは私一人ではないと思います」（後略一九五二、十二月） 校長の壮行を送るために当時在住していた満洲からはるばるやつて来て、東京から神戸乗船まで見送った一族崎山信義の最近に語ってくれた追想談の一節、

「私が帰国して神戸で別れるまでの間の校長の私に対するしみじみとした心使いは、私の生涯忘れられないと

ころでしよう。いろいろと思い迷うた私がどうにか生活していることを第一に 喜んでくれたのでしよう。直接キリストの道を歩まないのを悲んでも、とにかく思想的に一つのみちを歩んでいるらしいのをみて、それはそれとして許し、或は多少喜んでくれていたかも知れない。何よりもまた逢うこともないであろう別離にのぞんで愛情にあふれていたのかも知れない。彼はまた言っていた、「今度お別れに古い先輩知人を訪ねてみると、悪いことは忘れて、よいことばかり覚えていてくれて、とてもうれしかった」そしてまたこうも言ってくれました、「文学を続けるようならしつかりやれ、本を出すときは金を送ってやる（略）」

ここで悪いことというのは学校の経営につまずいたことを意味していると思う。同行する家族は校長、田鶴子夫人、長男茂、妻君子、一女精子、甥盛繁（松吾二男）との六人で、二男忍と長女慰与子その良人大川伝の三人は既に先行してサンパウロにいた。

七月七日神戸を発した大坂商船の新造船「ぶえのすあ いれす丸」は平穩な処女航海を続けて、船中では船長主催の敬老会に招待されるなどなごやかな日を送り、八月二十二日リオデジャネロに着いた。これから他の船に乗り換えてベレムに着き、強く引きとめられるままに一応ブラガンサ鉄道の沿線などで土地を物色したが好条件のところはないので、初志の通り「サントマリア号」の客となってマウエスに向い、一行は無事九月二十二日目的

のわが土地に落ちついた。マウエスのことは彼が外務省に提出した報告書に詳しいが長文なのでここに掲げ得ないことを遺憾とする。

二三、マウエスにおける生活（一）

アマゾン河の流域をアマゾーニヤと呼ぶ。それは五百六十万キロ平方の広大なもので、ブラジル領アマゾーニヤだけでも三百四十万キロ平方だという。専門家はそのアマゾーニヤの地質形成を地形によつて四つの地帯に分類する。それはヴァルゼア（低温地）イガボー（浸水森林）テーズ（中間台地）テラー・フィルメ（台地又は陸地）で特にヴァルゼアとテラー・フィルメの関係が判らないとアマゾーニヤの地理と、住民の生活様式は理解しにくいとされておる。ヴァルゼアは毎年の増水期に定期的に浸水する地帯で減水期には陸地となる。浸水するとアマゾン河最大の河床となる。堆積しつつある浮動性に富んで而も地味の肥沃な陸地である。従つて農耕も、狩猟も漁撈も、この地帯から発達しておる。浸水を受けるヴァルゼアの森林地帯がイガボーである。テラー・フィルメは確固たる土地という意味で絶体に浸水しない陸地をさして呼ぶ。アマゾーニヤなればこそ必要な名称で、アマゾンの地形を理解すればこの呼称を怪しむことはない。テーズはヴァルゼアからテラー・フィルメ

に続く平均水準より六メートル乃至十五メートル程度高い、浸水を受けない中間地帯の平坦地で、農業生活に必要な位地を占めておる。

アマゾーニヤの中央部がアマゾナス州で面積百八十万平方キロ、全国土の二一パーセントを占めている最大の州である。アマゾンの大支流マデイラ河の分派であるパラナ河を本流沿岸パレンチンスから汽船で約七時間遡行するとマウエス郡境に達する。なおマウエス川を航行すること三時間でマウエス町に着く。植民学校分教場として選定し、崎山校長一族が移住したのは、この町から航行二時間の上流地点にある。この地方の地質はテーラ・ファイルメで稲を始め諸作物に好適で、言うまでもなく常緑の地だから周年耕作ができる。土地を流れる小マウエス川は川幅六キロ、水の清いのが特色である。交通は主として天然の水路で、モーターボートによる。

一九三二年九月二十二日マウエスに着いた校長は、その三日後の日付で母校の教職員に宛て、次のような便りを寄せた。ここで母校というのは海外植民学校のこと、相次いで紹介する便りで、説明のないものは、母校の教職員に宛てたものである。

謹啓日本はもう秋も末近いと存じます。諸先生をはじめ学生諸君、益々御清祥の事と存じます。私共も皆丈夫で御座います。船中も皆元気でした。婦人達は少し船酔いもありましたが大した事もなく、私の如きは一回の食

事も休んだ事なく、神戸以来ベレム上陸迄に期夕百四回の集会を勤め、いつも七八十人から百人内外の出席者がありました。誠に恵まれた航海でした。

其上神足船長、館林事務長、八谷一等機関士の皆さんには特別御親切にして下さいました。そちらの皆様がこれらの方々にお会いなされたら校長一家が大変御世話になったと厚く御礼申上げて下さい。

八月廿二日リオに着きそれからラプラタ丸で卅一日ベレムに着きました。ベレムでは福原社長はじめ多数の皆様にお世話になりました。皆様大変な御活動で、事業の方も順調に進んでいると承りました。ベレムでマウエス行を皆様から止められました。然し私共は長い間の御約束でありますから進んで参りました。九月九日再び船上の人となりました。前の旅行にはジャカレー(ワニ)など見た事はありませんでしたが今回は沢山兩岸の砂の上に日向ぼっこをして居るのを見ました。ベレム迄来ただけでは真のアマゾン河はまだ解らないと思いました。嗚呼偉大なる哉アマゾン河よ。私共は彼女の岸に住み彼女の水を飲んで暮すのです。一家をまとめて来た私共には此処より外にもう住家は無いのです。雑事に取紛れるうちに日が経って、やつと去る廿二日自分の土地に落ち着きました。そして廿三、四、五日の三日間、私と君子と母さんと盛繁とがカポエラー(藪の浅い所。あるいは再生林)になった所を雑草を削りとり、そこで一同が食事をしました。今日は日曜で休んで居ります。

伊藤松之助君は河上一日程位の処に自分の土地があるので其処へ行くことになりました。宇野円治君が十月半まで手伝ってくれる筈で来ています。君は山内君の方へ船（カノア）を買いにゆき、昨夜船を曳いて帰りました。そのカノアで尾崎君も来ました。今日は尾崎君と宇野君がいて、今家内と日本の話をして居ります。

私は日本に於て考えた時は私共一家十人が四五年自から鋤を執って一生懸命に働いたなら、四五年後には半日働けば生活が出来るだろう。

そうなれば後の半日で勉強する自給自足の真の植民学校にする積りでしたが、ベレムを始め此地方の先輩の話によると其はなかなか難かしいとの事で御座います。實際出来ないものならば五年計画は十年、或は二十年かけてやる外ありません。只だ「終りまで忍ぶものは救わるべし」とのみ言葉を遵奉しましょう。然し何れにしてもマウエスの自然は満足です。水清く風涼しく、湖畔に立つて水に入れば夏の鎌倉よりも氣特が宜しう御座います。夜はまだ夜具は要りませんが朝方少し寒い位です。聴き慣れない鳥が啼き、又猿群がよくキャツキャツと叫声をあげます。とにかく健康の地である事だけは間違ありません。

私は祈って暮します。耕やして食います。庄野君も東君も出ました。其他沢山の植民者が去りました。マウエスに来る人は祈る人でなければなりません。鋤を執って自ら働く人でなければなりません。経済々々という人よ

りも忍耐一徹の人の来るべき所の様です。その積りで学校でも仕込んで下さい。それから土地売買の委任状は持参しましたが、地上権書類と納税領収証を忘れましたのか有りません。学校の建物の登記書類などと一緒にしてあるかも知れません。

探してみても有りましたら早速お送り下さい。それが無いと種々支障が生じますのでお願い致します。

日本出立の際御寄附や錢別を下さいました方々へは略儀ながら御礼状出す積ですが、一般の方々へは出し兼ねますから、年始状なり、明春の卒業式の案内状なり、又は一般に配布する他の印刷物でも出す時、私の名儀で御礼の言葉を申上げる様御手配下さい。勝敗期し難いマウエスの地故この事業報告は当方より申上げる迄はお控え下さい。

重ねて申します。南米特にアマゾンに来ようという人は、信仰の人、祈りの人でなければなりません。それから鋤を執り斧を執って自ら働く人でなくてはなりません。而して倦まず撓まず、余り経済々々といわず、暑さに耐え粗食に甘んじ、百年の将来を夢みつつ現在といえる我を、アマゾンといえる祭壇に献げて喜び感謝し得る人でなければなりません。諸先生よ、学生諸君よ、義塾の学生諸君よ、女子部の姉妹たちよ、世田ヶ谷の里よ、其処に吹く風よ、降る雨よ願くは天の御祝福の豊かならんことを。(完)

三年前に母校出身の伊藤松之助が先発隊としてマウエスに入って準備をしていた。後れて山内登、宇野円治らの校友も自ら開拓に従事しつつ好意的にこれを助けながら校長一行を待ちかねていた。そこで一応先発隊の建てた小屋に住むことになった。ところが椰子の葉で葺いた屋根はやや朽ちて雨が降ると屋根がもる。傘をささねば間に合わぬほどになっていた。そこで大急ぎで別に小屋の新築に着手した。老いたりとはいえ彼は開拓については経験済みである。夫人はもとより子女たちも一寸どこから手をつけてよいのか解らないのは都会育ちには無理はない。同行した盛繁は年少（十六歳）であつても北見の開拓地で父に鍛えられていたので、こんな場所では通常人の一人前以上の仕事ができるので、彼の片腕というよりも山仕事の方では主役をつとめた。更に年内は校友宇野円治がこれを助けた。仕事の順序や、その他の点も大体北海道の開拓と同じだ。ただ一方は北国で雪や寒さと戦うのに苦労したが、ここでは逆に直射する炎熱を忍ばねばならないといつても耐えられない暑さではない。地理的条件として著しく違うことは、祖国を離れて一万余キロ、日本に二十数倍する大国の真中にあるという点である。次の便りはその日から一ケ年間の経過を詳しく語っている。

（前略）長い間我が学校を援助して下さった本山翁（毎日新聞社長）が私の移住後学校顧問になって下されし事を喜んで居ましたが、御永眠なされし由果して然りとせば、御齡の上から御無理もないのですが誠に残念に存じます。翁は此世界に誠に有益な事業を残されました。願くは御遺業の上に、翁の靈魂の上に限りき御恵を祈る次第であります。

学校の方も新学年も始まっている事と存じ皆様御多忙の事と存じます。本学期間特に学校の上に、諸先生と御家族、学生諸君の上に御恵みを祈ります。御注意下さいました外務省への報告の原稿を同封致します。何卒清書して提出する様お願い致します。それからこの原稿を講堂で一度お読み下さっても構いません。発行された「開拓」大変能く出来ました。然し私手元には二号までしか届きませんのであとを待つて居ります。

少し此方の事申し上げます。既報の通り私共が此方へ入植したのは昨年九月二十二日でしたから山伐には少し後れたので心配しましたが、それから今日まで植附けたものは左の如くであります。（一）米一町五反、（二）マンヂオカ七反余、（三）トーモロコシ三反、（四）南瓜と西瓜二反、（五）バナナ百五本、（六）マモン二百本、（七）カフエー千五百本（実植共）、（八）ガラナ二百五十本、（九）カンナ二百本であります。中には間作の物もありますが、反別にして大体三町五反内外であります。

比等の作物は何れも上出来であります。元来以前伊藤君

が伐つてそのカツポエラーになっている所ですから作物は出来まい、寧ろ奥のマツトを伐つて作りなさいと伊藤君を初め先輩は申しましたが、百姓が家の前をカツポエラーにして置くことは仕事に不忠実な様に思い「勤労の鍬に不毛の地なし」という決心で祈りつつ小屋の傍からカツポエラーを開拓しました。米やトーモロコシは木灰を入れなければ出来ないと皆さんが申しますから小さい木の株まで焼いて灰を造り、之を度び度び撒布しました。マンデョカは時々サウバー（アリ）に襲われましたので、暑い時にその巢を一生懸命に掘り崩しました。

蟻殺しの器械と薬品は費用が掛りますから用いない事にし、手で一切を解決する事にしました。蟻はなかなか辛棒が強いので、蟻が勝つか、私共が勝つか闘いました。然し今日ではもう大丈夫です。マンデョカはぐんぐん伸びて最早蟻の襲来には怖れません。油断はできませんが先ずマンデョカに限り私共が勝ったわけです。ミリヨ（トウモロコシ）は播いた時は天気が続いたので三分の一しか生えませんでした。

然し根元に灰をやった為なかなか出来がよく、去る一日に収穫しましたが半作以上ありました。南瓜西瓜も時節外れの乾燥期の蒔付けで毎夕根元へ給水しました。そのお蔭か先日収穫しましたが時ならぬ南瓜が中庭に山をなしました。

カンナもまた乾燥期に植えた分は生えませんでした。が、これにこりて二百本は雨期に入ってから節を三つず

つつけて植えましたら一本も枯れず皆育ちました。バナナは私が一人で植えましたがこれも百五十本完全に育っています。然しこれら作物のうち米はたいしたものです。十一月末から一月廿八日迄の約二ヶ月間に播いたのですが、先の分は来週刈ります。大きな所は七尺近くあります。山内君は先生のお祈りの力だと申します。来て見る人みんなほめます。私共も喜んで居ります。其出来栄を見ますと全く神様が私共の努力と祈をお祝し下されたので、実際よく出来ました。中に這入ると私が見えない位で薄気味が悪い程です。或人は六、七十俵あると申しますが、私は四十俵あれば沢山です。私は知りました。百姓の喜びは努力した作物の出来栄えを見る、そのことが最上の喜びであります。

私共の家族は今十人であります。崎山比佐衛、妻田鶴子、長男茂、妻君子、次男忍、次女精子、大川伝（長女の婿）同妻慰与子（長女）その子約書亜（孫）崎山盛繁（甥）以上十人、まだ今日までお医者さんを煩わした事なく有難い事です。それから豚二疋、犬一疋、鶏二十羽、皆元気で彼等は小屋の周囲や作物を掘ったり徒らをするので柵に入れられたのもあります。

今は雨期の候で多くは曇天で、毎日一回は必ず雨が来ます。此処の雨は烈しくて鳴る光る降る流れる、そして前の川は大波となります。その時は私共も家畜も皆小さくなって雨をよけています。この大騒ぎは一時間位で何

処かにいつてしまいます。この変化は此処の生命ではないかとこの頃私は思っております。常緑の国にして周年平穩のみでしたら或は退歩しようとも進歩はないかも知れません。それから昼間は暑くても夜間は打つて変つて涼しう御座います。特に雨期の季節は寒くて夜着無しには夜は眠れません。

私共は亦小屋に二軒建てました。来る早々建てた小屋が十六米に六米、此頃建てたのが九米に七米、目下は前の建物に住んでおり、此小屋は中に土間をとり、そして一方の部分を四つに仕切り、私共夫婦と精子、茂夫婦、忍と盛繁、大川夫妻が各一室にあります。今度の小屋には米の収穫後大川一家が移ります。前には経験がなくて人を雇いましたが、今度の小屋は一切私共でやりました。私は曾て歌いました。

我が土地に小屋打ちかけて山ぞ焼く

開拓の一戦ここにはじまる

今私共は之を味いつつ一家一族楽しく暮して居ります。御安心下さい。

次に私共家庭の日常生活に就て少しく申し上げます。朝は五時半に起き、下の河で名々顔を洗い、一同食堂に集ります。普通の朝はさんび歌だけを歌い、毎朝順番に御祈りをし、朝の挨拶の握手をして食事をします。食事はフアリーニアにカスタニア若くはフアリーニヤの入ったジウム（カボチャ）のお汁をかけて食べます。此朝食の

時は私が必ず感謝を捧げることになっています。日曜の朝だけは、さんび歌、それから聖書輪読をし其の読んだところをお話をします。

偉いもので昨年七月九日神戸出帆以来今日まで船中では朝夕であつた関係もありますが既に聖書はマルコ伝、マタイ伝を終えて今は使徒行伝を読んでいます。若し宇野兄とか山之内兄とか校友で受洗している方が見えましてたら朝の集りにお祈りして貰います。中食は十一時です。此時は米飯にフアリーニア、前と同じお汁で頂きます。此時は名々が感謝して食べます。食後は午後一時頃まで休みます。私は五分間位眠ります。それからガラナ水を飲みまして仕事に出かけます。夕方は五時半か六時頃迄に終わります。

此時私は一番の年長者で酋長みた様なものですから特別の待遇を受けています。それはお湯を沸かして貰い盥で行水をしますので、その時マウエスの清い水に宇野兄が下さった硫黄を入れるのですがこれは大変身体に宜しく、正に上州伊香保の様な感じがします。それで常に申します。昼は河の方から涼風が吹くので、

ひるは鎌倉夜は伊香保どこに苦勞がマエナス（マウエスのこと）の里

然しこの待遇は酋長計りで他は皆上下十里一望に見渡す河が盥であり又井戸であります。それから御夕飯はランプをつけないですませ、終ると故郷の話、先哲や英雄偉人の物語などして暫時楽しみます。私はよく虫まけ土

まけを致しますので校友武田兄が送ってくれた薬品ミチガールを家内が塗ってくれます。そして特別疲労した時は子供たちと甥とが代る代る肩や腰をもんでくれます。私は酋長だけではなく、海外植民学校の校長でもありません。学生諸君若し君たちが卒業して此アマゾンに来られたならば、此酋長の肩や足をもまなければならぬことを今から申しておきます。それから就寝の時には八人の子供が両親の所に来て挨拶をして休みます。その時も朝と同様握手であります。それから名々必ず感謝の黙祷を捧げて就床します。こうして遠く世田谷の上に、母校の上に、先生たちとその御家庭と、学生諸君の上に今夜唯今お恵み下さいと、一度でも欠かしたことはありません。このことを御記憶願います。

世の進歩と共に我等は相見ざるも、郵便という機関によつて交通ができます。然し我等信者は祈りに依つて、何ものよりも速かに聖霊の恵みを交換し得ます。どうぞ皆様が信仰の道にますます進んで下さい。

一九三三、四、七 マウエスにて

手紙で要点はつくされているが、当時の体験者崎山盛繁の話してくれた実話には生々しい別個の感じがあつて興味が深い。風光雄大で水の清らかなこと、作物のよく出来ることなど校長の便りの通りである。当初住居は床もない土間で、伯父（校長）さんたちのベッドを急造し、若い者は暫く土間に寝起きをした。食物も慣れない間は

口に合わず、食卓を眺めていると伯父さんが直つ先に、これはおいしいものだね、といって手を出されるとみな黙つて食べたが、あまりおいしくなかった。毎日のことで辛かったのは家から二百メートル離れた川から用水を汲んで運ぶことだった。

移住した土地の面積は川に沿うて二キロの幅で、奥行には限度がなく開拓しただけ所有することができ。校長は先ず最寄りの最良の所を幅三百メートル分校の用地と定め、それに続いて幅百メートル宛家族一人一人私にまでくじで分け与え、名々開拓するように仕向けた。

それから動植物のことですが先ず到着早々驚かされたのはサルで、ガリーバといつて大きな日本ザル位のが沢山いて、これは声帯が太く声が高い。それが夜明け頃に家のまわりで八釜しく鳴いた。動物はその外にバク、シカ、ムクラー（ブラジルイタチ）、ハリネズミ、アリクイ、タツーなど、ナマケモノというのが扱つてみて徹底した修業？ をつんだ怠け者であることを始めて知った。アマゾンといえば大蛇を連想するが全然見かけなかった。川には魚が多くチャラキー（フナ）その他食用に適するものも多いしピラーニヤのように鋭いノコギリの刃のような歯でかみつく危険な肉食魚だとか、水蛇のようなくす気味の悪いものもある。ワニや電気ウナギは衆知の通りだが、要するに用心する者に恐ろしいものは何もない。

果物のことになるがバナナ、パイア（マモン）パイ

ンナツプル、それからマンゴ、ジャツカ（冬瓜の形をして甘い）パンの木など、自然生のもものではビリーバ（果肉はクリームのよう）アビユ（アマゾン柿）カスタニア（アマゾン栗）などがある。カスタニアは直径五寸ぐらいの実の中に栗の粒が四十位あって大きい。それが喬木の上から落ちるのをサルが拾って、そこでイガを除けようと苦心するうちに、上かち落ちて来たのが頭に当つて死んでいるのを見うける。果物のおいしいことは定評通り。

樹木ではカリューバ、イタウバ、プレウ・ブランカ、カリュバラーナ、カラパナウーバ、リツパなど建築用材として木材となり、板、桁、小ワリ何でもとれる適材である。ゴムの木は植ゆればよく生長する。椰子の葉は屋根を葺き又、壁まで簡単に出来るので初期の家は全部これで葺かれて居たが、一つの家を作るには相当の椰子の葉を集めて来なくてはならないのでこれとて大変な仕事であつた。アルマといつてトウのような長いや、シツポというツルなどナワの代用に使われて大変強い。そのほか自然はいろいろ必要なものを豊富に与えてくれる。それからポポニアといつてブドーのように結実して、茹でると主食の付用になるものあり。自然生でイナジャーというのは、木の新芽をとると形が筍に似て味は椎茸のようでおいしい。日曜日など良く忍兄と半日がかりで新芽を取り、伯母の得意のスシを作つて皆で味つた。アサイとアカバーというのは何れも美味い代表的飲料で、この

地方に最も沢山ある。

話が変わるが建築物は特種な材質を除いては熱帯で特に雨が多いので腐り易く、それは白アリが食うので長持がしない。アリといえば幾種類もいて、サウバーというのは大きく農家に取っては一番の強敵であった。雨上りの午後、女王アリの分巢の時などは一寸以上もある女王のサ克蘭ボ大の腰から下を天ぷらにするのもおいしい。タウカというアリは肉食で群を成してくるときはザアザアと音を立てる。これに人家を襲撃されるときは家に居る者は蚊帳の中に避難する。肉食で他のものは食わぬから案外害は少ない。トカンデーラというのが一番大きくて二寸ぐらいあり、非常に猛毒を持って居り、これにやられると一夜中は痛むと云われて居る。サソリもいる。一番いやで厄介なのは砂ノミで、これは皮下に喰い入って卵を生みつける。伯父さんの足の裏や爪の間からこれを針の先で掘り出すのが毎晩私の役目だった。

……聞いていると面白い話はつきないがこのへんで打切りとしよう。

謹啓 御無沙汰致しました。お便り有難く存じます。北海道の弟（松吾）の永眠のお知らせも頂きました。皇太子御降誕についての新聞も頂きました。それから「開拓」（母校発行）も参ります。学校が益々順調に進んでおります事は何より力強いことであります。もう卒業式も

終ったことと思います。遙かにお祝い申ます。

当地は今雨期で毎日雨が降っています。今年は珍らしい雨年だそうです。内の土地はテラー・プレーター（黒土）なので能く草が生い茂ります。今年も米を一町八反作りました。米だけはよく出来ました。茂の方も一町余、大川も八反計り作りました。カフェーとカカオと椰子類と多年生の果実とを除けば殆ど我等の理想である自給自足ができる様になりました。ファリニア（マンジョカで作ったアマゾン一帯の主食）を家内が製造する事も覚えました。而も土人よりも上手に造ります。そのお蔭で君子も慰与子も造る事を覚えしました。カンナ（甘藷）も搾れるようになりました。マモン（パイア）とバナナは豊かです。然し今年は魚類は少い年でした。豚は小さいの共に十頭います。これも来年になれば自給自足できます。茂にも大川にもいます。此処は氣候の良い所ですから、みのと笠があれば雨が降つても仕事が出来ます。教会の御金もお送り下さいました由待っております有難うございました。私は跣足が好きなのですが、手のひらと足の裏の非常に柔らかな質でなかなか固まりません。それで送って下さるブラジル屋の靴も待っています。

二月八日に林大使一行が来て下さいました。

大使はじめ皆さんが大変良い所だと言ってくれました。その外北海道の服部先生、南拓の臼井さん、海興の加藤さんも来て下さいました。だんだん当地の真価が日本にも解る事と思います。毎度申します様に当地は金は

獲れません。

健康に平和にアマゾン流域二百八十万方哩百年の大計を画しつつ暮す所です。卒業生に希望者がありましたら能く此の訳を話してやって下さい。此処は祈りと汗と、不断の忍耐と平和と、喜びと楽しみのある所、金と虚栄はありません。

××会社がご存じ通りの成行なので、建物やガラナ園も荒れてゆくので当地の人に対しても日本の恥になり、日本人会を創立して進みたいというので、昨年六月出来ました。今年は私が会長にされましたので、家の方も多忙ではありますが、勤める事に致しました。此の一年間に私の仕たい事は、五十戸程ある我村民（日本人）に登記をして各自に土地所有権を持たすこと、日本人会がガラナ園を経営して基本財産を作ること、寺小屋式でも小学校を設立すること、此の三つであります。成功を祈つていて下さい。

一九三四、四、二

マウエス

（文庫編集部注・XX会社は「アマゾン興業株式会社」のこと。この会社がマウエスの入植をはじめた。ただし、崎山一族は会社とは無関係に入植した）

二四、マウエスに於ける生活（二）

次ぎは四ヶ月後れて、学校後援の関係者に宛てた便り

で、母校で印刷し発送したもの、状況を知るうえだけでなく、参考となることが多い。

親しき皆様……謹で親しき皆様へ御一緒に申し上げますこと御容赦下さい。皆様には益々御清祥の段奉賀ります。私一家も皆丈夫で働いて居ります。御安心下さい。皆様には絶えず母校の為御同情下され有難う存じます。また遠い私共にまでお心を留め御便りや書籍など贈って下さいまして有難く存じます。此の山奥にありて皆様のお便りを頂く事は何よりも私共一家の慰めであり励みであり厚く御礼申し上げます。

今日は御礼に代え其後の事を少し申し上げます。私共が此処に参りましたのは一昨年（一九三二）の九月ですから早や満二年になります。

誠に速きは月日であります。此処は赤道直下であります。誠に氣候の良好な所で、住みよい所で御座います。其上私共の所はマウエス湖畔の西側にあり、日の出や月の眺めが殊に雄大であります。そして此湖には沢山の魚族が居ります。亦山猟も能くやります。私は狩は致しません。鹿や、アンター（バク）やカピバラ（水豚）の肉を土人が持って来ます。何れも肉が柔かで極めて美味であります。然しこんな山奥ですが不思議な程何もこわい者は居りません。私は小供の時は田舎で少し百姓をしましたが、長い間の都会生活で百姓のことは殆ど忘れて居りました。然るに此処に来てから諸作物には誠に仕合

せよく、米の如きは昨年の方がまだ食べきれず沢山残っております。稲刈は四五月でありますが、本年は昨年にもました豊作で御座いました。私だけで一町八反歩作り、五斗入の粳が九十三袋ありました。之は日本の水田に較べると少いのですが、山を伐ってそこへ作るのですから、若し日本の様に立派な水田にし肥料を施したならば、日本よりもずっと多くとれましょう。元来米は我がアマゾン地方が原産地らしい。その訳は四月頃川の淀みや思いがけない山奥の沼の端に行きますと自然生の稲の穂の出ているのを見かけます。本年私の作りました稲の中で最も丈けの伸びたのが六尺七寸、最も多く分けつし実ったのが三十穂、粒の最も多いのが一穂で四百八十粒でした。これは如何に当地方が米作の適地であるかを証明しています。

米作に限らず作れば何でも良く出来ますが、わけて果実類がよく出来ます。バナナ、パイナップル、パパイヤ等は申迄もなく、自然の野山にあるもの、或は栽培するものその数は算えきれず、味いつくせない。それでいつでも食卓の上が賑かであります。前日も小供が申しますに「何時も日本のクリスマス歳の時の御馳走の様だ」と、本当にそうであります。

私共は毎朝外へ出る前に一家揃ってさんびかをうたい、お祈して出ます。之は一昨年東京を立ちましてからまだ一回も欠かした事のない私共のお勤めであります。そして日曜の朝は三家（自分たちと長男、長女の家）の者が

揃うて少し長時間に亘り、私が聖者のお話や、皆様から頂いたお手紙や書物に就て話を致します。それから子供達や孫達も一緒に感謝してお茶を頂くのであります。其時は必ず祖国の上に、母校の上に、各地にある校友諸兄弟の上に、亦皆様の上に御幸福を祈るのであります。次に当地は毎度申すことですが今のところ現金はとれません。殆ど物々交換です。先日も英国から聖書販売人が参りました。彼は聖書を、米、鶏、豚何とでも交換してゆきました。鶏も大小の区別なく、一羽は一羽で、鶏一羽が聖書一冊です。こうなると鶏も誠に貴いものです。それから一日の労働賃金は二ミル（日貨五十銭位）ですが、日本へ手紙一通出すには一ミル要るので一日働いて二通しか出せません。

然し之が却て私共を落ち着きのある真の植民者としてくれます。金、金といって金に走ると植える者も金、作る者も金となりますが、真の植民者即ち真の百姓は百姓するそのことに妙味があるのであります。二宮尊徳先生は歌って申されました。

この秋は雨かあらしか知らねども

今日もつとめの田草とるなり

ほんとうにそうであります。諸作物は草さえ取つてやれば喜んでくれます。今日の本分を尽して諸作物に喜ばれる、これ純農の味い知る処、敢て他に何をか多く求めましょう。これはまた真の百姓に過ちなく一家団欒の幸福多く寿命も長き所以では御座いますまいか。私はマウ

エスに来て二年間の経験で、此処に来て百姓する者には次の様な心得が必要である事を知りました。題して『我がマウエスに入植当初の心得』と申しましょう。即ち

第一、入植者は徹頭徹尾自給自足のこと。

第二、主食その他必ず自力や余る程作ること。

第三、日用品は収穫物を以て交換すること。

第四、収穫物を現金で売った場合は其幾分若くは全部を不時の要意に必ず貯蓄すること。

第五、食料作物を作る余暇には、何を差しおいても必ず多年性植物を植えて我がアマゾン百年の計を立てること。

以上の様な心得で歩一歩と進んでゆきますならば我マウエスは大した資金を要せず、よし赤手で来た者でも五年も経てば細々ながら独立でき、そして十年も辛棒しすれば彼の北米加州や、我がブラジル南部サンパウロ一辺の立沢な百姓にも劣らない、寧ろ落着きのある我がアマゾンの百姓となる事ができます。何時も世界の景気不景気に追立てられて左右される様なやり方では折角此のアマゾンの奥まで来た甲斐はないと思います。

喜んで下さい。前日も親友からの便りに、私共が此処に来た事を激賞しました上で「まさか自分で手を下すのではあるまい」と書いてありました。私も人生六十の坂を越えたのですから友人がそう思うのも無理ではありませんが、之でまだなかなか元気なのであります。一昨年入植当初は事情も解りませんので小屋掛けなどには少々

人も雇いましたが、今では一人も雇っていません。耕作、小屋掛等は固よりファリニア（ブラジル芋の粉）バーニヤ（豚油）製造などに至る迄一切万事自分達でやつて居ります。

特にファリニア製造は家内が上手で土人の町で一籠六ミルする時、私方のは七ミルします。

私も入植当時は手の掌にマメが三十ヶ所も出た事がありました。今では立派に固くなり、とげも殆ど立ちません。

まだ日浅いので不自由は免かれませんが、それでも既に記しました通り日用品は収穫物と交換します。其上本年は少々米を現金で売る事になり、その幾分（日本金の八十円）位は不時の用意に貯蓄する事が出来ます。また此地の特産物たるガラナも一千本位植えましたが、全部着いて生々と育っています。外に豚が十頭、鶏が五十羽、犬と猫が各一疋、どちらも肉や骨が沢山あり肥え太って居ります。特に丸く太った犬は「エス」といって家畜中の愛嬌者です。来年お便りする頃迄には、乳牛一頭と山羊と綿羊一、二頭飼いたいと思っております。

皆様から御手紙や本を頂く外には新聞もとっていませんから世界の事は殆ど解りませんが、その代りに耳に喧噪の声を聴く事もなく、目に醜賄の犯行を見る事もあります。見るもの聴くものとしては朝夕の空のながめ、千古の森を潜って吹き来る涼風、枝から枝に轉り歌う美しい百千の小鳥の声、夜は鹿と猿との鳴く声が聞えるだ

けであります。大変長くなりました。

親しき皆様、左様なら、祖国の上に母校、校友皆様の上に神様の限りなき御恵みを祈りつつ筆をおきます。

合掌

二伸 何卒皆様此上共お便り下さい。私も自筆で一々お便したいですが、疲労と郵便費の都合で、此処に此の手紙を東京の母校で印刷に附し皆様に送って頂く事に致しました次第です。何卒御容赦下さいませ、左様なら皆様」

一九三四、八、二〇

マウエスにて

「前略 次に当地へ来たいという卒業生がありましたら真の植民者となる青年、即ち斧と鋤を手にとつて自給自足をモットーとする、妻帯した方を送る様にして下さい。また当地へ来る者移植民者は普通一般の荷物の外に是非共持つて参るべきもの（日本からか若くはベレムで購入して）を申し上げます。

一 仕事道具――斧一丁、ホイス（草刈鎌）一丁、テレサード（山刀）一丁、エンシャダー一丁、エンシャドン（木の根を掘る道具）一丁、此等の刃物を磨ぐヤスリ一丁。

二 衣類其他――労働服五着（上下揃）、労働靴五足（極めて丈夫なもの）、簑笠一揃、労働用靴下十足、冬期用手厚い帽子二つ（伐木時枯枝落下防止のため）、ゲートル三組、縫針大小若干、縫糸黒白若干、労働服用ボタン若干

(丈夫なもの)、靴修理台(簡単なもの)、同修理用道具、麻製蚊帳四丈半吊二張。

三 大工道具――鉋一丁、金槌一丁、ノミ一丁、曲尺一丁、墨壺一個、鋸若干、鳶口一丁、壁塗用鋤二丁。

四 収穫用其他道具――麻袋若くは天幕二、三十枚(粃乾燥用)、粃通し二、米通し一、バケツ四(一斗入水汲用)
五 薬品――ヨジウムチンキ、ホーサン、サリチルサン、メンソレタム、ヒマシ油、ワニス、吸出薬等座右薬品若干(以上)

次に習得して来て最も良いことは、A席機(むしろばた)を作ること。之を織ること。B靴を修理すること及び跣足袋を縫うこと。C唐箕と臼を造ること。D労働用の簑笠を作ること。E枳を割り、枳屋根を葺くこと。(以上)

一九三四、九、七 マウエスにて

移民した初めから数年間のことは以上の便りでよくわかる。単に事情がわかるというだけでなく、この便りの中に無限の教訓がある。

ここで同労者であって、第三者として当時の彼の生活を目撃した宇野円治の記事を借りてみよう。

「崎山先生多年の宿願であつたアマゾン移住が遂に実現した。これより先サンパウロにあつた校友伊藤松之助君は先生の依頼を受けてマウエスに至り、先生がアマゾ

ン旅行の節に予定された土地入手に尽力して、少しおくられてサンパウロからやって来た校友山内登君と土地の一部を開拓し家を建て、彼らの労働によって自活しつつ土地を守っていた。後一九三〇年に校友宇野円治君が今井先生と共にマウエスに到着し、山内君と交代一ケ年余伊藤君を助けた。然し山内、宇野ともに先生の依頼を受けた責任者でなく、単に手伝いに過ぎない。只だ一人伊藤君は初めかち責任者として先生一行の到着迄前後四ケ年間頑張り通しました。その忍耐と努力は崎山一家一族は勿論校友としても「忘れてならない」功績として銘記すべきである。先生の土地の前は特に見事で百メートル程の砂浜にあちこちに岩が出て、岩の上に枝ぶりの面白い木が生えている。美しい景色が特にいいのは朝日の上る時、満月の出てくる時である。河幅は約六キロ、清水を湛えて静かに小波を立てている。

朝日と満月が上ると、マウエス河は南から北へ流れ先生の土地は西側にあるので、忽ち金波銀波の六キロに渉る一大道路が作られたようで、白沙も木も人も忽ち金波銀波に塗られた感がある。実に偉大な景観である。先生は毎朝五時半頃定って起床された。楊子も齒磨も使用されず一つまみの塩を左手の掌にのせ、トボトボと水際に下られる。減水時には家から二百メートル程度あったがそこを毎日洗顔にゆかれた。そしてしばしば岩のほとりに朝日を受けて真赤に見える対岸を臨んで立つ静かな姿を見かけることがあった。長髪長髯の先生のこの時の姿

は燃ゆる柴の中に立てるモーゼの姿を思わしむるものがあつた。二十余年後の今月尚忘れられない。

家を建てるため山から材料をとった。そのとき面白いことがあつた。大きな生木なので三人や五人では担げない。ことに経験乏しく力の不揃な人たちに山道のことで危険である。談合しても良い方法がない。すると先生が土佐の山地で材木出しをする要領でやるといわれる。それは丸太棒を枕に並べてその上を這らすのである。当日は男女総動員で前方で綱で引く、後から押す。先生が音頭とりで、さてその日先生のいでたちはカーキ色のシャツ、ズボンに地下足袋をはき、ズボソの裾を紐で括り、頭にはパーリヤで作った帽子を冠っていた。眼は鋭く顔は髯で被われている。ひいき目にもスマートな恰好とも良い入相ともいえない。知らぬ人が夜道でも逢えば逃げ出すであろう恰好であつた。

いよいよ引出しにかかる先生は応援団のリーダー宜しく、旗の代りに帽子を右手に高く振り上げ「ヨーイコーラ」と音頭をとる（註土佐ではこれに文句が入って木遣りぶしという）みんながそれに調子を合せ掛声をかけ、引張るやら押すやらで問題の材木を引出すのに成功した」

植民地開拓生活の描写はこの程度にして、彼は、到着第一便で「ああ偉大なるかなアマゾン河よ、私共は彼女の岸に住み、彼女の水を飲んで暮すのです。一家をまとめて来た私どもには、ここより外にもう住家はないのです」と書いている。現地に来て長い体験者の直話をきいて、彼の出発当時の考えのまだ甘かったことをみとめざるを得なかった。外にもう住家はないのですということばは彼の意志の決定を示している。これは背水の陣ともいえる。そして文字通り祈りに明け、労働に暮れて、蔑年か過ぎた。南米の伝統のようになっていたエル・ドラード式（金銀を求めて飽くなき冒険）でなく、彼はピューリタンの開拓構神を堅持して、それを主張し、その通りに実践して少しもたじろかなかった。その強靱な精神力はあらゆるものを克服して徐々に曙光をみとめ得るようになった。尤も幾年かの労苦の中では、神園敞に嫁した彼の最愛の二女精子は過労のために病み彼と一族中の篤い祈りも看護も力及ばず、一女を遺して開拓地における第一の犠牲となった。この大きな試練を通過して植民地の開拓が一つの段階に到達し得たとき校長が、その本来の目的に一步を進めるべく、夫人を伴うて旅に出たのは千九百三十八年（昭和十三年）九月のことであった。この旅行において彼は百万の味方にもまさりていつも彼を勇気づけてくれる校友（彼の教子）たちを南米各地に訪問して交情を温めること。マウエスに建てようとする教会建設に対し協力を求めると。世界の動乱と、日

支事変の拡大に伴う母国の激動に刺戟されて去就に迷う在住同胞に勧告を試みることに。「時局に鑑み敢て一言せん」などの目的を実現することができた。サンパウロ、パラナ、アルゼンチンを訪ね、予定のように太平洋岸のペルーその他を訪問することはできなかったが、楽しい、そして意義深い使命を果し、彼は満足と感謝のうち千九百四十年五月夫妻そろって元気にマウエスに帰って来た。……この旅行に就ての資料は入手できなかったので詳細は後日に期する外ない……

旅行から帰った彼は実に怖るべき事態に直面した。あれほど空気は澄み水の清い健康地であることに安心して来たマウエスは、彼らが出発してのちマラリア（伝染性熱病）が発生し、伝染の勢は猛烈をきわめていて彼ら夫妻も遂にこれにかかった。その詳細は「植民第四号千九百五十三年九月海外植民学校校友会発行」の巻頭に載せてある「崎山先生の晩年とアマゾン」と題する神園徹の記事を借りてその真相を紹介しよう。一字一句悉くわれらの胸をうつ。

「先生がこの旅行に上られて間もなく、アマゾン一帯はマラリアの猖獗する処となり、アマゾン随一の健康地を以て誇っていたマウエスもマラリアのため犯さるるに及び、邦人植民者も多く之に罹り、数人の死者を出すに至った。留守を守っていた吾等も殆どマラリアに罹り、

崎山先生が帰られた頃が一番ひどい時期であった。先生は帰って来られるや、教会堂の建設と小学校の建設の事について語られ、今後ガラナを一万五千本増植、五ヶ年計画の書について皆に協議された。先ず教会堂建設に着手すべく、位置を選定され、吾等一団を集めエンシャーダ（鋤）にてリンパ（除草）を命ぜられ、一同脆まずいて教会堂建設の為に熱祷されたのであった。然るに先生も帰られて間もなく二ヶ月目にマラリアに罹られ、続いて奥さまも罹られ、我等一同殆ど枕を並べて倒れる有様となり、教会堂、小学校の建設、五ヶ年計画、グワラナ園の拡張も手を着ける余力を見出せなくなった。

先生も帰途船中でいろいろ計画されて来た事も実現不可能になったので、非常に残念がつて居られたが、マリアが下火になるまで一時転地の止むなきに至り、先ず一番ひどかった茂兄一家がパリンチンスへ転地したのであった。

ここに於て先生も教会堂の建設も一時断念されるに至り、それより先きは教会堂及小学校の建設に援助下されし校友諸兄弟姉に對し、いろいろ御世話下されし多くの知己朋友に對し、祈りと勤労とによりて報いられんとして只管祈りと勤労の生活に入られたのであった。祈りと勤労の生活はやがて難業、苦業の生活となり、己が身の苦業によつて衆生を濟度されんとした先哲、聖たちの苦業を偲ばせる程であった。先生の健康を心配された戸田医師始め多くの人々が転地されんことを願つたのであるが

肯んじなかつた。

「おばあさんや（奥様のこと）俺の生命も余り長くないぜや、一鍬でも打つて来るからの」

といわれ乍ら三十九度位の熱では休まれる事も重く、エンシャーダを担いでグワラナ・ザールに行かれ、先ず脆いて神に祈りを捧げ大地に鍬を打込まれたのであった。それは全く何人にも真似る事のできない祈りと精神力の力であつた。グワラナ・ザールに行かれて一度エンシャーダを持たれた時は、身体を正しくしやんと伸ばして一心不乱に除草されて行く状は、恰も戦場における古武士の慨があつた。やがて黄昏が迫り、アマゾン特有のパパガイオ（インコ）の群が鳴き乍ら埒に急ぐ時、再び鍬を置いて静かに脆いて感謝の祈りを捧げられたのであつた。

身にはつぎはぎだらけの労働着をまとい、サンパウロより持つて来られた地下足袋には穴があき、凡て身にまとうものは粗末であつたが、その祈りの敬虔なる事彼のアフリカの聖者リヴィングストンも斯くの如くあつたかとしのばせるものがあつた。先生が亡くなられる四日前、恐らく四十度以上の熱があられたが、先生は最後の力を振って大地に鍬を打ち込み、力尽きてグワラナ・ザールに倒れられたのであつた。ここから約二百メートルの先生の家まで歩む力もなくなり、這いながら涙と共に感謝の祈りを捧げられながら一時間余りかかつて我家近くに迄来られたのであつた。先生の帰りを案じて病床から起

きて外に出た奥様が、走り寄って抱きかかえられると、
「おばあさんや、今日は疲れたぜや、歩く力がないもん
じやけに這って来た」

といわれ、床に就かれてから四日目、再び起き上られ
る事もなくアマゾンの万物寂として眠る未明、静かに息
を引きとられたのであった。

時に一九四一年七月二十四日、享年六十七歳であられ
た。先生の亡骸は奥さま、慰与子姉の涙の手に依って清
められ、先生にふさわしい有り合せの板切れに依って山
内登兄、大川伝兄、忍兄等の手に造られた粗末な棺に安
置され、マウエスの湖畔を渡り、マウエス市墓地に埋葬
された。」

悲痛というよりもむしろ凄愴の感を催さしめる。彼は
多忙な生活の中でも欠かさず日誌を認めていた。死に直
面したころ、彼自らの記事は何を誌しているのであろう
か。

七月十日（一九四一）木、晴、お祈り、おばあさん（夫
人）おじいさん（彼自身）煎じ薬を三回飲まして貰う。腸
の工合大によし、ピラルクなく人夫不満故におばあさん
ジョッカに漕がせ町に買いにゆく、幸にあり、波静か故
障なく帰る安心。

石子さん次第によし、然し愛子さん少し発熱、パパま
だ宜しからず、大川。パパとヨシア発熱、老と病氣と雨、し

かしお慈悲は小さく、低く、堅く、心をすえてみ空を仰げば甘味つきじ。

十一日、金、かわき、お祈り左近先生（左近義弼祈祷日課表の意味？）おじいさん。岩間父子まだ充分ならず、ジョツカ来ずおじいさん一人八号地（夫人の土地）へゆく。下痢のあとなれども例によりボツボツやれる。久しく粉グワナ用いしがおじいさんだけ今日より粒にする。そのためか夜眠れず、世界の動き山奥の我等にまで影響あらん、自給自足これ第一、引き緊めてやること大切なり。

十二日、土、晴、お祈りおじいさん、愛子さん少し催しありしも先ず先ず一日気分よし。ジョツカ来る、八号地にゆく、おじいさん足すくみ仕事運ばず、されど終日堪ゆ、本週は何もかも都合よくゆきたり。岩間一家病氣したれどここに来ていたため仕合せしたり一切は主にあり。

十三日、日、晴、お祈りおばあさん、おじいさん少し催す、夜寒け、おばあさんにもんでもらう。岩間父子だんだんよし。

十四日、月、晴、お祈り左近先生おばあさん、おじいさん夜少し寒けする。例により毎日ぶるいならん。山間

パパ充分ならず特に骨節いたむ、今日より人夫を請負にする。ジョツカ、オランド来る二人共十四本やる。一本四〇〇レース。

十五日、火、しめり、お祈りおじいさん、集りはおじいさん一人、みなみな充分ならず、おじいさん濡れたり、夜少し寒気する。

十六日、水、晴、お祈りおじいさん、おばあさん加わる。おじいさん軽けれどおばあさんと岩間のパパ重し、人夫来ずおじいさん一人八号地にゆく。夜おじいさん殆ど眠れず。

十七日、木、晴、お祈り左近先生、おじいさん、集りおじいさん一人、岩間。パパ充分ならず大川来り注射する。おばあさん次第に快し、おじいさん幸いに快よし。

十八日、金、晴、お祈りおばあさんも無理に起きてくる。お祈りはおじいさん、おばあさんはまだ力つかず、岩間父子快よくならず、おじいさんおかげで快よし。注意せず快くなりつつある。八号地全部午前で終る、向うの端グワラナより五メートル程きれいにする。年後より一号地にかかる。この請負賃一株四〇〇レース、五ミル以上にしてやりたし。大川では今日屋根葺き替え、ジョツカを手伝にやる。

十九日、土、雨、お祈りおじいさん、午前大雨請負人夫ら来らず、自分も休む。おばあさん、岩間父子次第に快し、午後かわく、トチーニヨ、オランダ来る、自分もゆく。しかし痛みて早く休むジョツカ来りしも大川へ手伝にやる。(日記終)

そして二十日もグワラナ園に出たのであるが歩くことができなくなったのだからペンもとれなかったことと思う。それから四日後に彼は永眠した。恐らく十九日の日記は彼の絶筆であろう。

彼の永眠したころは欧洲といわず、東亜といわず世界をあげて大戦乱の渦中にあつた。通信機関も殆ど麻痺状態に陥っていたので、その訃音が会社機関を通じて東京に届いたのは同年の十月一日であつた。夫人令息連名のもとに各方面に発せられた通知には次のように認められてあつた。

謹啓皆様御健勝のことと存じます。

父も母も共に多くの各地の校友諸兄姉のお蔭によりましてサンパウロ方南及びアルゼンチンまでもの長途の良き旅行をさせて頂き、久しくお会い出来なかつた校友、知人にお目にかかる事を得まして、こよなく喜んでおりました。当地に帰りましてからもいろいろお世話になりました方々に報ゆるべく老の身も忘れて元気に働き居

りました。

然るに此の二、三年来当地に流行致しておりましたマ
ラリアに半歳ばかり前頃から罹り、時々発熱しますの
で、母を始め一同のものがゆつくり静養する様に勧めま
しけれども、パイオニヤとして天の恩寵を思い、亦皆様
の絶えざる祈りと御厚情を思うてはじつとしては居られ
ないと申し、時々は発熱しつつも鋤を執り、若い者も及
ばぬ勤労の日を送りました。父の生活は実に文字通り祈
りに明け、祈りに暮れ、特に最近には、ガラナ一本の除
草にも先ず脆まずいて祈り、祈り、祈りつつ一日の務を
尽しておりました。段々年老いてゆくに従い、清貧の生
活を愛し、足らざるを感謝し、苦行をさえ喜ぶ様であり
ました。

殊に神秘の境とも言われる此世界の奥地に数えられる
アマゾン二百八十万方哩の天地を愛し、大和民族に残さ
れた唯一の世界の宝庫を開くべしとの使命を任じ、その
礎を据えんが為、己が身を神様への尊い供物として献ぐ
べく念願致しておりました。実にアマゾンを愛するその
愛に於ては殉教者的な強い愛でありました。リヴィング
ストーン博士が暗黒アフリカの為に最後まで献身した如
く、父も斃れるその日まで鋤を執り、若い時から深く尊
敬していた博士の如く、此アマゾンに身も心も捧げつつ
安らかに眠るが如く天に召されてゆきました。斯くして
此アマゾンの一角マウエス湖畔に於て七月二十四日午前
一時、六十七年の生涯の幕を閉じました。

父の健在な間は左程に解りませんでした。父亡き後の大いなる淋しさは我等残された者の胸にひしひしと迫ります。今まで道標として導きくれた燈火が一時に消えた様で大変淋しくなりました。

されど父は信仰に生き、永遠の生命を信じ、人は死して始めて大いなる仕事が出来ものである、われは天使となつて皆を守るから我が志を継ぎ、真の植民者として励んでくれと日頃申して居りました。飼う者なき小羊の如くになりましたが、之に失望する事なく立ち上り、天よりの父の加護により益々植民道に励み度いと念願致して居ります。

父は毎朝一日も欠かす事なく礼拝致して居りましたが、其祈りには必ずお世話様になつた皆様の上に神の御守を懇ろに祈願熱禱致して居りました。何卒皆様その事をお心にお留め下されて善き戦いをなされます様お祈り申上げます。

亦まだ若くて何等為す事を知らざる私共の上に、今日まで厚き御同情を賜りました如く今後とも宜しく御指導御愛護下さいます様偏えにお願い致します。

母は特に三十有六年の間苦楽を共にして来た父を失い、大いなる悲みの中にありますが、幸い健康でありますれば何卒御安心下さい、母も心の落ちつき次第皆さまでへお便り差上げ度いと申して居りますが、何分まだ日も経ちませぬ事とて、宜しくお伝えしてくれと申して居ります。

先ずは取急ぎ御通知申し上げます。終りに皆様の上に
天父の豊かなる御恵みを祈り奉ります。 再拝

一九四一、七、三〇日

崎 山 茂

〃 田 鶴 子

この悲報を受けると同時に海外植民学校では直ぐに今井修一が委員長となつて、崎山校長追悼式を執り行うこととし、十月十二日渋谷教会堂に於て、石垣勝三郎牧師司式のもとにキリスト教式で盛大に行われた。大東亜戦の勃発も間近いときで、東京の空気はひどく緊迫していたが、当日は朝野有志が多数参列して、この偉大なる植民指導者の死を悼み、その霊を弔うた。左はその日霊前に朗読された弔詞の一部である。

恩師崎山先生の死を悼む

海外植民学校校友会代表 児玉甚右衛門

去る十月一日突如アマゾンに在る崎山先生の訃音に接し、親しく先生より慈愛探き訓陶を亨けたる我等は、今更の如く驚愕一入深い感慨に打たれたのであります。我等は先生の人格竝に その事業より甚大なる感化影響を今日まで受けている者であり、今日の事ある実に痛悼の極みであります。然し先生の人格、先生の一貫せる主義主張、其生涯の事業を深く考える時に、此事たるや寧ろ理の当然であり自然の帰結であり、又先生に最も相応し

い最後であり、先生御自身に最も本懐とさるる所にあらずやと信ずるのであります。

先生は初め北海道に移住しその若き熱情と力とを北門開発の為に注がれ、更に東北学院、青山学院等に学び、更に重大なる人為の開拓を要する世界のあるを悟るに及び、転じて人心を開発し民族精神の開拓育成を主眼とする青年教育の事業に身を挺する事を決意されました、此の着想動機が因となり海外植民学校を創設し、延ては我民族精神の世界的昂揚を目ざす海外発展の叫びとなり、遂に南米移住の民族的先駆の大怒濤となったのであります。今日世界的大変革の激動と嵐の真唯中に泰然として微動だにせず、確固たる世界的機構と不変なる基礎の上に立って、祖国の進路を推進せしめる偉大なる民族精神を覚醒し涵養せしめた点には、大正昭和の時代を通じて故先生の隠れたる業織の与って力ある事を信じます。然し乍ら今故先生に就て言い得る最上の事は共等の点でなく、寧ろ世間から忘れられたかの如く思われるアマゾンの天地に於ける先生晩年の移住生活であります。

それは一般の移住とその意味を異にし、先生の場合には、半生の間生命を堵して闘われた主張乃至理想の実現化であり、試練であり又結果であつた。そしてその事たるや先生独自の信仰の見地より見る時、神が地上に於て果すべく先生に与えた最終の使命に対する服従であり完成であり、勝利であつたのであります。先生は自ら深く決する所あり神の御用を終えた老骨を永久に葬るべく無

上の喜びを以て彼地に向われたのであります。先生は第二回南米旅行の時卒直に此氣特を吐露しておられます。

わがねがいしきりにさしぬアマゾンの

いずれの沢にいほりむすばん

世界の動きを見、祖国の事を思う度に、先生は今一度聖旨に叶わば祖国の地を踏まんことを願われた事でしよう。然しそれは信仰により確く約束された最後に帰るべき永遠の御国を思う時に最早物の数では無かったのであります。実に先生はその歩みし生涯の品性と信仰に価する最後を遂げられたのであり、恰も軍人が戦場に仆れし如く雄々しく、移住の先駆者として、大自然開拓の勇者として、遂に栄光の死をかちとられたのであります。仰げば千古の白雪を戴く神秘なるアンデスの嶺より滾々として永久に流れ来るアマゾンの大江、その河畔原始林のほの暗き影が陽光に映じて静かに白沙の上に落つる処、人足絶えたる静寂なる大陸の一角に、マウエスのさざ波が久遠の讃歌を奏する時、我等の師崎山比佐衛先生の英霊は神に捧げられたのであります。今先生の臨終を偲ぶに当り、偉大なるイエスの使徒パウロが愛弟子テモテに与えたる書翰の一節を想起するのであります。

われ善き戦闘を闘い走るべき道程を果し信仰を守れり今よりのち義の冠わがために備れりと

聊か蕪辞を述べて在京の校友一同に代り謹んで哀悼の意を表します。

弔 辞

外務大臣兼拓務大臣 豊田貞次郎

本日海外植民学校々長崎山比佐衛君の追悼会を開催せらるるに当り謹みて君が在天の英靈に告ぐ。君弱年にして夙に学に志し笈を負うて上京勉学の途に励みしが、其後同郷先輩の北海道拓殖の計劃を聞くや勇躍之が開拓に赴けり、然れ共君は生来の向学の志捨て難く開拓事業を父母の手に委ね、再度上京遂に青山学院英語専門部に学ぶ、此間君は刻苦勉励牛乳配達等の労務に従い自活の途を講ぜしが、他方積極的な君の性格は自活学生の団体たる学生労働会を組織し後進学生の指導誘掖に任じたり、然るに後日学生労働会出身の学生にして多数社会に進出し、特に海外に発展活躍する者の多きを数うるに至るや、君学生労働会を以て海外に発展する青年の教育機関たらしめんと志し、幾多の困難と障害を克服して大正七年遂に財団法人海外植民学校を設立し自ら校長となりて移植民青年教育に尽粹せらる。

君は資性温厚誠実其人格の高潔なるは稀に見る処にして海外植民学校出身者今日の発展は克く君が薰陶の力に俟つ所多し、又君は信念の人にして昭和七年当時アマゾン地方開拓の困難なること世上に伝わるや君は平素の所信を貫き敢然一家を率いて彼地に移住し、自ら開拓の第一線に立ち一族校友と共に開拓事業に投ずるに至れり、

而して此間君が本邦移植民事業に貢献する所は甚大にし
て、海外植民学校に抛り海外に発展する青年の教育に従
事する傍ら常時移植民思想普及の為の講演行脚を行い其
足跡は内地全県は勿論朝鮮清洲に及び、共間二回に涉り
て南北両米に亙る大旅行を敢行せり。

而してアマゾン移住後も現地開拓事業に携る一方植民
地青年子弟の教育に意を用い其終始一貫せる不撓不屈の
意気と旺盛なる実践力とは単に校友関係者間に止まらず
広く一般在留邦人の敬服措かざる所なりしなり。

今や非常の時局に際会し本邦移植民事業も多難を加えん
とする折柄君の如き偉大なる先覚者を喪う真に痛惜哀悼
に堪えず、然れ共君が業績とその不撓の精神は後進の胸
底に生きて永く滅すること無かるべし、君亦以て瞑すべ
きなり、茲に謹んで哀悼の微衷を捧ぐ、英霊希くは来り
餐けよ。

校友崎山比佐衛君を偲ぶ

青山学院院长 笹 森 順 造

北米合衆国コロラド州デンバー市コールフックス街の
一角に巨大な赤煉瓦建の偉容を示す日本人美以教会堂に
一九一五年、日本から来た大旅行家我が学院出身校友崎
山比佐衛君を迎え、同君は此教会に出入する青年学徒に

強烈なる鼓舞激励を与えた。当時此教会はコロラド州を中心として四辺の各州に散在する数千の在留同胞の精神生活と文化訓育の指導的中心であつた。

亦デンバー大学始め州立大学其他に学ぶ日本人学生の最も良きホームでもあつた。太平洋岸よりロッキーマウン脈を越えて大西洋岸へと米国を横断旅行する日本人旅客は大概デンバーを通過する。デンバーに立寄る者は必ず此教会を訪ねて憩を求め、亦調査研究の資料を需むるが例であつた。

我大和民族海外発展の大志を懷いて渡米された崎山君は矢張此教会を訪ねた。君は特に多数の青年学徒に接触し君独特の理想抱負と活眼達識と加うるに熱烈な信仰と豊富な経験とを以て誠に興味深き旅行談を縦横になされ青年の士気を振起せしめた。当時君を迎えた我等は其記念として一九一五年一月二五日クリスマスの日学生等と共に撮影した其写真は今猶お澆漑たる君の面影を思出さしめるのである。

君は我同胞が狭き日本国土に跼蹐するを潔しとせず察る其驥足を海外に伸ばす可きを常に主張し躬ら鵬翼を北中南米に張って到る処同胞発展の実状を具さに踏査し、帰朝後海外植民学校を興して有為の子弟を教育し、遂に自ら率先してアマゾンに入植の範を垂れ此処を墳墓の地と定められ開拓の先覚者として其尊き終局の生活をマウエスの地に送られたのであつた。今君の訃音に接し往時を回想して哀惜の至情禁じ得ず衷心より追悼の誠意を捧

げ御遺族の上に天よりの御慰めを禱り、且君の鳳志を継ぐ者の続出されんことを念ずる者である

追悼の辞

アマゾンヤ産業開発会社々長 長 上 塚 司

秋風落莫として明月別離の人を想わしむるの時突如として崎山先生の訃に接し誠に哀悼に堪えません。先生は年若く北海道に渡り石狩理想村の建設に参画せられ、亦東北学院青山学院に学び信仰の道に精進されました。大正三年夙に南北南米大陸を踏破して海外発展の急務を痛感し帰朝後海外植民学校を創設柘植の第一線に立つ人材を養成する一方内地及満鮮各地を遊説し移植民思想の鼓吹に努力されました。昭和二年先生は再び南米視察の途に上られペルー国よりアンデス山を越え大アマゾンを下りアマゾナス州マウエスに到り風光明媚にして地味豊饒なるに心惹かれ此地を墳墓の地と定め遂に昭和七年一族を率いて入植せられました。

爾来十年間先生は原始林中に専ら晴耕雨読の生活を続けられましたが年来教会堂建設の志あり昭和十四年四月其計画を抱いて南米各地校友を説き其目的を達して翌年マウエスに帰還せられました。恰も此時マウエス植民地は我アマゾン産業株式会社と合併し両者渾然一体同心協

力所信に向つて邁進する事となり、私と先生との関係は一層の親密を加うるに至りました。昨年十月会社創業十周年に当り先生はマウエスの同志と共に参列せられ我々はかくしゃくたる先生の温容に接し老来益々澆漓なる御健在を祝すると共に今後相携えてアマゾン開拓の大業に当る事を喜び固く相約して別れました。然るに天寿を仮さず赫々たるアマゾンの前途を望み乍ら永逝されました事は実に痛惜の極みであります。

先生こそ身を以て一生を海外発展に尽された方でありまして一族を挙げて天涯の異郷に移住し遂に愛着の地に清き生涯を終らるるまで終始一貫変る所なき強き信念は我等開拓植民の事業に従う者をしてヒシヒシと鞭うつものがあります。即ち人亡ぶと雖も英霊未だ泯びず長えに天地の間に在りて海外発展の精神を鼓舞するものといふべく先生の英霊以て瞑すべきであります一言蕪辞を述べて追悼の詞と致します。

弔 辞

東北学院同窓会長東北学院長 田村悌三郎

同窓の友崎山比佐衛君永眠の報に接し国家の為痛惜の情にたえず今日我国内外の情勢は君の識見と熱情と実践力とを最も要するの時君を喪う啻に君御一家の損失のみならんや。

されど天意は往々にして我等の意表に出づ、謹んで撰

理を畏み君が多年鼓吹せられ実践せられし海外植民思想が大東亜平和御建設の上に実現し成就せんことを希い、亦御遺族各位の上に 天の啓導と天来の慰藉とを祈り奉る。

なほこの日懇篤なる弔詞を寄せられた人々は日伯中央協会々頭徳川頼貞、海外興業株式会社々長渥美育郎、青山学院校友会々長米山梅吉、修養団主幹蓮沼門三、永井柳太郎、阿部義宗、勝田銀次郎の諸氏で、なほその他に各地よりの弔電は五十余通であった。

崎山校長逝いて十余年、いつの頃が墓碑建立の話がもち上り、ブラジル校友会において平山惣次郎、蛭田徳弥、石丸二郎、西岡一志、須賀貞治、大原豊、五十幡直義、平野徳夫の八名を実行委員にあげた。各地校友有志競うてこの挙を助け、ベレム在住の山内登校友の斡旋によつて工を終え、計画が発表されてから三年目の千九百五十四年一月二十九日建碑式が挙行された。左の記事は「植民」第四号に発表された報告である。

墓碑竣工式の模様

山 内 登

前略 一月二十九日午後四時竣工式をあげる運になりました。田鶴子未亡人を始め神園氏の一族、マウエス町と其近郊に住む同胞有志及び先生と親しかつた二、三の外人の参会者もあり相当な人数になりました。午前中は激

しい雨だったのもスツカリ晴れ強い夕日は遺族の方達がきれいに掃除して草花に飾られた大理石のお墓に強く当り良く映えて見えます。あり来りの型と異つたお墓の構図もよかったのですが、一目見て誰もが「良いね、これは結構だ」と言い合っています。一同お墓の前に集まつて頂き、やがて神園一生君の司会で、先ず故人の愛唱された讃美歌「山路越えて」を合唱、次で私が南米の各地又故国にある校友及び友人協力者の方々を代表して、このお墓が、先生が此世を去つて十三年にして建立されたのは遅かったけれども、斯うして多くの子弟が又知己友人が協力して建て得た喜びを恩師の霊に、又参会された皆さんに報告致しました。終つて最年長の神園のお父さんが聖書詩篇の一節を朗読され、引続いて熱涙溢るる力強いお祈りがありました。一同主の祈を以て式を終り、一人一人墓前にお参りしたのですが、故人の霊魂が吾々一同と共にあつて、誠に感激に満ちた会合でありました。

私が校友を代表して、お話をするためには前もつて大體報告要領を準備しておりましたが、先生の墓前でお話していながら墓石の上部に位置されたブロンズの枠の中にある先生の写真を見ると、在りし日の先生が思い出され懐しさに胸が一杯になり心の中では「先生些細なものです、校友の中には唯一人でもつて立派に大きな墓石を建てることの出来る人が幾人もあります。而し先生はこうして皆が心を合せ少しのものを集めて建てたものを喜

んで下さると思います。私がこうしてこの校友の喜びを表現することが出来ましょう」と申上げているのですがグッとこみ上げて来て唯嗚咽するのみです。それにも増して人一倍先生に心配をかけたこの私が校友を代表しているのだと思うと慚愧に堪えなくなり、何うしても終りまで話し続けることができませんでした。付加えて墓石の浮彫りの処に書いた文字「アマゾン日本植民の父」を書き入れたことについて一筆報告させて頂きたいと思えます。

当地校友会の委員である須貝兄と毎度連絡交渉していて、既に何んな形式でそれを日本語にするか、ブラジル語で書くか、又は適当な聖句の様なものを入れるか、それら一切を私が一任されていたのですが、さて何うそれを決めるかに就て私は人知れず苦勞をしたわけです。一月経ち二月過ぎしている中に、石屋の方から催促を受け、のつぴきならない羽目になって終いました。私の処には筆も墨もないので領事館にいつて拝借し、その事務所で紙を頂いて書くことになったのです。墓字を何んな字体で書くかに就て、古関領事や、尾崎副領事さんにも御相談申上げた次第です。友人の屋崎副領事と二人であれこれ幾枚か書き出している中に、何かインプレーションを受けたとも言いますか。何を考えると言うともなく私がスラスラと「アマゾン日本植民の父」と書いて終ったのです。それを横から見ていられた古関領事さんが「それがよいね……」確かに先生は精神的にも亦身を

以て実践された事実からしても、このアマゾンに於ける日本植民の父であり大先輩である方だし、南では水野竜さんの碑に「移民の父」と記したが、君これでよいではないか、と日われてハツと気が付いた。私は暫く駄つて領事の顔を見つめるばかりでした。その時強く確信をもつことのできた私の考は、何も引け目を感じずすることは少しもない、先生を自分達の「親父」だなぞと小さな見方で考えるからちゆちよもするが、故人が生前吾々に教えられた事どもを想起すればよく解る。

先生は決して売名家でなかった、誠心誠意人類福祉のため植民を説かれた。又説かれるに止らず一家を引連れ未開のアマゾンに先駆された方でもあり、少くとも此アマゾンに住んで先生に逢つて大なり小なり関係をもつ機会を持った人であるなら、それが日本人であれ外国人であれ誰れしもが一樣に先生に対し、深い親しみを感じ敬愛の念を持つに至ったことは争われない事実として証言されている。崎山先生は一海外植民学校の校長にとどまることなく、日本の数少ない偉大な先覚者であり、日本民族海外移住のあり方について先生独自の教育をされ、又身をもつて範を示された意味に於て万人が「日本植民の父」であると呼称するのは寧ろ誇りとするのでなければならぬ。でありまして早速領事館を出で家に帰り、一生懸命清書したものが墓石に書かれてあるものなのです。（後略）

崎山校長永眠当時の行事に就て今少しく附記しておく。悲報至ると同時に東京で追悼会の行われたことは既述した。少し後れて高知学生労働会々長川添徳治の主唱で、高知教会堂に於て追悼会を催し、同地方遠近の校友有志これに参列した、司式者は西山道吾郎牧師であった。

当時大連満鉄本社勤務中の筆者は計報を受けとるや新京に赴き故人の一族にして同地居住の崎山信義、従弟杉本春喜らと相謀り校友と共に十月四日追悼会を開催、同月十九日大連メソジスト教会に於て小林矩表牧師に司式を乞い、近親岩沢やす子一家外校友並に多数数会員の参列を得た。当時満鉄社員体育に關与していた筆者は、その月末明治神宮体育大会に二百余人の健兒と共に参加すべく上京した。行事終了後一ヶ月の休暇を得てこの機会に、故人に因縁深き土地を訪うて、彼の尊い生涯と、その終焉の次第を伝えて、哀悼の志を共にすることにした。十一月六日北海道聖園教会では、武市安哉令孫土居英子牧師司会のもとに追悼会開催、故人と開拓行を共にした生存者平井虎太郎、和田吉弥両名から創業時代の彼に關する追憶談があつた。十一日札幌豊年館に小笠原楠弥、佐々木鉄之助両老、井川伊平、戸津高知両道会議員らを中心に有志会合、故人の追憶談に一夜を更かした。次で彼の生地高知県本山町では、十八日川添会長はじめ高知その他在住の校友駆せ参じ、町民有志五百名の参列

を得て、畠山邦雄町長司会のもとに故人の竹馬の友ら、有志多数の追懷談があつて、故人の生地になさわしい盛大な追悼記念会であつた。

各地に携えた故人の遺影は最後に生郷吉延公会堂に寄贈し、その遺影は今日も郷土の青年男女によつて大切に保存されておる。「崎山家先祖之墓」には後日崎山信義の手によつて故人の写真が納められた。爾来今日まで毎年七月二十四日には青年団員が基地を清掃し、記念行事を催して郷土が生んだ偉人に対し、虔ましい尊敬の誠を捧げておる。

二六、海外殖民学校の結末

千九百三十四年九月七日付校長より母校に宛てた便りには、学校経営のことに關して左の一節がある。

（前略） 本年は生徒が少なく学校の経営容易ならぬ次第承りました御察し申し上げます。仰せの如く由緒ある学校を閉ずる事は残念とは思いますが、学校は南米即ち目的地に移して百年の基礎を固めるものとすれば、其れは決して廃校でも閉校でもなく一つの大なる進歩ではないかと思われます。勿論出来れば現在のまままた財団法人にして基礎を固めるのも結構なことと思ひます。然し南米に移すとすれば二三承知して置いて貰いたい事があ

ります。即ち

一 此のマウエスを本校とすること。

二 本校は自給自足をモットーとしたいと思いますから急に大勢を入学せしむる運びにはゆかぬこと

三 ブラジル校友の維持費及一般寄附金は本校に於て扱うこと。

四 移転実行の段取りはじめ打合せ下さる事。

これによつてみると、校長の移住後数年を出でずして母校の経営難に就て相談のあったことがわかる。その翌年には予て関係の深い井上雅二を校長に迎えて一月十一日に就任式を挙行了した。今井主事は直接経営者として努力を続けて来たばかりでなく、井上校長を迎えても、その責任は解放されることはなかった。当時は大口の賛助は望まれず、少額の定期寄付をしてくれる維持会員を勧誘し、その醵金によつて不足を補うていた。校友太田兼四郎久しく教務を助け、創立以来教授陣の中堅であつた酒井市郎教師の如きも、暑休など利用し今井を助けて維持会員の募集に各地を歩くなど、教職員一致して涙ぐましい協力を続けた。だが、満洲事変突発以後のわが国策はだんだん大陸偏重となつて、年と共に満洲移民に重点がおかれることになつて、南米を目標とする植民学校は当局からも一般国民からも閑却される形となり、時運は学校にとり日に非であつた。かくしていよいよ学校が危機に臨んでいる頃、千九百三十七年二月九日崎山校長は

次のような重要な手紙を今井、酒井、片野の三者に宛て送っている。

「謹啓十一月（一九三六）二十八日付今井先生の御手紙、十二月三日付お三名の御手紙昨日落手拝見致しました。色々お骨の折れることとお察し致します。それにしても諸先生皆様お変りなき由奉賀ります。私方にも皆丈夫で働いて居りますから御休神下さい。早速用向きを申し上げます。今井先生のお手紙中に「校長事務取扱を置けば、校長は無いので先生（崎山）より小生（今井）に小生より井上先生に譲った形となります、云々」しかし左近先生よりのお手紙には「前日今井君が来て君（崎山）が校長では名だけの校長で仕事やりにくいから、名実共にや ってくれる校長をほしいという話であった、最も の事と思うから君（崎山）然るべき人を校長 に選定してやれ云々々」ということが記されてありました。これはお互いの問題でなく、学校を経営する者の熟知しおくべき問題と思いますから一応調べおき下さい。私は校長事務取扱を置けばとて、校長はそれで直ぐ無くなるとは思いません。如何なものでしょうか、何かの間違ひではありませんか。それからまた一九三四、二、一〇日付私からの手紙に基き（今井より）「充分慎重の態度をとったつもりでおりました、そして特別学校の事をお世話下さる十名の方々に相談して意見を聞き、左近先生よりも特に井上先生へ大賛成というお手紙を頂いて決しまし

た。然し時代は移り小生の考にも多少感ずる所あり、恩顧を受けた井上先生の時代に於て、この地を引払うて南米に移動するということを発表するは如何にも心苦しい、小生（今井）が経営して行詰ったのであるから小生が一切の責任を以て事に当るが至当であると考えたので、そのためには前申上げた如く、自由に処分出来る方法を取りおくに非ざれば、いつまでも残骸をさらすこととなり、徒らに世間の嘲笑を招くのみと思います云々」またお三名のお手紙の中に「今後の経営に就ては従来以上の困難も可有之、ここに一英断の必要ありと考えられ候云々」それからまた「目下の状況としては負債をなすことは勿論不可能にて校舎其他の建築物も、設立者たる先生以外の者の手を染め得ざる処に御座候云々」これを要するに約束の五ヶ年が来ました。今後の経営は一層困難、何時処分して南米マウエスに移さなければならなくなるかわからない。其時学校が今井先生の名義でないと思う様に出来ないから、其名義にして下さい。然し崎山先生が帰国が出来れば何よりであるという意味かと存じます。

私帰国ができればお互いにそれに越したことはないと思存しますが、それは今の所間に合いませんから宜しくお願い致します。別紙設立変更認可申請同封致します。それでいよいよ英断即ち処分しなければならぬ日がきましたら左の事項を御承知の上でやって下さい。

一 南米アマゾンに移転するという理由及発表のもと

にやっして下さい。

二 それからお金は残る筈はないと思いますが然し何かのはずみでたんと残ったら名ばかりでも送って下さい。

三 現在有る特別の記念物例えば講堂正面にある後藤伯の書かれた額、其他名士の筆跡等にして、アマゾンに送達できるものは取りまとめ私の帰る迄（昭和二十年春頃）保存しておいて下さい。最も今井先生がそれ迄に来て下さるなら持って来て下さい。

四 処分が済んだら御三名の名義で報告して下さい。

五 後に未解決のない様に一切決りをつけて下さい。

貧乏学校を経国するは容易なことではありませんが、これを処分するも亦容易なことではありませんから、充分手を尽し道を尽してやって下さい、祈って居ります。然し現在の心配が裏切られて学校の経営が其のまま進みますならば、そして今井先生が御希望ならば私が帰る迄お待ち下されて差支ありません。

右御承知下さる限り処分の方法は一切今井先生にお任せ致します。私はよく夢を見ます其れは殆ど二つのことです。一つは植民学校の土地を探し廻ること、それは日本山川の間か、南米の西海岸かです。あせって苦んで疲れて探します、然し何時も自分は南米に来て居ると気づいて覚めます。他の一つは寄付を募って先生方の給料を作ること、或は旅賃がないので如何にすべきかなど、こんな夢に殆どつきています。以上は皆私の過去の経歴で

す。それを夢に見るのです。今井先生の御苦心充分お察して居ります。お祈りして居ります。斯くの如くして続けてきた学校を処分するということはお互いに涙なくしては出来ない事です。然し潰ぶすのではない初期の目的通りこの南米に移すのである。

そしてお互いにこれが百年の栄を祈りましょう。私老体なれば完全を期することは出来ませんが、骨を埋めて基礎と致します。主によりて祈る。

石橋兄より記念絵葉書着きました。関根（要八）さんにも御無沙汰しています。若し本を送って下さるなら、岡田哲蔵先生著「本多先生の伝」を贈って下されば仕合せです、そしてそれに関根さんに何か書いて貰って下さい。お願い致します。手紙が着きましたら御返事下さい。待つて居ります。（完）

今井主事（校長事務取扱？）からは五月七日付で校長宛に返事を送っておる。その七月今井は大連に筆者を訪ずれた。学校は完全に崎山校長の手を放れ、一切を委任されたので、時局に応ずる経営案を立てる事としたから、賛同のうえ今一度学校に復帰し、創立者の一人として再生の力を与えてくれという話だった。その案というのは満蒙科を新設しようというのである。当時筆者は満鉄本社で社員と在満同胞教化の業務を担当し、特に数千の男女青年社員の訓育方面に参加していた。既に国策会社として満蒙文化開発に偉大な貢献をし、なほ将来その事

に就て重い使命を負っていた満鉄としては、いよいよ膨大な財力と機能をもつてあらゆる施設を推進しようとしていたところである。

従つて人材養成も新興蒲洲国と協調して、着々新施設を実現しつつあったので、その点を説明し、満蒙科新設に就ての再考を促がすと共に自分は実質的には学校とは比較にならぬ大きな教育の使命を果しつつあること。また崎山校長の学校であつても遠慮するし、無関係なれば一層魅力のないことを率直に語つて辞退した。その後満蒙科は断念して経営を続けていたが井上校長も早く退かれ、今井校長事務取扱以下当事者の数年間に亘る苦心は慘担たるものだった。時恰も大東亜戦が突発し、東西両洋の航路は一挙に破壊されて交通不能となった。この世界大戦のまえには南米を対象とする海外植民学校はその使命を抛つほかはなかった。崎山校長とその同志、後継者たちが精力を傾けて、幾多有数の健児を養成して南米大陸に送つた光輝ある学校は、創業（仮教場）以来二十六年にして閉鎖され、歴史的存在として回顧さるる運命を甘受する外なきに至つた。

後半孤城を死守した今井修一とその同志に敬意を表するに吝かでないが唯一つ残念なことは校長永眠後学校の施設は今井一個人の手で身売りされ、同労者の酒井、片野の同人も与り知らず、学校売却の結末は何人にも不明のままになつてしまつた。委任したのだから校長が生存していても文句はなかつたであらうが、処分するとき

「その理由と結末を発表報告して下さい」と明記し、これを御承知であればと条件を付けてある。それは天下の公器、万人の協力で出来ていたものとしてそうすることが当然の常識である。これを敢てしなかったために今井主事が多年尊い努力を傾けたにも拘らず、その労を思う半面、その結末が批判の的となって、而もそれを明かにする機会なく、心労の結果なお春秋に富みながら、病のためにもなく世を去って、その晩節に一抹の疑点を残したことは、誠に同情に堪えない。一方学校のために遺憾千万であつた。

一方崎山校長が海外植民学校を移すという構想のもとに計画を進めていたマウエスにおける学校建設はどうなつただろうか。千九百三十二年九月彼地に移つた彼は、翌年一月十五日に左のような箇条がきの「覚書」を作成し、マウエスの土地を区劃し、一、二号地を学校及教会敷地と定めて彼自ら管理することとし、他は抽せんにより家族に分配しておる。この土地というのは川に沿うた便利な土地を屋敷地として割当てたものである。耕作その他に充当する土地は奥に向つていくらでも将来開拓ができることになつていたものと思われる。そののち彼は千九百三十八年九月から一年有余南米各地の校友有志に訴えて協力を得、第二期の計劃として先ず最初に教会堂を建設する方針を立て、資材の一部は買い入れるなど準備を進める途中で罹病し、遂に挫折してしまった。教会堂の次ぎに学校にとりかかる段どりであつたようで

あるが、これは机上のプランのままに終っておる。
覚書は次の通りである。

覚 書

われわれ崎山一族は皆受洗したるキリスト信徒なり。
われらは主の御栄光のために自給自足的眞の植民者たらざるべからず。

われらは主の御栄光のため眞の植民教育家たらざるべからず。

われらは毎日曜日に御堂に於て礼拝を共にす。

われらは毎金曜日の夜は各家庭に於て順番に祈祷会を催す。

われらは禁酒を守る。われらはダンス会を催せず。

第一期事業（屋敷選定及分譲計画）

家長にして亦海外植民学校校長たる崎山比佐衛は今回左の定めに従い学校関係の各家庭に対し屋敷地を選定また分譲す。

第一条 屋敷――九つに区劃し左の如く選定分譲す
（個人名義）一九三三、一、一五日抽せん決定

第一、二号地 教会及学校敷地（崎山比佐衛）

第三号地 崎山 茂

第四号地 倉庫敷地

第五号地 崎山 忍

第六号地 崎山精子

第七号地 大川 伝

第八号地 崎山田鶴子

第九号地 崎山盛繁

第二条 位置及反別

各屋敷はマウエス本流に面し選定せり、而して此を呼ぶに河下より上へ順に一号二号を以てす。反別は二町五反以上三町歩内外教会及学校地区は二割を他は一割を分譲す。但し倉庫地区は第四号地とす。

第三条 業務の種別

われらは左の業務を為す。

一 教会及学校経営

二 初年度に限り共力一致して翌年度の食料として之を各家庭に分配す。

三 各屋敷は規定の年限内に最少限度の住居をなし又一定のグワラナ及カフェーを植付けること。

四 倉庫敷地の開拓其他一切の共同事業。

第四条 グワラナ及カフェー植付規定

教会及学校屋敷はクワラナ及びカフェーを各一千株以上倉庫屋敷を除く他の屋敷はグワラナ及びカフェーを各四百株以上完成期日までに植付け終ること。

第五条 完成期日

本事業の完成期日を自一九三三、九月至一九三六、八月の満三年間とす。

第六条 着手資格

今回各自に屋敷は分配すと雖も之が着手の資格は特別

の事情なき限り世帯者を以てす。末世帯者は世帯後着手するものとす。

第七条 注意

一 各屋敷の経営は各自の任意によると雖も極めて有利に又極めて美的に常に手人を怠らぬこと。

二 方針を立てて第三条第三項を規定通り実行すること。

三 教会及学校のため又共同事業のため必要なるときは、何れの屋敷を問わずその必要なる部分を分譲提供するものとす。但し開拓されし部分にありては相当の代償を以てするを至当とす。

四 第三条第一項及西項の如き公的事业にありては男子は出役を厳にし、婦女子も亦心を揃えて協力一致し本事業最後の目的を達成する様心がけること。

五 各屋敷及公的事业とも可成金銭の投資をさけること。

六 各屋敷及公的事业は可成賃雇人入れぬこと。

七 建築用材は非常なる迷惑とならぬ限り各屋敷を問わず或る程度まで自由に使用するを可とす。

第八条 教会及学校経営

主として各自の出役を以て之に当るものとす
但し之が細目は別に之を定む。

第九条 補充費

各屋敷及公共事業共之に要する経営費の補充は別に之を定む。

第十条 各屋敷選定分譲

教会及学校の屋敷は固より学校の所有地なる故に校長任意に之を選定す、倉庫屋敷を除きたる以外の各屋敷は抽せんを以て之を定む。

第十一条 解散

一九三六年八月事業完成期に於て一切の精算をなし即時解散す。 (完)

こうして植民学校は閉鎖し、マウエス分校は敷地を切り開いただけで、来るべき建設者の出現を待っている。ここに悲痛な思いで書き加えなくてはならないことは、彼の後継者で最も有為の才能に恵まれていた長男茂が、父のあとをおうて若くして逝いたことである。亡父と亡夫の志をついで男装して雇用の土人たちを指導して遺業を守っている若い君子未亡人の操守に敬意を表し、切にその健闘を祈って止まない。

彼の遺志を継ぐものは遺族のみではない。彼には数百の教え子がいる。その多くは南米各国にあつて、未開地開拓に文化の推進に活躍しておる。

特にブラジルにおける彼らは校友会を中心に強固な団結をして、毎年彼のために記念会を催し、その精神の実践につとめておる、アルゼンチンその他各地の校友もまた同じい。これらの同志と更にその後継者によつて彼の示した開拓精神は、着々全南米に拡張され力強い歩みを続けるであらう。

大正七年八月比島独立運動の志士で日本に亡命していたアルテミオ・リカルテ將軍が、海外植民学校のスペイン語、英語の講師として就任した。

後藤新平の紹介推薦であつた。爾来閉校の日まで勤続教鞭をとつて、生徒の尊敬を一身にあつめていた將軍は、大東亜戦酣となり、比島が日本軍のために陥落すると同時に苦節四十年にして祖国に還る日を迎え、校友太田兼四郎副官として將軍と行動を共にした。事成らず敗戦と同時に病に冒され、追わるる身を陋屋に横たえた將軍は、太田副官の看護のもとに、祖国独立の悲願に捧げた八十一年の生涯を終えた。この愛国の権化であつた將軍の最後は学校の悲劇的終結と共に関係者にとりて忘れ得ぬ悲痛な記憶として長く語り伝えられることであらう。昭和五、六年頃のことである、森村組重役だった村井保国翁が植民には婦人の力が主であるという見解のもとに、本校に女子部の増設を要望し、独力で女子寄宿舎一棟を寄付された。当時の進取的な女子学生を収容し教育したにも拘らず、このことに就ては一片も資料もないので、これ以上記述することを得ないのが惜しい。

帝都線池ノ上駅を数百歩南行すると海外植民学校であつた建物だけは今も健在である。一九一七年九月校長の乞いに応じてM・Cハリス博士、顧問創立委員たちが定礎式当日の記念にサインしたのを、特製の鉛筒に封じ込めたのが、あの建物の隅の親石の中に、納めたままの筈である。そして分不相応に立派な石の門には現在「東

京電気株式会社」の看板が掛っている。あの前を通る毎に創建当時を追想して、人間の地上に建てたものの変わりゆく運命を思い曾ての校舎の建物を仰いで、その生れ出した使命と二十余年間の功業を思い、今の時代に再現せしむる道如何など、校長その人の悲願への追慕にふけるのである。これは果して単なる感傷に過ぎないのであろうか。

二七、追憶

大川慰与子

私の見た父の生涯は、神を畏れ、イエスさまに身を捧げて力一杯に生きた一生だと思います。信仰一筋でありました。父はまたときどき腹を立てるので、そのためにざんげの生活の連続でありました。しかしその怒りはきれいな善から出た短気で、すぐ消え去るとけろりとしていました。父も多くの世のお父さまと同様、平常家庭ではやさしい好々爺でした。子供の教育上大切だと思うことは、細かいことにも気つけてくれました。父には孫になるわけですが私たちの家庭にお産のときなどはどこか近い処にいて祈ってくれていました。

安らかに生れますとああよかったよかった」とさも安心したように喜んで母に「おばあさんあとは頼むから気をつけてやってくれよ」といって帰ってゆくのでした。

私と亡くなった弟の茂が同時に中等学校を終えましたとき、植民学校の主立った先生方を御招待して「御苦勞だった、これはお前たちの勉強だけではない、お母さん始め先生方や沢山の方のおかげだ」といつて私共を諭し、それから「さあここで一つ植民学校に入り先生方に教えて貰い、お父さんの仕事を覚えるのだ」といつて、前途を励ましてくれました。植民学校校長として五年間私共を他の学校に通わせた時間と経費、それから外からの或る非難に対し、父はそれらをじっと胸に秘めて私共には少しも見せませんでした。こんなことからあとで父の行き届いた氣特に氣ずき、有り難い親心を知りました。多事多難だった父の労苦を負うてくれた母には腹の立つことも、涙にくもる日も多かったでしょうが、忍耐一つで貫いて来ました。わが家の十字架の縦が父のでしたら、横の線は母のだと思います。父と同時に母をも並べて二人の深い深い恩に感無量であります。

父はいつも聖い人々を胸に生かしていた人でした。卒業式の校長訓辞も父の場合は型を破った訓辞というよりも説教でありました。例えば「人格者我らのワシントン」とか「植民の使徒モーセ」「わが尊敬するリヴィングストン」或は「聖女小さきテレーザ」という風に毎年一人の「偉れた人」を門出の餞けとして卒業生を送ったのでした。父は骨の髄まで植民の使徒でありました。若し植民が一つの芸術で御座いますなら、父は確かにその心境を味い得た偉れた芸術家だったと申しては言い過ぎで

しようか。たとい何事かに動揺したことがあつたとしても「植民、未開地の開拓」ということになるで大盤石に立つたように、その信念は微動だもしないことを感じました。

神園 一生

この度び先生の日記に眼を通す機会を与えられたのであるが、先生の御生涯は実に修道一筋であられたという事である。先生は決して偉人豪傑の型でなかった。その風ぼう於ても、時には貧相に見える事すら有つた。むしろ吾々凡人に近い型の人であられた。過ちては改め、怒りては悔い、悔いては祈り、常に内省し、道を求めて止まなかつた先生の御一生は、確に修道僧にも似た御生涯であられた。私共弟子は斯うした処に、尽きざる親しみを覚えるのではあるまいか。

アマゾンも邦人移民がボツボツ入植し始め、増々世界の視聴を集めるに至つた。而も新移民は仕事も始め先きに脱耕等の問題を起して世の注目を引いている今日、先生在さざるは何としても淋しい極みである。がしかしアマゾン百年の計を劃して、その礎たらんとして地下に眠られた先生は「言うを休めよ」といわれるかも知れない。私はマウエスに根を下ろしておる、先生のお墓近くに私の母も眠り、又長男も眠っておる。先生の望まらるような道は、私如き俗物には到底歩み得ないが、弟子の

一人として先生の御遺志に沿うことを念じて、アマゾン開発のために奮闘し、やがては自分も先生のお墓の近くに眠らん事をこそ願うものである。

利 光 格

崎山校長は神域に達していた、神意を体して現代顕現した人である。西洋風のキリスト教で訓育され、日本伝統の古神道の精神を実践した。なぜ私がそういかう「古神道では鎮魂といって感覚を超越してひたすら天之御中主神と一体となることを念ずる。キリスト教に於てもイエスは四十日昼夜断食して静座を続けられたことが聖書に明記されておる」アンデスを越えアマゾンを下った当時の心境を語られる校長にはまさしくそんな風貌があった。特記したいことは真のキリスト教徒であつた先生は、天孫民族を尊崇していた。自らアマゾン仙人を天孫（アマゾン）仙人と署名していた。天孫民族が大和の国や、浪速の国を開拓した気概を以て、アマゾン流域を開くことが唯一の理想であつた。その到達した心境は一寸現代人には理解し難い神がかりのような魂をもっていた。校長はまた国家民族の犠牲になつた人を祭つた靖国神社に対し、キリストやその使徒達に対するように感激の想念にもえていた。これは先生が一般に知られていない心の裡に秘していた激しい民族的情熱であつた。先生に於てはそれが少しもキリスト教的信仰の妨げとはな

らなかった。

校長は報国の精華であつた。国民に教え自分自身実践して一身を終える人は、いつの時代にも少ない。校長は国が領土的野望に支配され、国民が一時的利害に喜憂しているとき、日本人百万人がアマゾン開拓に入るときを叫んでいた。若し日本がこれに耳を貸していたなら、日本人はもつと早くアマゾン流域に新文明を建設して、日本国のみでなく全世界に大きな利益を与えることが出来たであろう。この校長の抱負と犠牲は今日なお国民の間に知られず、のみならず校長の無言の教育を現在ですら無謀と評して安閑として背後にかくれ、安易の生活に誇っている者が多い。われらは、信ず百年千年の後、日本民族発展の歴史上に輝く偉大なる人物は崎山校長であることを。

大川 傳（女婿）

先生は畑事をするために幾人かの土人を連れて行かれる。土人たちは皆プロヘソール、プロヘソールといって尊敬していた。先生はポ語は不自由だったが幾何かのポ語を加えて土人を使っていた。

土人たちも先生の話を察して何不自由なくのみ込んでやってくれる。ある日先生がその時間がきても食事に行こうとしない。土人は腹が減って仕様がないうが先生が帰ろうと言わないので、そのまま黙って仕事を続けてい

た。やつと帰ろうというて自分の家に来て見ると二時間も定刻を過ぎていた。他の場合の土人たちなら時間が過ぎたといつて八釜しいのだが、先生を知っておる土人たちは何事もいわず先生のいうがままに働いていた先生の徳の力である。

先生がいかにマウエスを愛して居ったか、美しい砂浜に清い水、岸辺の水中林の美は何といつても聖園といわざるを得ない。先生はここに第二の植民学校を立てたいと念願しておられた。教会堂も建てたいとその望みを以て旅行から帰って来られたが病氣やいろいろの事情でその運びに至らず倒れてしまった、マウエスの地は先生第二のふるさとでした。懐かしい故郷に帰り来てそのふところに抱かれて亡くなられた。先生にとりては満足であつたのだらう。マラリヤに罹つたとき転地療養を勧めたが自分はこの地に死ぬのだと頑として肯かなかった。死に対する確かな用意ができていた。私達の気持はまだまだ丈夫で居て貰いたかつた、然し今となつてみると先生が満足してマウエスで眠られたことは幸いであつたのだと思ひ得るようになった。

愛する土に骨を埋める事は嬉しいことである。

曾て先生が墓ということに就て話された。自分の墓は決して立派な墓を望まない、できれば草むらの中で良い、貧しい墓でよい。後世の人が二十年五十年の後に草むらの中に眠っている私の墓を、草を分けて訪ねてくれる人があれば私は幸いであると語られたことがあつた。

座談会記事（その一）

崎山校長に最も関係の深い神園億輔、同蔽、西 岡一志、横山健三、須貝貞治、同夫人の方々が 座談会を催し（一九五四、一一 二日）主としてマウエスにおける校長の日常生活についてザックバランな談話を交換されたのを、須貝夫人が筆記して本稿に寄せられたものである。

日本人会長として：先生はアマゾン入植後附近の植民者と計って日本人会を起した。その日本人会はアマゾン興業株式会社の株主の流れである植民者が多く、先生は株主でなかった。会長は崎山先生、副会長は大石という元アマ興の支配人で、先生とは全然性格の違う人物であつた。日本人会の基金として、アマ興が日本に於ける有名人、或は皇族方の出資された財産が多少あつた。この基金が常に日本人会のゴタゴタの種だったので、きれいさっぱり処分して禍根を絶ち、再出発するに如かずと、その処分方を協議すべく集会を開いた。先生一派はこれを公共に呈しようと思ひ当時戦争酣わな時でアマゾン邦人間にも国防献金募集が進められていたので、これに提供しようとするに対し、一部の人は会員に分配するのが当然だという案があつて、会議は困難を極めたが先生の熱誠溢るる演説に魅了されて半ば先生一派の案に採決される雲行にあつたに拘らず、竹富という人との討

論で状態は一転し、先生達の希望は否決されてしまった。先生は性来政治的な所なく、大衆に向つて演説する時は雄渾熱情ほとばしるに拘らず、討論になると掛引きということを知らない潔白さから、敵に乗ぜられ敗北するという事態で、この会議では当時神園万輔老人始め先生一派は、先生のその討論の拙さに焦慮を極めたとは神園老人の述懐である。帰宅後老人が先生に向い「先生どうしてあんなへまな事を言うのですか私は気が気でなかった」と言うと先生は「そうぢやったかなあ」と撫然としていられた由。

前田光世氏（一名コンデコマ、南拓の顧問）と先生……昭和七年先生一行は八月二十八日革命の混乱中のリオに着き九月四日ベレム着、校友伊藤君の出迎あり、同君は先生に対し、マウエスは米作地として不向き故他の耕地を撰ばるるよう進言した。先生は意外な話に驚き目的地の選定に悩まれた。当時南拓会社の専務前田光世氏は先生を励まして「先生のアマゾン入植は、マウエスが選定地であつて外ではない、きつとマウエスへ入植されるように」と力をつけてくれた。前田光世氏という人物はアマゾン内外人に人望を集めており、一万町歩の土地所有者だったが、邦人の世話をされ、アマゾンの植民者はみな氏の世話になつておる為氏に常に貧乏であつた。先生は十二日間ベレンに留まり日夜土地選定のため悩み、熱い祈を捧げていたが遂にマウエス入植を決行された。一説には伊藤君が先生一行のマウエス入植を拒んだの

は、同君たちが毎土曜日には彼の習慣であるダンス会に金と時とを資して仕事も捗どらず、金も費い果していたが為と言われているが、若い青年たちが無味乾燥な開拓地における有り勝ちなことであろう。

先生の一鍬主義……先生一行は入植後米作不適地という困難と戦うべく非常な決意で仕事を始めたが結果は案外で、充分の収穫があつた。入植当時開拓と農作技術は先生自ら先頭に立って指揮された。先生は頑固強情なところがあつて、子弟は閉口したようであつた。何れも大原始林の開拓農法は初めてで、先生も自ら案出して譲らない。原始林倒伐後の跡始末に就ては、先生の案は初めから火を焚いて一本一本枝を担いて行つて火に投げ込むがよいと言う、然しこれでは終りには段々火勢が強くなり、がつて働く者が堪らない。アマゾンの白日炎天下のあちらこちらの燃え盛る火の困りで仕事をするのはたまらなので若い人達が提議した。

それは適宜に枝を積み重ね、夕方陽の入りを待ち各々枝の山に火をつけるがよい、そうすれば夜の中にみんな訳なく焼けるというのだつたが先生はなかなか譲らない。そこへ神園兄一行がアリアンサから移住し、彼地の開拓方法と、若い人達の提議が一致して、漸く先生も納得せられたが、この仕事の為に年若い先生の愛嬢精晴子さんが早逝される一因となつたように伺っている。

然し先生は頑固だが一度確かな事実を見ると決して横

車は押されず一遍に賛成する。先生は農業の就働法に就て技術的であるより、精神的で一鋤毎に精神がこもらなくては嫌いである。茂さんがサンパウロからプランタマキナ（播種器）を一打持つて来て、米や豆を播いていた。先生はそれが気に入らない、すべて楽に仕事する事を好まない、一鋤一鋤心をこめつつ播いておられるからプランタマキナとは時間的にも大差がある。茂さんがカタンコン、カタンコン音をさせて、伸びやかにやっている音を聞くと「あの音はいかにも怠け者の音がするぜや、植物も一鋤一鋤心をこめて植える時成績がよいのじゃ」と言われたが、若い人達には茂さんのプランタマキナが羨望の的であつた。茂さんが播いた米、先生が播いた米の秋、出来栄えは何れも同じだったので、盛繁、神園、横山の三兄弟が恐る恐るプランタマキナの効能を述べて先生に願つたところ「プランタマキナもよからうぜや」と言われ三人が躍り上つて喜び注文したのであつた。

先生は苦行の人……先生の修養法は凡て難行苦行によるのでなければならぬので、農法についても特に常住子弟に説かれる。神園、横山、忍さんが一緒にグアラナの苗を植えたとき、忍さんは一本植えては苗の根本を両手で押さえ、先生の声色で「物を植える時は時間がかかつても精神をこめなければいかん、わしが今な精神こめて掌療法をやるけよく根づいてくれよ」と先生の掌療法のみねをしいしいやつて皆を笑わせた。先生は畑で多く

歩き働き廻る程足跡が多く、足跡が多いほど肥料も多く殖えると説かれていた。手際よく世の中を渡ることを好まれない。茂さんがちよいちよい野菜を作って町に売りに行き、小遣いを得て日用品を買って来るのを好まない。大農を好まれた。酒井先生（母校）から 焚くほどは風がもてくる落葉かな の句を送られたのを非常に感じられていた、日常の細かい生活苦には無頓着であった。

演説会……先生は農作中であろうと、家の中であろうと、思いつくと突然皆に仕事を止めさせて演説をはじめ。台所で皿洗をしている奥さんにも仕事をやめさせて演説を聞かせるようにする、時々英語の演説をも若い者を相手にやられた。

殺生嫌い……神園老人は鉄砲打ちが好きでよく山や畑で鳥打ちをすると「神園さんどうぞ天の方へ向けてうつて下さい」と注文する、鳥をうまく打ち当てると「やっぱり落ちるものですな」と感心された。先生は殺生が嫌いだった。ついでに或る時豆を蒔いた、鳩が無数に下りてきて先生は大変喜んだ。しかしあとに少しも豆が生えなかったので先生は「鳩が下りて来たのは嬉しかったが、あとがあまりよくなかった」と言われていた。

鳥追いに疲れる……或る年米を播いた。先生御夫妻、

神園一家、横山、忍兄等各々家族の数に従って作った。先生の所は夫妻二人きりであるから、他の家族よりも小面積の米作であった。アマゾンは大変小鳥の多い所である。収穫時期になると小鳥や雀が集まって来て各々鳥追に苦心するのであった。大抵の所は鉄砲を用意して追い立てる。先生は毎日空罐を叩き乍らホーホー追い立て米の収穫を急いだが、小鳥というものは面積の小さい所ほど集まってくる。その上近所の若い人達の多収穫地帯では勢よくぽんぽん鉄砲を放って小鳥を嚇かすので小鳥達はますます先生の米作地に集まってくるので、先生御夫妻は聊か疲れたらしく、或る日のこと「ばあさんや一寸向いの岸のグワラナザールを見て来るから、ばあさん一人でやつちよってくれ」と出かけて行かれた。向い側のグワラナザールと言うのは日本人会所有のものだったが、会員が忙がしいままに放って置いてあるので、雑木林の中に埋もれてあったものだった。先生が出られてから奥さんは一人で小鳥を追いつら稲を刈りたたいておられたが、一週間経っても先生が帰って来られないので、毎日奥さんは空罐を叩きながら鳥を追う声も涸れて出なくなり眼は落ちくぼむばかりだった。先生が帰って来られないのでとうとう怒ってしまわれた。慰与子さんの所へ行って「もうわたしは我慢できません、今度こそあの人の性分が解りました。三十五年間辛棒しましたが、もうすぐ離縁してもらいます」と泣き乍ら仰しやると、慰与子さんは「お母さん今頃そんな事を仰しやつても困

るでしょう、お父さんに平常言いたい事があつたら、どしどし仰しやればよいのですよ」と言えば、「そりやあんたの良人のように良い人だったら良いですよ」という訳でこの度びはほんとに気の毒な位怒られた。それで神園兄が先生の働いておられる所に出かけて行つてみると、先生もただ一人で雑木林に埋もれたグアラナの木を掃除しておられた。只だ一人でかなりの仕事をしてグアラナの実を採集しておられた。これは日本人会の仕事で先生個人のものではない。先生は神園兄をみると「ばあさん一人でやつちよるか」というので、とても怒っておられるという。「怒つちよるか、そんならお金を持って行つてくれ」と伸しやつて、二十（金偏に千）か五十（金偏に千）か托された。神園兄も奥さんの御機嫌もおるかと思つて喜んで持ち帰ったら、それがいけなくて一層「人を馬鹿にしている」というので怒ってしまったが、とにかく先生がお帰りになるまでにすっかり米を叩き上げ、袋に入れて積み上げてあつた。その頃はもう奥さんの氣特もなおつておられたが、米は十俵位穫れるのが、小鳥に食われて六俵位であつた。そこへ先生が「ばあさん、きつかったじやろうな」と言い乍ら歸つて来られた。この時の話は思い出す度びにおかしい話だが、先生のおかげでグワラナザールが助かり、グワアナの採集可能ということに勇氣づけられ、植民者は後からグワラナ園の手入れに出かける様になった。先生はどうして米の收穫を捨てて行つたか、小鳥追いに疲れ果てて、こんなつまらな

い仕事をするより人のために働いたが良いと思われたのか。で、あるとき先生は神園老人に「若い者達の家庭が円満にゆくために代る代る家庭訪問をして祈祷会を持つがよい」と提案されたが「若い者の家庭より先生の御家庭がそんなでは困る」と言つて上げたそうだ。さすがの先生も一本とられた恰好である。

負けず嫌い……先生は仕事に真剣であるが要領は悪い方であつた。物の考え方にも融通性のない所もあつた。畑で夫妻一緒に仕事をしておられるとき、奥さんは仕事が上手で、先生より先きに進まれると、負けた形になつて先生は御機嫌悪く「女はな少し位、仕事ができても鼻にかけるものじゃない」と言われる。「女は家に引っ込んでおつて、畑の仕事などするもんじゃない」と仰つしやつた、これは多分に奥さんを労わるおつもりであつたようだ。お花畑を草取りすると大事な花も何も鋏にかけてしまう。地上の仕事は高が知れている。天国にいつて仕事をするのじやと仰しやられた。

座 談 会（その二）

この座談会は一九五四年四月十六日スザノ市在住の植田良治校友の宅で行われたもの、遠慮のない校友が集まつて、主として校長の逸話について語り合つた、その要領である。出席談話者の芳名が明かでないことが惜しい。

先生は旅行の際校友を訪問されたとき、子供が生れるか、生れようとする大きなおなかを見ると、赤ん坊の名前をつけられるのが好きで、ウイリアムとか、郡司とか、女の子はマリアとか、比佐或は比佐子とつけた。

アマゾンからアルゼンチン、サン。パウロの校友訪問の旅に上られたとき、各地で講演された「時局に鑑み敢て一言せん」を印刷にした。あの序文は坂本靖氏となっているが、実際は平山惣次郎兄が下書きされたもので、先生の平素の気特をよく言い表したものである。先生が坂本氏に依頼されたのを、坂本氏がまた平山氏に依頼されたものである。

坂本靖氏（元海外興業株式会社社員）が今西郷と日われる頭山満翁に面会したく、崎山先生に紹介して貰うよう頼まれたことがあった。先生が快よく引受けられ、坂本氏訪日のさい横浜まで二男忍君迎えに行き、頭山先生の代りに先ず植民学校卒業式の頃で渋沢栄一翁の処に紹介された。坂本氏頭山さんに逢えた以上にこれを喜ばれた。

最後の訪問旅行のとき講演された故郷の力ということに、みんなが感激して故郷へ金を送るようになったそうである。

ずっと前に平山さんに言われた言葉に、海外で働いて得た初穂は親に送れ、但し盆とか暮とかに送金するがよい。五十円でもよろしい、そうすると少しの金でも親は喜ぶ、また金の値打がわかつてくる、と。人情の機微を

よく知っている話である。

サンパウロ市で一番古く且つ一番成功している洗濯業の加藤さんの話に、崎山先生の奥さんと同郷だが、奥さんの里は旧家で豪農であった。没落しなかつたらあの朝鮮鮎屋のような風をした崎山さんのところになど嫁に来る人ではなかつたと。

佐藤新吉氏（校友）が輸送監督としてブラジルに来る途中印度洋で一人の男子が海に落ちたので、直ぐに跳び込んで助けた。そのため船の方は二時間手間どり大損したとて、成田船長が怒つたとのこと、しかし先生は教える子のために善意に解釈して、輸送監督たるものは一人の植民者のためにもその位の責任感がなければならぬ、実に見上げた行為であつたとて、拓務省に話して佐藤君のために金杯を貰ってやった、そして凡てものごとは解釈の仕様だと話してくれた、弟子をかばってくれた温かい心である。

平山さんが入校当時は一番植民学校の張りきっていた時代である。その開校式のときは天下の名士を網羅して来ておられたので感心した。いかに崎山先生が偉いところがあつたかが伺われると。

校友の奥さんがカマラーダ（傭人）に殺された事件があつた。このとき先生は嫁は小柄なキレイな女は貰うな、大きな身体の、強い人を貰え、そうするとカマラーダも遠慮して手を出さないからと、丁度植田良治兄の家を訪ねられた先生が、植田君、奥さんは立派だねと感心

された。多分先生から見て理想的夫人だったのであろう（これは植田兄から出た話で一同大喝采） 先生がアマゾンから来られたとき、平山さんの家を根拠とされたので、平山さんは自分の寝台をあけて先生御夫妻に宛てがい、自分等は床に寝られたそうである。先生が感激されてこんな校友が居てくれるので楽しい旅行ができると感謝されたとのこと。

先生は何処でも眠るくせがあつて、牛乳の得意勧誘に行つたとき電信柱に倚りかかったまま眠ることもあつたそうである。汽車の中、電車の中で眠るのは有名で、よだれを流して眠るので唯だ一着のフロックコートのえりもよだれで点々と白くなつていた。

平山さんが在学時代先生が英語でマタイ伝を講義されたとき、次のような文句のところで即ち「二人の女曰ひき居れりその一人は召され一人は残さるべし」この句の説明に信仰ある者は召されるという事を、二人が身体を括つて心中しても一人は召され一人は残さるべしだよ、よく解るだろうと話されたそうで、その説明が振つていたので皆面白くきいたものであると。

植田良治さんが学校で生意気なことを日つて先生の言うことを聞かぬことがあつた、そのとき先生は黙つて謙遜という字を書かれたそうである。

怒らないで謙遜という字を書かれたことはいつまでも頭に残つて忘れられないとのことである。

先生の氣に入らぬ時面白くない時は鼻をほじるか、胸

をガリガリ搔くくせがあつた。曾て平山さんが先生にそのわけを尋ねると、まあそういう訳だね　といって胸を搔かれたとのこと。先生はまた演説のときに顔をなでるくせがあつた。(完)

二八、印象、感想

先見の明　野　田　良　治

先見の明は天が至誠かつ無欲の人間に賦与する特惠で、十年、二十年乃至は自分の存生中に富を成さんとする者などは、欲のため眼光がくもる、こんな人が五十年百年後を透見し得ないのは当然でしょう。崎山先生は驚くべき先見の明があつたと確信します。国土狭少人口過剰な上に日に月に増加する日本と、無人の境といえる人口稀薄、広濶な大アマゾニヤを比較するとき、日本民族とアマゾニヤとの関係は運命の太い綱で既に堅く結ばれているのです。日本人の力で大アマゾニヤを開発し、世界人類の福祉に貢献することは可能であるとの結論は、先生の如く能くアマゾニヤを理解した卓見の土でなければ握み得られないのです。

アマゾニヤの将来に就て先見の明があつたればこそ、先生はマウエスに分校設置を思い立たれたのです。そして躬行実践身を以て範を示すことをモットーとされた先生は辛苦はもとより一身一家を犠牲とするも尚辞せざる

堅い決意を以て、挙家現地に移り九年間献身的努力奮闘を続けられたのでした。

先見の明なき一般世人の中には先生を無謀の一冒険者と見る向きもありましょう。また先生のアマゾンや開発の計画は失敗に終わったと思っている者もあるでしょう。然し先生には末頼もしい多数の後継者がある。先駆の大業は多くの歳月を要します。眼前や足下のみ見ずに三十年後を見よ、五十年百年の後を見よ先生が着眼し且着手された大業成就の日は必ず到来すると思います。その日その時現在世人の理解し得ない先生の偉大さがさん然とその本来の光輝を放つでしょう。

祈りの人

輪湖俊午郎

崎山校長と初めてお会いしたのは昭和何年であたか、頗る朦朧としているが、多分ペルーからアンデス越えをされ、目的のアマゾン旅行を終えてからの帰途サンパウロ州に立寄られた時ではなかったかと思う。とにかくリアンサ移住地の拙宅に宿泊された折であつたに相違ない。あとにも先にもこの一回のみであつたが兎に角苦勞人に見る陰影など夢想だに出来ぬ至つて明朗な人間まるだしの印象が残っている。その日近隣の青年を集めて、講演をして頂いた。その内容なども古いことで失念してしまつたが、最後の祈りは今なお私の脳底に蘇かである。未だ曾て私はかかる厳肅な祈を聞いたことがない。

その真摯な態度と焰の如き熱意とはまさに神とぢきぢきに語る姿であつた。

崎山先生は祈りの人である。私はこの大先輩によつて祈りの如何なるものを教えていただいた。

人間の価値は誠にこの祈りにより清められ且高めらるるかに感ずる。真剣な祈りの出来る人は幸である。空響きの祈を神は聞き給わぬであらう。私は昭和八年一切の職を辞しチエテ移住地に隠棲し爾来一介の農民となつた。その後崎山先生は御一家とその弟子達数名を率いて宿望のアマゾンに先駆移住し、悲しいことに一九四一年マウエス湖畔に淋しく墓を作つたと聞いた。恐らく死の其日まで、日本民族の将来を思い、世界平和を念じ、あの力ある祈りを捧げたであらうと思う。

私の見る所によると移植民事業に係する人々には凡そ二つの型がある。その一つは出来かけた一定の社会に秩序と組織を与える拓人と、その二は前人未踏の地に千年の後知己を求めんとする所謂先駆者である。両者の価値は勿論甲乙はないが、前者は衣食に多く事欠かぬが衆俗の悪声に悩まされ勝ちであり、その例は上塚周平、永田稔、多羅間鉄輔などであり、後者は常に孤独と経済苦にさいなまれ時には極度な肉体の駆使に終始する。水野竜、青柳郁太郎、崎山比佐衛の如きである。蓋し若し世紀の後に芽生え輝くものありとせば、これ等拓人のその敬虔な祈りの足跡に発すべきを私は信ずる。信仰地を払って抑も何の移住栄達ぞや、私は只一度相見た崎山先

生ではあるが、崎山先生の弟子達と共に崎山先生の墓があの悠々たるアマゾン河畔に久遠に存するを忘れぬ一人である。

（輪湖俊午郎氏は長野県の人ブラジル開拓先駆者の一人、南米ジャーナリストの元老である）

崎山先生の印象 中 尾 熊 喜

先生が二回目に南米にお出でになった時、私はサンパウロ郊外のコチャ村で百姓をして居りました。夏の日がカンカン照っておるある日曜日、そのころコチャ小学校で先生をしておられた森喜代三さんから「今日は私共の母校海外植民学校の崎山校長がコチャ小学校で話をして下さるから聞きに來て下さい」という通知がありました。あまり咄嗟のことで、日本人会が主催して講演会を開くなどという訳にゆかなかったようでした。学校に集まったものは、学校附近の二三十名のもので、その頃は日曜日も仕事をしたものですから、仕事服のままのものが、素足で來て居られた方もありましたが、それがまたそのころのコチャの風景でもありました。

やがて先生が、森さんと共に馬に乗って來られました。馬といっても、その頃コチャで農耕に使用して居ったものです。肩に水筒をかけ、風呂敷包みを大事そうにさげて居られました。森さんの紹介があつて、先生が立上がられて、南米大陸が如何に有望なところであるか、

アマゾン地方がいかに関来性を持っておるか、サンパウロがブエノスアイレスに次ぐ大都会となり、次はリオデジャネロ、ベレムの順で、五十年もすれば南米の四大都市といわれるようになるかと説かれた後、自分が今度通過して来た南米横断旅行談（アマゾンを下りて）を初められました。話の途中「自分は写真機がないので、歌を作つて来たから写真をお見せする代りに歌をうたつきかせよう」といわれるので一同どつと笑いました。その中には歌が面白いと思つて笑つた者もありましたが、大部分は、写真の代りに歌をうたうなど一寸ユーモアを言つておられるのだと思つて、こちらも笑つた。先生は人が何と思つていようと平氣なもので、リヤマの説明をされたとき大きな声を張りあげて

リヤマのむれふくろ背負いて通りけり

何かときけばおのが身の糞

リヤマのむれふくろ背負いて通りけり

何かときけばおのが身の糞

リヤマのむれふくろ背負いて通りけり

何かときけばおのが身の糞

チチカカ湖の説明をされたのち

水ぎわに入道雲のさすみれば

なだの大海もかわらざりけり

水ぎわに入道雲のさすみれば

なだの大海もかわらざりけり

水ぎわに入道雲のさすみれば

なだの大海もかわらざりけり

或は一つの歌を六回位詠ぜられたかも知れません。それを次々と説明しては詠じてゆかれました。私は初めのうちはあまり感心した歌ではないと思つて居りましたが、つい引き込まれてゆきました。そして今では、入道雲のさすみれは……と時折詠ずることがあります。二時間半位のお話が終りましたので、年長者の松岡老人が立って「アマゾン奥地の風景が手に取るように感ぜられました」とお札を述べました。終りに先生は学校の出口に立って「またあう日まで」を歌つて「みなさんしつかりやつて下さい」と言つて出てゆかれました。

その頃のコチャの学校は、高原の野原の中に建てられた掘立小屋でした。でも日光が快よく照り、空には雲一つなく、風もなく、かげろうが上り、蝶が飛んでおりました。先生はこの自然を愛するが如く、静かに馬に乗つて、野の細道を下つて行かれました。私は一度しかお目にかからぬ先生でしたが、十年の知友を送る思いで見送つておりました。先生の百姓のような容貌、茶色の服、ボタンをかけた胸のポケットなど今も目に見えるようです。それから三十年、先生は目的通りアマゾンの土となられました。アマゾンにも南米の日光が強く照つていることでしょう。(完)

一九五五、九月

中尾熊喜氏は邦人移民の草分けの一人であり、コチャ産業組合の創設発起人の一人で、現在はジャグワレー肥

料株式会社の社長を後輩にゆずり、顧問として悠々自適の生活をしておられる徳望の人であります。

（須貝貞治）

崎山君の宗教生活に入る動機

小笠原尚衛

明治二十五年神戸の日本キリスト教会伝道部が大挙高知県に運動を開始した。そのとき本山地方は田舎で神道仏教以外の宗教は知らなかった。本山で最初に受洗したのは私と森下茂豊、三浦チヨと三人だけであった。この三人が洗礼を受けたという報道が広がって日本各地から伝道者が代る代る本山の片田舎に押しよせた、中に神戸日本キリスト教会の青木仲英牧師は最も熱心で崎山君の出生部落の吉延の学校で伝道演説会をやった。それまで崎山君とは同村でも格別交際はなかったのだが、君はその時はじめてキリスト教の話を聞いた由、これはその四十年後崎山君がアマゾンを下って第二回の訪伯のとき、私の居たイタケーラに来て二人が昔話にふけた時の君の述懐で、青木牧師の吉延伝道で初めて知つたといっていた。仏教と神道の外知らない片田舎の一青年はどんな思いでキリスト教なるものをみたことであろうか。崎山君の北海道行は明治二十六年かと思う。私は君より約一年おくれて渡道したが浦臼村では隣地に住うことになったので崎山君とは日夜の交際だった。

武市農場はキリスト教主義の植民地だったので信者た

るの有無に拘らず、毎週教会で礼拝を行つた、禁酒村だったので酒は厳禁だったが中には抜け飲みする者もあつて、崎山君はいつも抜け飲み退治の先頭をつとめていた。日清戦争後明治三十年頃かと思う。石狩川の大洪水で私も崎山君も土地を残したのみで無一物となつた。二人は川の沿岸の肥沃な土地を選んでいたので、水は特に甚だしく被害甚大、五日間は惨但たる状態であつた。村は板垣内務大臣に泣きついて北海道復旧費百五十万円支出して貰い飢寒を凌いだのであつた。崎山一家では父親が熊と衝突して大怪我をするなどで、経済的に全く行き詰つた。その後の方針に就て度々心境を語り合つた。仙台の東北学院に入学の希望を持ったのもそのころで、いろいろの災害はかえつて崎山君の心眼を開き、発奪させた。勉強に出ても暑中休暇などに帰道しての話に米磨ぎなどして苦学しているが学友がヘトヘトになつて弱つても、北海道で鍛えた身体には何の苦痛もないと言つていたことを覚えてゐる。

崎山君はちみつなこと、人を利用するといった様な智恵はなかった。とにかく金銭には無頓着で一直線の男だった。いつかイタケーラの夜話で、ベレンの領事館から金をやるから舟を造れといつて来たが、補助を受け理由がないといつて断つたと話していた。それから領事館を通じてパラグワイ進出を計画している者があるとして反対しておいたといつた。海のない出口のない国に発展性はないというのが崎山君の持論だった。崎山君のア

マゾン移住はちと深入し過ぎた感がある。然し北海道でもブラジルでも一旦植民地が開かれたが最後決して壊れるものではない、人が変り時代が移るうちに栄えてくるものだ。植民地は不滅である。マウエスの君の植民地も何十年かの後には必ず世に出て来る。そんな意味からして遺骨を二つに分けてサンパウロに分墓地を造るということには私は反対だったのだ。とにかく珍しい性格の男だった。峻峰国見山、白髪山にかこまれ、急流吉野川をめぐらした一寒村の奥地吉延にも、明治十四、五年頃からいわゆる自由民権の風が吹きつけ、続いてキリスト教の伝道も盛んだった。大自然の故山の風物と、時代と思潮とがああした崎山君の人格を築き上げる基礎として大いに役立っていると思う。(一九五四、一、二五)

小笠原尚衛老は八十五歳崎山先生の同郷で同志、小笠原吉次(九十一翁)の二男で一族に先んじて渡伯した人で、今やサンパウロ市に老を養うていられる。一夜二人で翁を訪うて、崎山先生の青年時代について追想談を聴くことができた。本稿はその筆記である。

(西岡一志、玉田善九郎記)

感想断片

崎 山 信 義

吉延にいったとき子供時代の友達だった高井房治老の話、崎山君が八つ位るとき、近所の人に連れられて金比

羅詣りに出かけて迷子になり八方探したがわからず、人々は帰って来て常吾親父に詫びをいった。大して気にもとめず、「心配することはあるまい、そのうちに戻って来るだろう」とさりげなく挨拶していたという。心の底では久吉という子を信じていたのであろう。

伯母田鶴子夫人から聞いた話だが、何でも労働会時代、青山一丁目から四谷へ出る電車の中で、家族連れであつたらしい、校長が窓を上げて留めるために、肱で窓ガラスを押したのだが、強すぎたのかガラスが破れてしまった。「おうこのガラスはヒビが入っていたようぢや」とすましていた。お父さんの押しの強いのは呆れる、と伯母が話していた。ただ何となく憶えているのだが、私などには出来そうもない驚くべき力だ。今にして考えると、彼のクリスチャン教育家としての型を破って山家育ちの凶太さとでもいったものが飛び出したとでもいうか、恐らくあとで考えたら彼自身も驚くような不意なもの現われたものではあるまいか。あまり意味づけてはいけないが、彼が祈つて征服しようとしていた百姓的なラフなもの、それが押えきれずして後日重大な時期に露出するに至った地肌（いいものもあり悪いものもある）の一部がここに出ていると言つてはいけないか。彼が「東京人」を制圧して一度事業に成功し、またこれを失つたものの底の方で繋がっているようにも思われるがどうか。つまり近代人や都会的な感覚では押し切れないところを押し切った、ところがその「或る物」が

彼をつまづかせた。良いにつけ悪いにつけ彼は強い自我の持主だった。キリスト教信仰でもまだとことんまではこの自我は洗い浄められなかった、若しそれができていたらもつと民主的な考え方をしたであらうし、事業にしても皆と共に守り立ててゆく事を考えたはずだ。

もつと具体的に事業の方面から卒直にいつてみれば、彼は本質的には田舎者の強い独裁者、それをもつて生れた美しい感情と、信仰で支えていた。それは悪いことではない。唯だ時代が異っていた、……時代だけではなかったかも知れないが……そこに悲劇がはいたい（胚胎）した。初めからそれが解っていたら、小さくても個人の事業として、強い彼の個性を生かした方向にもつていったにも拘らず、民主的運営を必要とする法人組織にした。しかもその運営の実際は彼の独裁に都合のいいように運んで行った。従つてその組織の中に支援者たちの力や、熱意を取り込み、それらを生かしてゆくというやり方をとらなかつた。そこで逆に「組織」に咬みつかれ、すったもんだの末に個人経営という元の穴へ逃げ込むことになった。これは単に形をかえたというだけに止どまらない損失を内外に於て招いた。しかしこれは私一個の見方でもつと深く研究しなくてはならないことである。

今度私が土佐に引上げて来てから田舎に行つてみて、こんなところにーと思うようなところへもおりおり伯父（校長）が手紙を出しており、特に外国旅行中には珍らしい絵はがきなどで便りをしていたことを知り、感心する

以上に驚いた。こうした情の美くしさは彼の天性であつて、また多くの崎山ファンを作ったのだと思う。

校長は彼の事業を「神の御事業」とまで徹していないにしても尊い仕事と考えていた、そのため他の人たちがその事業に奉仕するのは当然（？）と考えていたのではあるまいか、ところが、その事業と校長とは「不可分」であつたから事業に奉仕することは、崎山に奉仕することになった。キリストならそれでよいがそうでないからまちがいが起る、崎山のエゴイズムに奉仕すると考えるようになる人もあろう。校長は烈しく祈りつづけながらも、絶望と深い自己否定（懷疑）の過程を通過していないのではないかという感じがする。しかし校長の強さ、感情の豊かさ、烈しい求道精神、稀れに見る人と思う、やりとげた事業も失敗を差引いても立派なもの、その点で「伝記」に価する人である。しかし一個の人としてみるとき彼は「悲劇の人」ではないかと思われる。そのために彼の真価は増しこそすれ、断じてへるものではない。関連もなく思いつくままに。

崎山先生の生涯

アルゼンチン、ブエノス・アイレス

日本人教会牧師 谷 力

「誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦地に落ちて死なずば唯一つにてあらん、もし死なば多くの果を結ぶべ

し」

私は崎山先生の植民学校に学んだものではありません。然し私は多くの校友と同様先生の著書を読み、先生に接したことが動機となつて亜国に渡つた一人でありまして、先生は私の生涯に私の進むべき方向を指示して下さいました。先生は私の生涯に対し尊敬を懷いておる一人であります。先生の召天十三周年の追悼記念会を迎えまして、いささか先生の御生涯を追憶致したいと存じます。

千九百四十年一月二十八日の日曜日でした。私の牧している教会の礼拝集会に、思いがけなく崎山先生が郡十太郎氏の御案内でお見えになり、早速先生を教会の講壇にお迎えしてその日の奨励をお願い致しました。その日のお話はアフリカ大陸の開拓伝道者リヴィングストンの生涯について語りつつ、海外植民者にとってキリスト教信仰の欠くべからざる理由を諄々と説いて下さいましたが、出席者一同深い感銘を与えられたのでした。

ブエノス・アナレスの一月は盛夏の季節でありますのに、先生は例の黒の冬服を召し汗を流しつつリヴィングストンの生涯を語られた先生の面影は今も深く印象に残っています。集会のあとで一同先生を囲んでお茶を頂きつつアマゾンにおける先生の御家族の近況や、御事業に就ていろいろお話を承りましたが、そのとき先生が私の為に書き残して下さいた歌が、今も私の愛用の聖書に残っています。それは

もろともにみくにのためにつくさまし

またのあうせをいのりかわして

御教会の御集の後

一九四〇、一、二八

崎山比佐衛

であります。それが地上に於ける最後のお別れとは知る由もなく、先生愛誦の「また会う日まで」のさんびかを一同繰り返して歌い、再会を約してお別れしましたが、それはつい昨日のことのように思われてなりません。世には移民事業で金儲けをたくらむ所謂移民屋と呼ばれる人々があります。然しそうした人々の中にあつて先生は信仰の人であり、愛の人であり、真実に生きた人でありました。

晩年になられてから全家をあげてアマゾンの原始林の中に入植され、手に鋤を握られた先生、事業半ばにして骨をアマゾンに埋められた先生はまことに「一粒の麦地に落ちて死なずば唯だ一つにてあらんもし死なば多くの果を結ぶべし」との聖書のみ言葉を文字通り生きた人でありました。先生は日本民族によるアマゾン開拓の「一粒の麦」であり、先生のアマゾンにおける死は決して無意義な死ではなく、今後益々深く大きな意義を持って来ることを信じて疑いません。

開拓者、先駆者の歩む道はいつも苦難の道であります。私共少しく先生のお心を知る者は先生のお心の切なる祈願の那邊に在ったかを知ります。

第一は日本人によるアマゾンの開拓事業のあがらんこ

と、第二は先生御自身その捨石たらんことであつたと信じます。若しこれらの祈願が遂げらるるならば先生は死を辞さなかつたのでありましょう。死は悪いことではありません、人生死よりも遥かに悪いことが沢山あります。故に為すべきを為し、信ずべきを信じ、高き目的のために一生を捧げられた先生の御生涯と、その死は、誠に尊くも意義深い御生涯であつたと申さねばなりません。私共はもはや地上に於て再び先生の温顔に接することはできません。然し「されどかの時には顔を合せて相見ん」とやがて天のみくに於て相見相語ることが許されるであります。そのとき先生と世田谷の旧時を語る事を楽しみ、再会の希望を抱いて前進したいと思ひます。

（本稿は一九五四、七、二五日在モロン市郡十太郎氏宅先生記念会にて述べし原稿）

二九、結 び

植民学校開校前後のことであつた。ある日雑司谷を歩いていた崎山校長は、偶然文豪大町桂月の門前を通りかかった。五六歩行き過ぎてから何と思つたかツカツカと引き返してきてベルを押した。取次の書生に主人の在宅を確かめると、校長は玄関の次の間にずんずん上つていった。やがて客間に招かれるとそこに床柱のそばに

座っていた主人公が、挨拶をする校長の顔をいかにも嬉しそうにジッと見ていて、いきなり吃りながら

サ、サ、崎山君、キ、君の顔はサルに似ちよる

ずばりこう言い放った、相手が呆氣にとらた恰好でいると間髪を入れず

ト、ト、豊臣秀吉が君サルに似ていたそうだ

と頗る真面目である。この寸間柱月の面目まことに躍如たるものがあつた。校長はおれもそれでは秀吉と同格かなと思つたかどうか知らないが、例の両手で顔をつくりとなでて、もみ手をしながら、エヘヘと照てたわけである。南米談を始めると、一寸待て、といつて家中の人を女中まで集めて家庭講演会は二時間に及んだ。サルとは無礼と一寸思つたが桂月の校長を遇する先輩に接する如く、巧まらずして誠実の流露している態度に、たまらなく尊敬と親しみを覚えた。この二人の初対面から二時間には実に面白く有益だったが、当時桂月は人相手相を研究しているといつて床の間にも何かそれに因んだものが掛けてあつて、校長には偉人の相があると結論を下した。この桂月をして興味を覚えしめた彼の顔、十余年朝夕に親しんでいるその顔を見直して、そうかなと思つて見ると似ている。色が赤黒く濃い眉と目の間が迫り、眼孔がくぼんで、その奥に鋭い眼がぱつちりと輝いている。笑うときは限尻に一杯しわをよせて、いかにも人なつこい魅力がある。頬がこけて上唇が少しとんがつているところ一層サルと共通するので連想させるのである

う。

人間は崇拜する人に似るといふが、四十過ぎてからの彼には、顴骨の出たところなどからリンカーンを思い起させ、額の両方が深く禿げ上ってリヴィングストーンに似たものを感じしめた。晩年の写真（本書巻頭）を見ると冒し難いものが迫ってくるのを思わせる。あるときトルストイの伝記を読んで嬉しがっているので、何かときくと、トルストイが青年時代鏡に写した自分の顔を見て、大きな鼻が真ん中にあぐらをかいているのをつくづく眺め、こんな不器量な顔で来てくれる人があるだろうかと悲観したといふので、彼は傍らの夫人を顧み「僕もこんな大きな禿があつても嫁に来てくれる人があるかしらと心配したものだよ、でもよかったね田鶴さん」といつて頭を抱えて笑いこけた。彼は少年のとき後頭部に出た腫物の手当が良くなかったため径一寸にあまる禿があつて早くから頭髪を伸ばしてそれをかくしていた。老境に入つては各方面から侵入してきてもはや掩うべくもなかったようである。身長は約五尺五寸、毛深いたちで筋骨は逞ましくて肩幅が広く引きしまった肉附で、見るからに精気に充ち溢れていた。

初老の頃までの彼は天を仰ぐようにして両腕を組み、胸を張って一步一步大地を踏みしめるようにして歩いた。バンカラで無頓着ということに評価されていたが、第一回外国旅行から帰つて以後は毎朝顔に剃刀をあて、服装にも気を配り、ネクタイも上手に結ぶようになって

て、立派な紳士だった。若いころは特に素朴で天真らんな性質が豊かに表現されていた。従って誰にも城府を設けず、誰をも憚らない言行のうちに真摯なものが人に迫るので、初めて合う先輩たちにもすぐ愛され信用された、それは決して一時的なものではなかった。不思議なほどの魅力だった。

彼をして大事を成さしめたのは逞ましい体力と、強靱な意志力であるが、また彼ほど勤勉で、小事に忠に、時を惜しみ、努力を積み重ねていった人は少ない。労働会の経営の十余年間は蜚ばす鳴かず縁の下の力持ち的の仕事だった。しかしこれはその後の彼を飛躍せしめるあらゆる力を蓄えるための貴重な歳月であった。蛟竜は池中に潜んでいるときが長いのである。植民学校の創建に着手してのちも労働会時代の心構えを堅持して臨んだら、もつと変った形で発展したかもわからない。もとより時代の勢の然らしむるところであるが、一時彼らしい軌道から外れたことがつまずきとなったことは否めまい。

数々の美しい長所のあったことは挙げるまでもないが、自然人であつた彼は我ままであり、直情径行であり、ワンマンであつた。最大の短所は短気で、このために苦んだのは彼自身であつた。

喜怒色に現わさないのは東洋では昔から君子のたしなみとされているが、彼はその逆で気持をむき出しに示していたが、諸氏の追憶談にもあるように彼はよく怒った。怒るときは頭髪も逆立つばかりだが、あとは光風斉

月からりとしていた。この激情は彼の身内に流れていた血で自分でもどうすることも出来なかったたのである。千九百三十三年一月四日の日記に彼はこう記している。「午後のこと、一号地のミールヨの中を除草したとき子供らが言うことをきかなかったので腹が立ち、声荒く罵りました。夜になり母さん（夫人）に言われ又悔いしました。私は之が大きな弱点です、これを除かないうちは立派なものにはなれません。悔いつつ寝ました。」

そしてそれから三日間、彼は聖書を読み祈りながら断食を続けている。七日の日記には「断食の日も今日にて満てり、この清き心のあるうちに我語らん、われ断食中に詩篇を読み、聖者ダビデに習い、悔い且つ祈りたり、この間に得た恵みは謙遜という事でありました、私は謙遜が欠けておりました、謙遜は平和、忍耐、神を呼びますが、高慢は悪魔をさそいます（後略）」と書きつけている、容易に腹の立たない人には滑稽に見えよう、また勝手に怒っておいてあやまるなんて虫が好すぎると評する人もいよう。

だが彼を深く知る者にとりてはこれは痛々しいことだ、案外世の中には立派な人だと思ふ紳士でも、わが子を叱ってざんげどころか平気で威張っている人も多いのではあるまいか。とわいえこの彼の短所を弁讃しようとは思はない、同情すべきだと思う。

この短所に伴う悩みはいろいろの点に見られる。彼の信仰は「十字架の救に与る喜び」に充たされたもので

あつたが、それは神学的な理論や教義によつて啓発されたものではなくて体験によつて得たものだった。彼の聖書を読む態度は心読というよりも体読だった。しかし救いを信じつつも怒りの感情を克服しきれないために一層己れを責めた。「ローマ人への手紙」を愛読したが、パウロの「われは罪人のかしらである」という言葉を能くおのれに引き当て、責めた。もはやわれ生けるにあらずキリストわれにありて生けることを強調しながら、また彼の血の中をめぐる悪魔のために裏切られては泣く。ああわれ悩める人なるかなとのパウロの嘆きは彼のものであつた。しかし本能といつてもよい根強い身内の力にも屈することなく、求道者らしい血みどろの生活を続けて最後まで闘つた。

彼は多忙な生活の中でも書物を手にしたが、読書力は強くなかつた、従つて多読家でなかつた。

何を読むべきかについて慎重に撰択し、それを読みはじめると丹念に読む、興味と必要によつては幾度でも読んだ。深く読んでその中から何らかの教訓を得ようとするのが彼の読書法だった。聖者、偉人、探検家の伝記、地理、旅行に関する書物などを特に愛読した。趣味娯楽をもたなかつたというよりもそういう意味で悠々と楽しむときは無かつたといった方が真実かと思う。しかし会合の席上の余興の場合などでは、かくし芸には事欠かず愛嬌たつぷりで何か演じたし、移民に聴かした「イヤ唯の弥八」の滑稽武勇伝講談や、「石童丸物語」などは彼の独

独占的読み物であつた。

しかし、かれはペンをとる人ではなく、弁舌の人であつた。おおくの青年を動かし、困難な植民の道へ進ませたのは彼の心からの叫びであつた。

大事を成す人はいろいろ複雑な素質、而も優れた多くのものを具えている。その中にどこといって非凡なところは見えなくて、常識が円満で、抱擁力が豊かで、多数の人の力を結束し、統率して大を成した人が多い。人に長たり將たる器というのであろう。自分の体力と意志と信念と実行力と、自己中心に勇往邁進することによつて大事を成す人もまた少くない。

崎山校長は後者であつた。人間が一人の力ですることとはかが知れているといつてのけることはできない。彼の如きもその目的、その志すところによつては、その努力が完全に報いられたこともあつたし、場合によつては失敗に歸したと見られることもあつた。言い換えると個人の力でやつてゆくときには成果を収めたが、一方において志を大にし国民の総力を結集しようとして立ち上り、それを合理的にまとめ得ないで遂に破れたのは、自我の強いワンマン的な彼の素質に根ざしていることを否むことはできない。崎山信義の感想はこの点にふれて多くの示唆を与える。それと同時に彼の取り組んだ問題が、やつてみれば複雑な困難な性質のものであつた。

彼のみの責任ではない、それらを対照しつつ考えてみることは意義がある。他人に対する懷疑も手伝つて、マ

ウエスでは崎山一家を植民教育家にする決意で出発したことは覚書で明かだが、身内のものであれば思うように成ると考えたとすれば余りに単純だとみなくてはなるまい。あつものにこりてなますを吹く結果をみずして彼は逝いた。いや別に成算があつたのであろう。それを知りたいと思う。

彼は生涯夢を見つづけた人であつた。彼が静かに一人であるとき、じつと黙想してほのかに微笑んでいるときは、夢が生れつつあるときであつた。彼の夢も大部分は当然空想に終つたが、少しでも実現性の可能なとき、勇敢にそれを実行しようとするところに、彼の偉大さがあり、飛躍もあれば、危険性もあつた。しかし不可能なことを強く指摘されると断念して、その夢に次ぎから次ぎへと空想を加えて、その夢を大きくふくらまして喜んだ、あれが夢の世界というのであろう。幸福な人であつて、大業を成す資格のある人だつた。

打算を伴う夢もあるが、夢は打算を超越する。

特に理想家の夢はそうである。この意味では彼は実践家であつてまた理想家であつた。

崎山比佐衛が六十余年の生涯を通じて成したことをみると一寸多方面に亙るような感がするが、いうまでもなく彼の本領は植民者であり、もつとしぼつて言えば移住民教育者であつた。それは植民学校を建てて子弟を教育したからというだけではない、彼は何をして、誰と語つても、どこにいても、彼の思い、彼の言葉、彼の願い

祈り、彼の一切がそのことを実現し完成せしむるためにあった。移植民のことは世界の動きに比べると、日本は約三、四百年後れているので問題にならない。しかし明治の中期以後は日本にとっても新しい事実となった。

台湾を占領し、関東州を租借し、満蒙鉄道経営権を獲得し、朝鮮を併合したことによって、国家は植民地統治に就て新らしい経験をもち、その画策は先進国に劣らぬ実績をあげた。植民地問題の本質的な意味における是非は別として、どこの誰れが何とケチをつけようとも、この建設的能力は自信をもってよい。だが、広く未開地を対象とする移植民のことになるのと全く無為無策だつたといつたら言い過ぎであろうか。国土が狭く人口は稠密で、生活は世知辛く、たまりかねた国民は乏しい僅かな機会を捉えては海外に出ていった。彼らは赤手空拳出稼移民として多年の辛勞によつて産を成し功を建てた。移民の法規も、職制も、施設も、航路船舶の整備も、凡ては移民の先行に伴う応急処置として設けられた。

（附録、日本の海外移民参照されたい）

今日と雖も国家の力で移植民の方策を講じ、推進しているというほどの段階ではない。各政党の政策の末端にお題目のように唱えられている程度である。すべての機関が移民の上にあぐらをかいている観がある。

然るに彼は四十余年の昔ここに着眼し、これを研究し、これを解決し得ないまでも微力を献げようと心に誓つて、終生これがために働いた。明治時代から苦学生

の境遇を一つの社会問題として採り上げ、組織的な方法のもとに彼らの友となってその育成に心を砕いた。その間に既にこのことは約束されていた。海外在留同胞の実状を調査視察することに彼ほど徹底的だった人を曾てきかない。その結果移植民者の教育の急務であることを痛感した。このことは民族永遠の発展の上に、歴史的な影響を与える重要問題であるにかかわらずその頃の盲点だったばかりでなく、今日でも日本の一大盲点であると断言したい。彼は全く閑却されていたこの問題に対し、一般国民の国際的教養の必要と重要性を強調し、之が解決につくした意味で、新たな時期を画した先覚者であった。この着眼、この画策がよし敗戦のために、一時阻止されているとしても、この偉大なる識見と業績については何人も、妄りに批判し否定することは許されない。知命を過ぎて大アンデスの高所を走り、アマゾンの大江に棹さして、単身大陸を横断した日本人として稀れな壮挙も、探検者として誇らんがためでもなければ、旅行を亨楽せんがためでもなかった、彼はその使命と信ずる天職にふさわしい死所を求めて歩いたのだった。彼の至誠は天地の感応するところとなって、広大なるアマゾーニヤの一角風光明婚なマウエスの地が与えられた。

原始世界から近代文化へと飛躍する現代式開拓の手段を彼に期待することは無理であろう、しかし未開地開拓に就て自給自足と労働の絶体的必要性を唱えた彼の主張は原則として動かすべからざる鉄則である。彼はこの原

則を実践躬行するために、自ら一族を連れてこの大陸の第一線に入植し開拓者として具さに辛酸をなめた。その忍耐と勤労と祈りの十年に亙る生活録は、人々の胸をうつ。その真剣な求道の姿には一種の威圧を覚える。かのアフリカの父と呼ばれるダヴィッド・リヴィングストンが白人の奴隷狩を叱責し、暗黒アフリカの開明を祈りつつ三十余年間いばらの中に起居し、遂に千八百七十三年五月一日バングウェル湖畔千古の密林の中に祈りつつ終えたその生涯は、彼が一生畏敬し又私淑したところであつた。

南米大陸のどまん中で、一本一本のグアラナ樹のもとに跪いて祈りつつ、四十度の熱で遂に起つ力を失った彼の脳裡を去来したものは、リヴィングストンに笑われないうようにということではなかつただろうか。彼は日本のリヴィングストンであつたといつても過言ではないほどよく似ている。彼は遂にアマゾン河畔に老骨を埋めて永遠の人柱となつた。彼の教え子たちによつて建てられた大理石の墓碑こそ未開地開発の道標となるべき金字塔である。彼ほど日本民族の平和的な方法による海外発展を願ひ、その実現のために情熱を捧げた人は珍しい。南米を熱愛しその開拓に精魂を傾むけた、偉大なるアマゾンヤこそ彼の愛人であつた。彼は今静かにその懷ろに抱かれて安らかに限っている。

稿を終えるに当って繰り返して言うことを許されたい。彼は名門の出でもなければ、天才でもない。それと

は逆に恵まれない境遇に育った。しかし倦むことなく向上の道を辿り、努力と画策を続けて、多くの人の運命を好転させ、社会に良い影響を与えた。自ら求めること薄く、人類社会特に未開地の進歩にその生命を堵けた。彼は安易と享樂を斥け敢て試練の道を選んだ、止むなく艱険な生活に陥ったのでなく、自らそれを選びとつたところに尊い彼の本領がある。彼はわが道を行くためには、何物とも妥協しなかった。単純であるように見られながら頗る複雑な半面をもっていた。

そして靈肉の闘いその矛盾からの相克……烈しい性格であっただけにその相克に悩みつつ、終生を通じて敬虔な祈りによってそれに打ち克つことにつとめた。彼の事業が特色をもつように、その人間練成の過程にも変化があり波乱があつた。眼前の利害に支配されている現代人には彼は興味のもてる存在ではあるまい。しかし彼は現代人の欠陥を救うに役立つ多くのものをもっており、日本の行き詰るおそれのある将来に対しては移植民の如何にかかわりなく、窮状打開の大切なカギを握っているように思う。このかくれた先覚者こそ、ランジェルが「みどりの地獄」と呼び、あるいはハルトが「未知の地」と名づけた未来の宝庫、草深いアマゾンの地下から呼び起し、いないな彼が信じて逝いた永遠のみくから招き寄せて、その足跡をたずね、その全貌を示して貰うべき人ではあるまいか。

(完)

彼は死んだが信仰によって今もなお語っている

へブル人への手紙 第一章 第四節

附 録

一、日本の海外移民

二、時局に鑑み敢て一言せん

一、日本の海外移民

日本の海外移民海外に渡航した人で、著名になった人たちをみると、大正九年（一九二〇）三月、沿海洲ニコラエフスクで、石田領事等が虐殺された事件があったあの日まで、現地人に絶対的信望を博したほど成功していた島田元太郎が、シベリアに渡ったのは明治十九年、彼が十六歳のときである。北米合衆国でポテト―栽培で有名だったポテト―王牛島謹爾は明治二十一年に渡米している。森林商会の支配人で終始した村井保固の渡米は明治十二年（一八七五）である。この人は大正四年（一九一五）までの三十六年間に、大平洋を六十八回横断した

というレコードホルダーであつた。

菅沼貞風が図南の志を抱いて、若くしてマニラで客死したのは明治二十二年。この年には高橋是清が同志と共に南米ペルーに渡り、日秘鉱業株式会社を起したがこれは見ごとに失敗した。岩本千綱（退役陸軍中尉）がシャムを踏査し、これが刺戟となつてジャム殖民協会が設立されたのは明治二十五年。三十五年には笠田直吉がマレーにいつて、ゴム栽培に着手した。自由党の先輩西原清東が、同志社総長を辞して、テキサスに米作をはじめたのはその翌年である。これらは一例に過ぎないが、幕府時代に密航した勇敢な海外渡航の大先駆者、新島襄は別として、明治初年に佐藤進が公式第一号の海外渡航免状を下附されて出かけたのが最初である。有名人の多くはそれにおくれ明治中期頃になつてから続々渡航したことが前記の例でもわかる。

移民の方も個人の動きと大体同じようである。

明治元年四月に米人ウエンリートなる人の手で、ハワイの砂糖畑の草分時代に、そこで働く出稼移民三百人を三ヶ年契約で送りこんだのが、おそらく最も古い方であろう。ところがこれは殆ど無頼漢に等しい連中だったので、雇主との間に争議の絶えるときがなかった。そこで外務省は翌年九月に上野監督官を移民連れ戻しのために現地に派遣し、翌三年二月全部帰国した。集団移民史の第一ページはまことに香ばしくない。同じころ明治二年に、オランダ人スネルが日本人二十人を連れていつて、

北米合衆国で労働に従事せしめたのが、彼地移住のはじめといわれる。

しかし、日本の出稼移民は明治十八年（一八八五）に、ハワイの砂糖耕地へ、第一回に九百四十五人、第二回に九百八十五人を送った。これが集団的移民として最も早く、本格的なものである。明治二十五年以後はニューカレドニアに、鉱山労働者が出稼ぎをはじめた。これは南太平洋方面への発展の草分けである。明治三十二年（一八九九）四月には、南米ペルーに、第一回の移民八百名が送られた。このように個人の動きと共に、しばしば早くから話題に上り、また試験的に行われ、必ずしも予期にそわなかつた集団出稼移民も、次第に真価がみとめられて本格的となり、各国に出かけるので、法規の制定が必要となってきた。法規が公布されると、移民取扱の機関も急激に、多数の成立をみるようになった。

明治二十四年七月、時の外務大臣榎本武揚が、内部の異論を排して、大臣官房にはじめて独立の移民課を設け、海外出稼および移住民に関する事項一切を管掌せしめることにした。同二十六年にはこの課を廃して、移民事務を通商局に併合し、明治四十一年十二月、通商局第三課をして再び、移民、旅券、戸籍に関する事項を専管せしめることになった。大正二年にこの事項は同局第二課に移管されている。大正八年七月、行政整理のあと再び通商局第三課に

一 移民戸籍および国籍並に在外帝国臣民の保護に関

する事項

二 在本邦外国人および渡米外国人に関する事項
とを主管せした。大正十年七月一日には、通商局に特
に移民課をおき、同十三年には、再び移民事務は同局第
三課に復した。拓務省の設置とともに、移民業務も同省
に移管された時代もあり、職制も幾変遷して、現在は欧
米局移民課の管掌となっている。

職制が設けられると次ぎは、法令の発布であつた。制
定後も幾たびか、変改を加えているが、内容は、移民の
保護と、移民取扱業者の取締が眼目で、移民の援助とか、
奨励という点には少しも積極性をもっていなかった。明
治二十七年五月二十六日に、はじめて外務省令第六号を
以て『移民保護規則』なるものが、制定発布された。同
二十九年四月七日付で、『移民保護法』と改められ、その
施行細則が省令第三号で、同月二十七日に発令になつて
いる。そののち明治四十年六月外務省令第三号で、以上
の法令が改訂された。それが現行法で細則取扱規定の方
は、必要に即して部分的には幾度か改正をみながら、現
在まで実施されている。

次ぎには移民取扱機関である。最初の移民会社は日本
吉佐移民合資会社で、その創立は明治二十四年十二月で
ある。同三十二年二月になって、この会社は組織を変え
て東洋移民会社となった。そののち諸国に出る労働者の
増加に従い、移民会社と、個人の移民取扱名義のものが
続々と現れて、明治三十八年頃には両者を合せると、二

十九の多きを数えたという。

ところが、オーストラリア、カナダ、メキシコ、ハワイ、フィリピン等々相次いで、わが出稼労働者の入国を制限し、若くは中止するようになった。そこに北米合衆国の日本人労働者排斥問題が起った。明治二十九年、サンフランシスコで日本人学童問題に端を発した排斥の声は、各地方に拡がり、その前年から唱えられたドイツ皇帝ウイルヘルム二世の黄禍論などもこの問題に拍車をかけた。既に明治三十四年（一九〇一）にカリフォルニア、ネヴァタの二州では排日の決議が行われていたのに、排日は突如として起ったものではない。その間日本側としては、政府も、在米移民も、見るべき緩和策を講ぜず、どたんばになって、移民の啓発運動に乗り出す一方、朝野有志の間で日米両国民の親善に努めたのであるが、既に手おくれであつた。明治三十五年にハワイに在る日本移民の米本土への転航が許されると同時に、同四十年までの六年間に、三万八千三十六人が入国している。この急激な而も節度をわきまえない多数日本人の入国が排日熱をあおる結果になったことも見のがせない。

そこで明治四十一年の日米紳士協約によつて、写真結婚の花嫁以外、移民関係の日本人は合衆国には渡航できないことになった。これは日本移民にとっては大打撃である。移民について米国より数日の長あるイギリスは、広大な全領土にわたつて、あらかじめ排日網を張り廻ぐらしていたので、日本移民のゆき先は南米諸国の

みとなった。

極度に制限された結果、哀れをとどめたのが移民取扱業者である。その殆どは失業し、業界にはきびしい自然淘汰が行われ、明治四十二年ごろには、営業を継続していたのは東洋移民合資会社、森岡商会、皇国植民合資会社等々僅かに十指を屈するに過ぎなかった。

幸いに南米、とくにブラジルに、比較的大量の移民が受け入られる気運となり、北米合衆国にとって代る大口の移入国が登場したので、各社は競って、ブラジル移民の取扱に殺到した。国内でも人口問題、食糧問題などが論議されるようになって、国民の海外発展は真剣な要望となつて。閣議に上るまでになった。そこで新情勢に即応するため、寺内内閣の大蔵大臣勝田主計の勸奨が動機となり、移民関係の各会社を漸次解消合併する想定のもとに、海外興業株式会社が創立されたのが大正六年十二月一日である。

日本移民が開始されてから約三十余年を経過して、やや国策を加味した移民会社が発足し、事業が軌道にのつた。爾来統制のとれた方針のもとに進展中、大東亜戦に突入し、戦後は国状が一変するとともに、移民事業も根本的に再検討を要する時期となっている。

移民の行先が極端に制限されたので、明治四十年後の移民の大部分は南米諸国に向うことになった。第一回の南北全米の視察を終えた崎山会長が、日本移民に就て結論を得るよりさき明治二十七年（一八九四）九月に、政

府の命で最初の日本人として現地視察をした代議士根本正は同様の意見を政府に報告している。そのうちも外交官や、視察旅行者の中にも、同様の説をなしているものは少くないので、これだけを敢て彼の卓見とするには当らないが、その点についての論議は後にゆずることとする。

彼はブラジル以外の南米諸国を移民に不適當だと論じたのではない。特にブラジルの有望なことを強調したのである。それから早くも四十年の歳月が流れた。彼が訪問当時までのブラジル移民はどんな状況であつただろうか。

ブラジルは一五〇〇年五月三日、ポルトガルの印度航行艦隊長官カブラル（一四六〇〜一五二四）によつて発見され、ポルトガル領となつた。これが地理的に認められたはじめて、日本の土御門天皇時代、足利氏の末期に近い。そのちポルトガル皇室の私有物扱いだったことや、本国の状勢の推移に支配され、開発は遅々として進まなかつた。はじめてマデイラ、アゾールス両諸島から、四百六十一名のまとまつた農業家族移民が、ブラジル南部州に移住したのは一七四八年のことである。中南米の独立に刺戟されて、一八二二年に帝政独立国たることを宣言し、一八二五年母国から承認されたが、のち一八八九年に独立共和国となつた。この国はずつと黒人奴隷の力によつて開拓されていたが一八五〇年に奴隷売買が禁止され、次いで一八八八年には奴隷解放令が發布され

た。ブラジルの面積は八百五十一万四千八百八十九平方キロで、日本の二十二倍に当る。地質学者のハルトが「未知の地」とよんだアマゾン奥地には、まだ人跡未踏の地もあるというほど広大な未開地が多く、現在なお一平方キロ六・一人という人口密度である。最も必要なのは労働力で奴隷解放後は国策の上からも、大地主の需要からも、労働者を誘致することが急務とあつて、欧州移民の入国を促がすに至った。一八八一年から一八九〇年までの十年間に、欧州から南北米洲に向つた移民の数は、五百二十四万人といわれているが、その大多数は北米合衆国に向い、ブラジルに上陸したのは五十三万人であつたという。奴隷解放の年からブラジル入国の移民数は、次第に多くなつて、一九三五年までに同国に入つた、外国移民の総数は、四百六十二万三千七百八十九人である。（数字は中尾熊音編「移民問題より見たるブラジルの現状」による）日本とブラジルの国交は、明治三十年（一八九七）二月、両国間に締結された通商航海条約が批准交換されたときに始まる。移民のことは、それより前から話題にのぼっていたので、条約が締結されると同時に表面化した。

東洋移民会社と、サンパウロのプラト・ジョルダオ商会との間に、農園労働者として、日本人移民入国の契約が成立したのは条約締結と同じ年である。ところが、この契約は同商会から電報一本で断られてしまった。理由は「同国の特産であるコーヒーの価格が暴落したので引

受ける能力がない」というのである。既に渡航者は決定し、二千名の移民は神戸に集結し、日本郵船会社の土佐丸で、八月十五日に神戸を出港するという直前だったのだ、このために、東洋移民会社は三十万円の大損害を蒙る結果となり両国間のつまずきとなった。

そののち両国間に起った移民に関する話は種々の事情でまとまるまでに至らなかった。日露の役に日本が勝って、一躍世界に存在をみとめられたことは、一方では恐日の観念を与え排斥を招く原因となったが、ブラジルはむしろこの結果日本の実力を認識したとみるのが至当であろう。やはり遠隔の地で、両国お互いに国情が理解されなかったことがもとで、空しく十年に近い時日が過ぎた。

明治三十八年四月、杉村濬（杉村陽太郎の父）がブラジル公使として着任し、国書捧呈の席上、大統領ロドリゲス・アルヴェスは日本移民入国の希望を語り、ついで大蔵大臣も同様の希望を表明した。同公使は間もなくサンパウロ州内を視察し、至るところで官民の歓待を受けると同時に、彼らから日本移民を入国せしめるよう懇講をうけた。杉村公使は同国当局と再三この問題について意見を交換したうえ、同年六月三十日付で『南米伯刺西爾国サンパウロ州移民状況視察復命書』を本省に送った。これはブラジル移民が公式に取扱われる契機となった。ブラジル移民事業を創始したのは皇国殖民会社社長水野竜（高知県佐川町出身）である。彼は明治三十

九年三月と、翌年十月の三回ブラジルに渡り、杉村、内田両公使のあつ旋のもとに、サンパウロ州朝野の有力者と、一年有余の折衝ののち、具さに創業者の苦心をなめて、遂にその初志を実現するまでにこぎつけた。

こうして彼によつて送られた最初の移民は七百八十一名（内男六百名、女百八十一名）であつた。

この勇敢な記憶すべき開拓の先駆者が、笠戸丸で五十日の航海を終えて、無事にサントスに上陸したのは、明治四十一年六月十九日である。このときは水野社長自から輸送指揮に当り、ブラジル開拓の日本功労者である上塚周平も会社代理人として移民と行を共にしている。

それ以来日本からのブラジル移民は主として、水野の権利義務を継承した竹村与右衛門（高知県富豪貴族院議員）経営の竹村殖民商会と、東洋移民会社によつて続けられた。日本のブラジル移民は、第一回の渡航から大正三年三月までの約十二年間に、輸送回数十回、人員一万四千八百六十七名、三千七百三十四家族が送りこまれた。

日本の外交官で最初に南米に使したのは野田良治で、ペルー国リマ市に赴任したのが明治三十三年（一九〇〇）である。民間人としては「環海異聞」で有名になつた漂流人津太夫が、ロシア軍艦ナデシユダ号で送還される途中、フロリアノポリスに入港し、上陸してバナナ、ココを賞美した話などは、おとぎばなしに似た事実である。移民開始のころ日本から入国した知名人といえば、

豪放果敢な事業界の傑物山県勇三郎が、一敗地にまみれて、ブラジルに走ったのが明治四十年（一九〇七）で、その前年には藤崎三郎助によって日本の商店が、サソパウロ市に開業された。カフエランディアで植民地をはじめ、壮志を抱いて逝いた平野運平は、明治四十一年の入国、多年拓殖に心血を注いだ星名謙一郎が、青山学院を出て外地に渡り、亜国を経て移住したのは同四十二年である。

日本における初期のブラジル企業組合『東京シンジケート』を代表して渡伯し、植民地開拓史上に光輝ある苦闘の跡を留めた青柳郁太郎は明治四十三年に入植している。

以上日本からの初期移民渡航のあらましと、二、三有名人功労者の名をあげたに過ぎないが、これで明かなように崎山比佐衛が最初に同国を訪問した大正四年は、ブラジル移民開始後わずかに八ヶ年後の黎明期だった。

（完）

左の一文は当時祖国の状況に刺激されて在留同胞が非常に動揺し其の去就に迷っていた時彼が南米各地を廻った旅行のとき講演したもの的一部である。

二、時局に鑑み敢て一言せん

崎山比佐衛

一 故郷の力

小供等と故郷……此の問題は私の方から皆様へお尋ねしたい問題であります。御約束により一言申し上げます。然し敢て一言するには多少自任する処ないわけではありません。其は此問題の解決に最も必要な永住の決心を私は持つて居ります。帰りたい、或は帰ろうかな、などという人が何人寄つてもそれは片づくものではありません。帰らないという人の話を聴いてご覧なさい。屹度参考になることがあります。これが私が敢て一言し得る所以であります。私が昨年の暮、中央沿線を旅行して居りました時、その頃はまだ今の様に教育問題などは知らない時でしたが元来小供が好きでありますので、小供等に話をしてくれと頼まれ二三ヶ所話しました。併し不思議に何処でもそれらの子供の心と私の心とがピッタリ合わないことでもあります。それで力抜けがし、氣おくれがし、良心の責めという程でもありませんが何となく淋しくなりました。

それで或る処で小供等が五、六十人居りましたがこの『ブラジルで産れた小供さん方は手を上げて下さい』と言いますと、八割迄が上げました。

日本産れは二割でした。それで解りました。所謂釈然

としたのであります。それは此国を故郷として生れた子供たちに、私が日本の内地を巡って小学校で話をしていた様な気持だったからであります。こうと気がつくとは非常に大胆になれて何の怖れもなく腹の底を打明け得る様になりました。小供の事ですから私の話が解るか解らないか知りませんが、此等の小供が二十歳三十歳と成人した時に、あのアマゾンの奥から出て来た爺のいうた事には間違いなかったと思ってくれるだろうという確信を得ました。また私自身も後世に笑を残す事はないという自信を得ました。

顧みれば私は過去殆ど三十年『ブラジルへ』『ブラジルへ』と叫んで日本の各県を廻ったのであります。また、海外植民学校を建てて聊かではありますが男女の健児を海外に送り出して居るものであります。此サン・パウロ州だけでも私の教え子が三百人余も居ります。私は今アマゾンの奥に居るものですが親戚身内三十余人、小供四人、皆連れて参つて居ります。一人東京の青山墓地に居りますが其子の骨もアマゾンの奥へ取寄せる事に致して居ります。孫も九人居ります。そうして私は当年六十六歳であります。私は比国で産れた者ではありませんが、此国を第二の故郷として比国の土となる覚悟のものであります。即ち此等の小供達と一緒に暮らす事の出来る者であります。

教育問題とは此国に生れた小供等の教育問題ではありませんか。此等の小供等と同じに此処を第二の故郷とし

て此処の土になろうという永住の決心がつけば訳のないことと思われます。その代り帰国とか帰りたいと思つて居られては如何に親切に、亦如何に名論卓説を逞うするともそれは的中する物ではありませんまい。恰も二階から眼薬の類ではあるまいかと思ひます。小供等と自然……小供程自然なものはありません。風の吹く処なら風の子、雪の降る処ならば雪の子、此処の様に土の上に転ばせておけば土の子であります。土が鼻の穴に入ろうが、顔に着こうが土の子ですから仕方がありません。川端に産れた者は水の子、海岸に産れた者は海の子であります。決して溺れる者ではありません。溺れる者があるとすれば他所から来た避暑客位のものです。

御覧なさい、我々は日本に産れて来た者ですから米を食べねばなりません、此処に産れた小供等はフエジョンと骨つきの肉を好むではありませんか。私の孫達もそうです。アマゾンの奥の子ですからフアリニヤと骨つきの肉がなければ承知しません。日本で畳の上で小供が骨といったら如何でしょう、大変ではありませんか。しかし彼等は此処の人間ですから仕方がありません。

小供は父母の間に産れた者ではありませんが、其れは全部ではありません。その子に対する愛と力と徳を母が三分持つものならば、父も三分もつ筈です。それで両方で六分、あとの四分は其子の生れた土地の土と水と空気であります。これ即ち彼等の故郷であります。それで親といえども此点を考えずに勝手に引抜けば人間という霊木

の根はその時既に四分だけ捐ずるのです。小供の教育に故郷を考慮しない事は大なる誤謬であると思います。

小供等と数……私の知人で今調査をして居る者があります。まだ発表しませんので数字は判明しませんが参考になると思いますから要点だけ申上げてみましょう。在伯同胞の数は新聞などにもあります通り大体二十万、其内此国に産れた者が四割即ち八万人、それから日本で産れ乳呑児で来た者が約二万人、それで此国に産れた者と、産れたも同様の者とで十万人、日本で産れて来た大人が十万人、数に於ては東西関脇であります、此処に産れて領事館に届けをして居ない者が約七万人からあるとの事ですから、すると此処に生れた者と産れたも同様の者とが十七万、日本から来た大人が十万人となる訳です。然し此十七万人は毎日の様に殖えてゆきます。月に何百人、年に何千人増えて居ります。一方十万人の方は此上今の様に日本から来ないとなれば減りはしても殖えはしません。それを此処五年もすると此処に生れた者は七万人からなるうというのに、日本から来た大人は十万人が欠けようとも増しはすまいという事になるのであります。それで今迄は殆ど総ての事が純日本人所謂在伯同胞という名の許にやって来たのでありますが、今後は多くの事に日系ブラジル人という事を中心にして考える必要があると思います。申迄もなく教育問題の如きはそれであります。

我等と故郷……私共をして今帰国を唆るものには色々

原因がありましょう。此国の風向きが変つた事もその一つでありましょう。また祖国皇軍の勢を聞く事もその一つでありましょう。またこれによつて何か良き事もあらんかと思う方もありましょう。然しその最も大なる者は我等の生れたあの故郷であります。釣を垂れたあの谷川、毎年秋の終りが来るとまだ雪が積もらないなどと眺めたあの山、あの向の丘、運動会に駆つこをしたあの学校の庭、明日は御祭りという夜は眠られなかつたあの鎮守の森の太鼓、野良から帰る夕暮、霞を破つて聞えたあの山寺の鐘、丘一つ越えて通つた叔母の、叔父の家、母はまだ生きている、兄弟はある、祖先代々の墓……こんな事が年を経るに従つて懐かしく恋しく夢の様に、絵の様に我等を招くのであります。誠にこいしきものは故郷であります。この国の風向が少し変つたとしても、皇軍の勢が強いとしても東京の街が立派になつたとしても、大阪の築港が強固になつたとしても、若し我等にあの故郷が無かつたならばこれ程までに我等の心をひくものではないでしょう。偉大なる哉故郷、偉大なる哉故郷の力であります。

私はお勧めします。皆さん是非一度あの懐かしい故郷を訪ね、先祖の墓のお祀りでもして来て下さい。これは海外発展という事を口で唱え初めて以来の私の持論であります。是非お勧め致します。然し引上げて帰るのではありません。所謂パッセアであります。永住の決心をして落ち着いてやれば五年、十年の内には十コントや二十

コントの金は出来る筈です。これを日本へ帰ろう帰ろうと思つて東に西に転々しては十年経つても二十年経つても帰れない計りでなく、手に一物も無い者さえあります。而してそれは一生さすらいに終るかも知れません。人生に故郷ほど懐しいものはありません。例え帰れなくとも故郷を持つ人生は幸福な人生であります。

人生という旅路を辿る間は何処にありましようとも故郷は温い隠れ家であります。その反対に故郷のない人生は漂泊の生涯であります。如何に富を得ようとも、名を得ようとも、高位高官に上ろうともそれは淋しい人生であります。故郷は白髪の老人をも小供にしてくれます。あの豊臣秀吉でさえ故郷中村の里へあの通り帰っているではありませんか。父親を憚かり、叔父をおそれ、夜しのびに破れ家のぐるりを廻つて彼が流した涙は此の英雄の一生中にもまた格別のものではないかと思います。その様に此等の小供等には此処が故郷ではありませんか。此温い故郷から彼等を引出して満洲や北文へと放浪の旅に就かせるという事は考うるだに恐ろしい事ではありませんか。彼等小供等が何時日本へ帰ろうと云いましたか、私はまだそんな小供の声を聞いた事がありません。その反対に日本へ行った小供で「家へ帰ろう」と泣いて親にせがんだ小供の沢山あるのを知つて居ります。皆さん小供の為に負けてやつて下さい。永住の決心さえつけば一切の事が決つてゆきます。是非お勧め致します。

二 何かよき事もあらんか

先程からも申ました様に、一方では風向が変り一方では勢が増して居りますから、此際帰国すれば何かよき事もあらんかと思わるる人があるか解りませんが、それは余程考うべき事であらうと思います。私は過去二十六年間に三回このブラジルへ来て居ります。今此のブラジルに居る私から言えば三回日本へ行つたとも言えます。而して此間に私は殆ど日本の各県は廻つて居りますから割合に日本の事情は知つて居ると言えます。日本には尊いこと、有難いことが沢山あります。然し今日はそれを話すのではなく、むしろ必要上他の方面を話すのでありますからその意味でお聴き下さい。八十億の貯金……貯金が八十億出来まして今に百億になるかも知れません。それで日本は偉いものだという人があります。それはそうです。然しそれは日本が儲かったものではありません。戦利品を売って儲かつたとか、金鉱脈を見つけて掘り出したとか、それなら儲かつたといえましょうが、めいめいの家にあつたものを銀行に集めたというだけで、つまり置き方が變つたというだけでありますから、之を督励した当局の努力、之を実行した各自の奮励に対しては感謝すべきでありまして此際妻子を引連れて帰ろうという人にとって助けになる理由のものではありません。世の中はめくら千人、目あき千人という事もあるのでこんなことを申上げた次第であります。

二百万人の壮者……此の事變の為に早や既に犠牲に

なつた者が二十万人からあるという事です。而して傷病者三十万人を加えれば合計五十万人、そして現地にあるもの、満洲の国境にあるものと、支那大陸にあるものと、海の上にある者とを合せて百五十万人とすれば、合計二百万人であります。而して此等の大部分は農家の子弟であります。日本の田畑というものはまだ七百万町歩に足りません。この七百万町歩内外の田畑を耕やして居る内から二百万人の壮者を引抜いているという事は、如何なる事が農村に現れているでしょうか、想像に難くないと思います。そうです、出征者の家には青年団や村人が出て田を植え、稲を刈り、所謂銃後の守り遺憾なく扶け合うて居るのであります。然しそれでも二百万人に近い壮者が此処に満二ケ年余、足掛け三年間手を抜いて居るのでありますから察しが出来ようと思います。或る地方では水の不足な山田の如きはそのままにしてあります。亦近来蚕の棄児という事が大變流行して居りますが、その主たる原因は人手が足りないということであります。

私は蚕の事は全く素人ですが、蚕の棄児というのは立派にはき立てても桑が無かつたり、人手が不足したりして養う見込がない時は、之を火の中に入れたり河に流したりする事は人情として出来ませんので、隣家なり隣村なりで、桑があり人手のある家にそつと持つて行つて置くのです。之が蚕の棄児だそうです。而して之が主なる原因は人手の足りない為だそうです。が時節柄尤もな事と思います。

交通の発達……近來新聞或は雑誌の口絵にもみえます通り、鉄道は許より国道、県道、村道に至るまで非常に発達致しまして、村という村は如何なる山奥でも殆ど自働車の行かぬ村はない程であります。それが為に昔の草屋根は瓦屋根となり、鰯のめざしは刺身と変りましたが、その代り徳川時代からの深山は伐り出されて板になり、柱になり、炭になり、薪になり、枝まで運び出されて、昔二十年も出来た樫が、今では浅山になって三年から五年しか出来なくなりました。つまり交通が発達した為め自然の富源が枯渇し、山奥の村程困る様になったのであります。私が主として廻ったのは都会ではなくこんな村でありました。

農産の増収……近來また農産物は著しく増加しました。例えば昔一反歩に米が六俵位しか取れなかった所が、今では七俵も八俵も収穫する様になった所があります。然し之は耕地整理という努力と非常なる肥料の力とであります。耕地整理は国庫の補助で出来た所もありますが、多くは年々に償還してゆかなければなりません。低利資金によつて出来たものであります。此種の負債はどの位あるか正確には判明しませんが七百万町歩に足りない田畑に七、八十億円からあるかと思ひます。また肥料は何程用いて居るかと申しますと年々肥料会社に放て製造しておるだけが十億円内外であります。其幾分は海外えも出ますが、大部分は此七百万町歩内外の田畑に使われて居るのであります。つまり一見すると非常に増収

して居る様でありますが、此等の莫大な負債と肥料の力で出来ておるのでありまして気候が良くなつた訳でも、土地が肥えたわけでもありません。

農村の節約……軍事産業地帯、或は満支利権者の往来する地方は聊が景気づいて居る所もある様でありますが、一度平和産業地帯即ち農村に行つてみますと、其は一切万事極度の節約であります。

昼間十二分の労役に従事し疲労した身体で、夜は縄をなひ、筵を織り、五銭十銭の金でも之を土地の産業組合、若くは銀行に預けております。これは農村には前申しました様に年々償還してゆかなければならぬ借金があります。事変なる故に之を停滞さしてはなりませんので、当局の督励と共に各自の奮励により実行して居るのであります。亦輸入品特に軍需品によつて、製造される品も非常に高くなり買手がなく、農村の商店には閉鎖する者が多いのであります。靴の如きはなるべく履かない様にします。居ますので、中学校でも大学でも、兵隊屋敷でさえ下駄をはいて居ります。カミニヨンはガソリンの代りに薪を焚いて走つて居ります。

今日は困つたという事は言われん時です、また困つたとは誰も言っておりません。一切万事緊張で押し通して居るのであります。併し妻子を引きつれて帰ろうという人は此の内の何処に割り込もうというのですか。

戦後に来るもの……戦後に好景氣が来ますか、不景氣がきますか、其れは必ず不景氣が来ます。但し軽い不景

氣であつて欲しい、日清戦後に、日露戦後に、世界大戦後に等しく嘗めた経験であります。世界戦争に日本は大儲けをしました、それでも如何共なりませんでした。私の知人に其時船で儲けた方があります、彼は日本で七百万円という最初に大きな小切手を切った男です。神戸に、東京に立派なビルを造りました。住吉の山手に大住宅を建て、その資産と信用で貴族院議員となりましたが、やがて吹いた財界不振の風には一とたまりもなく、転ばす間に太ったのは借金でした。こんな事は彼ばかりではありません、其の当時取附けられない銀行は第一とか三菱、三井位のものだったかも知れない。皆さん来るべき者を見越して何処へ割り込むお積りでありますか。自給自足は努めて居りますけれど、それは完全した者ではありません、今の場合ですから必要な者は北米からでも何処からでも買わねばなりません。されば五円に値する金を佐渡から堀り出すのに十五円要あつても止むを得ないのであります。軍事産業の発展は其地帯の給料を上げます、給料が上がれば物価が上がります。物価が上がれば金が無くなります、然し其金は何処から得ますか、而も毎日ダイナマイトとなつて破壊しつつあるので減るばかりです。これ戦後に於て来るものは何か、想像がつくではありませんか、妻子を引連れて帰国せんとする方々の注意すべき点ではありますまいか。

真の日本人となつて……どれ程考えてみても尚解らず、解つても判断がつきませんなれば純日本人となつて考えて下さい。我等は非常時に当り御国の為め帰国すべきか否やと御伺いできるなら伺つてみようではありませんか。如何なる仰せがありましたようか「汝等には汝等の務めがあるうぞ」との仰せがありますまいか、そうです、我等は逃げかくれて此国に来ている者ではありません。

此処に来ている我等は一人一人が大御心に留められて居る者と思つて差支ないと思います。既に一億の民が総動員という以上、現地にある者と、然らざる者の区別はない筈であります。今満洲の境に居る者が支那大陸の方へと云えるものでしょうか、言えるものではありません。其様に国外の者と雖も、ハワイに、北米に、ペルーに、またこのブラジルに居る者とを問わず『汝等には汝等の務めがあるうぞよ』との仰せではありますまいか。それで若し何かの御用があつて、臣下の一人をして軍艦でもつて迎えに来る時でもありましたならば帰りましょう。共時には帰らんと申して居る私でも帰ります。若しも其反対に此非常時に於てハワイに居る者も引上げた、北米に居る者も、ペルーに居る者も、また、ブラジルに居る者も引上げたいという様な事になりましたならば如何なるものでありましょうか、其は御国の為め最も悲しむべき事ではありますまいか。

御製……明治大帝の御製に

国を思う道に二つはなかりけり

軍のにわに立つも立たぬも

何と有難い事ではありませんか。戦の庭に立つも立たぬも、戦の庭に立たぬ者でも、戦の庭に立つ者も同様である。と仰せられました。それには戦の庭に立たぬ我等は戦の庭に立つ者と同じ意義がなくてはなりません。つまり世界の何処に居りましようとも不動の大地を堅く踏みしめ、御用のあるまでは動かないという事が、戦の庭に立つも立たぬもという御意ではありますまいか。

四 帰国は不可能

準備金……私が不可能というのは、個人的の帰国をいうではありません。教育問題から見てとか、また日本人としてとか、即ち一般的の者として帰れる者ではないというのであります。それには第一金が無ければ帰れないではありませんか。

何程有ったらよいでしょうか、それは解りませんが、東京で小さな店一つ持つにしても、のれん代だけが一万円以上もかかります、田舎へ帰ったとしても、まさかカマラーダも出来ますまいから、自作しようとするなら水田一反歩が三百円から五百円、二重作のとれる良い処なら千円します。それで一町歩貸うなら一万円要ります。一町歩といった処で此国の半アルケルにも足りません。子供一人大学を出すには一万円要ります。して見るとちつとやそつとの金では帰れません、それで之は一般的

に帰れる事ではありません、それでも充分の用意があつて帰れるという人がありましたなら、斯る際でありますから黙つて帰つて下さい。

多くの人の実行も出来ない事を大びらに言いふらして氣を揉ます必要はないのであります。そういう人は送別会なども出来るだけ質素にして帰つて下さい。今は少しでも多くの金を御国へ持つてゆくべき時です。

船舶……一切の事を耳にせず、注意もせず、いやが応でも帰るとしても、此処に一つ困つた事は船舶であります。今日の場合如何に繰り合せて見ましても、年に十二回以上の船は出ません。毎回千人乗せるとしても、一ケ年に一万二千人より送る事はできません。すると二十万人全部の帰国には十六年間かかります。これは一つの笑話の様です。これが笑い話ならば帰ろう帰ろうと言う人の言葉も笑い話であります。私の話は何時でも取消せますから、こんな話はしない様にして下さい。つまり金の無い事と船の無い書とにより一般的の帰国は不可能であります。

五 楽しく有意義に

祖国の為……どうしても帰れないなら楽しく有意義に暮せる様に考えてみようではありませんか。

それには我等は何といつても此国からいえば、外国人即ち日本人でありますから、我等のこの国に居る事が祖国え対し御為になりたい事ではありませんか。

(A) 慰問の手紙……戦地へ送る慰問の手紙にしても、之を慰め励ますという事に於ては違いはありませんが、永住すると決心して居る人の手紙と、然らざる人のそれとは自から差があるうかと思えます。例えば一通の手紙にしても『現地に苦戦する君等を思うと僕らも安閑としては居られない。それで永住の決心をして奮闘している。君等は戦地に於て、僕等は此遠いブラジルに於て御互いに立派に異郷の骨となろう』といってやって御覧なさい。帰るとも帰らぬとも腹の決っていない人の手紙は如何に美文であつても、生命を献げて戦っている人には受ける人の氣持が違ふと思ひます。

(B) 献金……それから同じ額の献金をするにしても祖国に於て十円する金は十円に違いありませんが、それは祖国にあるものを廻したというだけ、此国から送る十円は祖国にない金がそれだけ殖えるのですから、時節柄特に尊い金となるのであります。此意味からいうと祖国に於てする百円の献金よりも尊いとも云えるのであります。

(C) 和親協力……それから御覧なさい。近来は流石に労働争議も、小作騒動も、また一般社会問題も殆どない様ではありませんか。之は非常時国民総動員の時故ではありますまいか。一昨年のこと北海道旭川から新聞を送つて来ました。みますと北見の或村で一人の軍人が出征の時村人挙つて駅に見送り

「内のことは心配するな立派にやつてきてくれ」

と声を揃えて叫びますと、窓から首を出し

「よし、わかった、立派に御国の為に白木の箱になって帰ってくるから、その代り君等も今日限り喧嘩をやめて仲よくやつてくれ」

と云いました。此村は長い間争つて居た村であります。が、それ以後極平和にやっているとあります。生命を棄てにゆく人の一言には誰でも動かされるのであります。されば海外にある我等も時節柄特に一致和合、相助け合うて行きたいものではありませんか、平素は知らず、兄弟の仲、親子間、一地方、特に二十万同胞一致和合、相扶け以て皇国の聖戦に対し之が犠牲の英霊に対し、大御心に添い奉らん事こそ御国への御奉公ではありませんまいか。

(D) 親への送金……それから亦愈々永住という心が決まれば、今迄帰ろう帰ろうと思つて西に東に一攫千金を夢みた過去を顧み、五十円でも百円でも之が永住決心の証として親への送金しようではありませんか。大金を儲けて帰ろうと思つた計りに、久しく親達に疎遠になつて居た方もあろう、それが手紙計りでなく金迄来たとなれば何程喜ぶ事でしょう。之れ只に親御さんを喜ばす已みならず、時節柄外国金の入国する事は、御国へ対する特別の御奉公ではありますまいか。

以上は只だ二、三の例に過ぎませんが、我等が此処に永住するという決心さえあれば、御奉公の道は多々ある事と思います。

伯 国 の 為

(A) 親日派……次は我等の足元即ち此国の事に就て考えてみたいと思います。我等は日本人でありますから此国にありて楽しく有意義に暮すには何と云つても親日派を必要とするのであります。然しそれは決つています。やがて二十万に垂んとする日系ブラジレイロこそ間違なき親日派ではありませんか。これ我等の血に依つて作り上げつつある真の親日派ではありませんか。確かなものです。之以上の親日派はありますまい。問題は之を如何に教育すれば立派なブラジル人になるかという事であります。真の教育問題は此点ではありませんまいか、之が為には日本語が必要であります。家庭の躰が必要です。日本の遊戯競技武道が必要です。然し其れは主でなく従であり副であります。言い換えれば如何に教育すれば立派な日本国民になるかというのではない、如何に教育すれば立派なブラジル人になるかという事です。ります。これ指導者たる父兄方の任務であります。

満洲に於て支那に於て其他の国に於て親日派はありません。然し其れは一つの力とか、或はその仲間とかに於てであります。そのブラジルに於ける如く我等の血によつて作り上げた二十万の親日派が世界の何処にありません。日支は大切な間柄ではあるけれ共我等の血をもつ二十万の親日派を作る事は恐らく百年の計であります。

嗚呼我等は頼もしき哉である。我等をして再び言わしめよ、我等は立派なブラジル人を作るのである。故に日本語を教ゆるにしても武道を教ゆるにしても、其れは日系ブラジレイロを通じて常にブラジル国に叫びつつあるという大きな広い胆をもつ必要があると思います。

(B) グループ……次は子供に必ずグループを卒業させて下さい。グループは此国の小学校であります。我等が教育教育と言いつら子供に小学校も卒業させない様では心配した甲斐がありません。実際は地方によって、事業によって困難もありましょうが、此国に残す此等の子供の為め之が指導の任にある親としては之だけの事はして置かねばならないという考だけでも持って下さい。日本人の偉い処は親が子の為に犠牲になる事です。然るに多々海外にあつては子が親の為に犠牲になつて居るのです。果して然らば之は真に悲しむべき事ではありませんか。それも無理はないと思います。我等が此国に來た目的が第一金という事でありましたから、然し金があれば必ず教育が出来るとは限りません。小供の無い内は兎も角小供ができれば自然小供の方の事も考えなければなるまいと思います。小供にグループ(小学校)だけは卒業さしておかねばならない事になれば自然一定の場所に落ちつかねばなりません。アレンダー(借地)では駄目である。通学には何処がよいかなどと考える必要もあるう。兎に角グループだけは卒業させて下さい。それは一生のうち屹度小供の身の上に大いに為になる事があり

ますから。

(C) 農業……小供を立派なブラジル人とするには彼等をして此国の功労者にしなければなりません。何の功労もない者が偉い筈はありません。

此ブラジルは四億の人間の住み得る所だそうです。然るに現在は僅か五千万位しか居ません。それでまだ三億五千万人入る事が出来るのであります。言い換えればそれだけ未開の地がまだ残っているのであります。つまり我々の舞台は此処であります。元来我々が日本から来る時もそうではありませんか、ブラジルは土地が広くて地味が肥えて作れば何でも出来て氣候が好い。それで行くうといつて来たのではありませんか、此点少しも裏切つて居りません。御覧なさい、ノロエステ線に於て、パウリスタ綿に於て、ソロカバナ沿線に於て、亦中央沿線に於て棉一本でも野菜一葉でも我等が鋤を執つて進む所喜々として喜んでくれて居るではありませんか、少しでも拒んでは居りません。日本民族は土の民族です。此ブラジルには世界四十余ヶ国の人間が居るという事です。が、土に喜ばるる者日本人の右に出る者はないのです。之は誇大でも何てもありません、既に立証されて居ります。そして前途亦極めて有望であります。鋤さえとつてゆけば都会の附近でさえ猶発展の余地があります。御覧なさい、コチアの産業組合の如き殆ど二千の会員を有し、其結束せる力に於ても功績に於ても唯に日本人の誇りたる己ならず我がブラジルの誇りではありませんか。

こうなれば大統領は讃辞を述べ、農務大臣は駕を枉げて来るではありませんか、此ブラジルの取残された七割が我等の真の舞台である事を本当に知り得るなら何処に失望することがありましようか。ユダヤ人は偉いと云いますがそれは金計りではありません。

彼等は商売以外決して致しません。産れ落ちて死ぬるまで商売です、此処が彼等の偉い所です。我々の偉い所は鋤です。ユダヤ人が商売道であるが如く我等も徹底せる農業道でありたいものです。

(D) 軍籍……それから我等の子孫を兵隊さんにする事です。つらつら案じまするに今より一世紀半程昔、即ち一七七六年七月四日北米合衆国が英国の羈絆より脱して自由独立を叫び遂に共和国を建設しました。次で南米十ヶ国と中米諸国メキシコ、更に歐洲東洋にまで風靡しまして今日に到りました。然るに最近起った風はそれが帝国であろうと共和国であろうと、民族的自覚即ち国粹主義という風であります。之がブラジル丈けのものであれば止む事もあるか知れませんが世界の風潮ですから世界歴史に一回転期のくる迄は向う一世紀なり半世紀なり続く者ではないかと思ひます。

されば此国内に如何なる事が起ろうと、何人が天下を取ろうと暫時は続くものと思ひます。而して国粹を最も代表せる者は軍人であります。茲に於て特別の技能を持つて居る大和民族は武に於ても亦特別の技能を持つて居ります。神武以来其武に於て辱めを受けた事なく最近

には日清の役、日露の役、世界の役、等しく世界の認める所でありました。我等の子孫をして此国に大なる貢献を成さしめ、以て立派なブラジル人たらしむるには、小供を百姓にすると同時に兵籍に入れる事を忘れてはなりません。此の二道はこの国の為にも亦我等子孫の為にも我等指導の任にある者心得べき点ではないかと思ひます。こんな話を聞きました。今の大統領がパウリスタ線の何処かへ出かけられた時、五、六人のお供を連れて騎馬でお通りになった。其沿道に日本の小学校の小供が甲斐々々しく整列してお迎えした。大統領は其小供等のキチンと整列して居るを見、後ろを振り返り莞爾として曰く『これは皆内の子だ』と。特別の民族が此処に来て産み落す此等の子供を『内の子だ』とは何と意味深い言葉ではありませんか。思うに大統領と云う程の人が此等の優れた小供の前途を思うては涙の出る程の嬉しさではなかったでしょうか。

北米の桑港に東ヶ崎さんという方がある。御子さんが大勢あるが皆北米生れであります。一人軍人になって世界戦争に出征し立派にやって来られた。亦塚本松之助さんと日われる千葉県出身の方があります。此の方は桑港日本入会々長で有名な方であります。立派な人強い人でユニオンの日本人に対する不法を憤って何十回かの、そして何年かの裁判を続けた。然し小供は皆北米生れである。内二人が世界戦争に出て立派な功を立て歸られた。それは日本人だけの誇りではなく、米国の誇でありまし

た。

(E) 師範教育……次は皆さん小供を師範に入れて是非卒業させて下さい。ブラジルには五千万の人間が居ても読み書きの出来る者は二、三割しかありません。つまり五千万人中の殆ど四千万人迄は無学文盲なのです。私共は未開の地に目をつける様に此処に目をつけ、此処に割込んで此等の人々をして文化の恩沢に浴せしめる様にしてやるべきです。欧米人が世界に貢献した仕事の内最大のもは救いの布教でありました。何といつても彼等は偉いものです。然し宗教が世界化即ち人類化された今日は開放された教化、即ち教育は最も尊い文化の事業であります。而も小学教育に於て特別に人格と技能の上に特性を有する日本人をして此国の教育に従事せしむるならば偉大なる効果を齎らすのではないでしょうか。私が此ブラジルを知り始めて以来茲に殆ど三十年、心密かに思つて居ります。此ブラジルの残された七割の人間の文化にはユダヤの資力が拡大されるとも欧米の力が入るとも大した効果を齎らすものではないでしょう。これはまた我等の舞台でしょう。然るに今回邦人間を旅行して新たに知った事は我等の小供を誰に托したら一番よいか、それは児童教育に特別の素質を有する日系ブラジレイロを資格あらしめ之に托するに増したものはありません。多分児童教育の問題も眞の解決は我等の小供で此処の師範を出る者の数と正比例して解決するものではないかと思ひます。此れ程大切な事であるから何卒お子さん方の

内、特に女子のお子さんを師範に入れ、そして我子供等の教育に従事させて下さい。

これは亦此国に於て我子孫永遠の使命であるかも知れません。如斯考えます時に此国は前途実に楽しく有意義に暮せる園であります。而も永住するという決心がつけば一層楽しい国であります。

六 三万の英霊を如何にせん

これは最早議論ではありません。比較でもありません。皆さん帰る帰ると日いますが、三万の英霊を如何にして置きますか、誰れに頼んでおきますか、過去三十年間に我等は三万以上の犠牲を出して居ります。此等の墓の内には充分の手当も受けずに死んだ方も多い。創業当時の事とて気の毒な最後を遂げた者が多いのです。まだ来た許りで言葉も解らず事情も解らずファゼンダーからファゼンダーと渡り歩く間に幸運未だ開けず空しく妻子を後にして亡くなった男子もあります。玩具一つ買つても得やらず亡くなった可愛想な小供もあります。此尊い犠牲の墓を如何にして置ますか。

墓は偉いものである。大西郷如何に偉くとも城山の墓が無かったなら菩提は弔われますまいが、四十七士が如何に忠義な元禄の武士でも泉岳寺に墓が無くば永遠に絶えない線香の煙は上げられますまいが、白虎隊が如何に可憐な少年武士でも飯盛山に墓が無かったら英傑ムツソリーニをして記念塔を上げしむる事は出来すまいが、墓という者は偉いものである。若しそれ祖国が世界から

包囲され、東京が焼かれ、大阪が焼かれ、更に各都市が焼かれたとしても尚お我等の後に祖先の墓がある。之を敵の靴の下に踏みにじらせてなるものかと思う時、百倍の力が出るのであります。而して必ず敵を追い払うことが出来る。之即ち守護の天使であるからです。

此事変に於て我等は既に幾万の犠牲を払いました。而して其等の多くが早や既に靖国神社に奉祀され、亦その故郷には戦死者の墓標が建ちました。そして之が祭礼と供養は永遠に絶えない。それでこそ護国の天使となるのである。それでこそ祖国の安泰と東洋の平和とは永遠に保せらるるのであります。

若し反対に靖国神社の奉祭もなく、故山の墓もなく何の供養も無かつたなら二十万が二十万の犠牲を払うとも其は空な事であります。祖国の安泰も東洋の平和も決して保たれますまい。彼は戦地第一線に立ったが故に守護の天使となり、此は未知の草間に伏すが故に置き去りにされてよいでしょうか、此を置き去りにし家族が満洲に支那にさすろうて果して運命が開けましょうか、仮令墓掃除は行届かずとも此土地の土となる事程の尊い供養がありますでしょうか。三万の墓の外に二十万の墓が出来る時に其は一切の事が解決します。蓋し此等の天使我等と我等の子孫と此国土とを永遠に安護するからであります。

最後に在伯同胞の上に、此国土の上に天の神様の豊かなる御恩寵を御祈り申し上げます。(完)

あとがき

「小生は世界に多くの先輩、友人、知己、校友を有す、されど小生の凡てを知るもの大兄の外にいずるものなし、小生大兄より先きに逝かん、宜しく願ひ奉り候」昭和十六年六月三十日日付の恩師崎山先生より私宛の便りの一節にはこう書かれてありました。それを大連で受取ったときは、先生は既に永眠されていたのであります。先生は世伝えなくてはならぬ人。それを伝えてくれる人は他にあるう。しかし「宜しく願ひ奉り候」ということが何を意味するかを詮議するよりも、私は私としてそのことをしなくてはならぬと心に決めました。それは先生の「小生を知るもの」との言葉を肯定するが故ではありませぬ。先生に関係のある各地で追悼記念会を催す一方、先生に関する資料の蒐集に着手しました。既に海外連絡は不可能でしたが、国内の多数の方から続々寄せられた資料の綴りは部厚いものとなりましたが、戦争は苛烈となりそのまま敗戦後まで保管中、連日の侵入者のために、この資料は雪の中に投げられとじ糸は切れて吹き散らされてしまいました。

引上げてから戦後の混乱も落ちつき、ブラジル校友会との連絡ができるようになりました、南米における先生関係の資料を南米における先生に関する資料を提供して頂けることになり、私が執筆をお引受け致しました。私

はある期間は余りに先生に近く、晩年は遠く離れて、先生との関係は首尾一貫しません、遠近の距離がどうこうということではありませんが、全般を平均に扱うことはこの事情から容易ではありませんので本稿におきましては止むなく、前半は私の記憶と乏しい資料により、後半は主として南米の校友会から送られた資料を用いまとめることとし、その資料の取捨撰択は自由にさして頂き事実の記述に重点をおいて扱いました。寄稿は全部収録したかったのですが、紙面の都合で止むを得ませんでした。先生は彫の深い、個性のはっきりした方でしたので、少しでもその線を打ち出すように、含蓄のあるものにと心がけ苦心しましたが、到底方の足りないことと、ぐずぐずしては自分がのびては大変だと気づき、事実をそのまま、平易に書くことにして気特が楽になり、三月新たに稿を起し、本日漸く脱稿致しました。仕事を終えてホッとふりかえり、余りにも不完全なものでお詫び申上げる外ありません今後皆さまのお力によって完璧なものに仕上げて頂きたいと願う次第であります。

ここで沢山の方々に御礼を申さして頂きます。

私の最も尊敬する元同志社大学総長牧野虎次先生が校友たちの御依頼を御快諾下さいましてはるばるシカゴから本書のために序文を寄せて頂きましたこと。次に今は故人となられた石川和助、白戸良作の両牧師、また神子朝太郎、名沢一二、野田良治、小笠原尚衛、輪湖俊午郎、中尾熊喜、谷力の各先輩、神園一生、宇野円治、山内登、

清広亮光、神園敬、大川伝、同慰与子、利光格、茅根（石丸）哲子、須貝貞治、同夫人、西岡一志、玉田善九郎、植田良治外座談会出席者、神園億輔外座談会出席者及び片野敬之助、今井久子、崎山信義、越智義秀等の校友各位が原稿や資料を提供して下さったこと。また先生御遺族から貴重なお写真を頂きましたこと。特に神園一生さんが先生の日記や記録を写して下さい、次にこれらの連絡に当って数年に亙り資料をとりまとめ送って頂き、いつも激励べんたつして下さった須貝貞治さん装幀、印刷出版について終始御尽力下さいました崎山盛繁さん、並に東京校友会西尾励会長外会員各位、以上の皆様に御礼申し上げます。更に本書を世に送ることができましたことは主として在ブラジル並に南米各地の校友各位からの出版費の御援助のおかげであります。このために御幹旋下さいました在南米校友会幹部各位に対し、ここに特記して衷心より感謝の意を表する次第であります。今後一層協力一致故先生の精神を現代に再現せしむるために現地に活躍せられている皆様の御自重を念願するものであります。終りに先生の御遺族田鶴子未亡人並びに御一族皆々様の上に豊かなる御恩寵をお祈り致しましてこの稿を終ることに致します。

千九百五十五年十月十二日 吉村 繁義

著者の略歴

明治二十年三月十四日生

高知縣長岡郡本山町

大正二年三月、青山學院神學部卒業　大正七年四月、
海外植民學校主事　大正十三年四月、南滿洲鐵道株式會
社　地方部社會主事、圖書館行政係主任、總裁室福祉長、
滿鐵奉天圖書館長、滿鐵獎學資金財團專務理事等歷任
昭和二十二年三月、内地引上

著書、日露交渉史話あり

ラプラタの夕空

一、いざや友（とも）よ　白妙（しろたえ）の
雪（ゆき）の心（こころ）と　黒鐘（くろがね）の
強（つよき）き腕（かいな）の　あらん者（もの）
世界（せかい）はやがて　汝（な）がものぞ』

二、希望（きぼう）に燃（も）ゆる　同腕（はらから）よ
心（こころ）開（ひら）きて　目（め）を上（あ）げよ
アマゾン岸（きし）の　人（ひと）知（し）れぬ
五千哩（まいる）の　大自然（だいしぜん）。』

三、自由（じゆう）を望（のぞ）む　人（ひと）や行（い）
け

雲上（くもへ）に連（つらな）る　アンデスの
平和（へいわ）の嶺（みね）を　越（こ）えてかの
ラプラタ河畔（かはん）の　夕（ゆう）の空（そら）。』

著者の略歴

明治二十年三月十四日生

高知縣長岡郡本山町

大正二年三月、青山學院神學部卒業

大正七年四月、海外植民學校主事

大正十三年四月、南滿洲鐵道株式會社

地方部社會主事、圖書館行政係主任、總

裁室福祉長、滿鐵奉天圖書館長、滿鐵獎

學資金財團專務理事等歷任

昭和二十二年三月、内地引上

著書、日露交渉史話あり



昭和三十年十一月五日 印刷

昭和三十年十一月十五日 発行

著 者 吉 村 繁 義

印刷人 崎 山 盛 繁

印刷所 東京都千代田区神田松住町十二番地
東方印刷工芸株式会社

発行所 Naoyoshi Isobata.

Parque Dom Pedro 11.46

Tel 33-3525 São Paulo.

大正八年創立当時の 植民学園の全景

ラブラタの夕空

一、いざや友よ 白妙の
雪の心と 黒鐘の
強き腕の あらん者
世界はやがて 汝がものと

二、希望に燃ゆる 同輩よ
心開きて 目を上げよ
アマゾン岸の 人知れぬ
五千哩の 大自然

三、自由を望む 人や行け
雲上に 連る アンデスの
平和の 旗を 越えてかの
ラブラタ河畔の 夕の空

四、海を渡りて 西ひがし
野にも 山にも 我民は
世界の 民を 率あんか
いざやたて 我友よ

